

京都府遺跡調査報告集

第194冊

1. 上野遺跡(第1～4次)
2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次
3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)
4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次

2024

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



第3次調査地を望む(南から)



第4次調査地を望む(東から)

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する京丹後市上野遺跡の調査は、浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良工事に伴い京都府建設交通部の依頼により実施しました。また、亀岡市南金岐遺跡第2次調査・千代川遺跡第36次調査は、京都縦貫自動車道インターチェンジ料金所新設工事に伴い、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所の依頼を受けて実施しました。一方、城陽市芝山遺跡・芝山古墳群第22・23次調査は、一般府道山城総合運動公園線橋りょう新設改良事業に伴い京都府建設交通部の依頼を受けて実施しました。今般、各事業の整理等作業が完了しましたので、『京都府遺跡調査報告集第194冊』として刊行します。

各遺跡を概観しますと、上野遺跡は、日本海に面した海岸段丘面に位置し、良好なA T層や大山倉吉軽石層が堆積するとともに後期旧石器時代の台形様石器や剥片石器などが出土しました。一方、南金岐遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期の自然流路、千代川遺跡では中世の掘立柱建物を確認するとともに、芝山遺跡・芝山古墳群では、古墳時代前期の土坑や古代の道路側溝を検出しました。

これらの調査成果は、今後、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府建設交通部ならびに西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

- (1) 上野遺跡(第1～4次)発掘調査報告
- (2) 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次発掘調査報告
- (3) 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告
- (4) 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
上野遺跡 第1～4次	京丹後市丹後町 上野地内	平成29年7月14日～ 平成29年12月4日 平成30年8月1日～ 平成30年12月21日 令和元年8月1日～ 令和元年12月16日 令和3年8月25日～ 令和4年1月25日	京都府丹後 土木事務所	面 将道 加藤雄太 中川和哉
南金岐遺跡第2次	亀岡市大井町 南金岐重見	令和5年7月21日～ 令和5年9月22日	西日本高速 道路株式会社	竹原一彦
千代川遺跡第36次	亀岡市千代川町 北ノ庄測田ほか	令和5年9月14日～ 令和5年11月20日		
芝山遺跡・芝山 古墳群第22次	城陽市富野中ノ芝	令和5年5月22日～ 令和5年7月28日	西日本高速 道路株式会社	小泉裕司
芝山遺跡・芝山 古墳群第23次	城陽市寺田南中芝	令和5年8月22日～ 令和5年10月25日	京都府山城北 土木事務所	小泉裕司

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

1. 上野遺跡（第1～4次）発掘調査報告	
1. はじめに	1
2. 遺跡の環境	
1) 地理的環境	3
2) 歴史的環境	3
3. 調査の経緯と方法	
1) 調査の経緯	4
2) 調査の方法	6
4. 基本層序	7
5. 第1次調査	
1) 調査概要	9
2) 出土遺物	15
6. 第2次調査	
1) 調査概要	15
2) 出土遺物	17
7. 第3次調査	
1) 調査概要	24
2) 検出遺構	25
3) 出土遺物	30
4) 小結・石器群の性格について	36
8. 第4次調査	
1) 調査の概要	37
2) 1区の調査	37
3) 2区の調査	69
4) 3区の調査	69
5) 小結	69
9. 総括	
1) 遺跡の変遷	72
2) 旧石器時代の上野遺跡	72
3) 上野遺跡から見た山陰・若狭地域の海岸段丘の可能性	75
付載1. 上野遺跡第3次発掘調査に係る火山灰分析結果報告	91
付載2. 上野遺跡出土鉄滓の調査	100

2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次発掘調査報告	
1. はじめに	109
2. 遺跡と環境	110
3. 南金岐遺跡の調査	
1) 調査の概要と基本層序	113
2) 検出遺構	114
3) 出土遺物	117
4) 小結	118
4. 千代川遺跡の調査	
1) 調査の概要	118
2) 検出遺構	120
3) 出土遺物	125
4) 小結	125
3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告	
1. はじめに	127
2. 遺跡の環境	
1) 地理的環境	128
2) 歴史的環境	128
3) 芝山遺跡の既往調査	131
3. 調査概要	
1) X-1地区	132
2) X-2地区	134
4. 出土遺物	134
5. 調査の成果	134
4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告	
1. はじめに	141
2. 遺跡の環境	
1) 地理的環境	142
2) 歴史的環境	142
3) 芝山遺跡の既往調査	145
3. 調査の経過	146
4. 調査概要	

1)基本層序-----	146
2)検出遺構-----	146
5. 出土遺物-----	156
6. 調査の成果-----	157

挿 図 目 次

1. 上野遺跡(第1次～4次)発掘調査報告

第1図 調査地の位置-----	1
第2図 上野遺跡と周辺の遺跡地図-----	4
第3図 上野遺跡周辺の地形分類図-----	5
第4図 上野遺跡周辺の地質図-----	5
第5図 地区割り設定図-----	7
第6図 第1～4次調査 調査区配置図-----	8
第7図 第2次調査拡張区2南西隅深堀部断面図-----	9
第8図 段丘上部基本層序土層断面図-----	10
第9図 第1次調査調査区配置図-----	11
第10図 拡張区1遺構配置図-----	11
第11図 拡張区1東壁土層図-----	12
第12図 土坑S K01平・断面図-----	13
第13図 土坑S K02平・断面図-----	13
第14図 土坑S K03平・断面図-----	13
第15図 土坑S K04平・断面図-----	14
第16図 3・4区平面図-----	14
第17図 5・6区平面図-----	14
第18図 第1次調査出土遺物-----	15
第19図 第2次調査 調査区配置図-----	16
第20図 5トレンチ平面図-----	17
第21図 第2・3次調査南壁土層図(1)-----	18
第22図 第2・3次調査南壁土層図(2)-----	19
第23図 第2・3次調査南壁土層図(3)-----	20
第24図 第2次調査出土土器-----	21
第25図 第2次調査出土石器1-----	22
第26図 第2次調査出土石器2-----	23
第27図 第3次調査平面図-----	25

第28図	石器平面・垂直出土状況図	27
第29図	器種別平面分布図	28
第30図	石材別平面分布図	29
第31図	剥片石器	31
第32図	剥片石器、剥片、石核	33
第33図	石核	35
第34図	剥片類の長幅比	36
第35図	各器種別の長幅比	36
第36図	第4次調査区配置図	37
第37図	1区南東壁断面図	38
第38図	1区南壁断面図	39
第39図	1区第2面S H2280平・断面図	41
第40図	1区第2面S H2280・SX2288平面図	41
第41図	1区第2面S H2292ほか平・断面図	42
第42図	1区第2面S H2292土器出土状況図	43
第43図	1区第2面S L2208 S P2444平面図	43
第44図	1区第2面SK2423平面図	44
第45図	1区第1面平面図	45
第46図	掘立柱建物S B01平・断面図	46
第47図	1区第1面掘立柱建物S B02、鍛冶炉S L1320平・断面図	47
第48図	第1面鍛冶炉S L1320実測図	48
第49図	第1面掘立柱建物S B03、鍛冶炉S L1326・1327・1328平・断面図	49
第50図	第1面鍛冶炉S L1326・1327・1328平・断面図	50
第51図	1区第2面掘立柱建物S B04、鍛冶炉S L1325平・断面図	51
第52図	1区第1面鍛冶炉S L1032平・断面図	52
第53図	1区第1面鍛冶炉S L1321平・断面図	52
第54図	1区第1面鍛冶炉S L1322・1323・1324平・断面図	53
第55図	1区第1面SK1038平・断面図	54
第56図	1区第1面SK1238平・断面図	54
第57図	1区第1面SK1286平面図	54
第58図	1区遺構内出土遺物1	56
第59図	1区遺構内出土遺物2	57
第60図	1区遺構内出土遺物3	59
第61図	1区包含層出土遺物1	59
第62図	1区包含層出土遺物2	60

第63図	1区包含層出土石器	60
第64図	1区包含層出土石製品1	61
第65図	1区包含層出土石製品2	62
第66図	1区包含層出土石製品3	63
第67図	1区包含層出土石製品4	64
第68図	1区包含層出土石製品5	65
第69図	1区包含層出土石製品6	66
第70図	1区出土鍛冶滓	66
第71図	鍛冶滓プロット1	68
第72図	鍛冶滓プロット2	68
第73図	2区平面図・東壁断面図	70
第74図	3区平面図・東壁断面図	71
第75図	上野遺跡における遺構の変遷	73
第76図	近畿圏内での台形様石器出土遺跡	75
第77図	上野遺跡周辺の地形面と土層観察地点	77
第78図	上野遺跡周辺の地層断面と火山灰・古地磁気分析結果	77
第79図	M I S 3以前の広域火山灰及びレス古土壌の認められる地点	77

2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次発掘調査報告

第1図	調査地の位置	109
第2図	調査地周辺遺跡分布図	111
第3図	南金岐遺跡調査地位置図	113
第4図	検出遺構配置図	114
第5図	自然流路NR1～4実測図	115
第6図	南金岐遺跡出土遺物	116
第7図	千代川遺跡36次調査区配置図	118
第8図	千代川遺跡36-1区検出遺構配置図	119
第9図	千代川遺跡36-1区東壁断面図	119
第10図	36-2区検出遺構配置図	120
第11図	千代川遺跡36-2区東壁断面図	121
第12図	36-2区SB23平・断面図	122
第13図	36-3区・36-4区検出遺構配置図	123
第14図	千代川遺跡第36次調査出土遺物	124

3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告

第1図	調査地の位置	127
第2図	周辺遺跡分布図(25,000分の1)	129
第3図	芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図	130
第4図	X-1・2区調査トレンチ配置図	133
第5図	X-1・2区調査トレンチ平面図	135
第6図	X-1区西半調査トレンチ土層断面図	136
第7図	X-1区東半調査トレンチ土層断面図	137
第8図	X-2区調査トレンチ土層断面図	138

4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告

第1図	調査地の位置	141
第2図	周辺遺跡分布図(25,000分の1)	143
第3図	芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図	144
第4図	調査区配置図	147
第5図	調査区平面図	149
第6図	調査区南壁土層断面図1	150
第7図	調査区南壁土層断面図2	151
第8図	調査区南壁土層断面図3	152
第9図	調査区西端南側土層断面図	153
第10図	土坑S K02平面図	154
第11図	溝S D06・09平・断面図	155
第12図	出土遺物	156
第13図	道路状遺構検出状況図	158

付 表 目 次

1. 上野遺跡(第1次～4次)発掘調査報告

付表1	出土石器組成表	26
付表2	石材別重量比表	26
付表3	出土位置別鉄滓重量	67
付表4	第1次調査出土土器観察表	80
付表5	第2次調査出土土器観察表	80
付表6	第2次調査出土石器観察表	80
付表7	第3次調査出土石器観察表	81

付表8	第4次調査出土土器観察表	87
付表9	第4次調査出土石器・石製品観察表	90
付表10	第4次調査出土鉄滓、鉄製品観察表	90

2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次発掘調査報告

付表1	南金岐遺跡出土土器観察表	117
付表2	千代川遺跡出土土器観察表	125

3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告

付表1	芝山遺跡・芝山古墳群調査次数一覧表	132
-----	-------------------	-----

4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告

付表1	芝山遺跡・芝山古墳群調査次数一覧表	145
-----	-------------------	-----

図版目次

巻頭図版1 上野遺跡

第3次調査地を望む(南から)

巻頭図版2 上野遺跡

第4次調査地を望む(東から)

1. 上野遺跡(第1次～4次)発掘調査報告

第1次

図版第1 (1)調査地遠景(南東から)

(2)調査地全景

図版第2 (1)拡張区1東半全景(西から)

(2)拡張区1全景(東から)

図版第3 (1)6トレンチ全景(西から)

(2)3・4トレンチ全景(東から)

(3)5トレンチ全景(北東から)

図版第4 (1)S K01検出状況(南から)

(2)S K02検出状況(南から)

(3)S X03検出状況(東から)

- 図版第5 (1) S X 4 焼土検出状況(東から)
(2) S K 1 半裁状況(東から)
(3) S K 2 半裁状況(北から)

- 図版第6 (1) S K 1 完掘状況(東から)
(2) S X 4 掘削状況(東から)
(3) S X 4 完掘状況(北から)

第2次

- 図版第7 (1) 調査地遠景(南西から)
(2) 調査区全景(右が北)

- 図版第8 (1) 拡張区1・4トレンチ全景(北西から)
(2) 5トレンチ全景(北西から)

- 図版第9 (1) 下層確認トレンチ完掘状況(南西から)
(2) 下層確認トレンチ9完掘状況(南から)
(3) 下層確認トレンチ8完掘状況(南から)

- 図版第10 (1) 下層確認トレンチ4完掘状況(北から)
(2) 下層確認トレンチ3完掘状況(北から)
(3) 下層確認トレンチ2完掘状況(北から)

- 図版第11 (1) 5トレンチ全景(上が北)
(2) 5トレンチ東壁(南東から)
(3) 5トレンチ東壁遠景(東から)

第3次

- 図版第12 (1) 調査地全景(南から)
(2) 調査地全景(南西から)

- 図版第13 (1) 調査区全景(上が北)
(2) 調査区近景(西から)

- 図版第14 (1) 石器出土状況(北から)
(2) 調査区全景(北西から)

- 図版第15 (1) 上野遺跡堆積状況(北から)
(2) 石器出土状況全景(南から)

- 図版第16 (1) 範囲確認トレンチ表土除去状況(西から)
(2) 石器検出状況1(北から)
(3) 石器検出状況2(北から)

- 図版第17 (1) 石器出土状況3(左が北)
(2) 石器出土状況4(下が北)
(3) 断ち割り状況1(西から)

- 図版第18 (1)断ち割り状況2(北から)
(2)斜面部堆積状況1(南西から)
(3)斜面部堆積状況2(西から)
- 第4次
- 図版第19 (1)第4調査地遠景(南東から)
(2)第4次調査地遠景(西から)
- 図版第20 (1)第4次調査地全景(真上から、上が北東)
(2)第4次調査地全景(真上から、上が南西)
- 図版第21 (1)1区第1面全景(南から)
(2)1区第1面近景(南から)
- 図版第22 (1)2区全景(北西から)
(2)2区壁面(西から)
(3)3区全景(西から)
- 図版第23 (1)1区S K1038遺物出土状況(南西から)
(2)1区石器出土状況(東から)
(3)1区S K1238遺物出土状況(南から)
- 図版第24 (1)1区S D1030断面(南から)
(2)1区S D1030完掘状況(南から)
(3)1区S D1030完掘状況(南西から)
- 図版第25 (1)1区S L1321検出状況(南東から)
(2)1区S L1321焼土除去後(南東から)
(3)1区S L1321完掘状況(南東から)
- 図版第26 (1)1区S L1326・1327・1328検出状況(東から)
(2)1区S L1328検出状況(北東から)
(3)1区S L1326検出状況(東から)
- 図版第27 (1)1区S L1327検出状況(南東から)
(2)1区S L1328断面(北から)
(3)1区S L1326断面(東から)
- 図版第28 (1)1区S L1327断面(北西から)
(2)1区S L1326・1327・1328完掘状況(東から)
(3)1区S L1032検出状況(南東から)
- 図版第29 (1)1区S L1032土砂除去後(南東から)
(2)1区S L1032断面(東から)
(3)1区S L1032完掘状況(南東から)

- 図版第30 (1) 1区S L 1322・1323・1324検出状況(南東から)
(2) 1区S L 1322検出状況(東から)
(3) 1区S L 1323検出状況(東から)
- 図版第31 (1) 1区S L 1324検出状況(東から)
(2) 1区S L 1322土砂除去後(南東から)
(3) 1区S L 1323土砂除去後(東から)
- 図版第32 (1) 1区S L 1324土砂除去後(東から)
(2) 1区S L 1322断面(南西から)
(3) 1区S L 1322・1323・1324完掘状況(南東から)
- 図版第33 (1) 1区S L 1320検出状況(北から)
(2) 1区S L 1320検出状況(南から)
(3) 1区S L 1320検出状況(南から)
- 図版第34 (1) 1区S B 04断面(南東から)
(2) 1区S B 04完掘状況・S L 1325検出状況(西から)
(3) 1区S L 1325検出状況(西から)
- 図版第35 (1) 1区S K 1286土器出土状況(西から)
(2) 1区S K 2423土器出土状況(南から)
(3) 1区S K 2288土器出土状況(北西から)
- 図版第36 (1) 1区S K 2288土器出土状況(北から)
(2) 1区S H 2280断面(北東から)
(3) 1区S L 2287検出状況(北西から)
- 図版第37 (1) 1区S H 2280完掘状況(北西から)
(2) 1区S H 2292土器出土状況1(南西から)
(3) 1区S H 2292土器出土状況2(南西から)
- 図版第38 (1) 1区S H 2292土器出土状況3(南西から)
(2) 1区S L 2446検出状況(南西から)
(3) 1区S H 2292完掘状況(北西から)
- 図版第39 (1) 1区S L 2208検出状況(南東から)
(2) 1区S L 2208とS P 2444完掘状況(南東から)
(3) 1区S L 2287断面(南から)
- 図版第40 (1) 1区第2面全景(南西から)
(2) 1区第2面全景(真上から、上が北東)
- 図版第41 (1) 1区南西壁断面(北から)
(2) 1区南西壁断面(南から)

- 図版第42 (1) 1区南西壁南側断ち割り(南から)
(2) 1区南西壁北側断面(北東から)
- 図版第43 (1) 第1次調査出土遺物
(2) 第2次調査出土遺物
- 図版第44 石器1(第2次調査)
- 図版第45 石器2(第2次調査)
- 図版第46 石器3(第3次調査)
- 図版第47 石器4(第3次調査)
- 図版第48 石器5(第3次調査)
- 図版第49 石器6(第3次調査)
- 図版第50 石器7(第3次調査)
- 図版第51 石器8(第3次調査)
- 図版第52 第4次調査出土遺物1
- 図版第53 第4次調査出土遺物2
- 図版第54 第4次調査出土遺物3
- 図版第55 第4次調査出土遺物4
- 図版第56 第4次調査出土遺物5

2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡第36次発掘調査報告

南金岐遺跡

- 図版第1 (1) 調査前状況(南から)
(2) 調査前状況(南東から)
(3) 遺構検出作業状況(南東から)
- 図版第2 調査区全景(南東から)
- 図版第3 (1) NR1 検出状況(南東から)
(2) NR1 完掘状況(南東から)
(3) NR1 西壁断面(北東から)
- 図版第4 (1) NR2 検出状況(南東から)
(2) NR2 完掘状況(南東から)
(3) NR2 西壁断面(北東から)
- 図版第5 (1) NR3 検出状況(北東から)
(2) NR3 完掘状況(南東から)
(3) NR3 西壁断面(北東から)

- 図版第6 (1)NR4 検出状況(南東から)
(2)NR4 完掘状況(南東から)
(3)NR4 西壁断面(北東から)

千代川遺跡

- 図版第7 (1)調査前状況(北から)
(2)36-1区・36-2区全景(左が北)
(3)36-1区全景(北から)

- 図版第8 (1)NR1・2 東壁断面(西から)
(2)NR4 東壁断面(西から)
(3)36-2区全景(北から)

- 図版第9 (1)36-2区全景(南から)
(2)SB23検出状況(南から)
(3)SB23・SP19埋土断面(西から)

- 図版第10 (1)NR5・6 全景(南から)
(2)NR5 全景(南から)
(3)NR5 東壁断面(南西から)

- 図版第11 (1)NR5 東壁断面(西から)
(2)NR6 全景(南から)
(3)36-3区・36-4区全景(左が北)

- 図版第12 (1)36-3区全景(南西から)
(2)36-3区南部(北西から)
(3)36-3区SX24(南から)

- 図版第13 (1)36-4区全景(南から)
(2)36-4区全景(北から)
(3)36-4区北部SD01(西から)

図版第14 出土遺物

3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次(X-1・2区)発掘調査報告

- 図版第1 (1)X-1区調査トレンチ全景(上が北)
(2)X-1区調査トレンチ全景(西から)
(3)X-1区調査トレンチ西側拡張区全景(西から)

- 図版第2 (1)X-2区調査トレンチ北半(上が東)
(2)X-2区調査トレンチ全景(北から)
(3)X-2区調査トレンチ全景(南から)

4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告

- 図版第1 調査区全景(西から)
- 図版第2 調査区全景(東から)
- 図版第3 (1)調査区全景(上が南)
(2)調査区全景(西から)
(3)調査区全景(東から)
- 図版第4 (1)調査区東端(西から)
(2)土坑S K02(東から)
(3)土坑S K02土器出土状況(西から)
- 図版第5 (1)溝S D09(南から)
(2)溝S D09(北西から)
(3)道路状遺構(人物が並んでいる部分・西から)
- 図版第6 (1)出土遺物1
(2)出土遺物2

上野遺跡(第1～4次)発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良工事による京丹後市丹後町久僧・上野における道路整備に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したものである。

上野遺跡は、京都府北辺の日本海に面する海岸段丘上に位置する。遺跡の南側に立地する旧宇川中学校付近で、縄文時代から平安時代にかけての遺物が採取されたことで知られているが、遺跡の実態を把握する調査は行われておらず、今回が初めての発掘調査となった。

各調査年度ともに現地調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ各関係機関のご指導・ご協力を得た。また、京都府丹後土木事務所、上野区自治会ならびに調査に参加して下さった作業員、調査補助員、整理員の方々には、調査・報告を通じて多大なご協力をいただいた。

本文は、海岸段丘上面で調査を行った平成29年度から令和元年度までの調査(第1次～第3次調査)を調査課竹原一彦、同名村威彦の協力を得て調査課面将道が、海岸段丘下部で行った令和4年度の調査(第4次調査)を調査課加藤雄太が、遺跡周辺の地形分析を調査課中川和哉が執筆した。なお、調査・報告に係る経費は、京都府丹後土木事務所が全額負担した。



第1図 調査地の位置

〔調査体制〕

第1次調査

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	中川和哉
	同 副主査	竹原一彦
	同 調査員	面 将道

調査場所 京都府京丹後市丹後町上野地内

現地調査期間 平成29年7月14日～平成29年12月4日

調査面積 1,700㎡

第2次調査

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	中川和哉
	同 調査員	面 将道
	同 調査員	加藤雄太

調査場所 京都府京丹後市丹後町上野地内

現地調査期間 平成30年8月1日～平成30年12月21日

調査面積 1,570㎡

第3次調査

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	中川和哉
	同 調査員	面 将道
	同 調査員	名村威彦

調査場所 京都府京丹後市丹後町上野地内

現地調査期間 令和元年8月1日～令和元年12月16日

調査面積 1,100㎡

第4次調査

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	吹田直子
	同 調査員	加藤雄太
	同 調査員	野島悠之

調査場所 京都府京丹後市丹後町上野地内

現地調査期間 令和3年8月25日～令和4年1月25日

調査面積 1,030㎡

整理・報告作業

責任者	調査課長	小池 寛
担当者	調査課調査第1係長	森島康雄
	同 調査第1係調査員	加藤雄太
	同 調査第2係主任	面 将道

整理期間 令和5年6月20日～令和6年3月31日

2. 遺跡の環境

1) 地理的環境

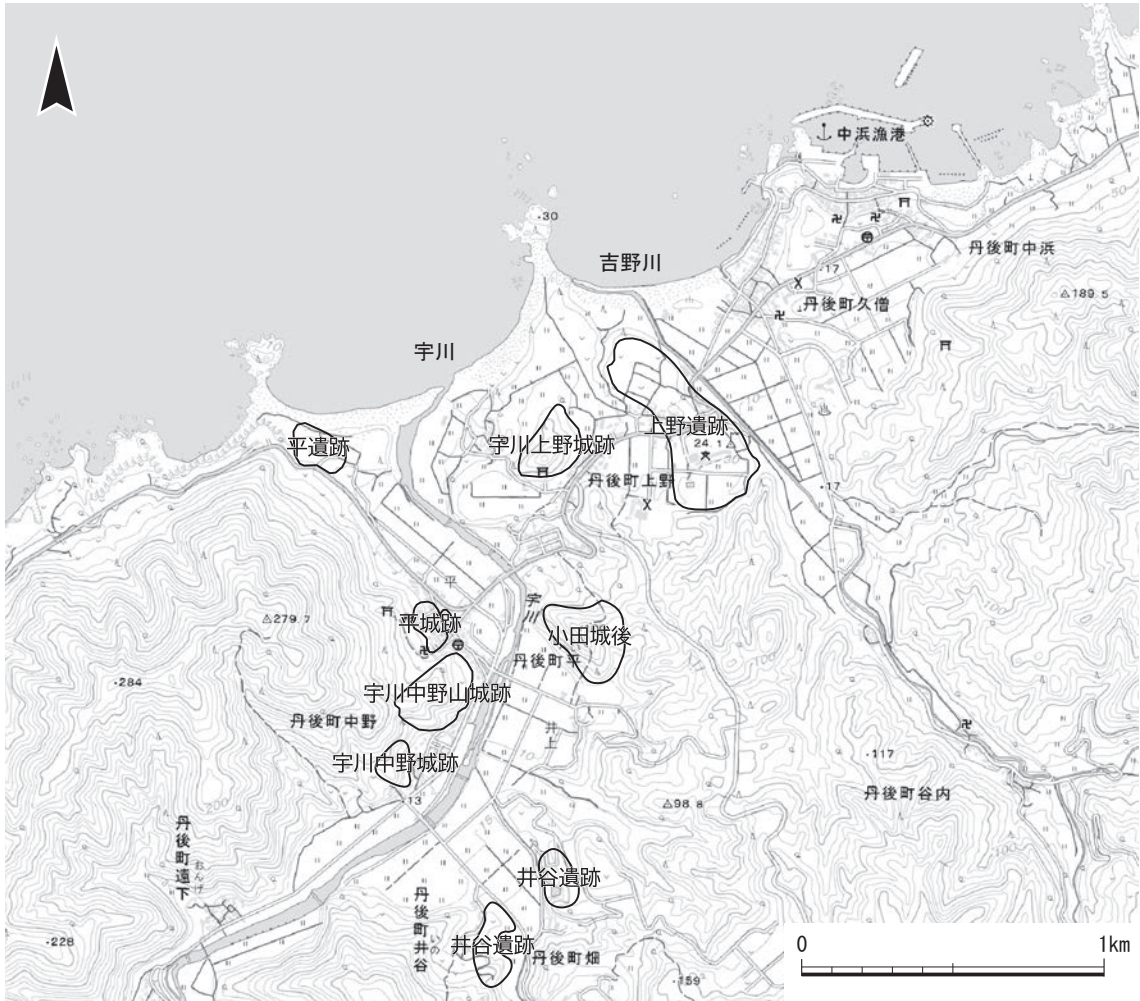
京丹後市は、京都府北部の日本海に北東方向へ突出する丹後半島の大部分を占める。京丹後市は、北東は与謝郡伊根町、南東は与謝郡与謝野町・宮津市に接し、西は豊岡市に接する。

上野遺跡周辺の地質は、南側に新生代古第三紀～新第三紀に形成された火山岩や堆積岩からなる急峻な山地が広く分布している。一方、海浜部には、新生代第四紀に発達した砂丘や段丘などの未固結層が発達している(第4図)。このうち、遺跡は丹後半島の北側の経ヶ岬から久美浜湾にかけて明瞭に発達する海岸段丘上に位置している。段丘面は下位、中位、上位Ⅰ、上位Ⅱに分類され(植村1981)、最も連続性が認められるものは中位面で、一部に厚い海成層を伴い、大山倉吉軽石(DKP)層に覆われることから、MIS5e(最終間氷期：約13万年前)の海進期に形成されている(注1)。遺跡の立地する海岸段丘中位面は、東を吉野川、西を宇川によって開析され、東西幅1km、南北幅0.8kmの後背山地をとまう独立した台地となっている(第2図)。

2) 歴史的環境

上野遺跡は、縄文時代から中世にかけての遺物散布地として知られていたが、今回の調査では、京丹後市および京都府内で初めてとなる、後期旧石器時代前半期の石器群が出土したほか、古代の鍛冶炉跡、工房跡と考えられる遺構群や、鉾、鋤の羽口などの鍛冶に関連する遺物が出土した。周辺には、宇川・吉野川流域を中心に縄文時代から中世にかけての遺跡が点在している。遺跡の実態について明らかとなっているのは、宇川河口付近に立地する平遺跡および山地に展開する中世山城に限られる。

平遺跡は、昭和37年に試掘調査がなされ、昭和38年に、同志社大学考古学研究会と同志社大学考古学研究室が共同で本格的な発掘調査を実施し、砂丘堆積物より、縄文時代前期から晩期にかけての土器や石器が多量に出土することを確認している。また、昭和40年には帝塚山大学考古学研究室が発掘調査を実施し、北近畿を代表する縄文時代の遺跡として広く知られることとなった(注2・3)。約30年ほどの期間を経て、平成8年には、当調査研究センターが丹後周遊道路改良工事事業にとまう大規模な発掘調査を実施し、縄文時代晩期を中心とした豊富な土器や石器などの資料のほか、埋甕や石敷炉といった遺構を確認している。また、古墳時代の土師器・製塩土器・須恵器が出土し、石組遺構が検出されたことで、縄文時代から古墳時代にかけての集落が営まれた複合遺跡であることが明らかとなっている(注4)。近年では、平成30年から令和3年にかけて当調査研究



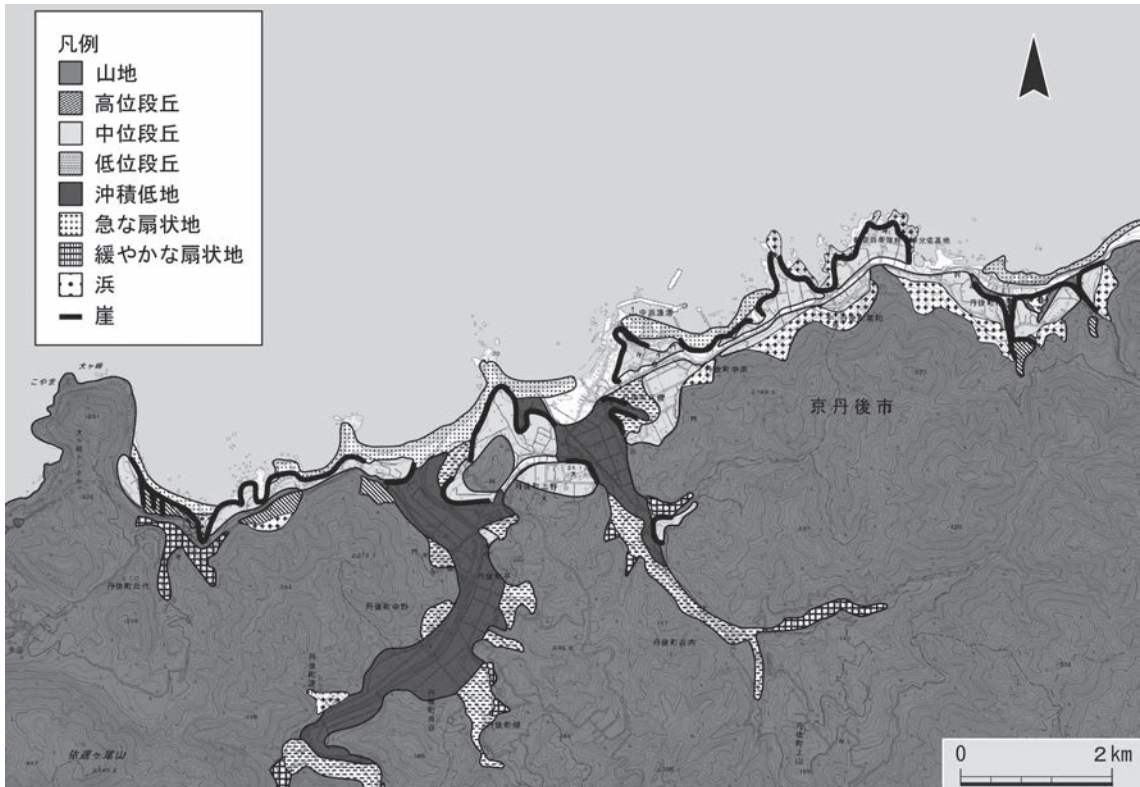
第2図 上野遺跡と周辺の遺跡地図(国土地理院「丹後中浜」に加筆)

センターが、小規模な発掘調査を実施し、縄文時代の土器・石器の出土が報告されている^(注5・6)。本
 地域の中世山城は、宇川流域の高位段丘上を中心に分布することが、平成21年から26年にかけて
 京都府教育委員会文化財保護課が行った、京都府下の中世城館の悉皆調査で明らかとなっている^(注7)。

3. 調査の経緯と方法

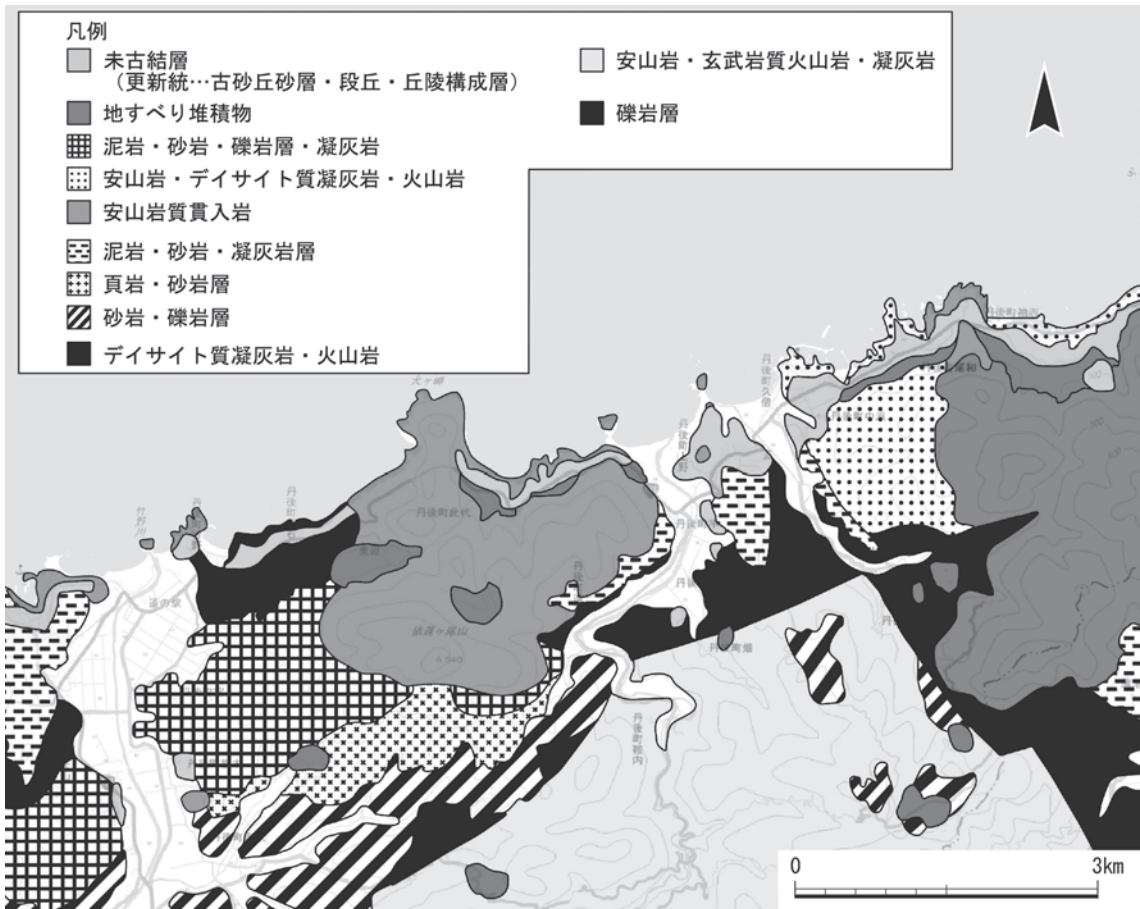
1) 調査の経緯

今回の発掘調査は、浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良工事による京丹後市丹後
 町久僧・上野における道路整備に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。本事業
 は、丹後半島を周遊する主要地方道浜丹後線のバイパス道路を新たに建設するもので、計画路線
 はおよそ幅10m・延長1.7kmの規模である。この計画された道路が、周知の埋蔵文化財包蔵地で
 ある上野遺跡が立地する段丘を、大きく削平して横断するため、西側から順次に4か年にわたっ
 て発掘調査を実施した。



第3図 上野遺跡周辺の地形分類図

(『京丹後市史』資料編「京丹後市の災害」巻末付図1をトレース)



第4図 上野遺跡周辺の地質図

(『京丹後市史』資料編『京丹後市の災害』巻末付図2をトレース)

(1)第1次調査

平成29年度は、計画路線西部の段丘上を対象として、7か所の小規模調査を実施した。この調査で、古代の遺構・遺物を確認した部分を拡張区1として面的調査を実施した。調査終了に伴い、無人航空機による空中写真撮影を1回行った。調査期間は平成29年7月14日から同年12月4日で、調査面積は1,700㎡である。

(2)第2次調査

平成30年度は、前年度調査区の東側で5か所の小規模調査を実施した。調査対象地の東部で、後期旧石器時代前半期の遺物が出土したことから、段丘上の後期旧石器時代前半期の遺物が分布する範囲を把握するために拡張して面的調査を実施した。段丘に付随する緩斜面地の遺構・遺物の分布状況の確認を目的とした小規模調査では、古代の鍛冶関連遺構と遺物を確認したため、次年度以降に面的調査を行うこととなった。調査期間は平成30年8月1日から同年12月21日で、調査面積は1,570㎡である。調査終了に伴い、ラジコンヘリによる空中写真撮影を1回行った。

(3)第3次調査

令和元年度は、段丘上の東部で確認した後期旧石器時代前半期の遺物分布範囲を中心に発掘調査を実施した。調査終了に伴い、無人航空機による空中写真撮影を1回行った。調査期間は令和元年8月1日から同年12月16日で、調査面積は1,100㎡である。

(4)第4次調査

令和3年度は、第2次調査で古代の鍛冶関連遺構などが確認されたトレンチを中心に丘陵の北側斜面とその下部の平坦面に、3か所の調査区を設定して、調査を実施した。調査の結果、掘立柱建物、竪穴建物、多数の柱穴、複数の鍛冶炉、溝、土坑などを検出した。調査の進捗に合わせて、無人航空機による空中写真撮影を2回行った。調査期間は令和3年8月25日から令和4年1月25日で、調査面積は1,030㎡である。

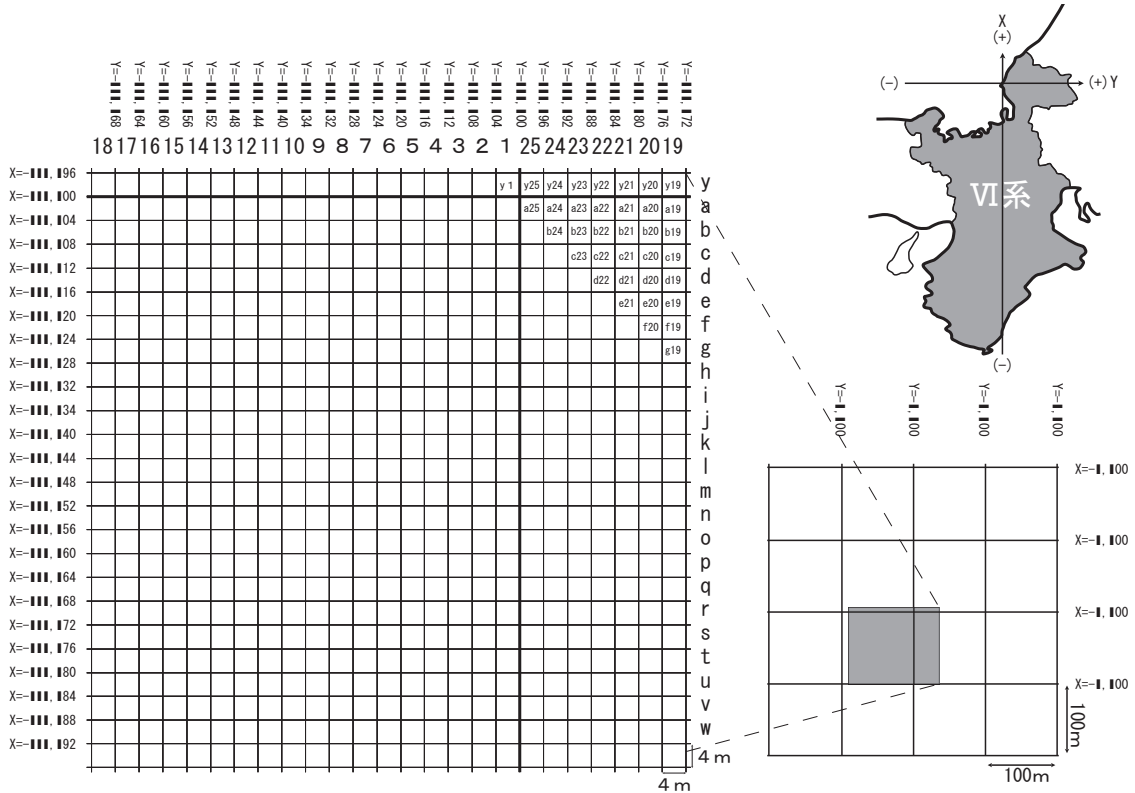
(5)整理作業

平成29年度から令和5年度にかけて整理作業を実施した。調査によって出土した遺物は、第1次調査で整理箱2箱、第2次調査で8箱、第3次調査で5箱、第4次調査で43箱であった。出土遺物については、台帳登録、洗浄作業を行い、その後、注記・接合作業を行い、必要に応じて復元・接合作業を実施した。その作業と並行し、報告書に掲載する出土遺物の選別・図化実測作業、写真撮影等を行った。本報告で使用した遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真測量で作成した平面図を使用した。

2)調査の方法

(1)地区割りについて

上野遺跡の調査では、次数ごとに数字の地区名を付している。遺物の取り上げには、平面直角座標系VI系(JGD2011)を利用し、X、Yの座標の整数値の下2桁が00となる点を基準に100m四方の大グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ25等分した4m四方の中グリッドを設定した。VI系の原点は調査地の北東にあるため、南と西へ向かって座標の絶対値が増加する。この点



第5図 地区割り設定図

を考慮して、中グリッドの名称は、南北方向は北から a～o、東西方向は東から 1～25としてその組み合わせで表記した。また、遺構や遺物の散布状況から、必要に応じて中グリッドをさらに 2m四方に分けた小グリッドを設定した。

(2)遺構番号について

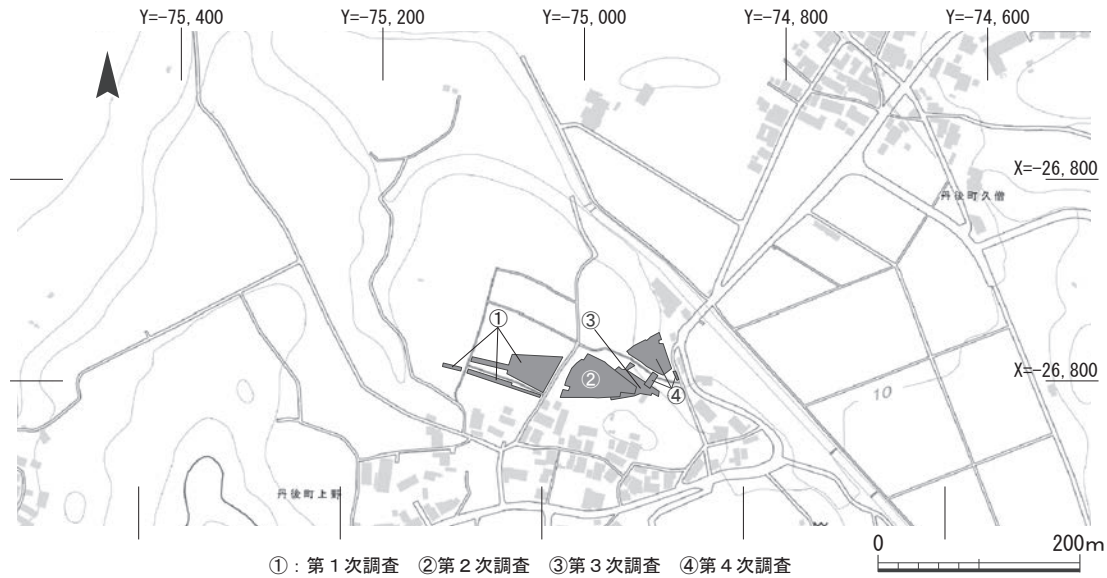
調査では、回数ごとにそれぞれ 1 から遺構番号を付け、遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更のないようにした。本書で使用した略号は以下のとおりである。

- S D : 溝、S K : 土坑、S B : 掘立柱建物、S H : 竪穴建物、S P : 柱穴、S L : 炉・竈
- S X : その他遺構

4. 基本層序

調査区は海成段丘に立地し、段丘上に風成堆積物がよく残存していた。段丘上の基本層序は、第7図に示したとおりである。

近現代の耕作土である、暗褐色を呈する極細粒砂含む中粒砂(I層)、I層のブロックと黄色を呈する極細粒砂である始良丹沢火山灰(AT)のブロックが基質に多く含まれる、橙色を呈する極細砂を含む粘土層(II層)、ATのブロックを少量含む橙色を呈する極細砂を含む粘土層(III層)、細粒砂を少量含む、明黄褐色を呈する極細粒砂を含む粘土層(IV a層)、細粒砂を少量含む、明褐色を呈する極細粒砂を含む粘土層(IV b層)、細粒砂を少量含む明褐色を呈する極細粒砂を含む粘

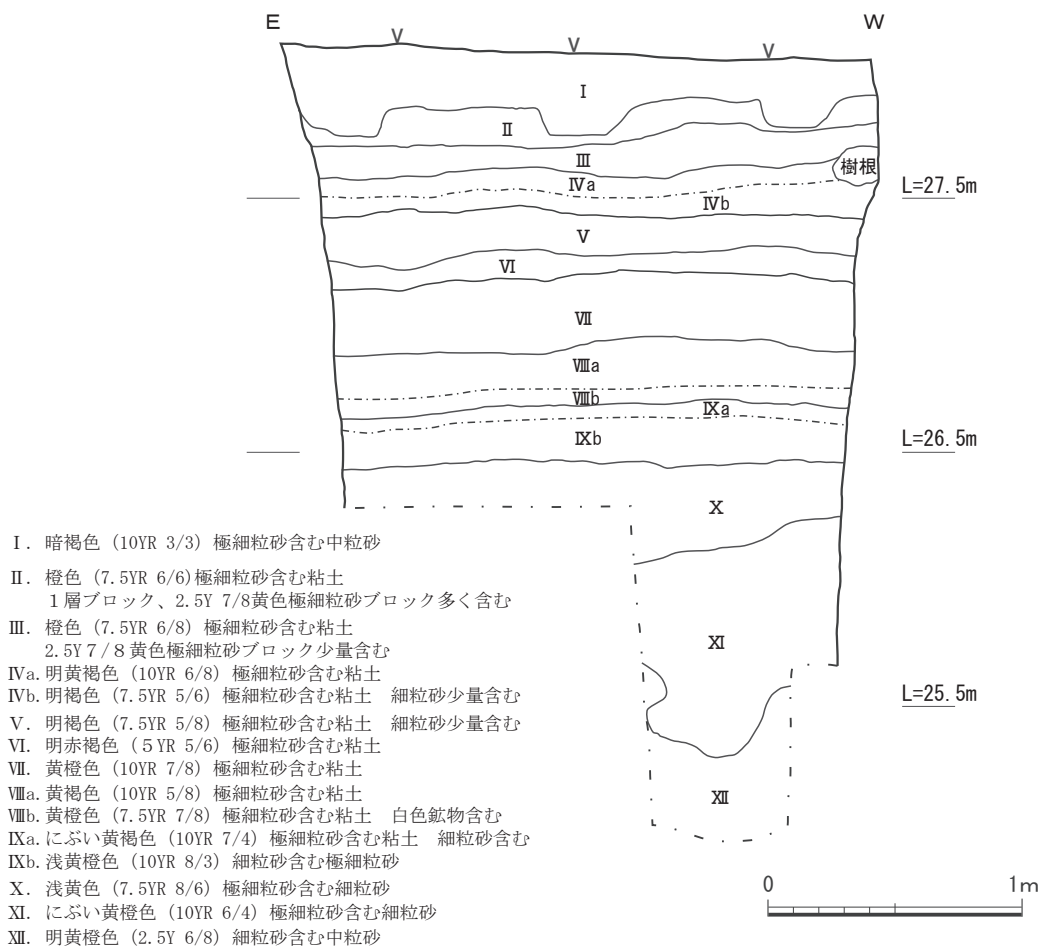


第6図 第1～4次調査 調査区配置図(1250分の1)

土層(V層)、明赤褐色を呈する極細粒砂を含む粘土層(VI層)、VI層と粒度の良く似る黄褐色を呈する極細粒砂を含む粘土層(VII層)、黄橙色を呈する極細粒砂含む粘土層(VIII a層)、大山倉吉軽石(DKP)を含み、白色鉱物を含む黄橙色を呈する極細粒砂含む粘土層(VIII b層)、細粒砂を含み、にぶい黄褐色を呈する極細粒砂含む粘土層(IX a層)、浅黄橙色を呈する細粒砂を含む極細粒砂層(IX b層)、浅黄色を呈する極細粒砂含む細粒砂層(X層)、にぶい黄橙色を呈する極細粒砂含む細粒砂層(XI層)、明黄橙色を呈する細粒砂含む中粒砂層(XII層)である。

第1次調査の調査区は段丘西部にあたり、調査前標高が北東側が約27.7m、南西側で約28.2mを測る。表土直下に東側ではVIII b層が、西側ではVIII a層が調査区の全面にみられたことから、II～VII層は近現代の耕地整理にともなって削平されたと判断した。

第2・3次調査の調査区は段丘東部にあたり、調査前標高が北西側で約27.3m、南東側で約27.6mを測る。南側はIII層が一部削平を受けているものの、良好な状態で残存している。各調査区の削平状況から、第8図のとおり、本来の地形は、おおむね北西から南東にかけて緩やかに低くなり、段丘中央部はすり鉢状に低くなっていたと推察する。なお、段丘下部については、堆積が上述の状況とは大きく異なるため、第4次調査の節にて個別に記載する。



第7図 第2次調査拡張区2南西隅深堀部断面図

5. 第1次調査

1) 調査概要(第9図)

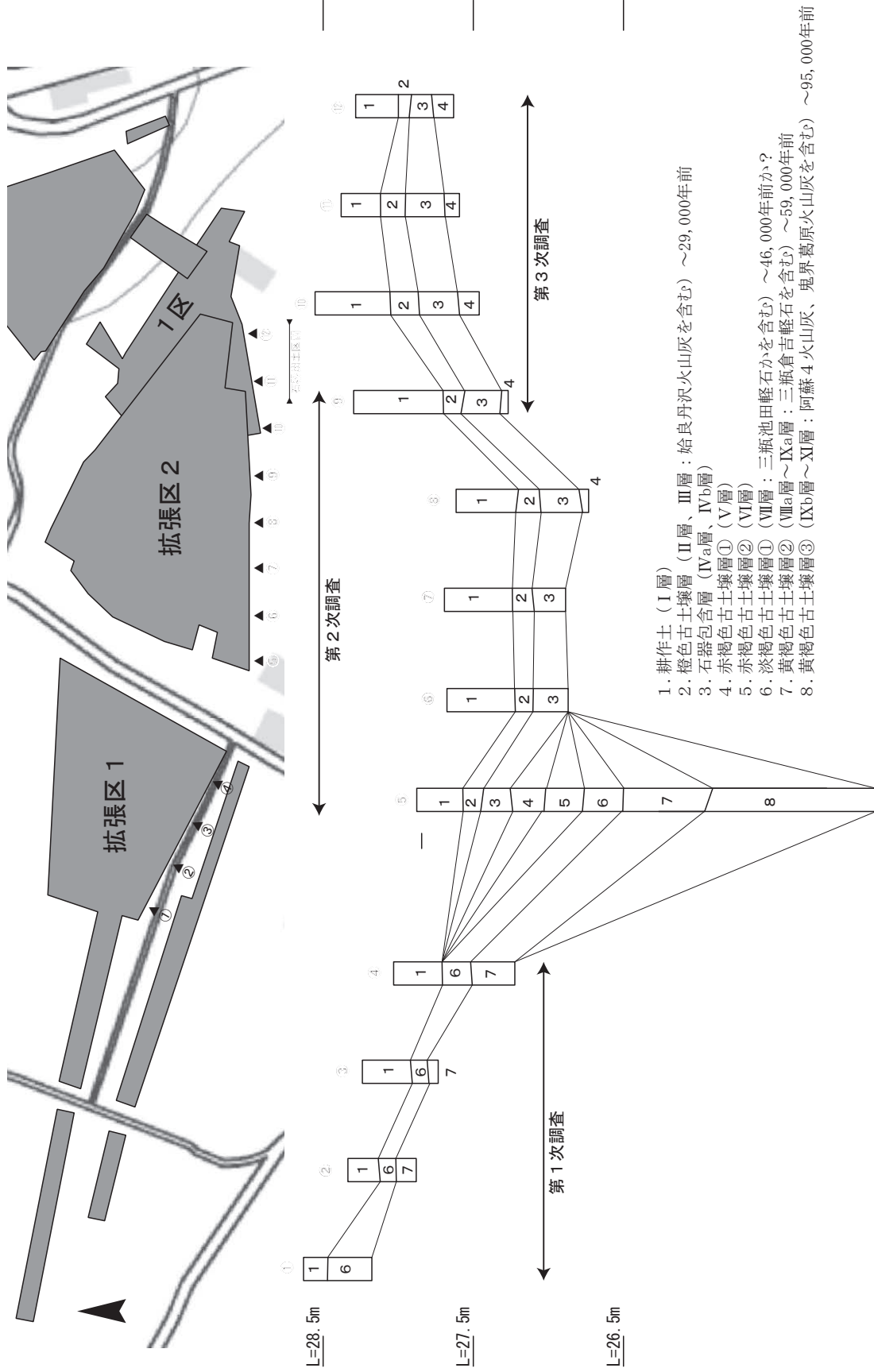
最初に段丘西部に7か所の調査区を設定し、小規模調査を実施した。調査区は、全面に耕作による削平・かく乱を受けていたが、1・2トレンチで縄文時代～近世にかけての遺物が表土直下で出土したことから、協議の結果、拡張して面的調査を行った(拡張区1)。3～7トレンチでは、前の地形改変の影響から、遺構・遺物を確認することはできなかった。

(1) 拡張区1(第10図)

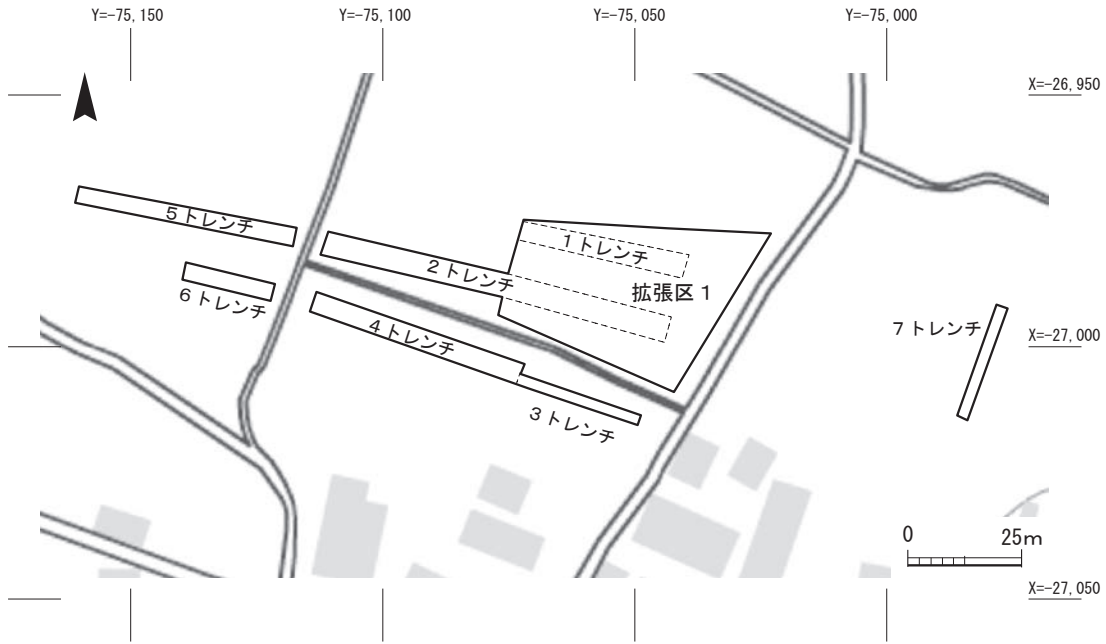
長さ80m、幅30mの台形状の調査区で、調査面積は1,220㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、黒褐色粘性極細粒砂の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層は検出できなかったが、古代の土坑・焼土坑を検出した。

土坑SK01(第12図) 調査区の北寄り検出した不定形の土坑である。遺構の東西は、近現代の耕作溝によって削平され、土坑の底部のみが残る。検出長0.5m、検出幅0.6m、検出深0.03mを測る。土坑内からは、ごく少量の磨滅した9世紀から10世紀初頭の土器片が出土した。

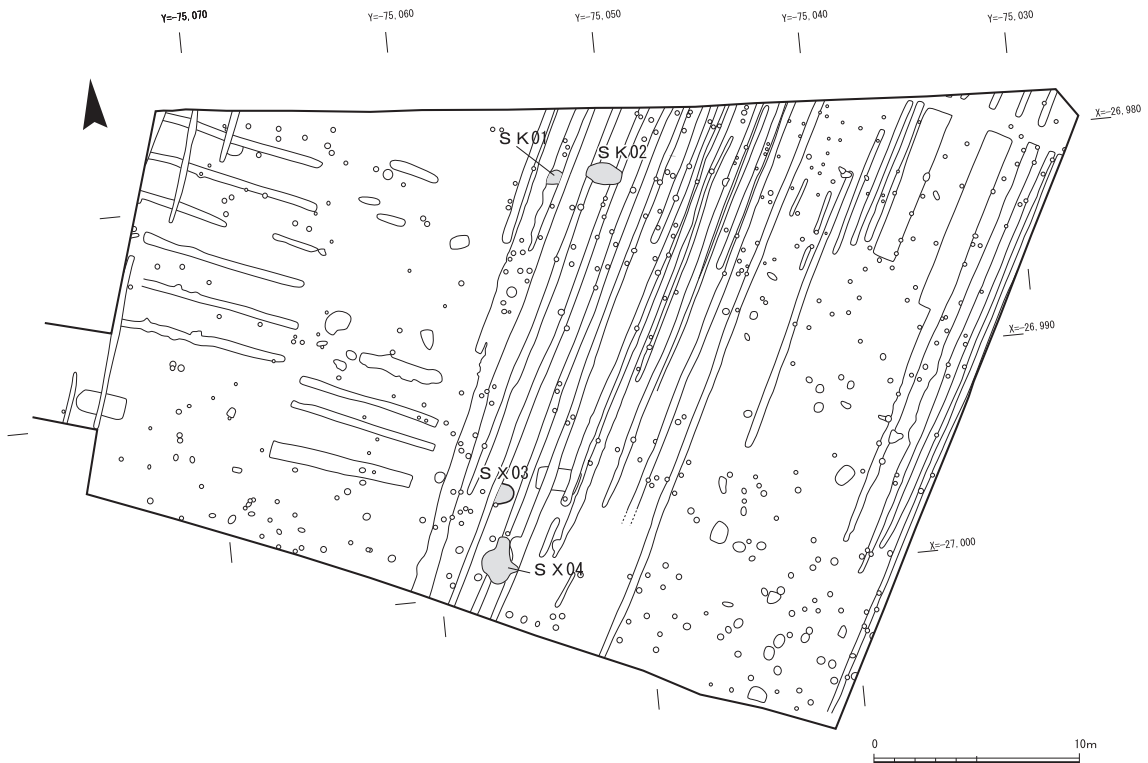
土坑SK02(第13図) 調査区の北寄り検出した不定形の土坑である。遺構の東西を、近現代の耕作溝や杭跡によって削平、あるいはかく乱され、土坑の底部のみを残して削平されている。



第8図 段丘上部基本層序土層断面図



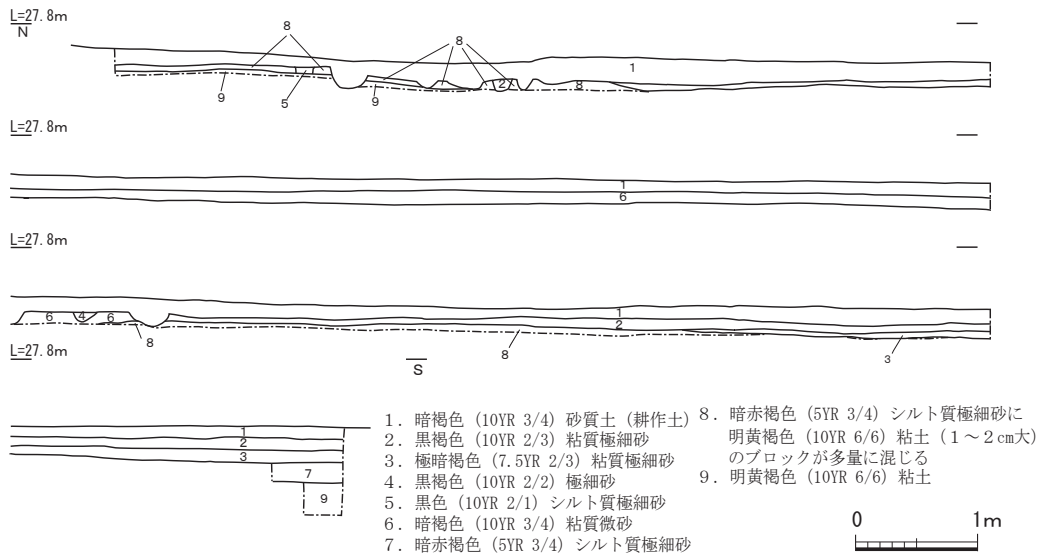
第9図 第1次調査調査区配置図



第10図 拡張区1 遺構配置図

検出長1.9m、検出幅1.5m、検出深0.2mを測る。土坑内からは、土師器片、羽口、礫類が出土した。土器片はいずれも摩滅が激しい。

焼土坑 S X03 (第14図) 調査区の南寄り検出した不定形な焼土坑である。遺構の西半は耕作溝によって削平され、土坑の底部のみが残る。検出長0.5m、検出幅0.6m、検出深0.1mを測る。底面北側に焼土が存在するが、炉面は確認できない。底面は凹凸に富む。埋土から、骨の細片や炭化物が少量出土している。



第11図 拡張区1東壁土層図

焼土坑 S X04 (第15図) 調査区の南寄りで見出した不定形な焼土坑である。遺構の西半は耕作溝によって削平され、土坑の底部のみが残る。検出長1.3m、検出幅0.8m、検出深0.1mを測る。底面中央に焼土が存在するが、炉面は確認できない。焼土は2か所に分布し、東側の焼土にくぼみがあることから、土器を据え付けていた可能性が指摘できる。土坑内からは、焼土のほか、炭化物、土師器の細片が少量出土している。

(2) 3 トレンチ (第16図)

長さ約25m、幅約2mの長方形の調査区で、調査面積は50㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、黒褐色粘性極細粒砂の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層・遺構は確認できなかった。

(3) 4 トレンチ (第16図)

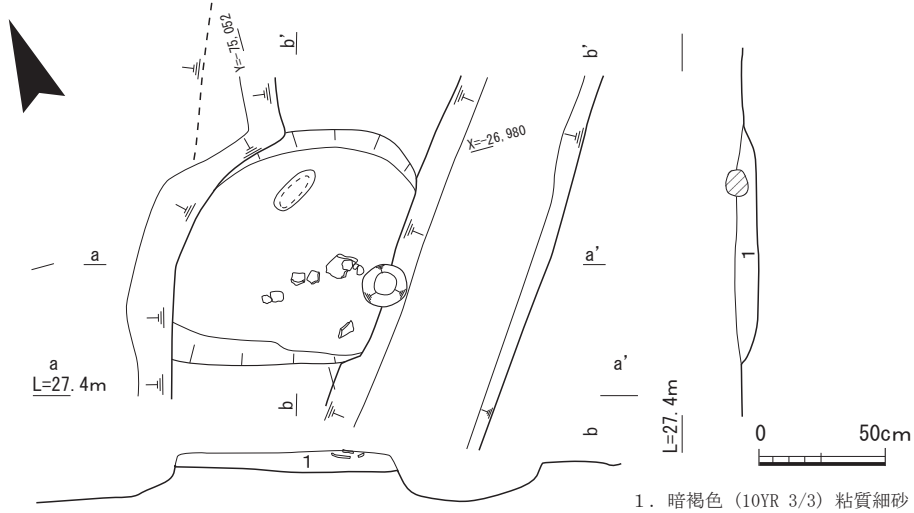
長さ45m、幅4mの長方形の調査区で、調査面積は180㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、黒褐色粘性極細粒砂の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層・遺構は確認できなかった。

(4) 5 トレンチ (第17図)

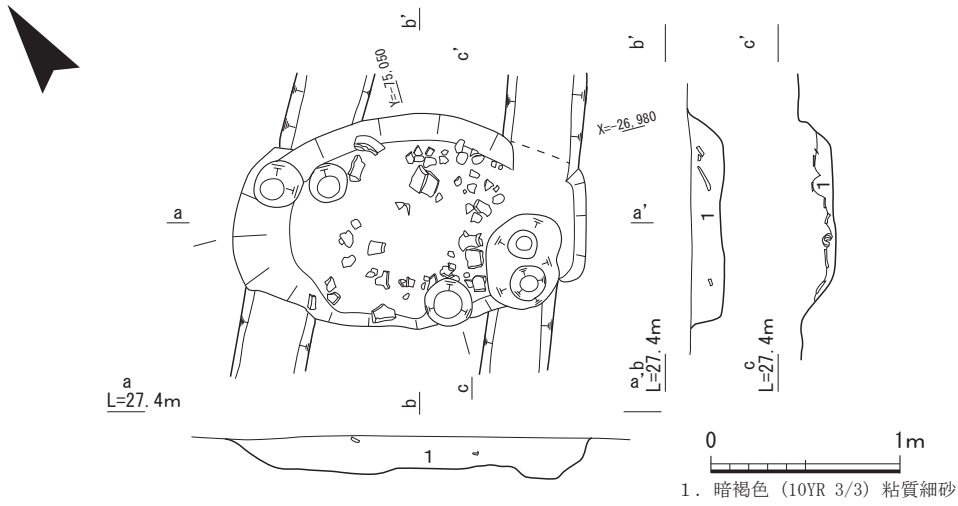
長さ40m、幅4mの長方形の調査区で、調査面積は160㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、明黄褐色粘土の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層・遺構は確認できなかった。

(5) 6 トレンチ (第17図)

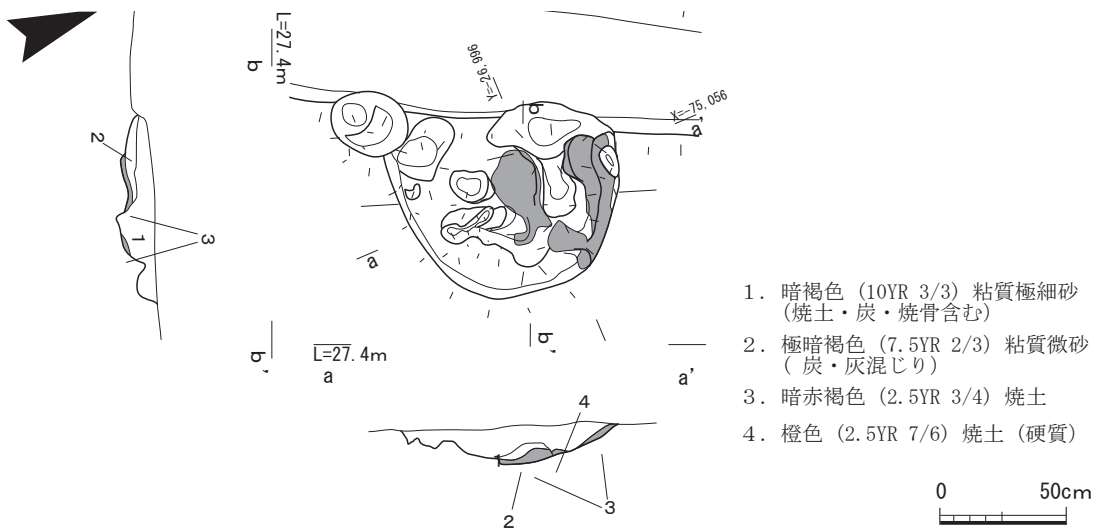
長さ15m、幅3mの長方形の調査区で、調査面積は45㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、明黄褐色粘土の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層・遺構は確認できなかった。



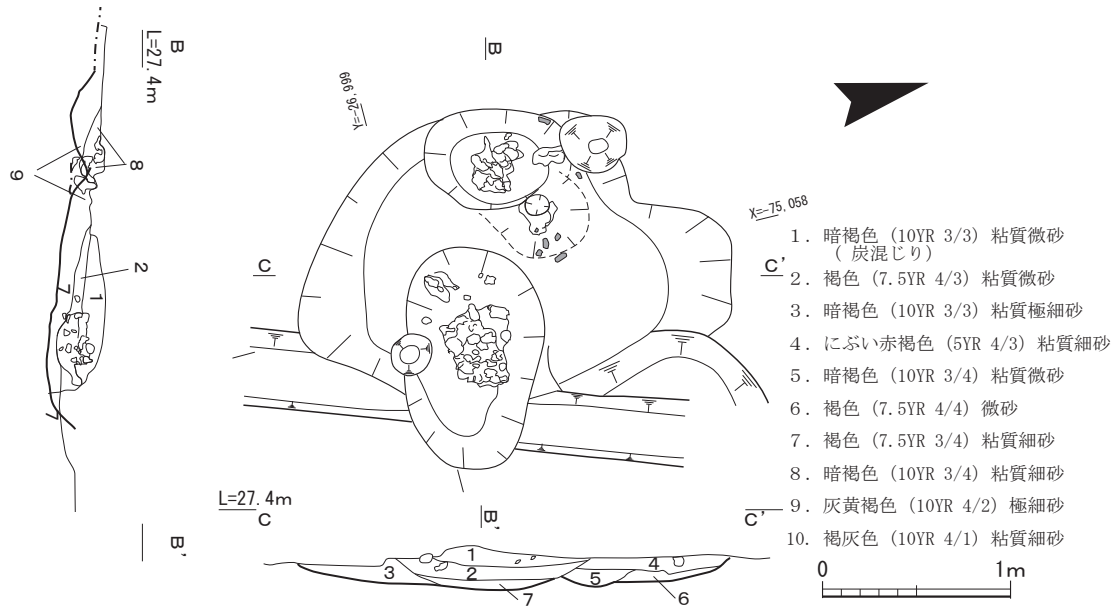
第12図 土坑 S K01平・断面図



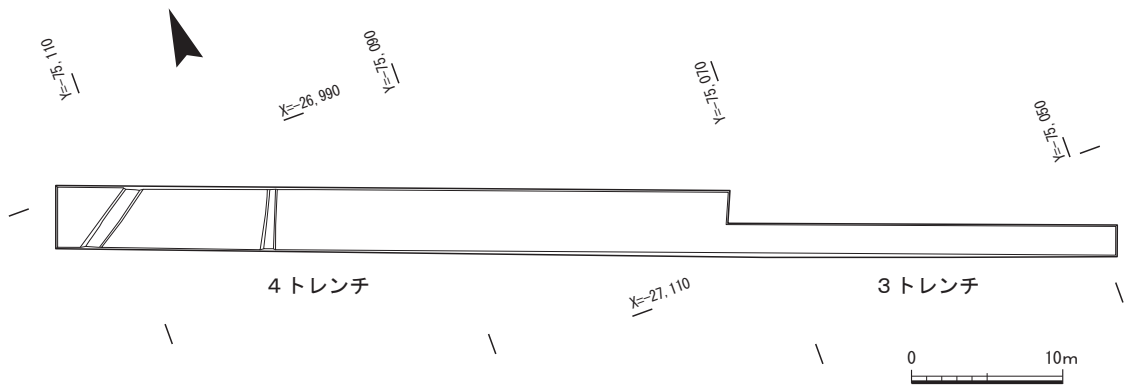
第13図 土坑 S K02平・断面図



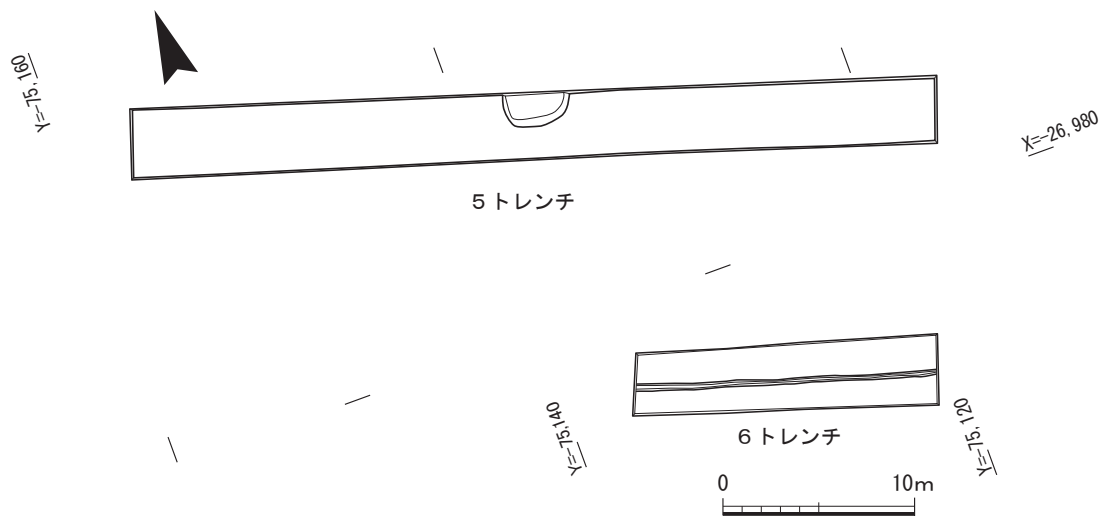
第14図 土坑 S K03平・断面図



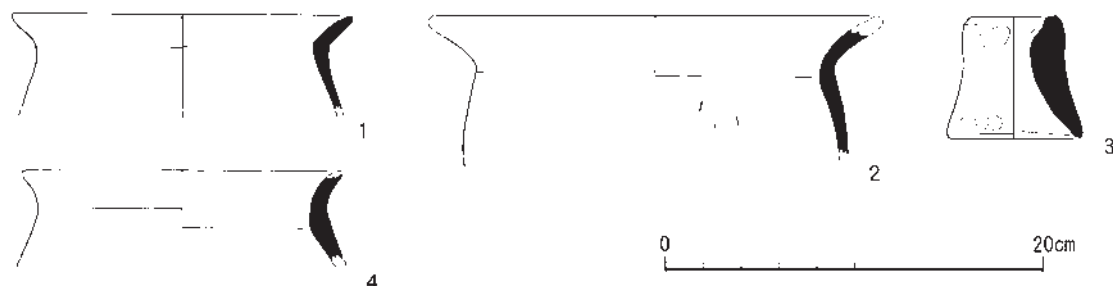
第15図 焼土坑 S X04平・断面図



第16図 3・4トレンチ平面図



第17図 5・6トレンチ平面図



第18図 第1次調査出土遺物

(6) 7 トレンチ(第19図)

段丘東部に設けた長さ約23m、幅約2mの調査区で、調査面積は45㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削を実施し、橙色極細砂の土色変化を確認したため、人力掘削および精査を実施した。明瞭な遺物包含層・遺構は確認できなかった。

2) 出土遺物

今回の調査では、おおむね8世紀から10世紀初頭に属する土師器片が出土した。図化に耐えうる資料はごく限られるが、遺構ごとに記載する。

1はS K01出土の土師器甕の口縁部である。口縁部はやや外反する。強く摩滅するが、内面にナデ調整、外面にハケメ調整を施すとみられる。内面にコゲが付着する。

2はS K02埋土出土の土師器甕の口縁部である。口縁部はやや外反する。強く摩滅するが、内面にナデとヘラケズリ、外面にナデ調整を施す。

3はS K02出土の製塩土器の支脚である。強く摩滅する。

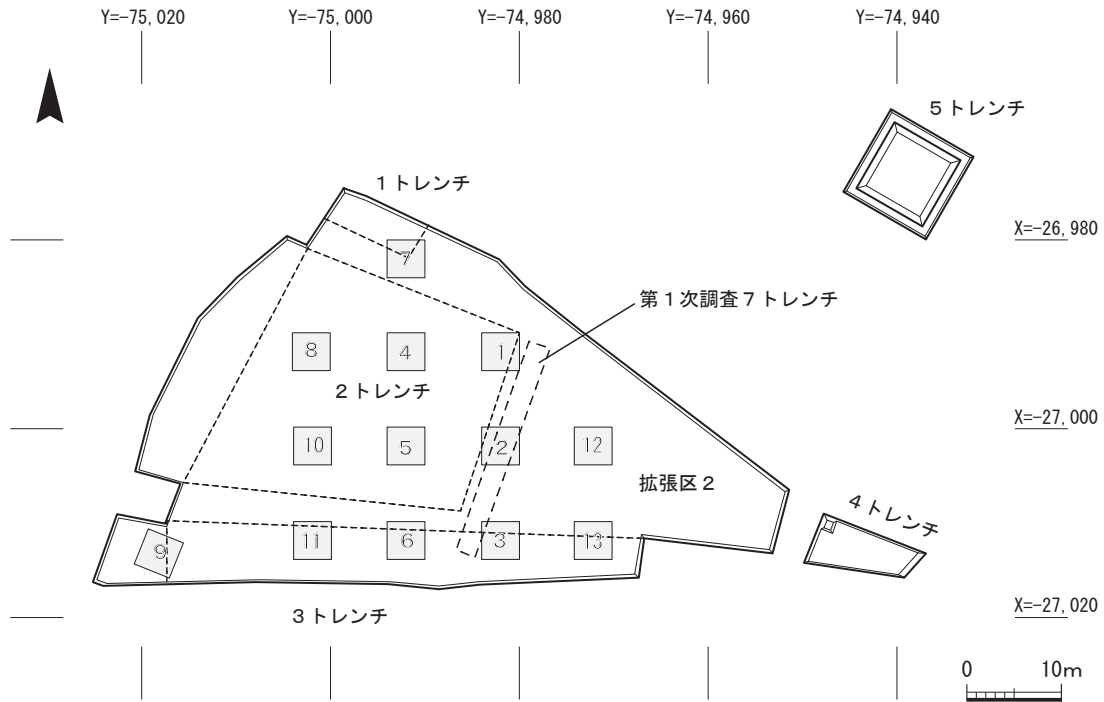
4は3・4 トレンチの樹根痕から出土した土師器甕の口縁部である。内面、外面ともに強く摩滅し、調整は不明である。

6. 第2次調査

1) 調査概要(第19図)

第2次調査では、段丘上に1～4 トレンチ、段丘下部の緩斜地に5 トレンチを設定して調査を進めた。1～3 トレンチで表土直下に、柱穴・土坑状の土色変化を多数確認したために、協議を行った結果、面的に拡張し、拡張区2とした。4 トレンチでは、下層確認のため一部を断ち割ったところ、AT下層の古土壤層より、チャート製石器が出土した。4 トレンチの調査成果をうけて、拡張区2に、4m四方の深掘りを実施した。西半では土壤が削平されていたが、東に向かうにつれて土層の残存状況が良くなることから、東半に石器出土層が広がることを確認した。

段丘下部にあたる5 トレンチでは、段丘上に比べて土壤が厚く堆積し、9～12世紀の遺物が出土した。9～10世紀の遺物が卓越して出土する層準付近で、鍛冶関連の遺構・遺物を確認した。



第19図 第2次調査調査区配置図

(1) 拡張区2

長さ70m、幅40mの台形状の調査区で、調査面積は1,430㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削で表土を除去したのち、石器や土器の細片をわずかに含む第21図2層を検出したことから、人力掘削および精査を実施した。遺構と考えていた柱穴・土坑状の土色変化は、調査区南西部に多く確認できたが、近現代の廃棄物が多く出土し、かく乱と判明した。第1次調査で確認した遺構面は、耕作地の造成によって削平されたと判断した。

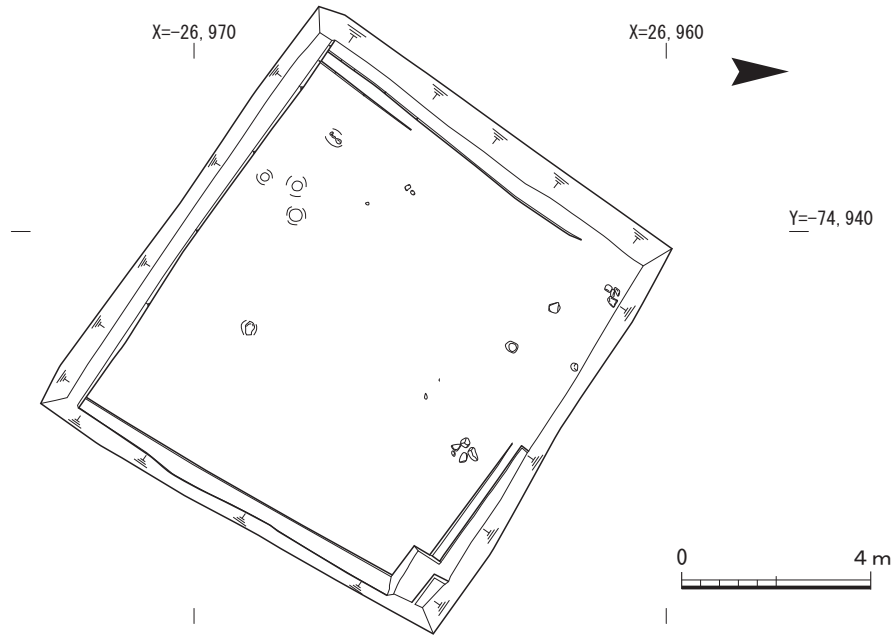
(2) 4トレンチ

南北5m、東西10mの台形状の調査区で、調査面積は40㎡を測る。地表下0.3mまで重機掘削で表土を除去したのち、人力掘削および精査を実施した。拡張区2と同様に、近現代の耕作溝等がかく乱をうけていたが、第21図3層がわずかに残存していた。調査区北西隅に堆積状況の確認を目的として断ち割りを実施したところ、地表下約0.4mの深さでチャート製の台形石器が出土した。

4トレンチの調査成果を受け、拡張区2に4m四方のトレンチ(第19図網掛け部)を設定し、下層の確認調査を実施した。4トレンチで出土した石器に類する資料は得られなかったが、調査区南東側に向かうほど、第21図3層が良好に残ることを確認した。段丘南東側に向かうほど良好に土壌が残存していると判断し、これより東側の下層は、次年度に調査を実施することとなった。

(4) 5トレンチ(第20図)

段丘下部の遺跡の内容確認を目的として、約10m四方の調査区を設定した。調査面積は100㎡を測る。重機掘削の際、地表下1.7mで9～12世紀の遺物が出土したことから、以降は人力掘削および精査を実施した。遺物包含層を除去したのち、9～10世紀の遺物が卓越して出土する層で



第20図 5トレンチ平面図

鍛冶関連の遺構・遺物が存在する遺構面を確認した。また、その下層で弥生土器片が出土したことから、下層遺構面が広がることが想定されたため、次年度以降に周辺を拡張して面的調査を実施することとなった。

2) 出土遺物

(1) 拡張区2

拡張区2では、第21図2層から弥生土器片、須恵器片と石器がわずかに出土した。耕作等によるかく乱を受けているため、本来の包含層は不明である。

弥生土器(第24図) 1は口縁部に刻み目をもつ甕の破片である。胎土は1mm程度の石英、長石を含み、やや粗い。体部外面には1cm四方あたり5条程度の荒いハケが施され、口縁部はヨコナデを施す。内面は全面にナデを施す。外面に煤が付着する。

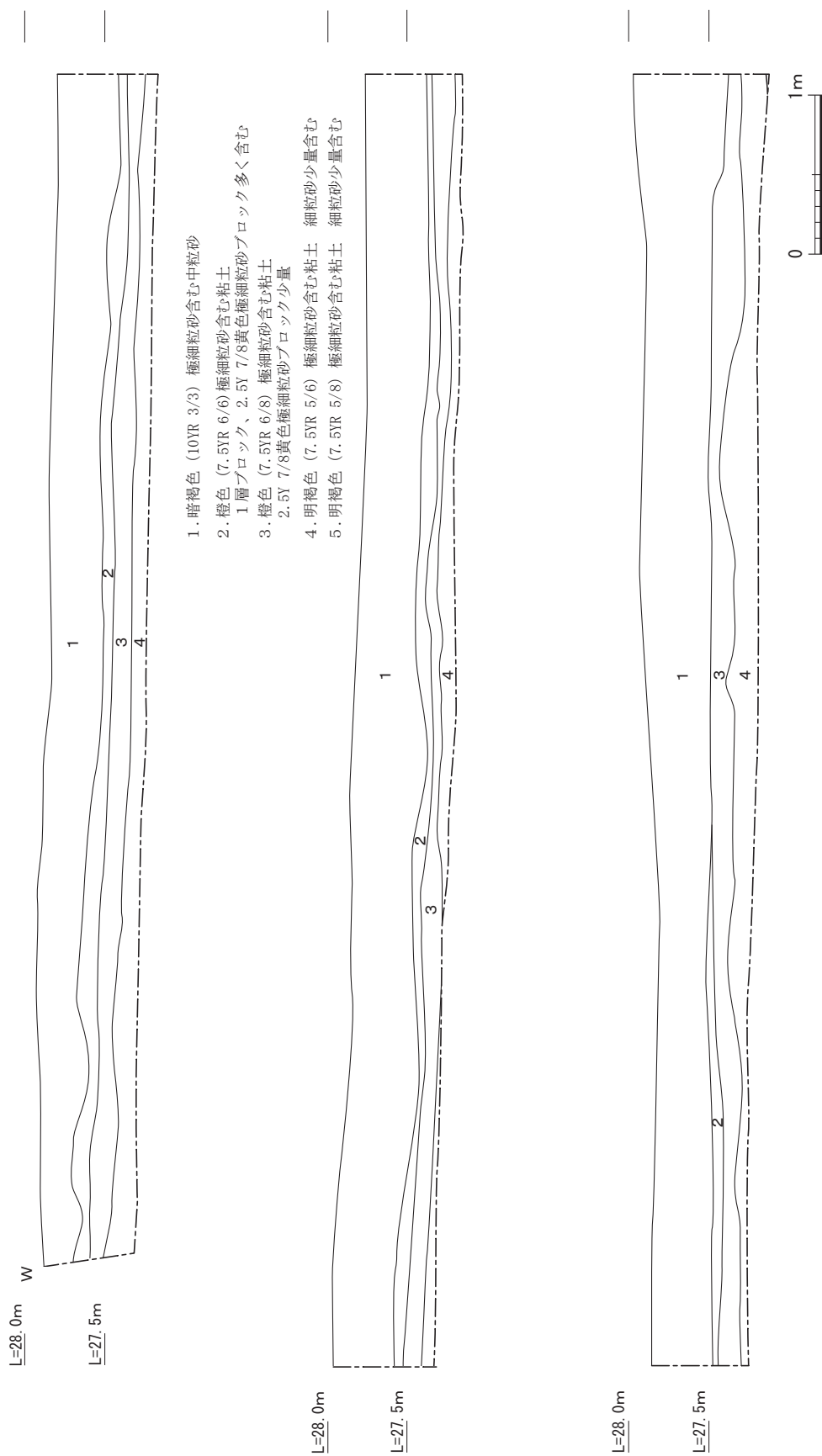
須恵器(第24図) 2は須恵器杯Aの破片である。胎土は1～2mm程度の石英、長石を含み、やや粗い。

石器(第26図) 3は、最大長7.6cm、最大幅4.6cm、最大厚1.3cm、重量31.6gを測る流紋岩製の縦長剥片である。背面に、主要剥離面と同一方向の先行剥離痕が2枚と、円礫～亜円礫の礫面を有する。打面は、背面の先行剥離を切る剥離面である。遊離資料であるため、帰属時期は不明であるが、風化の程度から縄文時代以降に属すると考えられる。

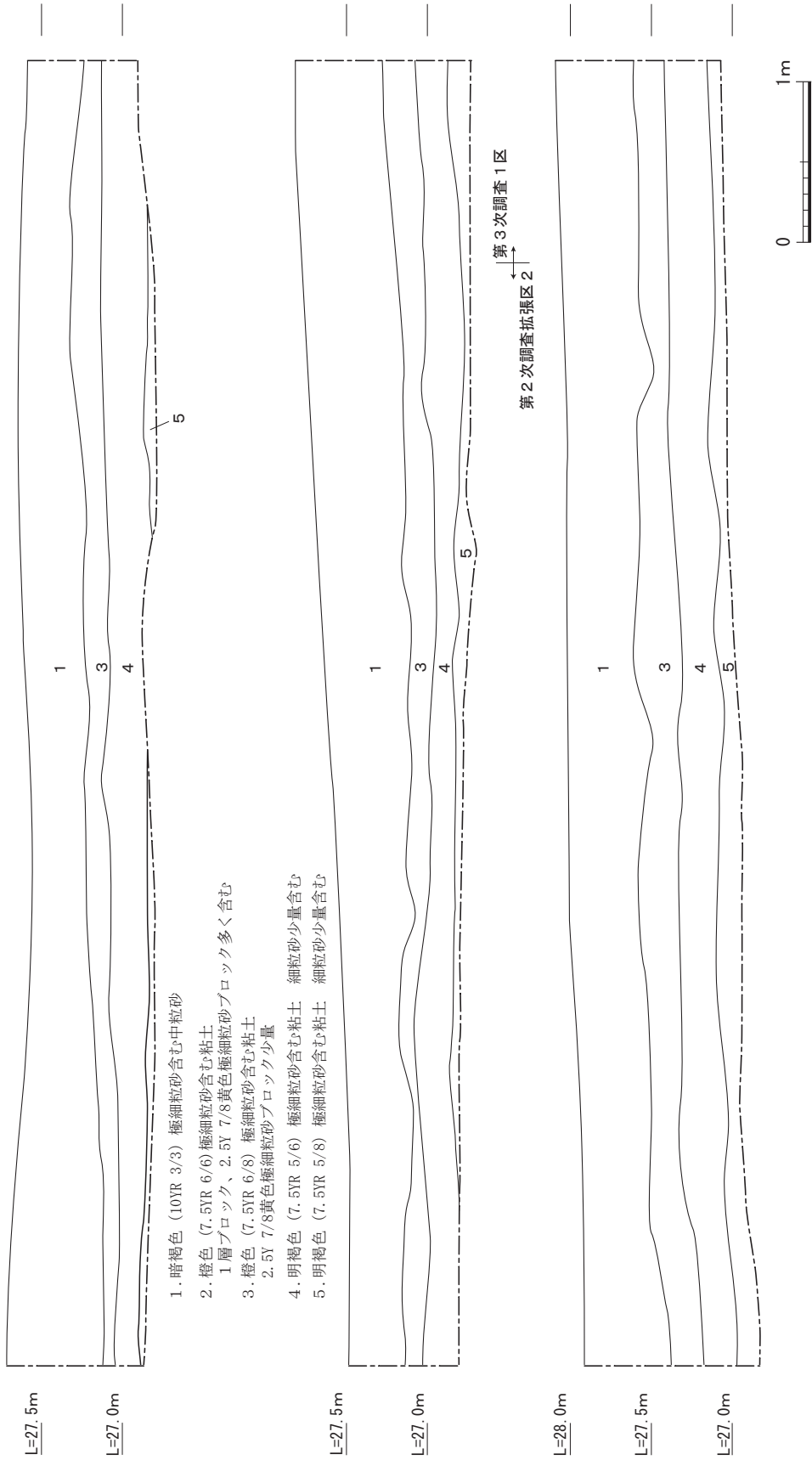
(2) 4トレンチ(第26図)

4トレンチでは、第21図4層から石器が1点出土した。

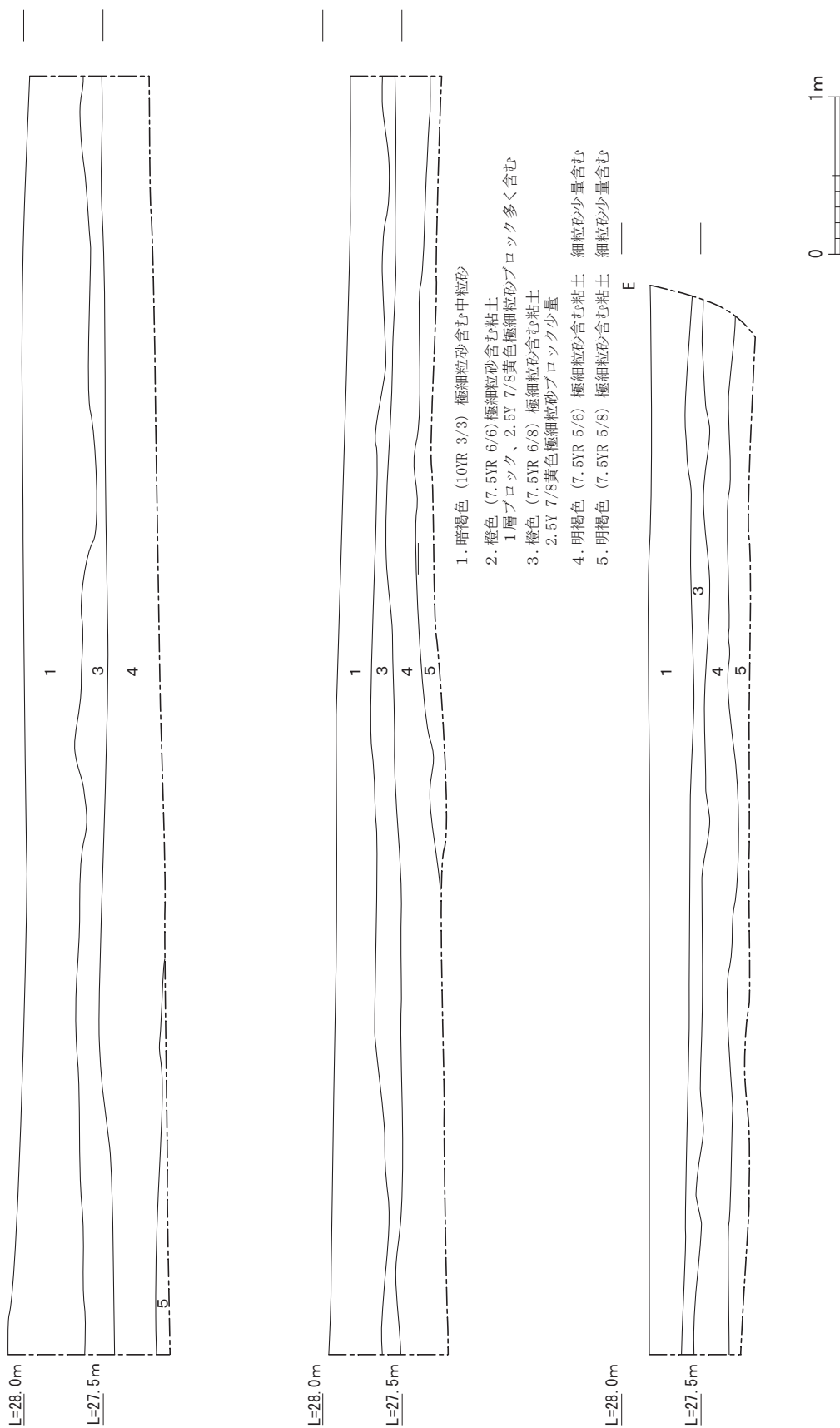
4は、最大長5.3cm、最大幅2.2cm、最大厚1.1cm、重量13.4gを測るチャート製の台形石器である。素材剥片の一侧縁にツブシ状に剥離を加えて器形を作り出している。また、背面側には2回のごく薄い水平剥離が観察できる。しかし、器形側縁部への急峻な2次加工が観察できないことから、



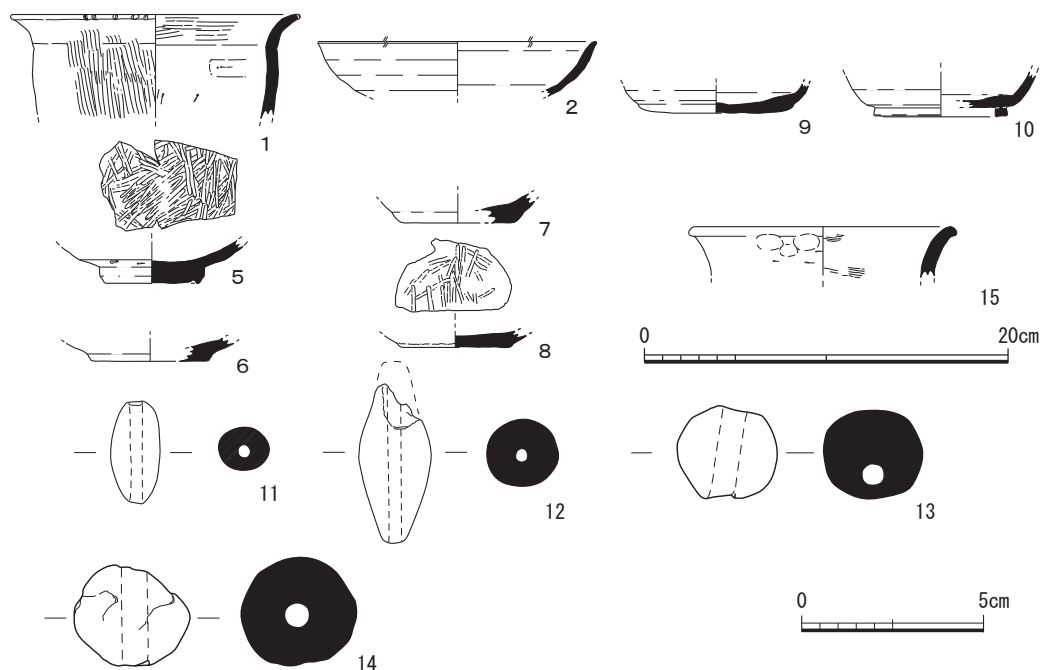
第21図 第2・3次調査南壁土層図(1)



第22図 第2・3次調査南壁土層図(2)



第23図 第2・3次調査南壁土層図(3)



第24図 第2次調査出土土器

石核の可能性も考慮すべきであろう。出土層準より、後期旧石器時代前半期の所産と考えられる。

(3) 5 トレンチ

3区では、耕作土から石器が出土したほか、9世紀～12世紀に属する黒色土器片・須恵器片・土錘が出土した。また、下層から弥生土器片が出土している。調査区が、段丘崖に接続する緩やかな斜面地であることを考慮すると、段丘上からの流れ込みがあったと考えられる。

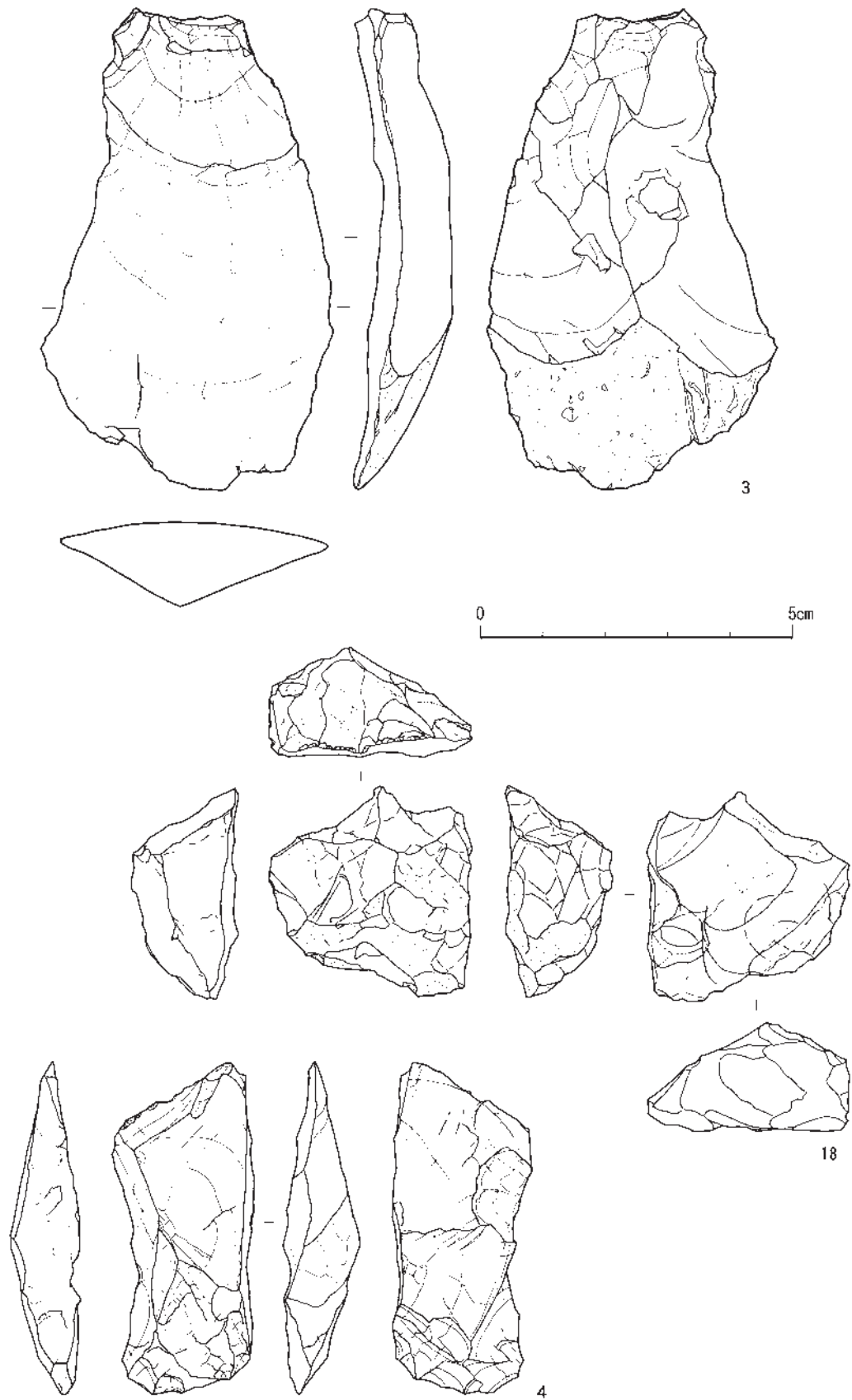
黒色土器(第24図) 5～8はいずれも底部片であり、回転糸切り痕を残す低い平高台が認められ、瓦質に近い焼成であることから、時期幅があるが、竹原編年の第Ⅱ段階に相当すると考えられる。^(注9)

須恵器(第24図) 9は杯Aの底部片である。10は貼り付け高台をもつ杯Bの底部片である。底径8.6cm、残存高1.6cmを測る。

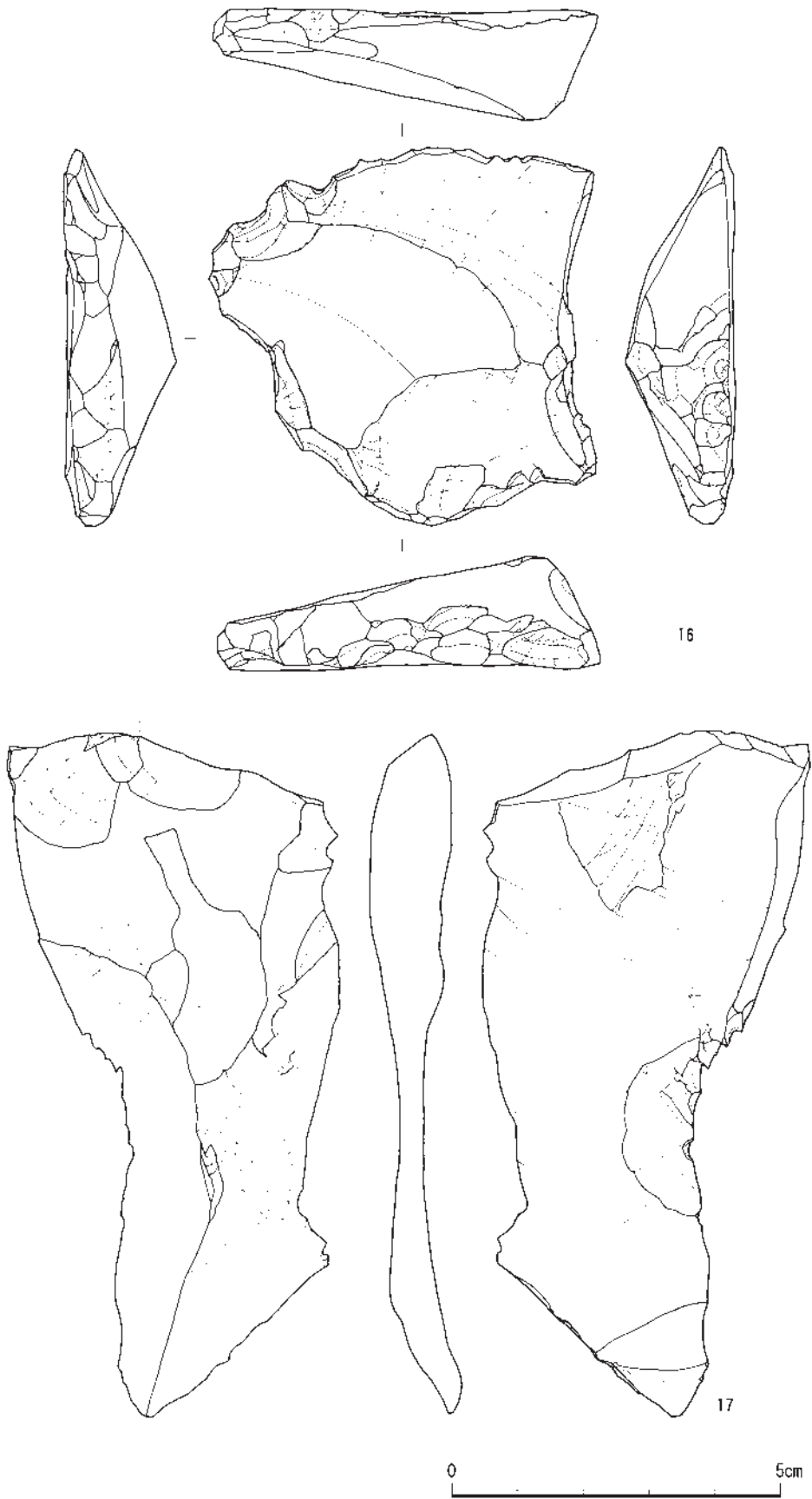
土錘(第24図) 11は全長2.8cm、径1.4cm×1.2cm、孔径0.35cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。12は一端を欠損し、残存長4.4cm、径2cm×1.85cm、孔径0.35cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。器面の一部に黒斑が観察できる。13は全長2.55cm、径2.75cm～2.45cm、孔径0.65cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。14は部分的に欠損し、残存長2.8cm、径3cm～3.2cm、孔径0.7cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。

弥生土器(第24図) 15は甕口縁部の破片である。外面はヨコナデを施し、口縁部外面には指頭圧痕が観察できる。内面はハケを施している。

石器(第25図、第26図) 第26図16は玉髓製の不定形剥片である。最大長5.8cm、最大幅5.7cm、最大厚1.7cm、重量49.6gを測る。背面に主要剥離面とは異なる方向の2枚の先行剥離痕を有する。打面・剥片末端は欠損している。剥片の周縁部に微細剥離が認められるが、連続性を示さず、積



第25図 第2次調査出土石器1



第26図 第2次調査出土石器2

極的な2次加工とは言い難い。上記の剥離面は風化度が異なり、2次利用あるいは堆積時の破損が考えられる。また、背面の稜線と剥離面に線状の褐鉄が観察できることから、近現代の耕作等によって付着したと考えられる。帰属時期は不明である。

第25図17は玉髓製の縦長剥片である。最大長10.4cm、最大幅5.0cm、最大厚1.3cm、重量50.8gを測る。背面に2枚の腹面と同一方向の先行剥離痕を有する。自然面は残存しない。打面は剥離面打面である。出土した土層に9～12世紀の遺物が含まれることから、2次堆積資料と判断する。帰属時期は不明である。

第25図18はチャート製の嘴状石器である。最大長3.3cm、最大幅3.2cm、最大厚1.7cm、重量15.9gを測る。素材剥片の背面に2枚の先行剥離痕を有する。垂角礫～円礫の自然面を有する。嘴状の突出を作り出す抉入状の2次加工により、打面は失われている。抉入部の稜線上には、連続的な微細剥離が観察でき、使用時の破損と考えられる。一方、嘴部に微細剥離は観察できず、嘴状石器の性格について示唆的である。出土した土層に9～12世紀の遺物が含まれることから、2次堆積資料と判断する。帰属時期は不明であるが、後述の3次調査で得られた資料と風化度が似ることから、後期旧石器時代前半期の所産であることは否定しがたい。

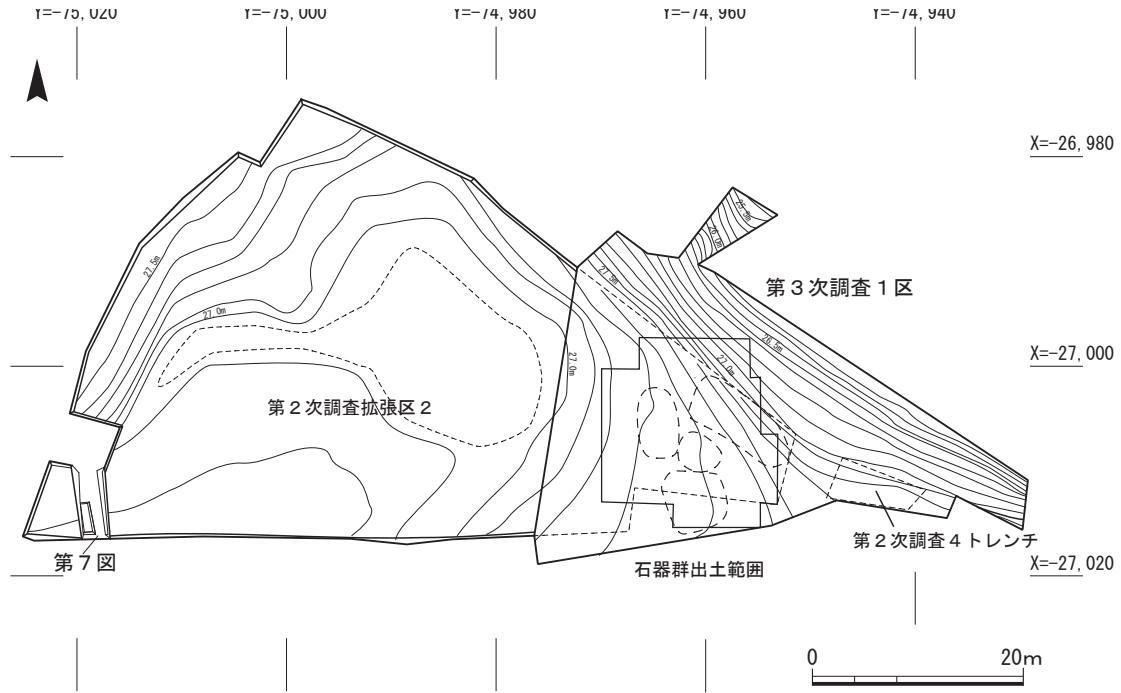
7. 第3次調査

1) 調査概要

第3次調査では、第2次調査で台形石器が出土した4トレンチを中心に、拡張区2の東部を拡張する形で調査区(1区)を設定し、調査を実施した。調査面積は1,100㎡を測る。現地表面の標高は27.1mである。地表下0.5mまで重機掘削で表土を除去したのち、第22～23図3層を検出したことから、石器が出土した地点を中心に、土層を確認しつつ調査を進めるため、千鳥状に小規模なグリッドを設定し、適宜拡張しながら人力掘削および精査を実施した。石器包含層は、近現代の耕作に伴うかく乱を一部受けていたが、既往の調査区に比べて影響は軽微であった。後期旧石器時代前半期の遺構は、調査区西側で南北約14m、東西約14mの範囲に広がる石器群を検出したが、配石、礫群は確認できなかった。石器は、適宜、自動追尾トータルステーションで位置情報を記録し、取り上げを実施した。また、段丘上のうち、堆積が厚く、なおかつ段丘基盤層までの掘削深度が浅くなる拡張区2の南西隅を一部断ち割り、段丘全体の堆積状況を確認した(第7図)。

第2次調査4トレンチの下層確認トレンチで、段丘東側はかく乱の影響が少なく、第22～23図2層以下の土壌が失われることなく堆積することを確認している。出土した石器群は、東西土層の断面への投影で、4層から5層に分布している(第28図)。したがって、この部分に当時の生活面が想定できるが、石器分布付近に生活面を示す、炉跡ような痕跡は確認できなかった。

遺物は精査中に182点出土した。石器の器種組成および石材の重量比は付表1・2のとおりである。石器群に、礫器や刃部磨製石斧などの大型の石器は確認できないが、敲石を転用した石核が1点出土している。また、台形石器、鋸歯縁石器、抉入石器、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片などで道具類は構成され、組成比率は約11.4%である。道具類以外では、断塊、石核な



第27図 第3次調査平面図

どからなる石核類と剥片・碎片からなる剥片類を確認している。

石材は、全体の約92.0%にチャートが用いられ、主要な石器石材であるといえる。チャートは多いものから、おおまかに分けて、①青灰色の珪質がある節理が少ないもの、②赤から緑色へと変色する、珪質のある節理が少ないもの、③青黒色の節理の多い珪質がないものの3種がある。

チャートは、遺跡周辺の河川・海浜や、石器包含層中にもみられるが、礫の大きさが細礫～小礫であるため、道具類や石核類の大きさを考慮すると、石器石材としては不適で、搬入石材と考えるべきであろう。また、搬入石材としては、^(注8) 隠岐群島産出の黒曜石を確認しているが、極めて微細な資料であり、道具類への利用は考えにくい。そのほか、石英、鉄石英、玉髓などの石材が確認できるものの、石器群に占める割合は低い。

接合資料は確認できなかったが、石材の主体であるチャートで母岩の分類を実施したところ、166点が①～③の3種の母岩に属することを確認した。

2) 検出遺構(第28図)

調査区南西寄りの東西約14m、南北約14mの範囲に石器が分布している。包含層の直上が近現代耕作土層であることから、地形改変の著しい北側は、部分的にかく乱されている可能性がある。南側は調査区の南側と西側で石器の出土が少なくなっていることから、ほぼ全体を検出したと考えられる。石器の分布密度は散漫であるが、比較的集中する4か所を石器ブロックとして記載する。

①石器の分布(第29・30図)

第1ブロック 東西約6.5m、南北約3.6mの規模を測る。これより北と西には石器の分布が認められないことから、第1ブロックが石器分布範囲の北西限であると考えられる。4つの石器ブ

付表1 出土石器組成表

	点数	器種									
		剥片	碎片	断塊 破砕礫	石核	2次加工のある剥片	使用痕のある剥片	台形石器	鋸齒縁石器	抉入石器	原礫
全体	182	60	66	19	10	5	6	3	3	4	6
		33.0%	36.3%	10.4%	5.5%	2.7%	3.3%	1.6%	1.6%	2.2%	3.3%
第1ブロック	64	17	32	4	1	1	5	0	1	2	1
第2ブロック	55	18	23	5	3	2	1	2	0	1	0
第3ブロック	49	22	11	7	4	0	0	1	2	0	2
第4ブロック	14	3	0	3	2	2	0	0	0	1	3

付表2 石材別重量比表

	重量 (g)	チャート ①	チャート ②	チャート ③	凝灰岩	黒曜岩	鉄石英	石英	玉髄
全体	490.98	331.84	119.98	1.41	10.81	1.32	14.06	9.68	1.88
		67.6%	24.4%	0.3%	2.2%	0.3%	2.9%	2.0%	0.4%
第1ブロック	79.86	50.48	22.01	1.41	2.54	0.21	3.21	0	0
第2ブロック	143.09	50.61	84.55	0	3.74	0.56	0.82	0.93	1.88
第3ブロック	173.03	147.2	13.42	0	2.06	0	8.64	1.71	0
第4ブロック	95	83.55	0	0	2.47	0.55	1.39	7.04	0

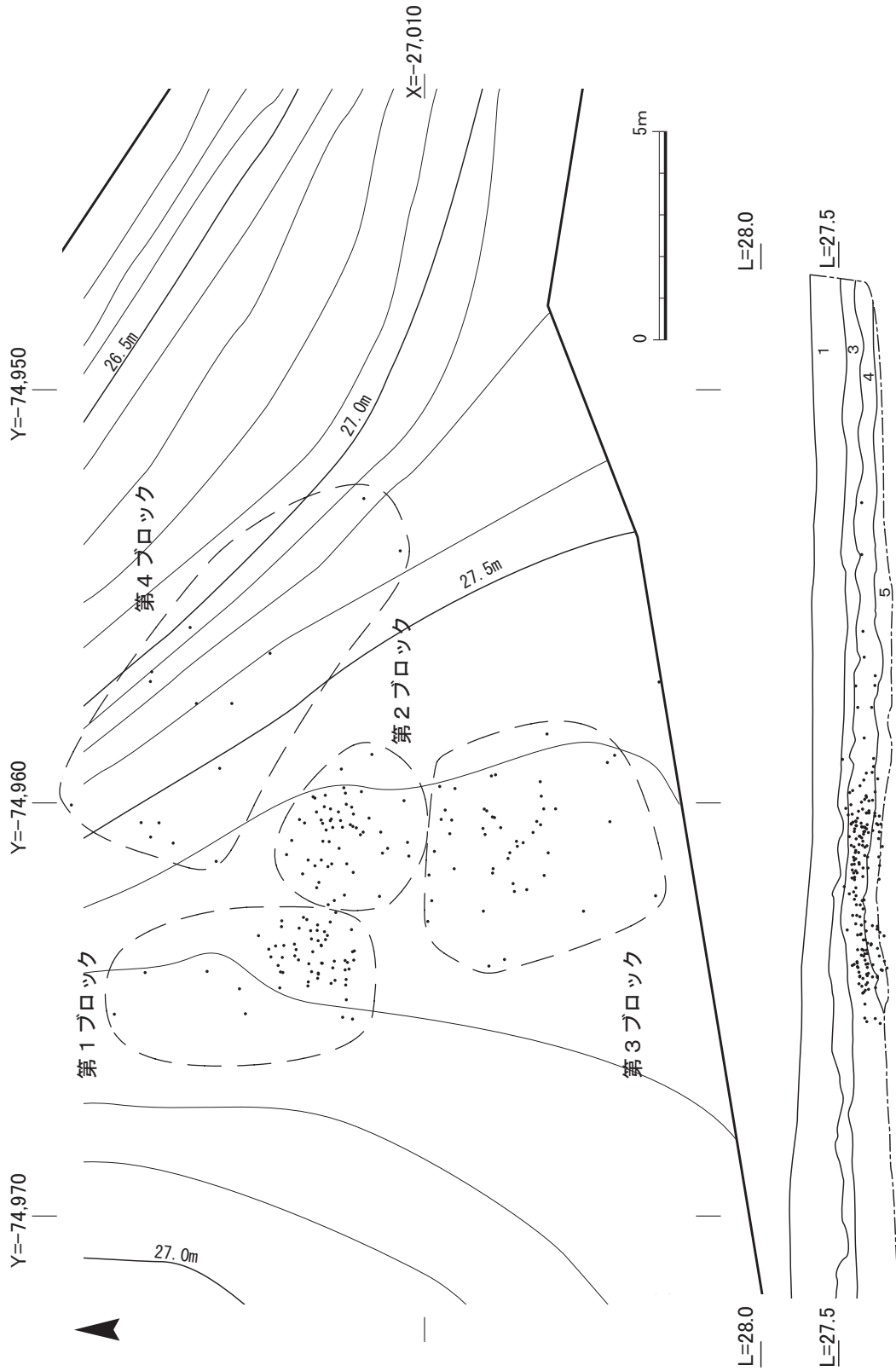
ロックで最も集まりが良い。構成点数は64点で、鋸齒縁石器、抉入石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片が道具類として確認でき、石核類・剥片類がみられる。全ブロック中で最も充実した器種構成となっている。

第2ブロック 第1ブロックの東側に隣接し、東西約4m、南北約3.6mの規模を測る。構成点数は55点で、抉入石器、台形石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片が道具類として確認でき、石核類・剥片類がみられる。

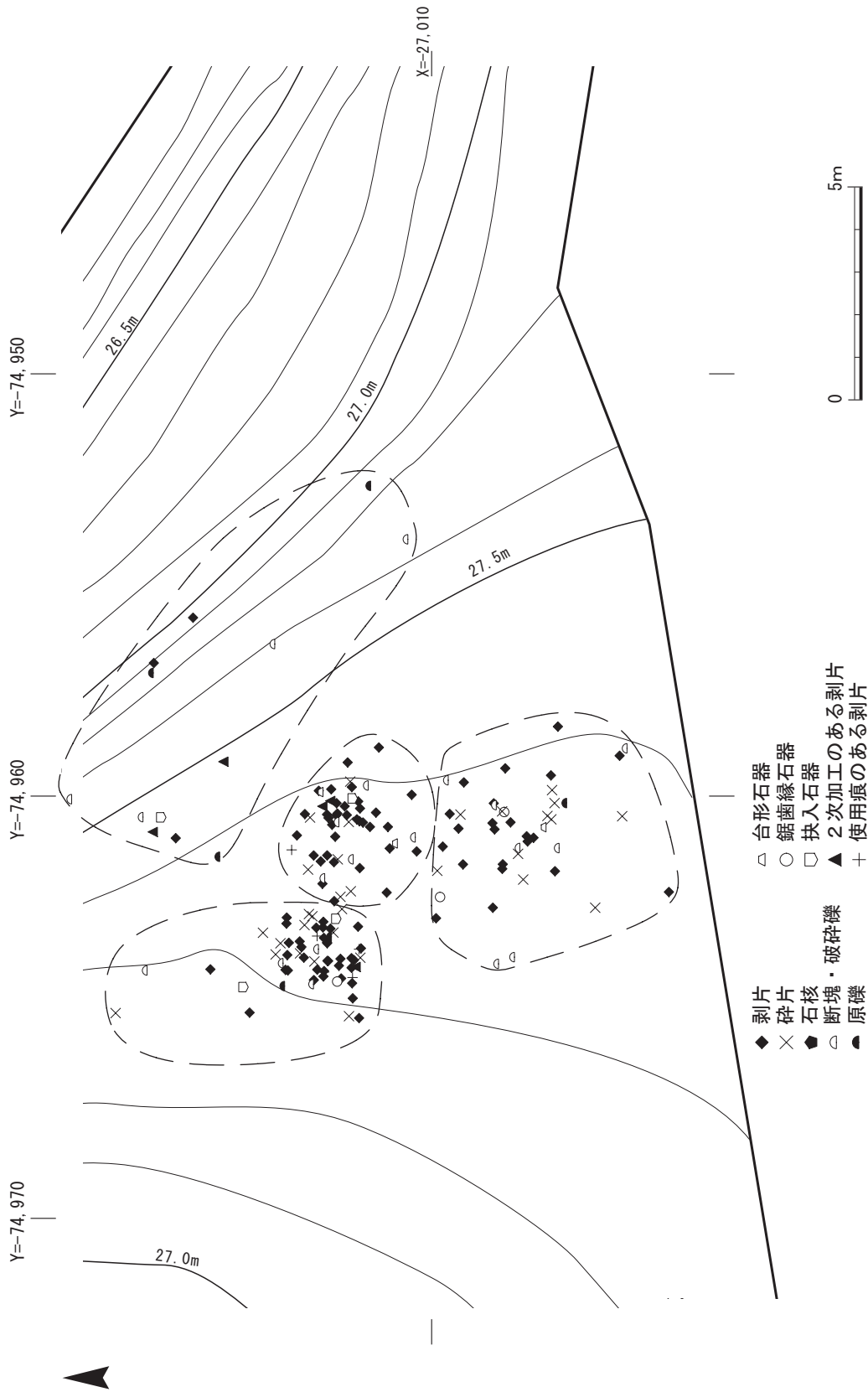
第3ブロック 第2ブロックの南側に隣接し、東西約5.9m、南北約5.8mの規模を測る。構成点数は49点で、鋸齒縁石器、台形石器、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片が道具類として確認でき、石核類・剥片類がみられる。

第4ブロック 第2ブロックの北東に位置する。東西約7.5m、南北約4.7mの規模を測る。構成点数は14点で、抉入石器、2次加工のある剥片の2種のみが道具類として確認できるほか、石核、剥片だけが確認できる。4つのブロックのうち、器種構成、特に剥片類においては最も貧弱である。

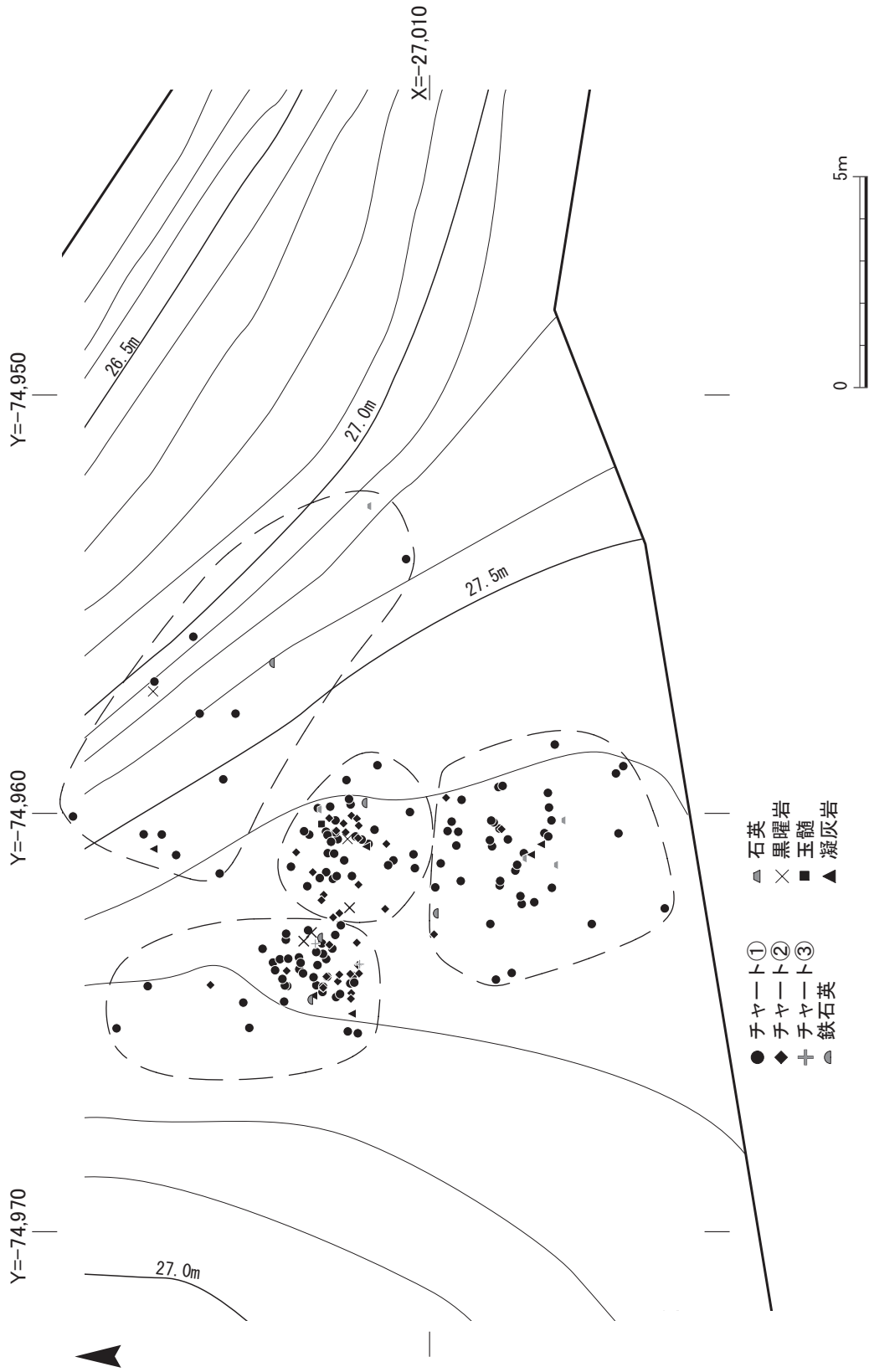
器種別の分布では、道具類については、各ブロックの分布密度が比較的高い部分に集中していることが指摘できる(第29図)。石核類についても同様の傾向を示している。一方、剥片類については、ブロック全体に広く分布するが、第4ブロックに碎片が含まれないことは注目すべきであろう。



第28図 石器平面・垂直出土状況図



第29図 器種別平面分布図



第30図 石材別平面分布図

②石材別および母岩別資料の分布(第30図)

母岩① 青灰色を呈する良質なチャートである。構成点数は131点で、最も多い。点数が非常に多いことから、同質の母岩が複数持ち込まれていると考えられる。鋸歯縁石器を除く道具類、石核1点が本母岩に含まれていることから、遺跡内で石器が製作されたことが伺える。ただし、石核は敲石の転用であることに留意すべきであろう。これを母岩とする石器は、各ブロックに普遍的に分布する。

母岩② 赤から緑色への変色を呈する比較的良質なチャートである。構成点数は33点である。ただし、同一母岩内で色調が変化することから、母岩①と同様に実際には複数の母岩が含まれる可能性がある。台形石器を除く道具類と石核1点が本母岩に含まれることから、本母岩を用いた石器製作が想定できる。台形石器が器種構成に含まれない点の特筆すべきであろう。母岩①が全ブロックで普遍的に分布することに対し、母岩②は、ブロック内での器種構成が充実する第1・2・3ブロックに限られ、特に密度の高い中央付近に分布している。

母岩③ 青黒色を呈する節理の多い不良なチャートである。構成点数は2点で、剥片のみである。道具類や石核類が含まれないことから、遺跡内での石器製作は想定できない。しかし、石器の器種構成が充実する第1ブロックに属することは注意すべきである。

3)出土遺物

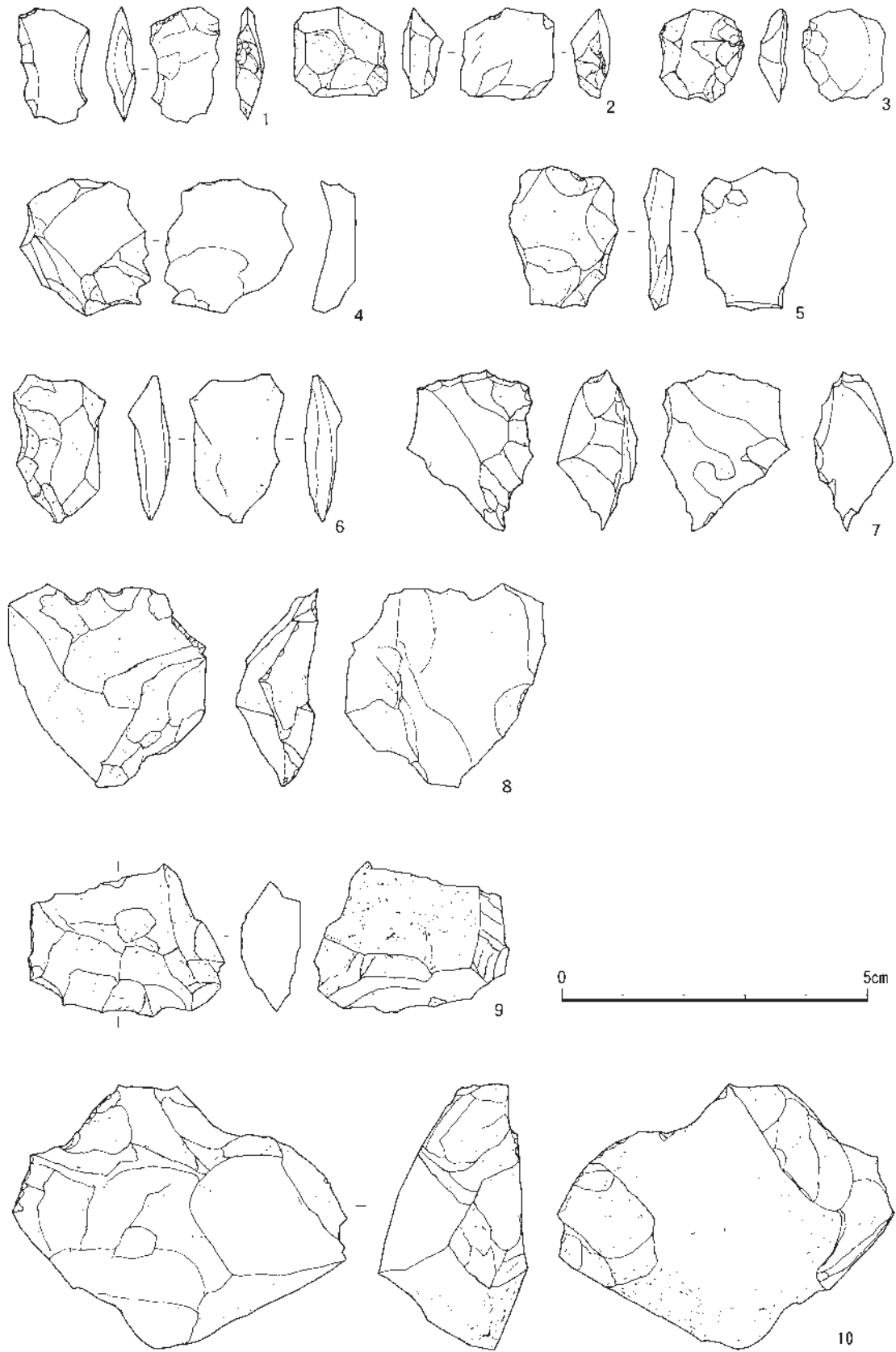
今回の調査で出土した遺物は総数で182点である。道具類は21点であり、台形石器3点、鋸歯縁石器3点、抉入石器3点、2次加工のある剥片5点、使用痕のある剥片6点に分けられる。台形石器や鋸歯縁石器などの一定の規範をもった定型的な石器は少なく、2次加工のある剥片や使用痕のある剥片など、非定型的な石器が主体を占め、剥片に対する2次加工の意識はさほど強くないといえる。石器製作に関わるものとして、石核12点、碎片34点が出土している。出土した石器のほとんどは極めて小型であり、全てを図化することは困難であった。本報告では各器種で図化に耐えうる大きさの資料を図示し、以下に記述する。なお、石器の器種同定は、『旧石器考古学辞典』に依拠している。

(1)台形石器(第31図)

1は最大長1.9cm、最大幅1.1cm、最大厚0.5cm、重量0.9gを測る石英製の台形石器である。素材剥、素材剥片の末端側に急峻な2次加工を施している。素材剥片の側縁を刃部とし、使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。基部への調整剥離は認められない。

5は最大長2.3cm、最大幅1.8cm、最大厚0.5cm、重量2.0gを測るチャート製の台形石器である。素材剥片の末端側に急峻な2次加工を施している。刃部には打面の縁辺をあてている。基部への調整剥離は認められない。

6は最大長1.5cm、最大幅1.5cm、最大厚0.7cm、重量1.4gを測るチャート製の台形石器である。素材剥片の末端側に急峻な2次加工を施している。素材剥片の末端を刃部としている。基部への調整剥離は認められない。



第31図 剥片石器

(2) 2次加工のある剥片(第31図)

2は最大長1.7cm、最大幅0.9cm、最大厚0.6cm、重量0.6gを測るチャート製の2次加工のある剥片である。打面の縁辺に2次加工を施している。2次加工を施す部位が共通するため、台形石器の可能性はあるが、角度が緩いため、2次加工のある剥片とした。

3は最大長1.15cm、最大幅1.1cm、最大厚0.45cm、重量0.5gを測るチャート製の2次加工のある剥片である。打面の縁辺に2次加工を施している。2次加工を施す部位が共通するため、台形石器の可能性はあるが、角度が緩いため、2次加工のある剥片とした。

4は最大長2.4cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cm、重量0.6gを測るチャート製の2次加工のある剥片である。素材剥片の打面側に急峻な2次加工を施す。

(3) 鋸齒縁石器(第31図)

7は最大長2.6cm、最大幅2.0cm、最大厚1.3cm、重量5.2gを測るチャート製の鋸齒縁石器である。素材剥片の形状は不明であるが、厚みのある剥片の端部がもちいられている。剥片の縁辺に連続的な抉入状の加工を施し、刃部を作り出している。刃部には使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。ただし、後述の2点に比べて鋸齒の作り出しが弱いいため、2次加工のある剥片の可能性も否定できない。

8は最大長2.2cm、最大幅2.7cm、最大厚1.7cm、重量11.7gを測るチャート製の鋸齒縁石器である。断塊を素材とし、一縁辺に連続的な抉入状の加工を施し、刃部を作り出している。刃部から右側縁にかけて使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。

9は最大長2.5cm、最大幅3.2cm、最大厚1.3cm、重量8.6gを測る鉄石英製の鋸齒縁石器である。断塊を素材とし、一縁辺に連続的な抉入状の加工を施し、刃部を作り出している。

(4) 抉入石器(第31図)

10は最大長4.3cm、最大幅5.5cm、最大厚2.4cm、重量42.3gを測るチャート製の抉入石器である。原礫の性状をよく残す大型の断塊を素材とし、嘴部を作り出すように2か所へ抉入状の加工を施す。抉入部の縁辺には、使用痕と考えられる微細な剥離痕が認められる。本石器群の中でも大型の分類になるため、礫器あるいは石核の転用である可能性が考えられる。

(5) 剥片(第32図)

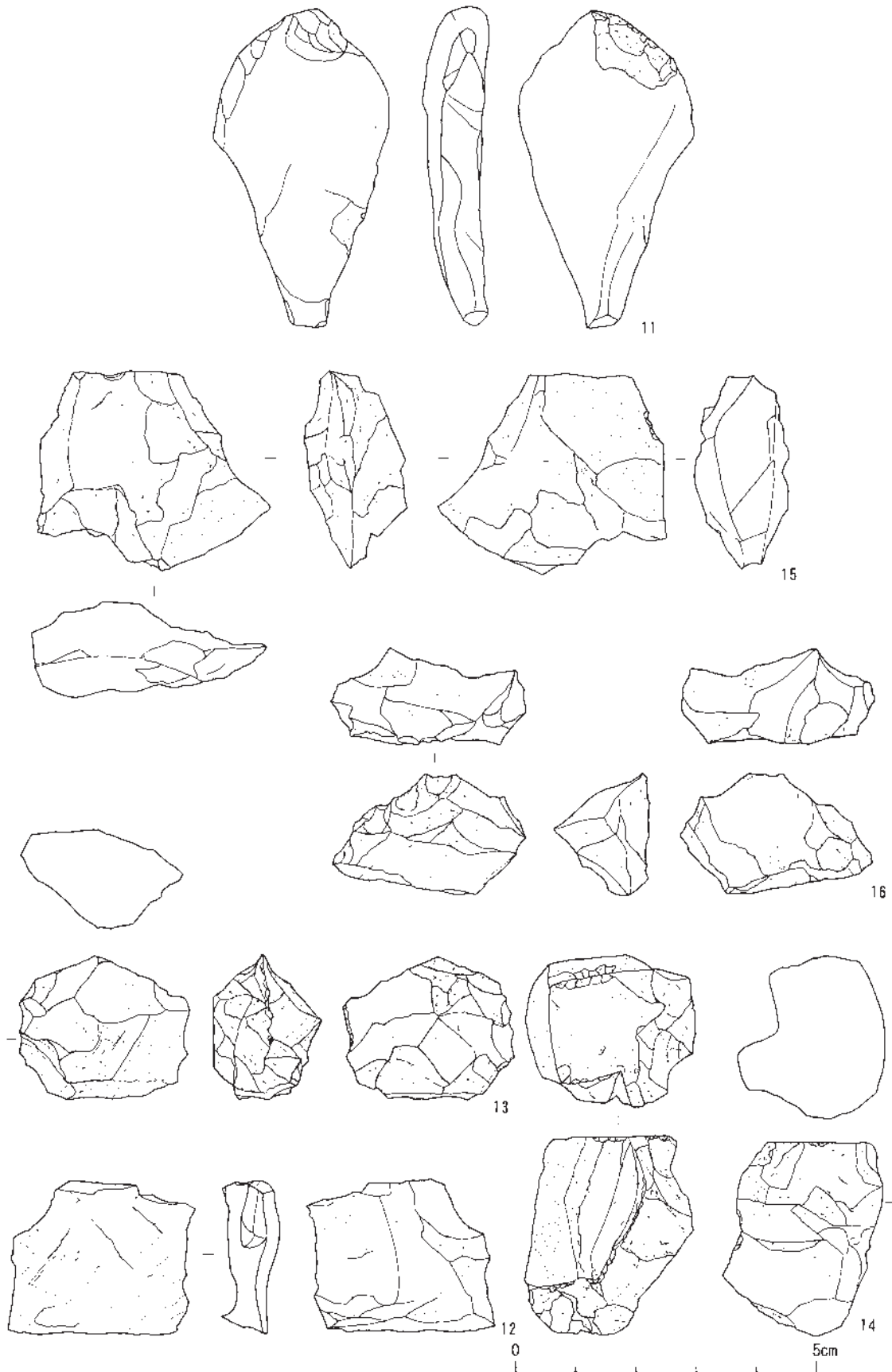
剥片は60点出土している。これらのうち、素材剥片と想定できる2点を図示している。

11は、最大長5.3cm、最大幅2.9cm、最大厚1cm、重量14.1gを測るチャート製の剥片である。背面は全面が自然面であり、礫面が残存する初期段階の剥片であるといえる。残存する自然面の観察から、素材礫は亜角礫もしくは亜円礫であると考えられる。

12は、最大長1.4cm、最大幅1.45cm、最大厚0.4cm、重量0.8gを測るチャート製の剥片である。背面には主要剥離面とは異なる方向からの剥離痕が確認できる。

(6) 石核(第32・33図)

13は最大長2.4cm、最大幅2.8cm、最大厚1.8cm、重量10.3gを測るチャート製石核である。不規則な剥離痕が目立つが、おおむね両面に対向剥離が認められることから、両極打法による剥片剥



第32図 剥片石器、剥片、石核

離の残欠と考える。原礫面が観察できることから、原礫また断塊が素材であると考えられる。

14は最大長3.4cm、最大幅2.6cm、最大厚2.3cm、重量26.1gを測る自然面が多く残存するチャート製の石核である。打面はある程度固定されているようで、長軸方向への剥離痕と短軸方向への剥離痕の2種のみが観察できる。これらの剥離痕の切り合いは短軸の剥離痕に打点が観察できないことから、短軸方向で剥片剥離を行ったのち、長軸方向へと切り替えているようである。剥離痕の観察から、短軸方向の剥片剥離で生産されたであろう剥片は、厚みは不明であるものの、寸詰まりの剥片剥離を指向していると考えられる。一方、長軸方向のものは、石核に観察される剥離痕が階段状を呈することから、やや縦長傾向を示すが、かなり厚い剥片が剥離されたと考えられる。また、長軸方向の打面の縁辺には、全周にわたって使用痕とみなしうる微細な剥離痕が観察できるため、スクレイパーとしての機能も想定できる。

15は最大長3.9cm、最大幅3.2cm、最大厚1.5cm、重量15.7gを測るチャート製石核である。両面に対向剥離が認められることから、両極打法による剥片剥離の残欠と考えられる。両面に原礫面が観察できることから、原礫また断塊が素材であると考えられる。

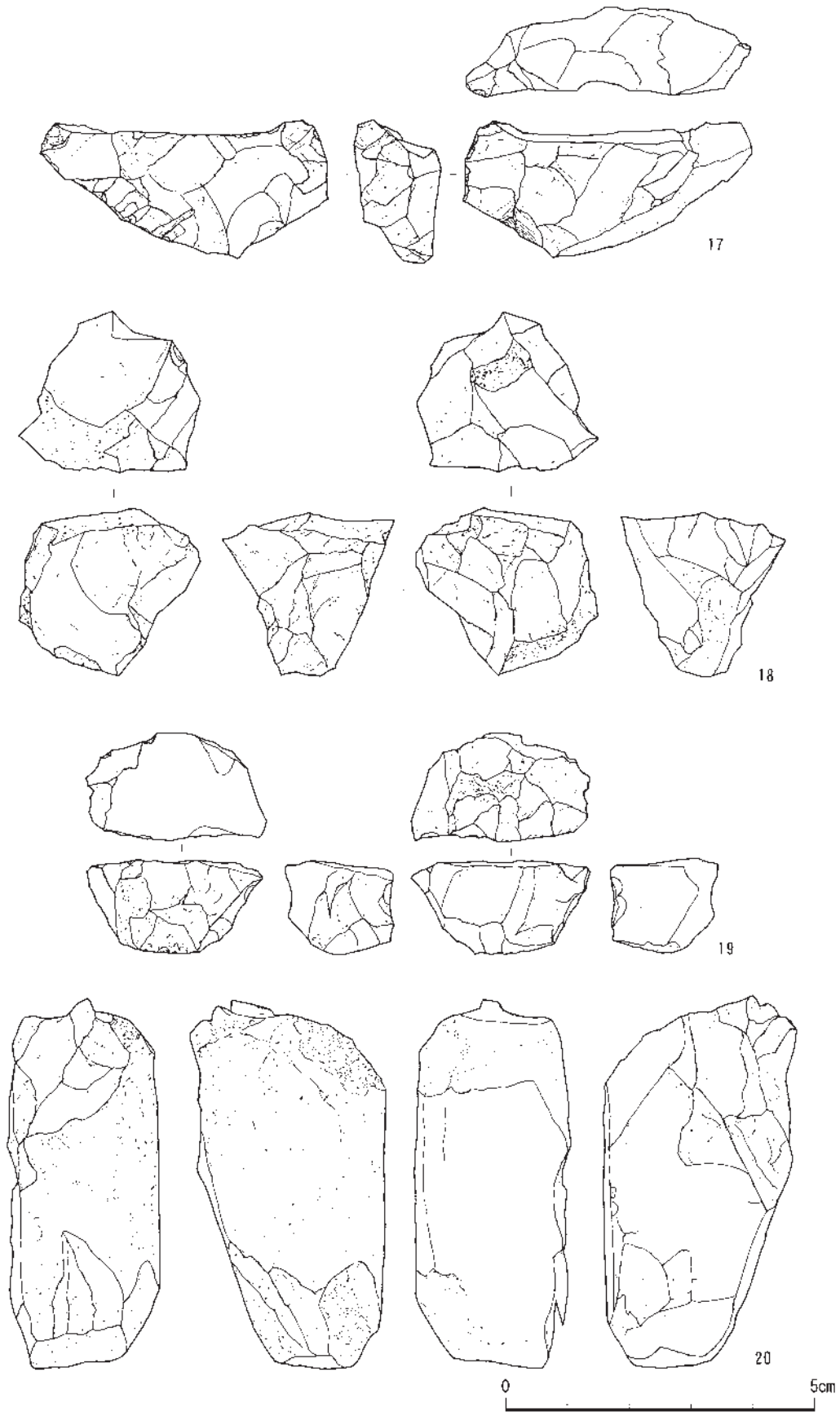
16は最大長2.0cm、最大幅3.0cm、最大厚1.5cm、重量8.2gを測るチャート製石核である。剥片を素材とし、縁辺からごく小さい寸詰まりの剥片を剥離している。剥離痕は、急峻な2次加工と捉えたと、スクレイパーに相当すること考えられる。しかし、剥離が非連続的で、刃部を作り出す意図を見いだせないことから本器種に分類した。

17は最大長2.1cm、最大幅4.6cm、最大厚1.4cm、重量14.0gを測るチャート製石核である。剥片を素材とし、縁辺からごく小さい寸詰まりの剥片を剥離している。一部の対向剥離が観察できることから、両極打法に関連する可能性がある。縁辺の剥離痕は小さく、2次加工の可能性も考慮すべきである。しかし、器面で観察できる剥離痕に規則性がなく、機能部である刃部を作り出す意図が読み取れなかったことから本器種に分類した。また、縁辺の一部には、使用痕とみなしうる微細な剥離痕が観察できることから、スクレイパーとしての機能も想定できる。

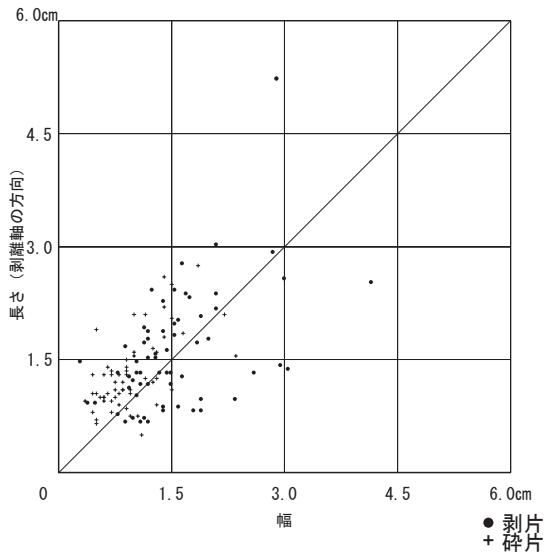
18は最大長2.8cm、最大幅2.8cm、最大厚2.6cm、重量17.0gを測るチャート製石核である。頻繁な打面転移により全面が剥離痕で覆われ、サイコロ状の形状を呈する。対向する器面にツブレが観察できることから、両極打法がもちいられたことが想定できる。器面に観察できる剥離痕は、階段状剥離の特徴を示し、端部の欠損した寸詰まりの剥片が剥離されたと考えられる。

19は最大長1.5cm、最大幅2.8cm、最大厚1.6cm、重量9.4gを測るチャート製石核である。器面に観察できる剥離痕は、小型でまばらである。底部に密集したツブレ痕が観察できることや石質がよく似ることから、20と同一母岩と推定できる。

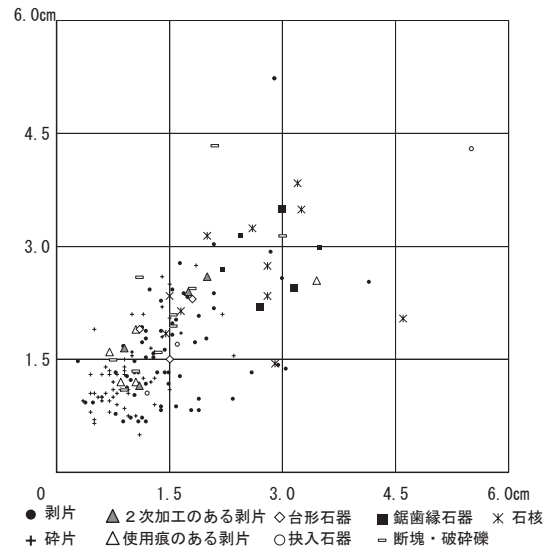
20は最大長6cm、最大幅3.1cm、最大厚2.5cm、重量64.6gを測るチャート製石核である。原礫面を多く残し、原礫の端部にツブレが集中することから、敲石からの転用であろう。剥片剥離は短軸方向になされ、やや幅広の剥片を指向していることが読み取れる。



第33図 石核



第34図 剥片類の長幅比



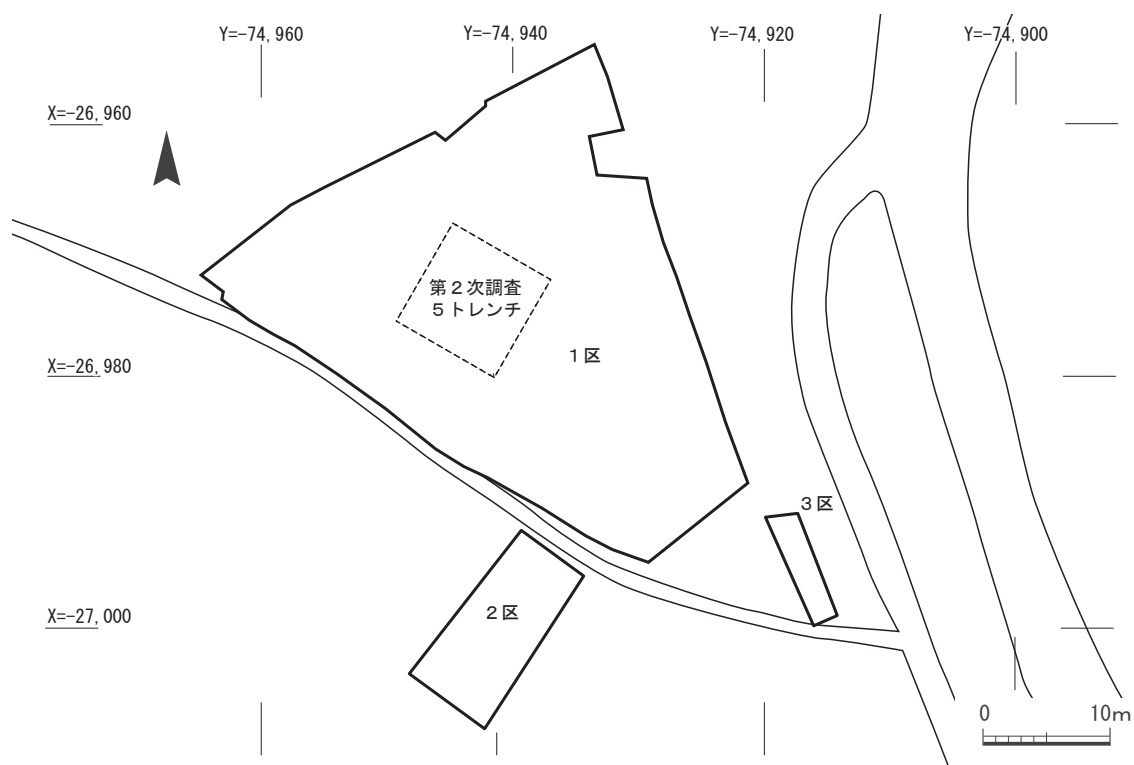
第35図 各器種別の長幅比

4) 小結・石器群の性格について

最後に、出土した石器群について、長幅をもとにそれぞれの特徴を整理し、簡単な考察を付け加える。

今回出土した石器は、打面・剥片端部が残存する形態的に整ったものはごく限られている。そのため、資料に観察できる主要剥離面(石核類の場合、最終剥離痕)のリングとフィッシャーから打面の方向を推定し、基準軸を設定した。この基準軸に直交するものを「長さ」、平行するものを「幅」と定義して、計測を実施した。まず、剥片類では、剥片・碎片の長幅の比率は、長幅ともに1.5cm未満の極めて小型のものは1:1の方形に近い比率によくまとまり、大きさが1.0~3.0cm程度の大型のものは散在する傾向があることが指摘できる。道具類では、鋸歯縁石器を除く道具類の長幅の比率は、大型の剥片類と同じ傾向にあることが読み取れる。道具類に観察できる2次加工は、剥片の形状を大きく変えることのない単純な加工で、素材となったであろう剥片の性状をそのまま利用していることが想定できる。石核類に目を向けてみると、頻繁な打面転移によって、全面が剥離痕に覆われたサイコロ状に近い石核が多く見受けられる。以上の事柄を整理すると、後期旧石器時代後半期に特徴的な、石刃技法などの体系化された石器製作とは大きく異なり、頻繁な打面転移を繰り返すことで、方形に近い小形の剥片を量産し、簡単な加工を加えた道具類を生産する石器製作であり、石刃技法が出現する以前のあり方を示しているといえよう。

(面 将道)



第36図 第4次調査区配置図

8. 第4次調査

1) 調査の概要

第4次調査は、第2次調査5トレンチの調査成果を受けて実施した。調査地は第2・3次調査が行われた丘陵から北東に下がる斜面とその下部の平坦面に3か所の調査区を設定し、遺構や遺物の概要の把握に努めた。緩斜面全体に設定した1区、その南側の丘陵上につづく斜面に2区、1区南東側の平坦面に3区を設けて調査を実施した(第36図)。調査の結果、掘立柱建物、竪穴建物、多数の柱穴、複数の鍛冶炉、溝、土坑などを検出した。

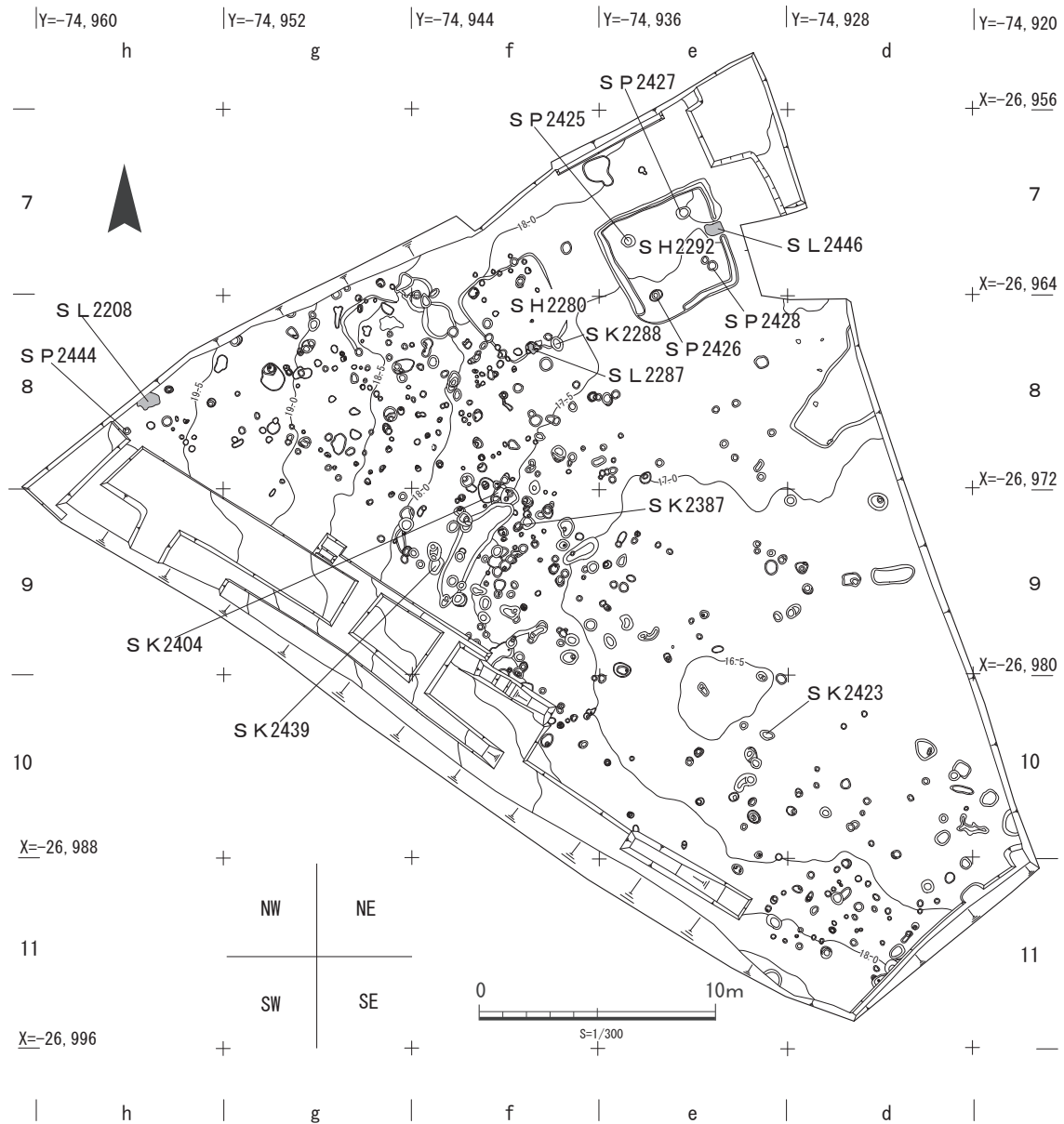
2) 1区の調査

(1) 1区の概要

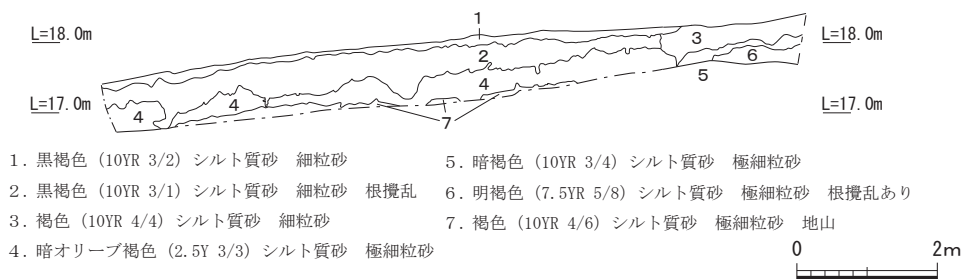
1区は第2次調査で遺構や遺物が確認された5トレンチを拡張して、丘陵裾の緩斜面に設定した。東西約36m、南北約42m、調査面積910㎡を測る調査区である。調査区西端部の現地表面は標高21.5m、調査区北端で19m、東端で17.5mと西に高く、南東方向に低くなる。5トレンチから鉄滓や炉跡が確認できていたことと、下層に黒褐色土層が確認できていたため、鉄の生産遺跡が上面にあり、下層にも何らかの遺構面が形成されていると予測された。

(2) 基本層序

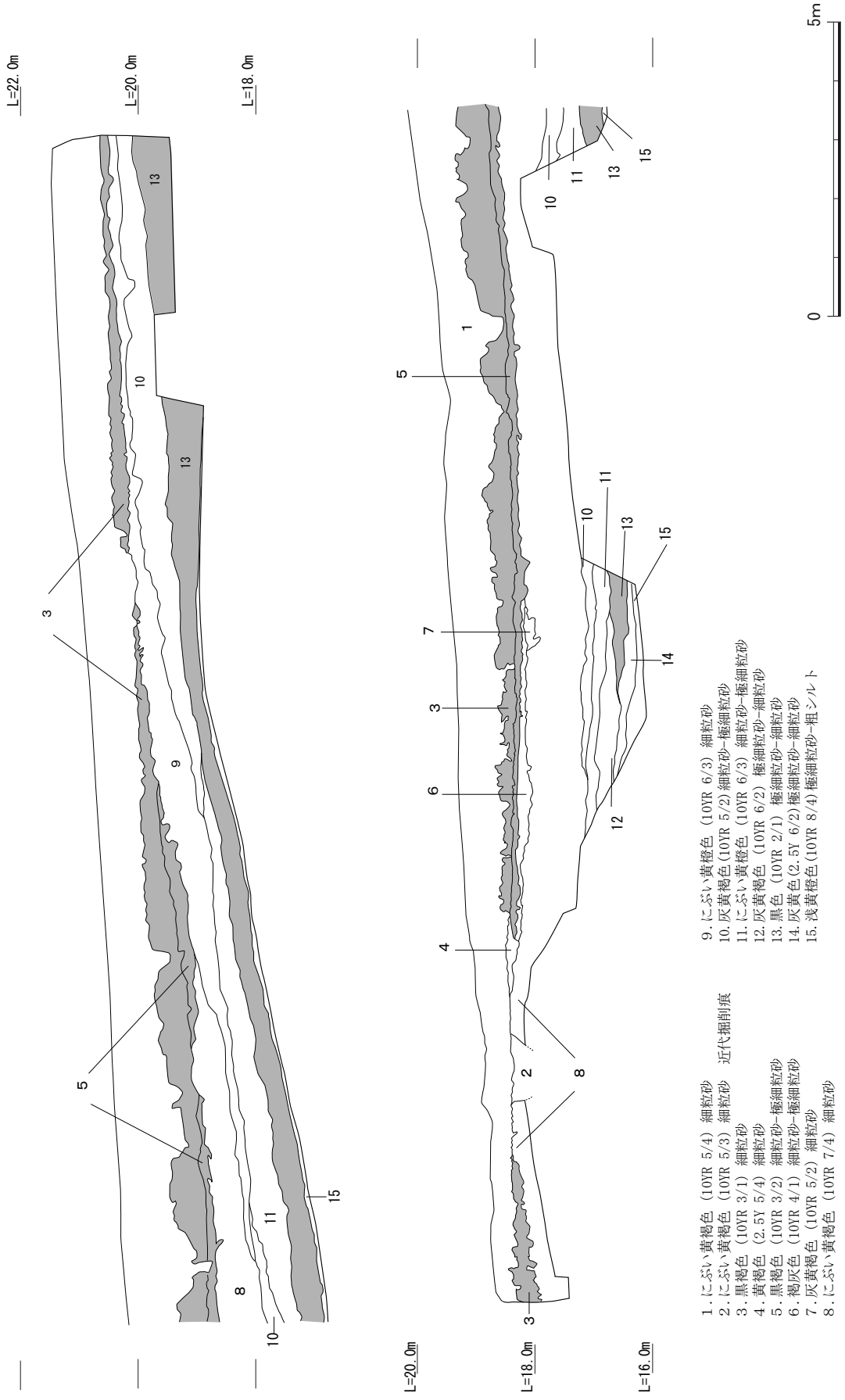
調査地は調査着手以前、農地として利用されていた。南壁断面図(第38図)で示した1層は上層と下層に細分することができ、上層は現代まで使用されていた耕作土である。下層は様相が異なり、シルト質の黄褐色系の土が堆積するが、これらはいずれも近代～現代の遺物を包含する層である。1層は2区を含めた南側斜面地を近代以降に耕作地化する際に削平された土砂が堆積した



第36図 1区第2面平面図



第37図 1区南東壁断面図



- | | | |
|---|--------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. にぶい、黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂 2. にぶい、黄褐色 (10YR 5/3) 細粒砂 3. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂 4. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 細粒砂 5. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂-極細粒砂 6. 褐灰色 (10YR 4/1) 細粒砂-極細粒砂 7. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細粒砂 8. にぶい、黄褐色 (10YR 7/4) 細粒砂 | <p>近代掘削痕</p> | <ul style="list-style-type: none"> 9. にぶい、黄褐色 (10YR 6/3) 細粒砂 10. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細粒砂-極細粒砂 11. にぶい、黄褐色 (10YR 6/3) 細粒砂-極細粒砂 12. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 極細粒砂-細粒砂 13. 黒色 (10YR 2/1) 極細粒砂-細粒砂 14. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 極細粒砂-粗シルト 15. 浅黄褐色 (10YR 8/4) 極細粒砂-粗シルト |
|---|--------------|---|

第38図 1区南壁断面図

ものであると想定している。3層・5層は黒褐色を呈する砂質シルトの堆積層で3層には近世の遺物が少量含まれるものの、5層は古代以前の遺物を包含する層である。炉跡はこの5層中と、その下層にあたる8・9層上面で検出でき、5・8・9層を切り込み形成している遺構群が検出される。この面を第1面として調査した。8・9・10層は遺物を包含しており、灰黄褐色の砂質シルトの10層を除去した11層上面で再び遺構が検出されたことから第2面として調査を行った。13層は黒色の砂質シルトの堆積層であったが3・5層や10層とは異なり遺物や遺構が確認されなかった。その下層の15層は浅黄橙色のシルト層で第2・3次調査で確認されたAT層であることを確認した。13層以下の堆積層からは遺構と遺物はともに確認できず、積極的な土地利用は11層上面からであると考えられる。

また1区は西が高く南東が低い地形であり堆積も一様ではなく調査地中央から西側と南側は上記のとおりであるが、北側と東側は堆積層が薄く、黄色ないし赤色の砂質シルト層が堆積する状況である。

(3) 検出遺構

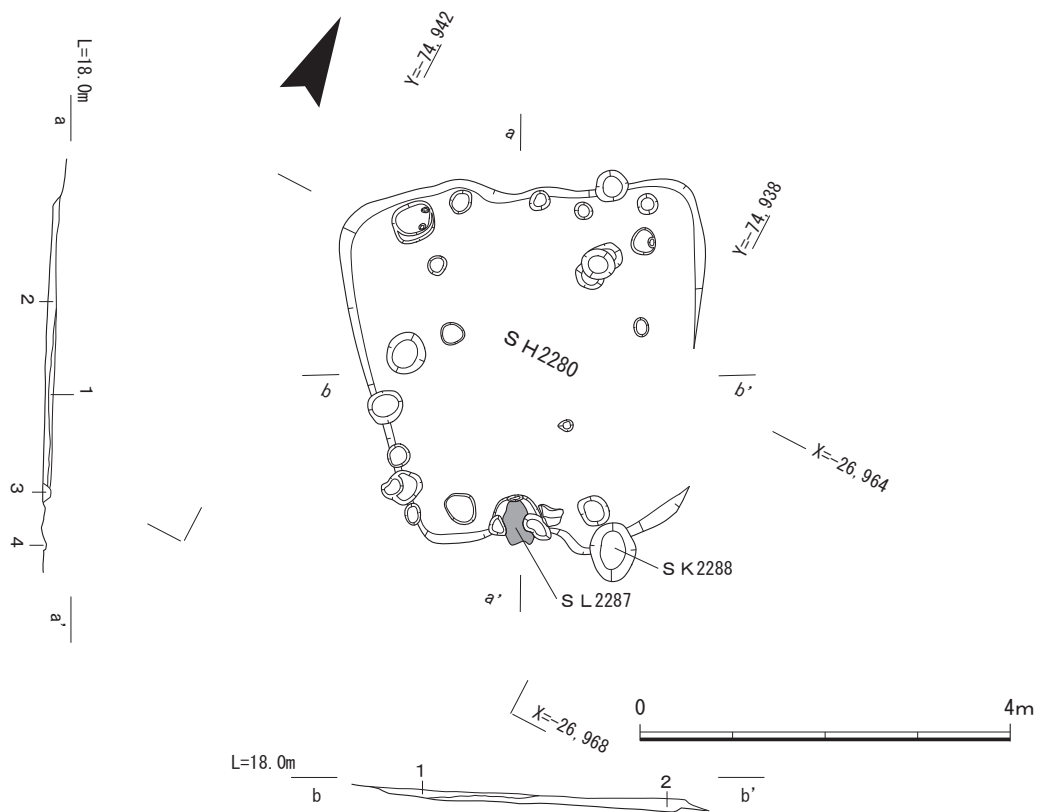
① 第2面(弥生時代～古墳時代)(第36図)

竪穴建物SH2280・竈SL2287・土坑SK2288(第39・40図) 竪穴建物SH2280は、調査地北側f7・8で検出した一辺約4m、深さ0.16mを測る平面が方形を呈する住居と考えられる建物である。埋土はにぶい黄橙色極細粒砂である。西側の残存状況は東側と比較して良好である。南東辺中央部付近で竈と考えられる赤色化した焼土面(竈SL2287)を検出した。竈SL2287の西側には黄色の粘土が残存しており、竈状の構築物をなしていたと考えられる。支柱穴・貼床は確認できない。竈SL2287の東側、屋内に位置する土坑SK2288から甕が2個体出土した。これらの遺物から6世紀前半の竪穴建物と考えられる。

竪穴建物SH2292・炉跡SL2446(第41・42図) 竪穴建物SH2292は、調査地北東部e7で検出した南北4.8m、東西5.6m、深さ0.28mを測る平面が方形を呈する住居跡と考えられる建物である。埋土は褐灰色の細粒砂である。後年に削平を受けたようで北側の残存状況が南側と比較して良好である。南部の一部を除いて0.3～0.4m幅で床面から約0.15mの深さの周壁溝を備える。支柱穴はSP2425、SP2426、SP2427、SP2428からなる。東辺中央部にはわずかに焼土(SL2446)が残存しており、竈と考えられる。貼床は確認できない。竈SL2446の北側と竪穴建物SH2292の北隅からそれぞれ甕が1個体出土している。いずれもこの住居で使用されたと考えられる。

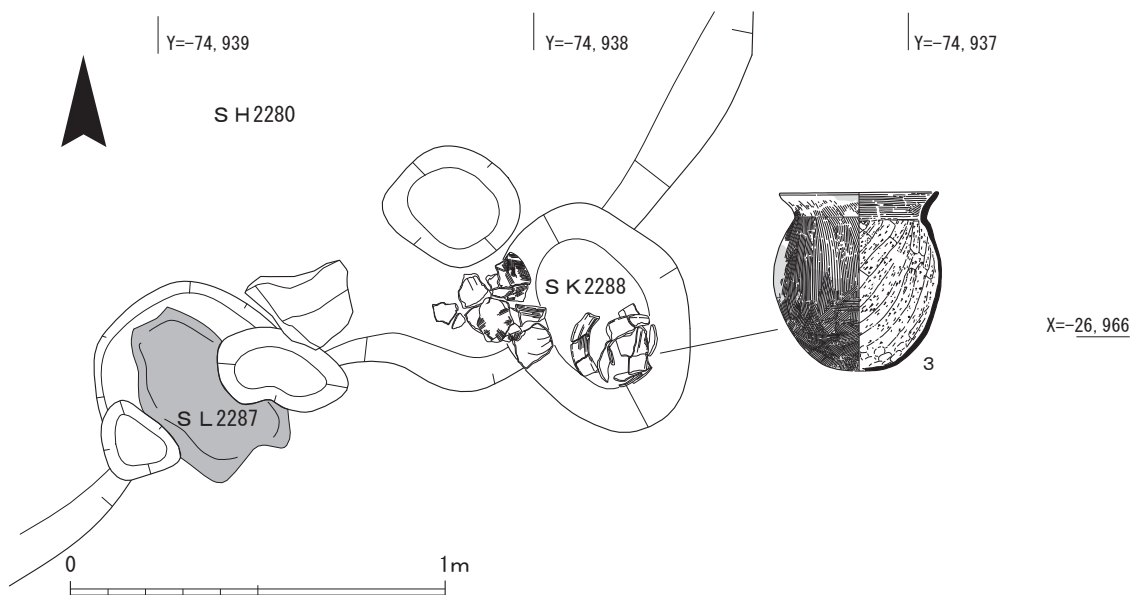
なお、SH2292の北東に隣接して、竪穴建物の一画とも考えられる土色変化を認めたが、周壁溝、柱穴、竈などが検出されず、遺物も出土しなかったことから、竪穴建物とは判断しなかった。

炉跡SL2208(第43図) 調査地西端h8で検出した南北0.8m、東西0.9mを測る焼土である。南側に位置するSP2444と一連の竪穴建物を構成する炉跡の可能性が高い。貼床や周壁溝は認められない。また遺物の出土もなく年代を特定し得ない。炉跡は調査対象地外へと伸びるため、拡張は行うことができなかった。

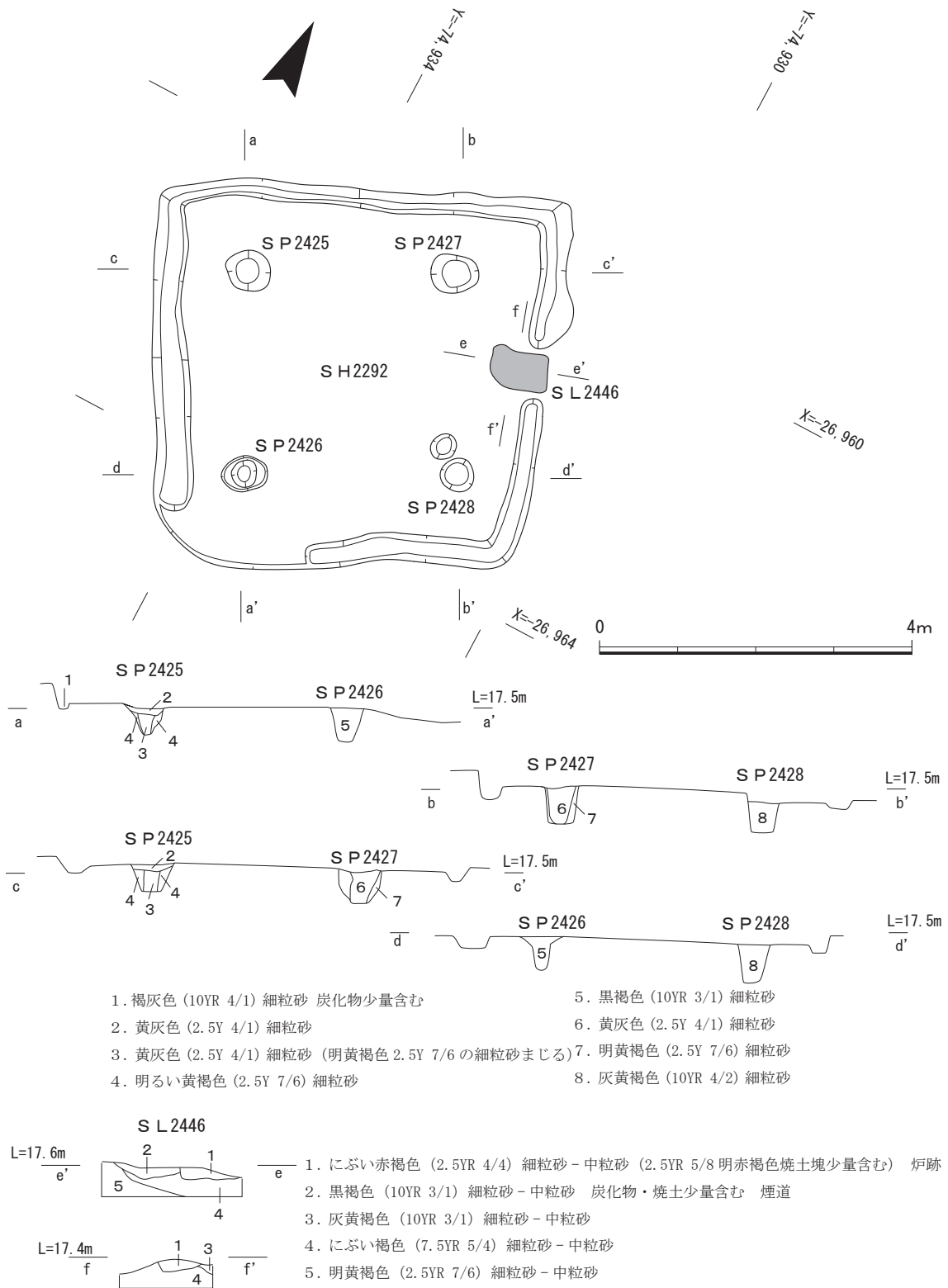


1. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂 - 細粒砂 (黄橙色 10YR 8/6 のシルトブロック少量含む) 炭化物・土器片少量含む
2. にぶい黄橙色 (10YR 6/4) 極細粒砂 炭化物少量含む
3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細粒砂 - 極細粒砂 (明赤褐色 5YR 5/6 の焼土片・淡黄色 2.5Y 8/4 のシルト含む (炉壁)) 炭化物少量含む
4. 明赤褐色 (5YR 5/6) の細粒砂 - 極細粒砂 かまどの焼土

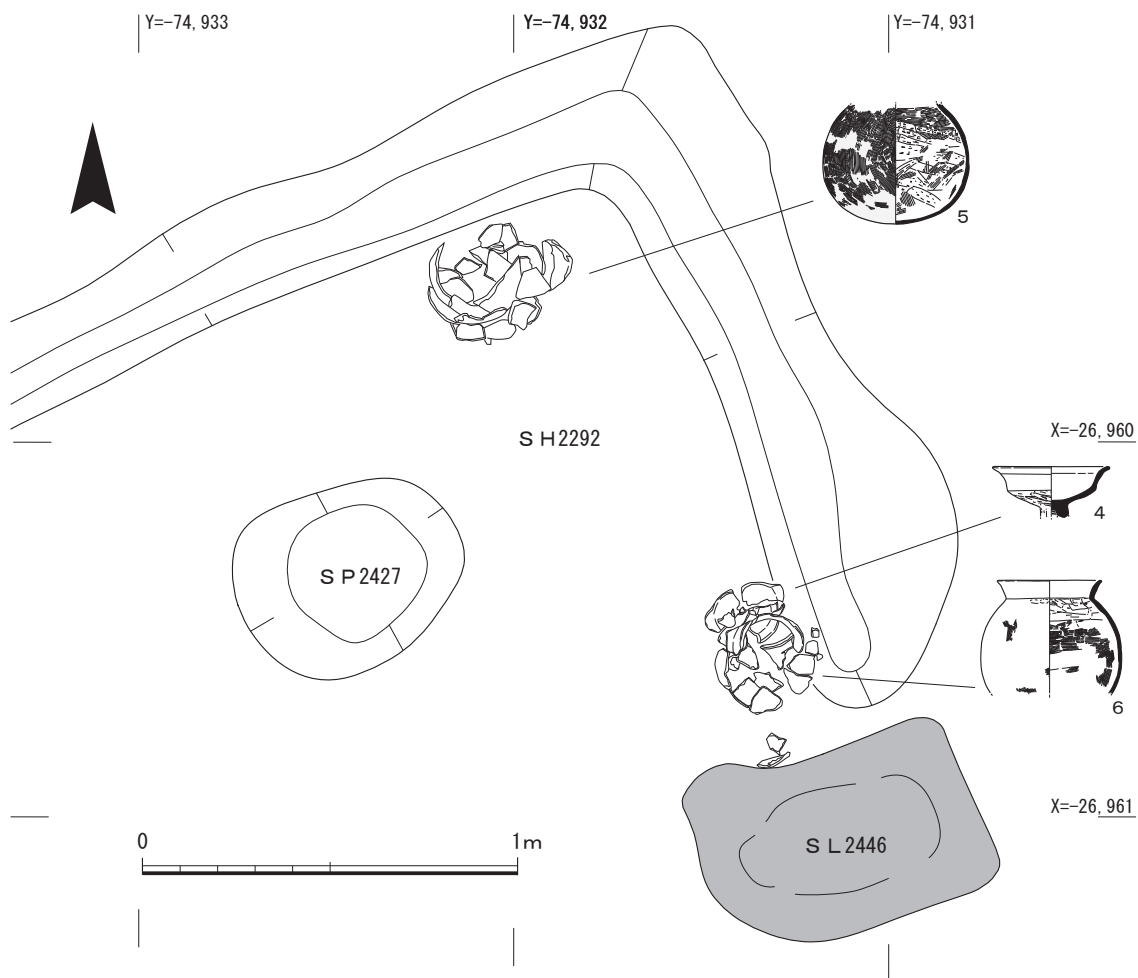
第39図 1区第2面 S H 2280 平・断面図



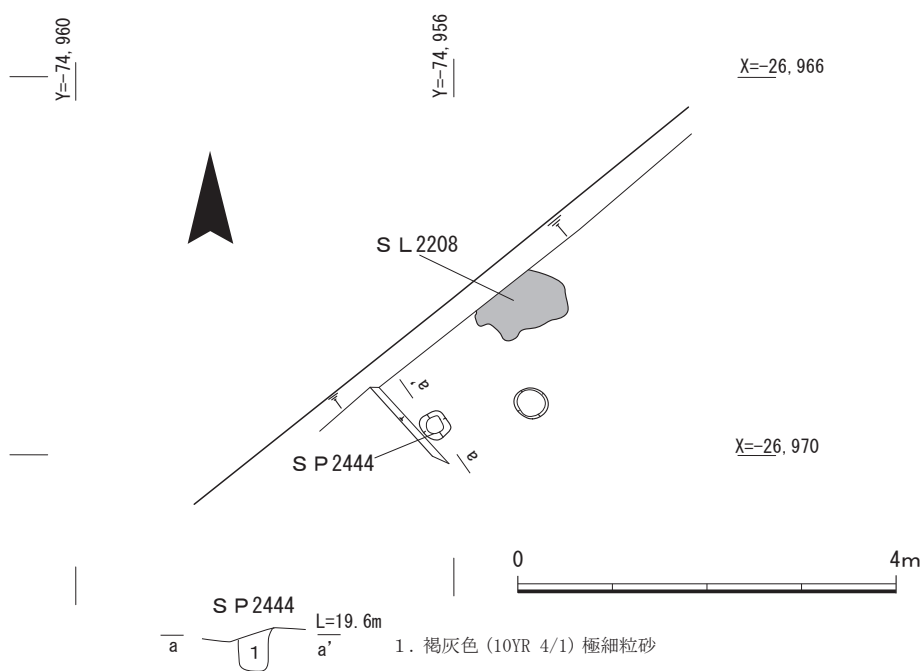
第40図 1区第2面 S H 2280・S K 2288 平面図



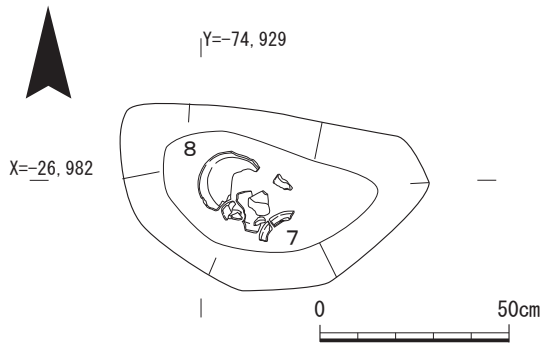
第41図 1区第2面S H 2292ほか平・断面図



第42図 1区第2面S H2292土器出土状況図



第43図 1区第2面S L2208 S P2444平面図



第44図 1区第2面SK2423平面図

S P 2444 (第43図) 調査地西端 h 8 で検出した直径約0.3mで深さ0.46mを測る柱穴である。

S L 2208と一連の竪穴建物を構成する柱穴の可能性はある。埋土は褐灰色の極細粒砂である。時期を特定し得る遺物は出土しなかった。

土坑SK2423 (第44図) 調査地南側 e 10北東部で検出した東西0.8m、南北0.5m、深さ0.1mを測る土坑である。埋土は褐灰色 (10YR4/1) 砂質

シルト極細粒砂-細粒砂。弥生時代末期の高杯、甕(第59図7・8)が出土した。

土坑SK2404 (第36図) 調査地 f 9 で検出した南北1m、東西残存幅0.5m、深さ0.2mを測るピットである。土坑の東側は別遺構により削平を受けており判然としない。埋土は黒褐色 (10YR3/1) 極細粒砂-細粒砂。甕 (第59図25) が出土しているので、第1面で検出できなかった遺構と考えられる。

土坑SK2439 (第36図) 調査地 f 9 で検出した 南北0.8m、東西0.6m、深さ0.4mを測る土坑である。埋土は黒褐色 (10YR3/1) 極細粒砂-細粒砂。8世紀前半の須恵器の杯が出土したので、第1面で検出できなかった遺構と考えられる。

土坑SK2387 (第37図) 調査地 f 9 で検出した南北0.5m、東西0.4m、深さ0.2mを測る楕円形の土坑である。埋土は黒灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂-細粒砂。鞆の羽口が出土している。第1面で検出できなかった遺構と考えられる。

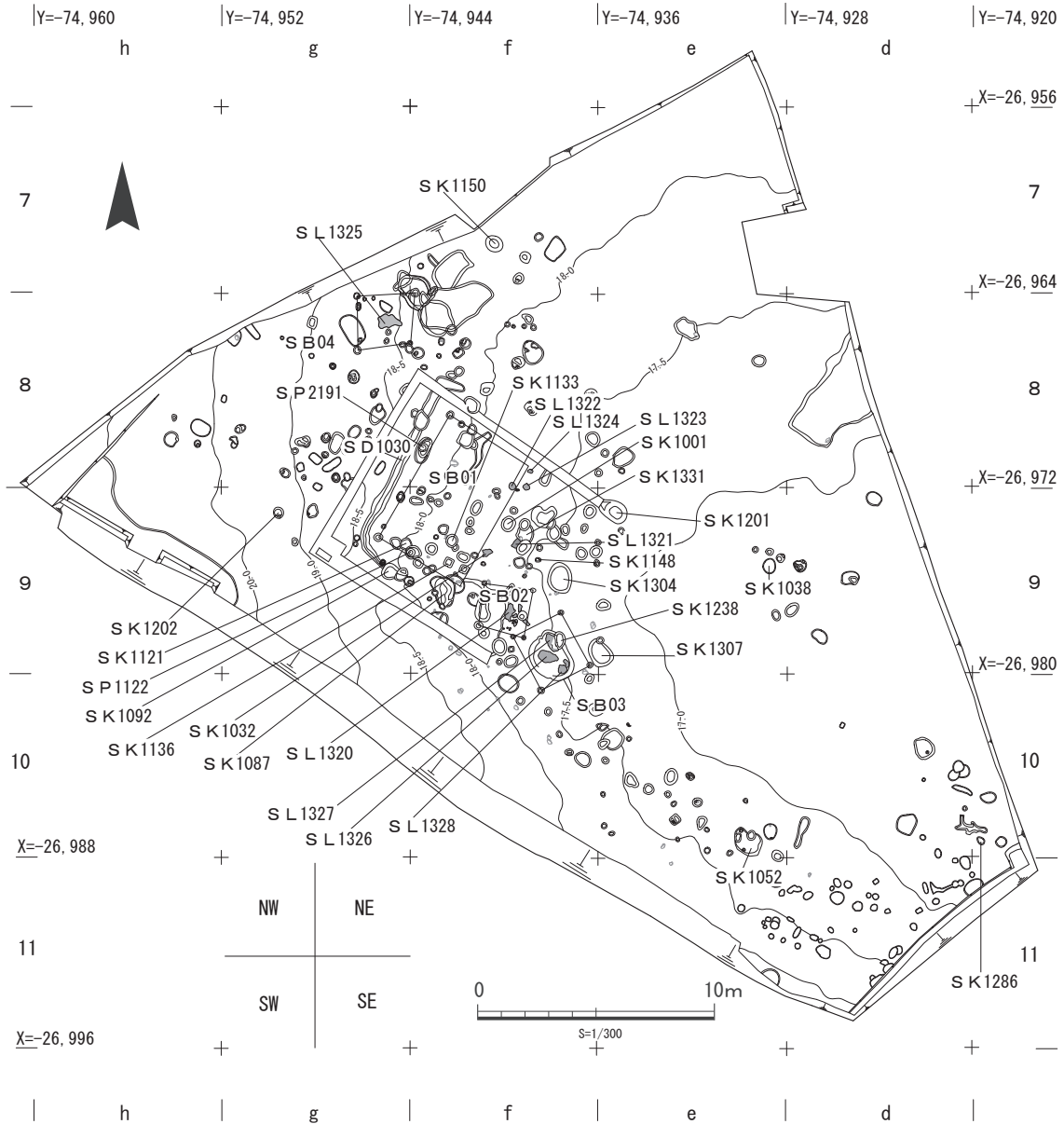
②第1面(飛鳥～奈良時代) (第45図)

掘立柱建物 S B 01 (第46図) 調査区中央部 f 8・9 で検出した梁行2間(4.2m)、桁行3間(6.0m)の掘立柱建物である。柱穴の平面形状は楕円形を呈する。柱痕は確認できない。

SD1030 (第46図) 調査区西部 f 8、g 8・9 の S B 01北側で検出したコの字形の溝である。深さ0.1～0.2mで埋土は黒褐色の細粒砂である。断面形は逆台形状で北側と南側の端部が南東側に折れる。溝の端部は屈曲して浅く削平されており全容は判然としないが、S B 01の雨落ち溝や建物内に水が浸入しないように設置された遺構ではないかと考えられる。

掘立柱建物 S B 02 (第47図) 調査区中央部 f 9 で検出した梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。柱穴の平面形状は楕円形を呈する。柱痕は確認できない。建物内に鍛冶炉 S L 1320が位置する。

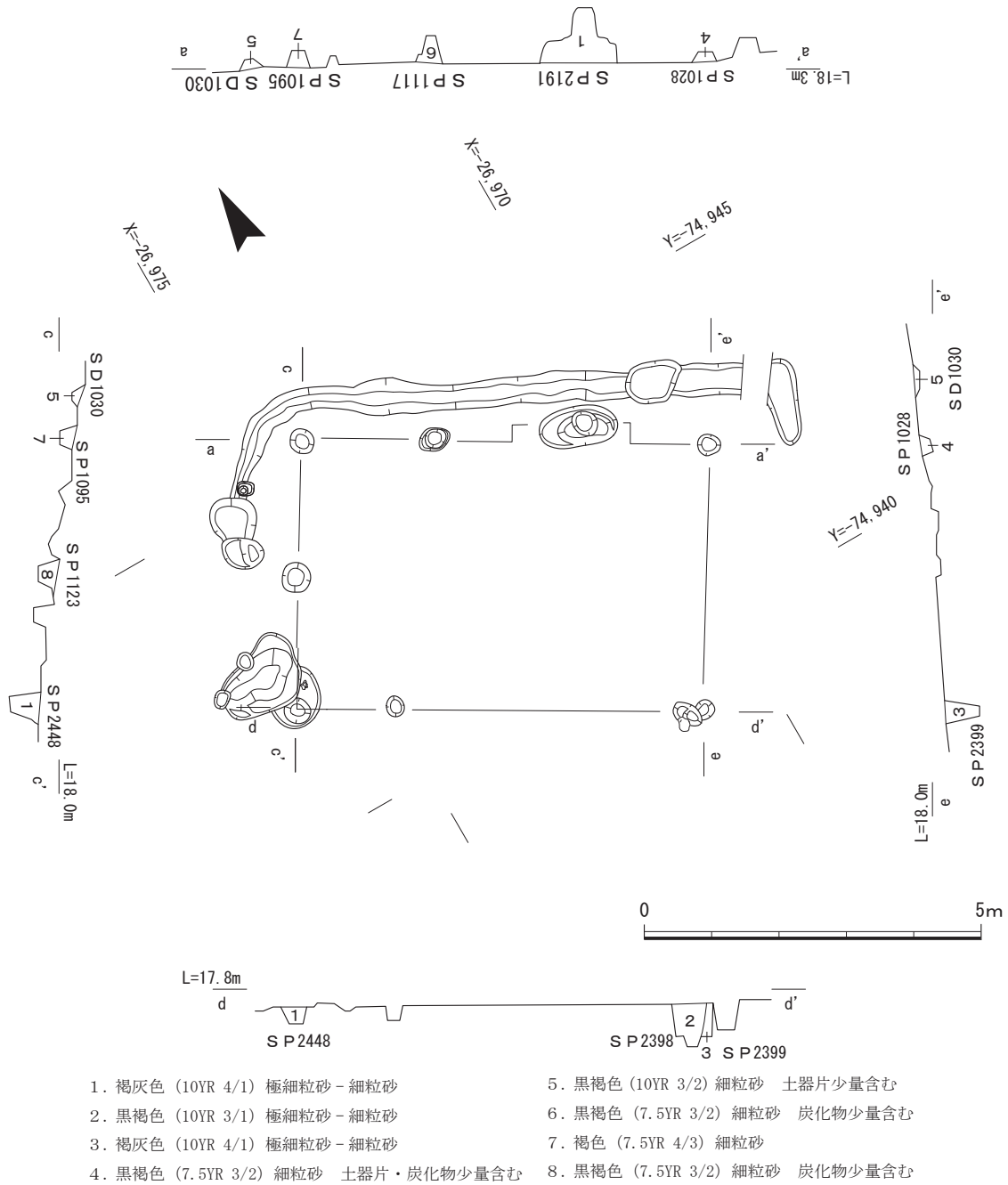
S L 1320 (第47・48図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。南北1.2m、東西1.1m、内径0.3～0.46mを測る。床面に粘土を貼り付けた後に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉床と側壁の一部がわずかに残存するのみで、鞆や羽口の装着状況は明らかでない。なお、第48図の南東に示した2か所の焼土は、S L 1320とは別の炉であった可能性がある。



第45図 1区第1面平面図

掘立柱建物 S B 03 (第49図) 調査区中央部 f 9 で検出した梁行 1 間、桁行 1 間の掘立柱建物である。柱穴の平面形状は楕円形を呈する。柱痕は確認できない。建物内に鍛冶炉 S L 1326～1328 が位置する。

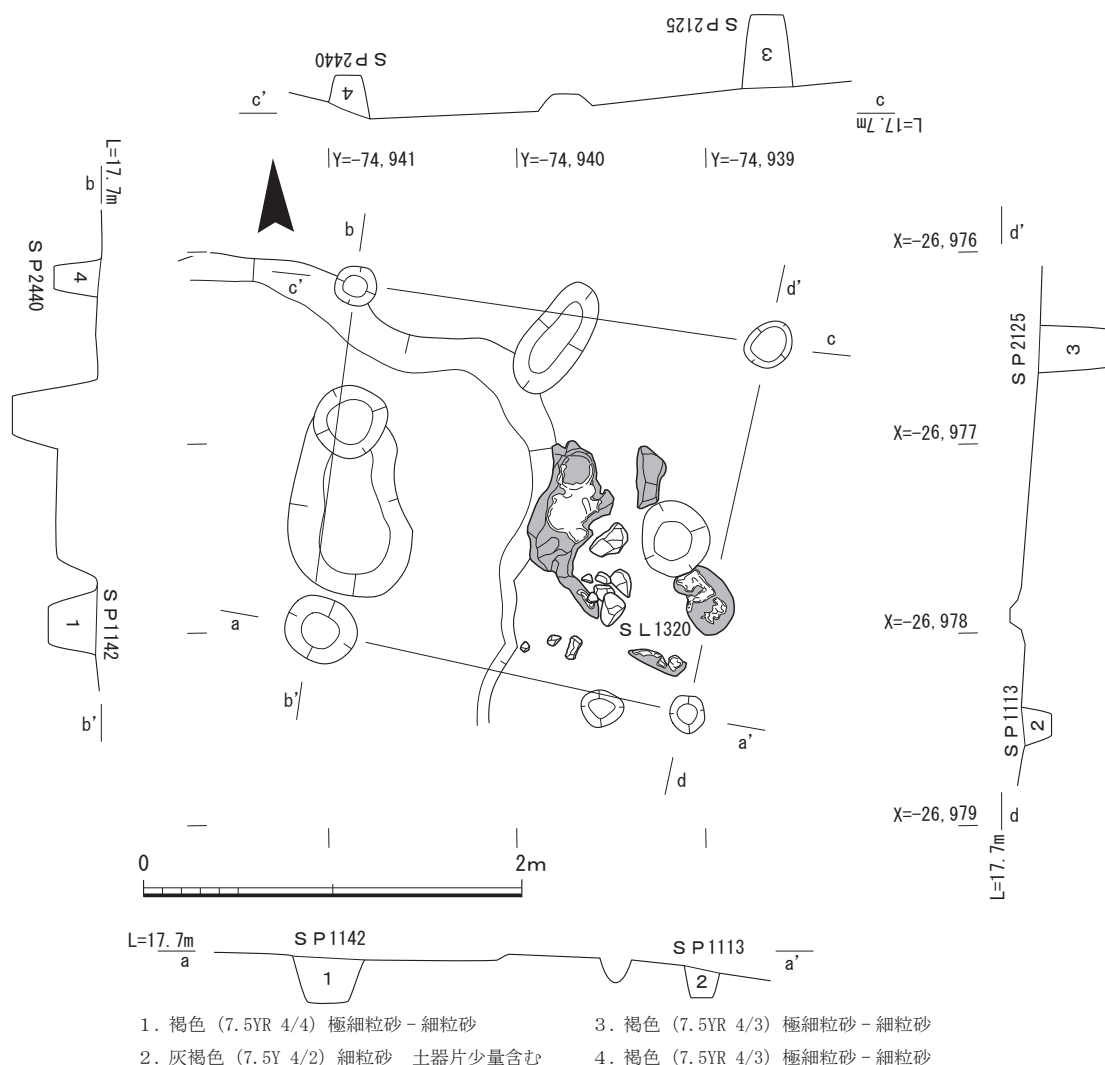
S L 1326 (第49・50図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。南北0.5m、東西0.7mを測る。床面に粘土を貼り付けた後に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉本体部分は削平されており残存しないが、地表面に焼土が残存する。S L 1327、S L 1328 は同時に機能していたというよりもいずれかが操業により炉壁粘土が融解するにしたがって、造り替え、隣接する場所に新設したのと考えられる。このような隣接地に炉を造り替える状況は、S L 1322・1323・1324 にも確認できる (第54図)。



第46図 掘立柱建物SB01平・断面図

S L 1327 (第49・50図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。南北0.8m、東西0.4mを測る。床面に粘土を貼り付けた後に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉本体部分は削平されており残存しないが、地表面に焼成を受けた焼土が残存する。炉の北東部は炉構築材廃棄土坑 S K 1238により削平を受けている。

S L 1328 (第49・50図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。内径0.4mを測る。床面に粘土を貼り付けた後に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉本体部分は削平されており残存しないが、地表面に焼成を受けた焼土が残存する。



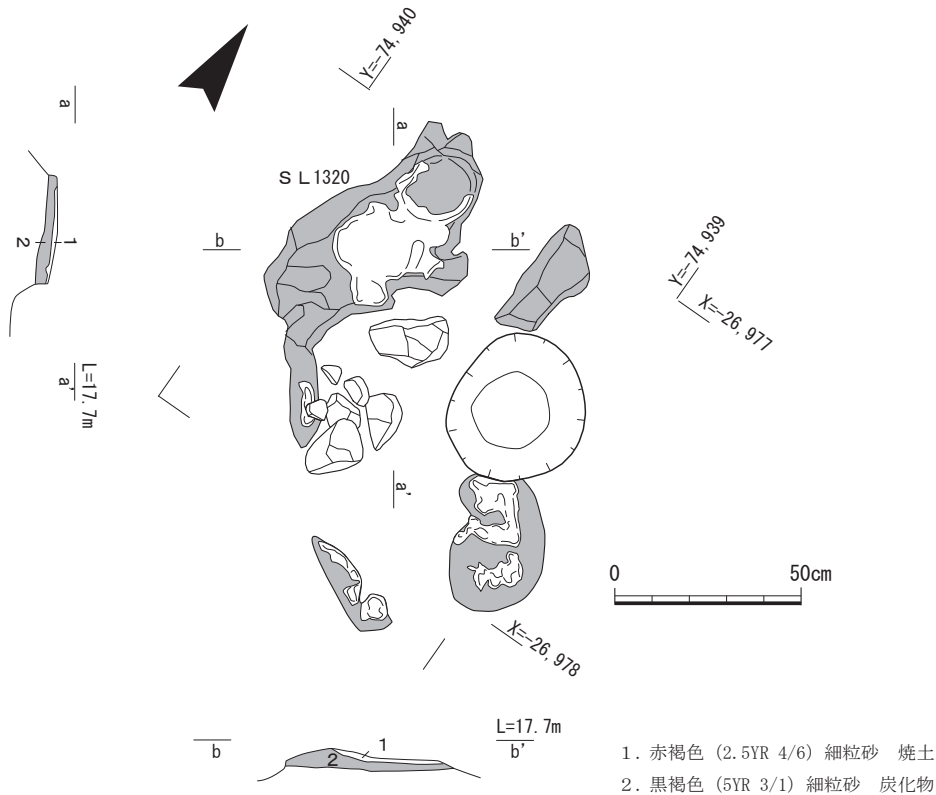
第47図 1区第1面掘立柱建物SB02、鍛冶炉SL1320平・断面図

掘立柱建物SB04(第51図) 調査区中央部g8で検出した梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。柱穴の平面形状は楕円形を呈する。柱痕は確認できない。

SL1325(第51図) 調査区中央部g8で検出した鍛冶炉である。南北0.6m、東西1.0mを測る。地表面上に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉本体部分は削平されており残存しないが、地表面に焼成を受けた焼土が残存する。当初下層の竪穴建物に関連する遺構であると考えていたが、周辺から出土する遺物や鉄滓から、ほかの鍛冶炉と同様の遺構であると判断した。

SL1032(第52図) 調査区中央部f9で検出した鍛冶炉である。南北0.4m、東西0.5m、内径約0.34mを測る。床面の凹みを利用して炉を構築する火窟型の炉である。炉床と側壁の一部がころうじて残存する。高熱を受けて焼け締まっており、一部が還元して白色を呈している。炉の東側の黒色化して締まっている土は、ややU字状の断面形を有していることから、羽口が据えられていた可能性がある。

SL1321(第53図) 調査区中央部f9で検出した鍛冶炉である。長軸約0.48m、短軸約0.28mを測る。床面に粘土を貼り付けた後に炉本体を築いた地上露出型の炉である。炉本体部分は削平



第48図 第1面鍛冶炉 S L 1320実測図

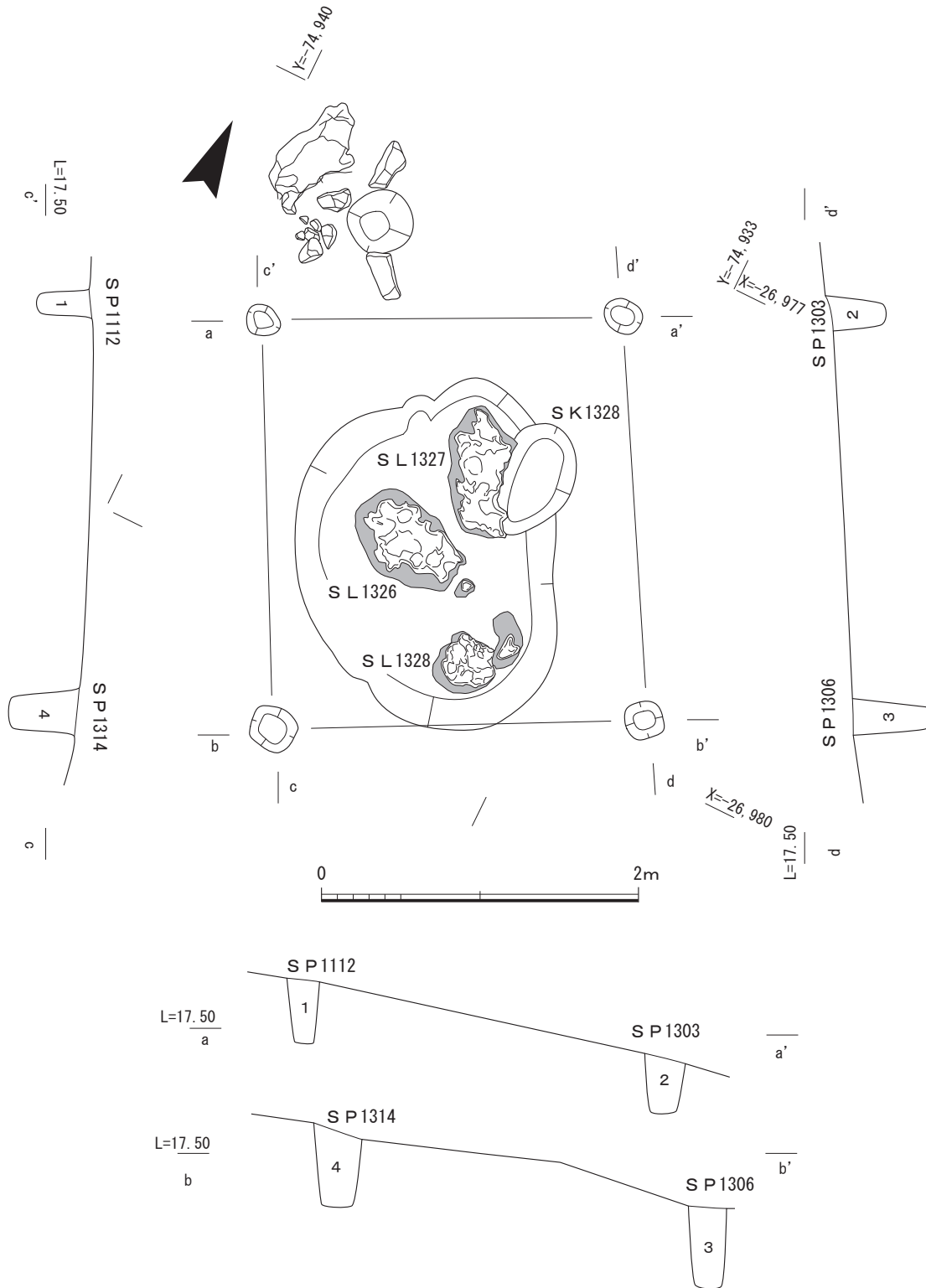
されており残存しないが、地表面に焼成を受けた焼土が残存する。遺構の北東側に炉の壁材として使用されたとみられる石が据えられている。石は被熱しており高温に曝されていたことがわかる。石材は平坦面中央に敲打痕が残されており、もともとは別の用途で使用されていたと考えられる。

S L 1322 (第54図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。内径約0.3mを測る。床面の凹みを利用して炉を構築する火窪型の炉である。後年の削平を受けており炉床の一部と2次被熱の面が残存する。S L 1322、S L 1323、S L 1324は半径1m以内に納まる位置関係にありいずれも火窪型の炉であることから、操業により炉が融解するに伴って造り替えられたものと判断される。

S L 1323 (第54図) 調査区中央部 f 9 で検出した鍛冶炉である。内径約0.3mを測る。床面の凹みを利用して炉を構築する火窪型の炉である。後年の削平を受けており炉床の一部と2次被熱の面が残存する。

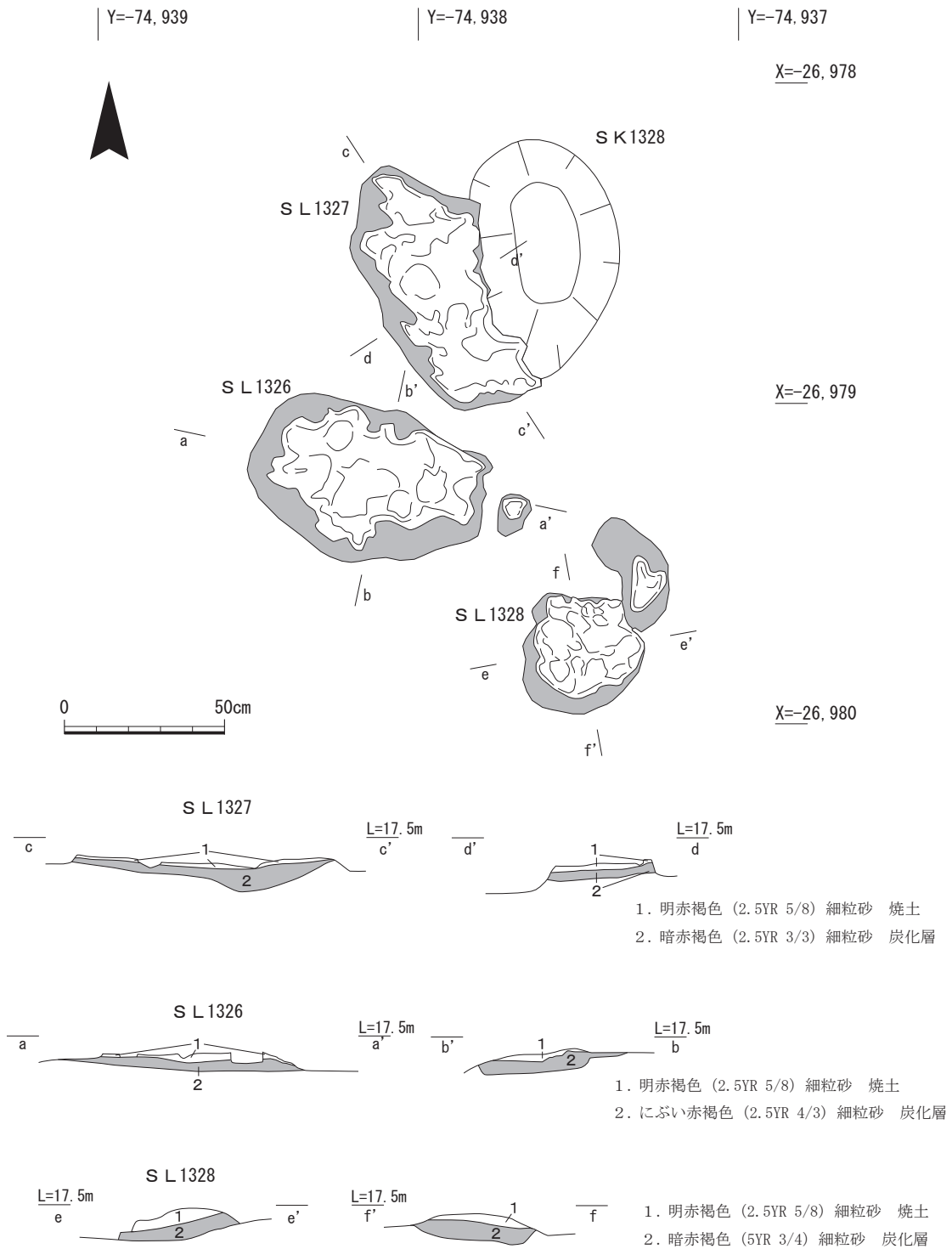
S L 1324 (第54図) 調査区中央部 f 8 で検出した鍛冶炉である。内径約0.2mを測る。床面の凹みを利用して炉を構築する火窪型の炉である。後年の削平を受けており炉床の一部と2次被熱の面が残存する。

SK1038 (第55図) 調査地東部 e 9 で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈す。外形約0.5m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい赤褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂で5世紀後半の土師器の高杯が出土した。

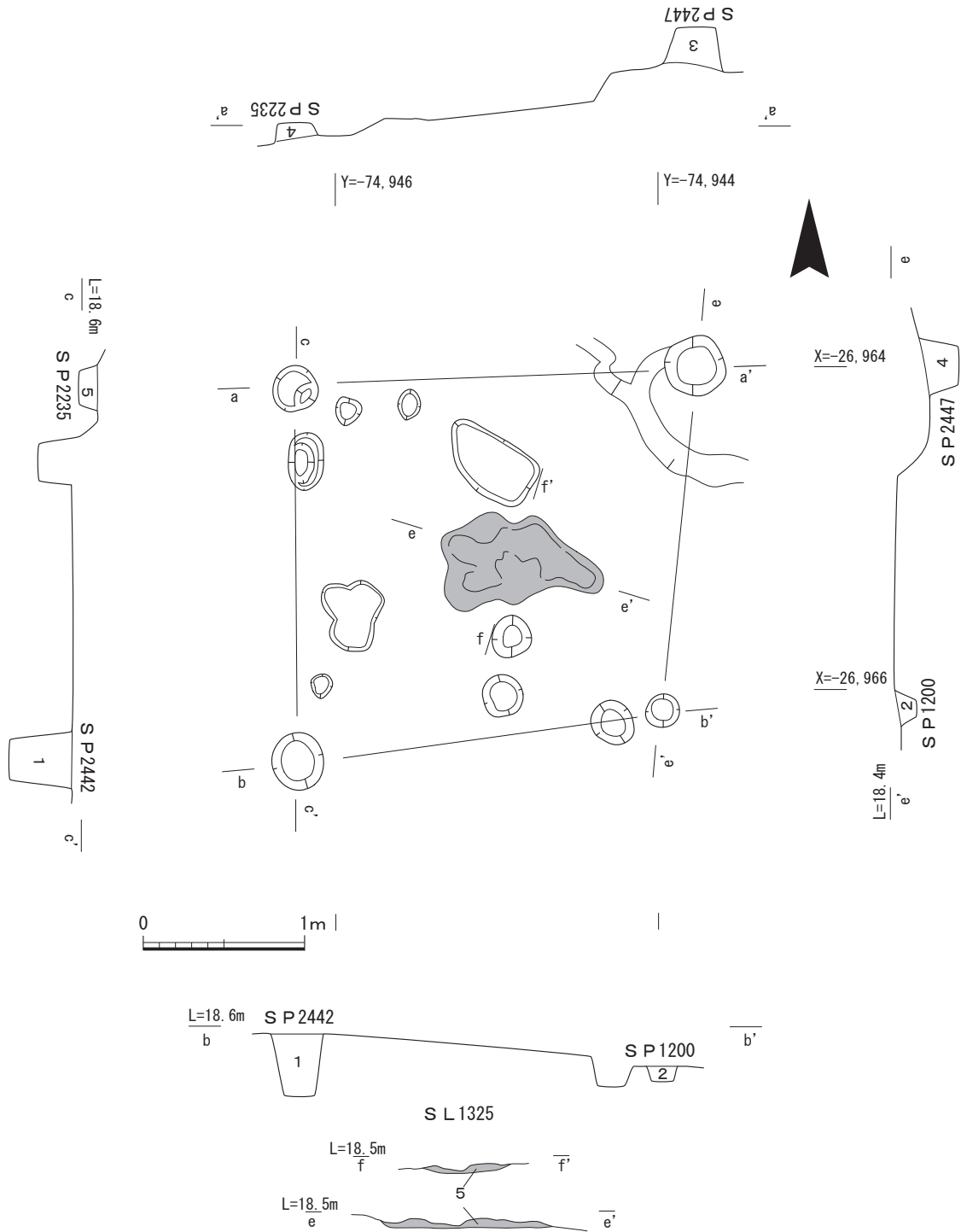


1. 暗赤褐色 (5YR 3/2) 細粒砂 - 極細粒砂 炭化物・土器片少量含む
2. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 - 細粒砂
3. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 - 細粒砂
4. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 - 細粒砂

第49図 第1面掘立柱建物 S B 03、鍛冶炉 S L 1326・1327・1328平・断面図

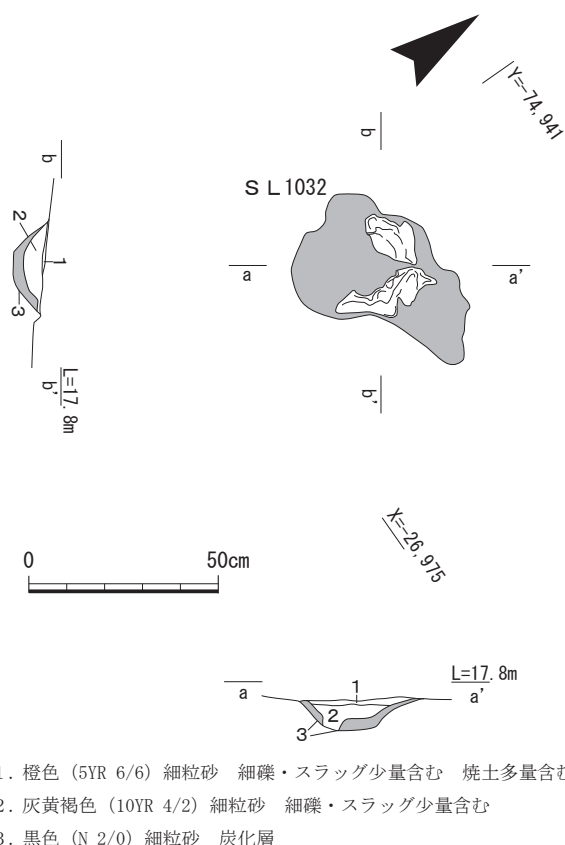


第50図 第1面鍛冶炉 S L 1326・1327・1328平・断面図

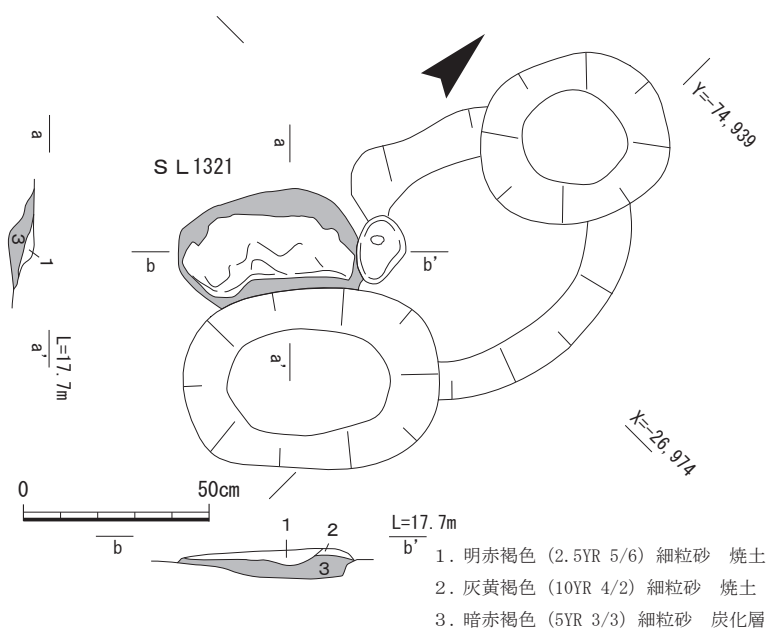


1. 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂 - 細粒砂
2. 灰褐色 (7.5YR 4/2) 細粒砂 炭化物少量含む
3. 黒褐色 (7.5YR 3/2) 極細粒砂 - 細粒砂
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 - 細粒砂
5. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 極細粒砂 - 粗シルト

第51図 1区第2面掘立柱建物SB04、鍛冶炉SL1325平・断面図



第52図 1区第1面鍛冶炉 S L 1032平・断面図

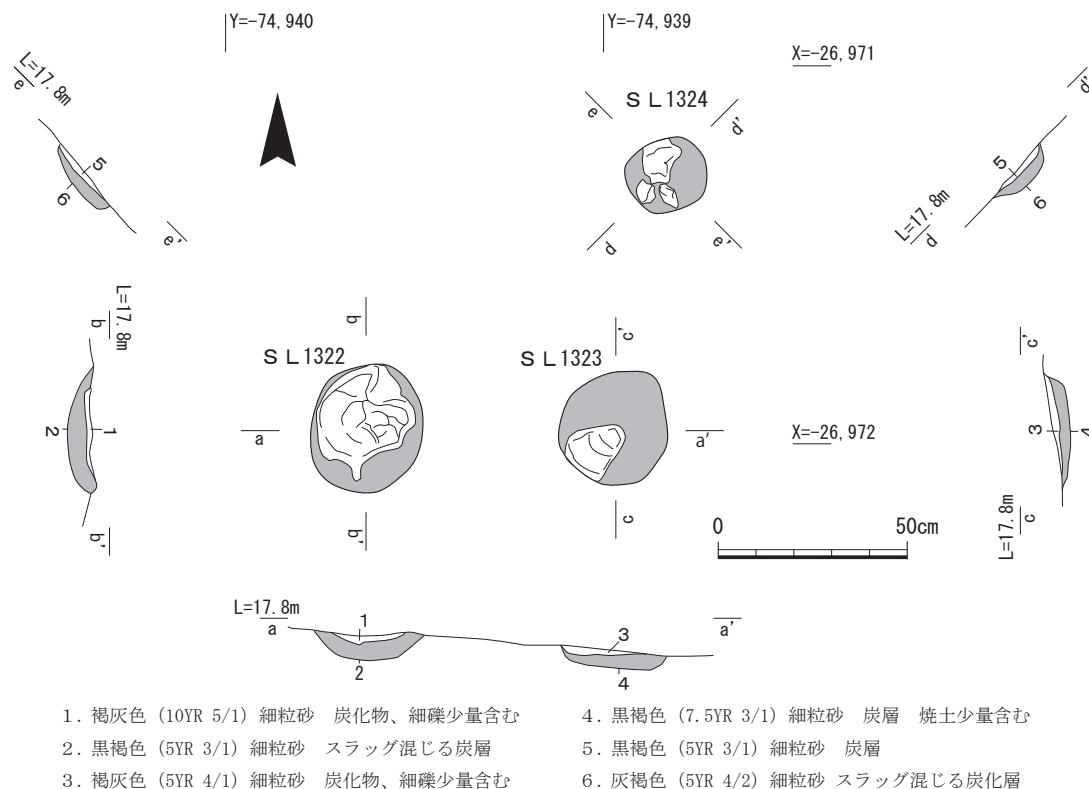


第53図 1区第1面鍛冶炉 S L 1321平・断面図

SK1238 (第56図) 調査地中央部 f 9 で検出した土坑である。平面形はやや楕円の不定形を呈す。南北1m、東西0.8m、深さ0.15mを測る。埋土はにぶい赤褐色 (5YR4/3) の細粒砂で焼土と土器片を少量含む。被熱痕を有する亜角礫、円礫が集積されて廃棄されている状況である。礫に被熱痕が観察できること、S L 1327を削平していることから S L 1326、S L 1327、S L 1328の鍛冶生業を終える段階で不要となった石材を廃棄した土坑であると考えられる。また、石材自体も第66図80のように石錘として利用されていた痕跡を残す遺物が確認できることから調査地周辺に残されていた石材の2次利用であるとみられる。

SK1286 (第57図) 調査地南東部 c 10 で検出した土坑である。平面形は楕円形で南北0.4m、東西0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は暗赤褐色 (5YR3/2) 細粒砂である。遺構底から5世紀後半の丸底壺が出土した。

SK1001 (第45図) 調査地 f 9 で検出した土坑である。平面形は円形で南北0.7m東西0.65m、深さ0.3mを測る。埋土は褐色 (7.5YR4/4) 細粒



第54図 1区第1面鍛冶炉 S L 1322・1323・1324平・断面図

砂で炭化物と土器片を少量含む。第59図14の土錘、第70図92の鉄滓が出土した。

SK1052(第45図) 調査地南部 e 10で検出した土坑である。平面形は不定形で南北1.2m、東西1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂で炭化物と土器片を少量含む。6世紀末から7世紀前半の甕が出土した。

SK1087(第46図) 調査地中央 f 9で検出した土坑である。平面形は不定形で南北1.4m、東西1.2m、深さ0.3mを測る。暗赤褐色(5YR3/3)細粒砂で炭化物と土器片を少量含む。遺構内に径10cmを測る礫を包含していた。第59図22の8世紀前半の須恵器杯が出土した。

SK1092(第45図) 調査地西側 g 9で検出した土坑である。南北0.7m、東西0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は褐色(7.5YR4/3)細粒砂で炭化物と土器片を少量含む。SD1030の南側を削平して構築された遺構で第67図81の敲石や玉髓原石や被熱痕のある径10-20cmを測る凝灰岩が集積されていた。玉髓は人為的に破碎されたように割れているほか、被熱痕のある石などがまとめられている状況から、鍛冶関連の遺構であると判断した。炉の構築材として使用し廃棄した資材や炉を構築する材を選別し不用品を集積して廃棄した土坑と考える。

SK1133(第45図) 調査地中央の f 9で検出した土坑である。平面形はほぼ円形で南北0.55m、東西0.5m、深さ0.15mを測る。埋土はにぶい赤褐色(5YR4/3)の細粒砂で土器片を少量含む。第67図87が出土した。

SK1150(第45図) 調査地北側 f 7で検出した土坑である。平面形はほぼ円形で南北0.7m、東西0.75m、深さ0.2mを測る。埋土は暗赤褐色(5YR3/3)細粒砂で炭化物・土器片を少量含む。第

59図24の壺が出土した。

SK1201 (第45図) 調査地中央 e 9 で検出した土坑である。南北1m、東西1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色 (7.5YR3/3) の細粒砂で土器片、焼土を含む。炉の底面の構築材と思われる被熱した土塊や被熱痕のある平石が出土した。また、土坑底面に土器の細片がまとまって出土しが残存状況は悪く図化に耐えない。SK1092と同じく鍛冶関連遺構であると考え。炉材の廃棄された状況から、炉を取り壊し再構築する際に不用品を廃棄したのであろう。

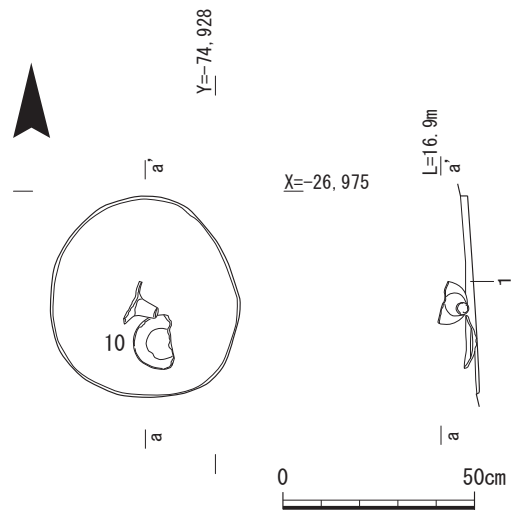
SK1202 (第45図) 調査地西側 g 9 で検出した土坑である。平面形は円形で南北0.5m、東西0.45m、深さ0.2mを測る。埋土は暗赤褐色 (5YR3/2) 細粒砂で土器片を少量含む。第67図85の敲石が出土した。

SK1121 (第45図) 調査地西側 g 9 で検出した土坑である。南北残存長0.6m、東西残存長0.45m、深さ0.2mを測る。遺構南東部を S P 1122 に削平されている。埋土は暗赤褐色 (5YR3/3) 細粒砂で土器片を少量含む。第70図95の鉄滓が出土した。

S P 1122 (第45図) 調査地西側 g 9 で検出した土坑である。南北0.5m、東西0.7m、深さ0.4mを測る。埋土は暗赤褐色 (5YR3/2) 細粒砂で炭化物・土器片を少量含む。第68図86の台石と第69図88の砥石が出土している。

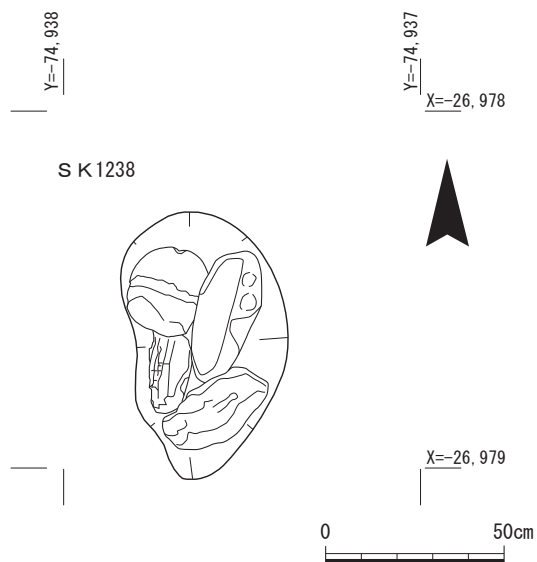
S P 1136 (第45図) 調査地中央 f 9 で検出した土坑である。平面形は正方形を呈する。南北0.4m、東西0.4m、深さ0.4mを測る。埋土はにぶい赤褐色 (5YR4/3) 細粒砂。第59図11、12、13が出土した。

SK1307 (第45図) 調査地中央 f・e 9 で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、南北1.2m、東西1.1m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい褐色 (7.5YR5/4) 細粒砂で埋土に鉄分が沈着し、

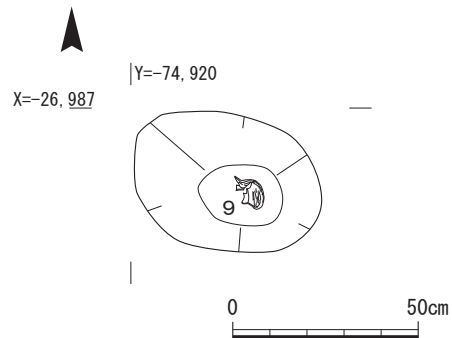


1. にぶい赤褐色 (7.5YR 4/4) 細粒砂

第55図 1区第1面SK1038平・断面図



第56図 1区第1面SK1238平・断面図



第57図 1区第1面SK1286平面図

土器片を少量含む。第59図21の須恵器杯が出土した。

SK1331（第45図） 調査地中央 f 9 で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、南北0.72m、東西0.78m、深さ0.1mを測る。灰褐色（7.5YR4/2）細粒砂で土器片少量含む。第67図82の敲石が出土した。

（4）出土遺物

①土器（第58～62図、付表8）

1はS H2280から出土した有稜外反の高杯である。内側底部にヘラケズリを施し、体部にハケ調整が残る。外面底部には一部ハケによる調整が観察できる。古墳時代後期か。

2はS H2280から出土した甕である。やや長胴で内面はヘラケズリが全面に施されている。内側口縁部はハケによる調整が施され、外面も口縁部を除いて全面にハケ調整が残る。体部はほぼ全面に煤が吸着している。6世紀前半。

3はS H2280から出土した甕である。やや長胴で内面は2と同様にヘラケズリが全面に施されている。内側口縁部はハケによる調整が施され、外面も全面にハケ調整が残る。口縁の一部と体部下半分に煤が残存する。6世紀前半。

4はS H2292から出土した有稜外反の高杯である。全面摩耗しており内側の調整は観察できない。外面腰部下からヘラケズリの痕跡が残る。脚部の一部が残存する。古墳時代後半か。

5はSH2292から出土した甕の体部である。内面は体部下を中心にヘラケズリ、体部上を中心にハケ調整が残る。外面は前面にハケが残る。

6はS H2292から出土した甕である。体部内面にはハケメが残り、肩部内面にはヘラケズリの痕跡を有する。外面は摩耗しており調整は判然としない。6世紀前半か。

7はSK2423から出土した甕である。体部内面にはヘラケズリが残存し、体部外面にはハケ調整が残る。西谷3式か。

8はSK2423から出土した高杯である。杯部内面にはミガキが加えられ、外面にも残存する。西谷3式か。

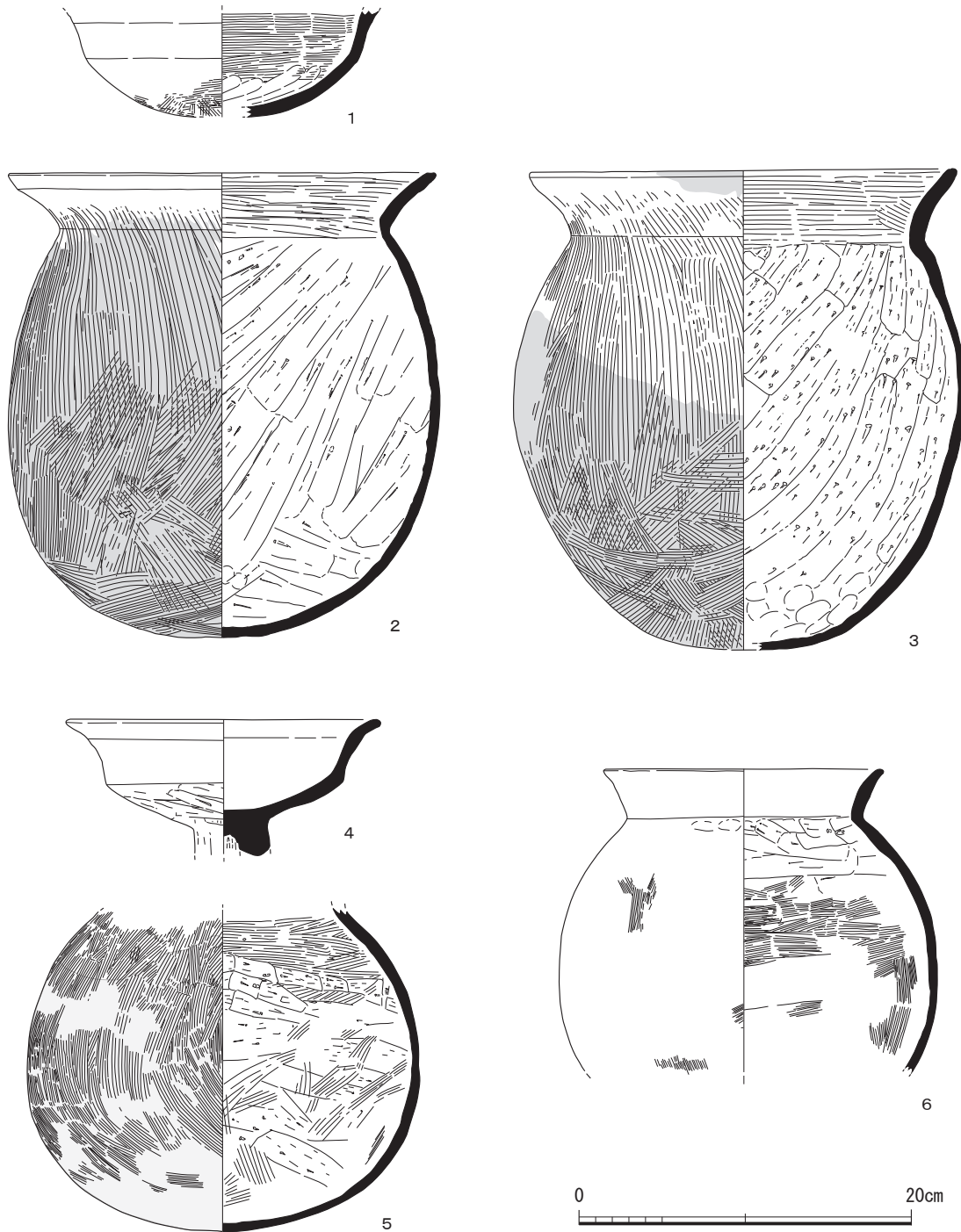
9はSK1286から出土した丸底壺である。内面に工具による痕跡を有する。内外面に指頭圧痕が残る。5世紀半か。

10はSK1038から出土した高杯である。内面は摩耗しているが杯部外面にはミガキの調整が残る。腰部の屈曲はゆるやかで端部にかけて少し外反する。5世紀後半。

11はSK1136から出土した須恵器の杯蓋である。焼成は良好で硬質である。6世紀末から7世紀前半か。

12はSK1136から出土した土師器の杯である。回転台成形で砂礫の混じるやや粗い胎土である。8世紀後半か

13はSK1136から出土した製塩土器の支脚である。手づくね成形で脚柱部に指頭圧痕が残存する。受け部上面は丁寧なナデ調整が施されている。

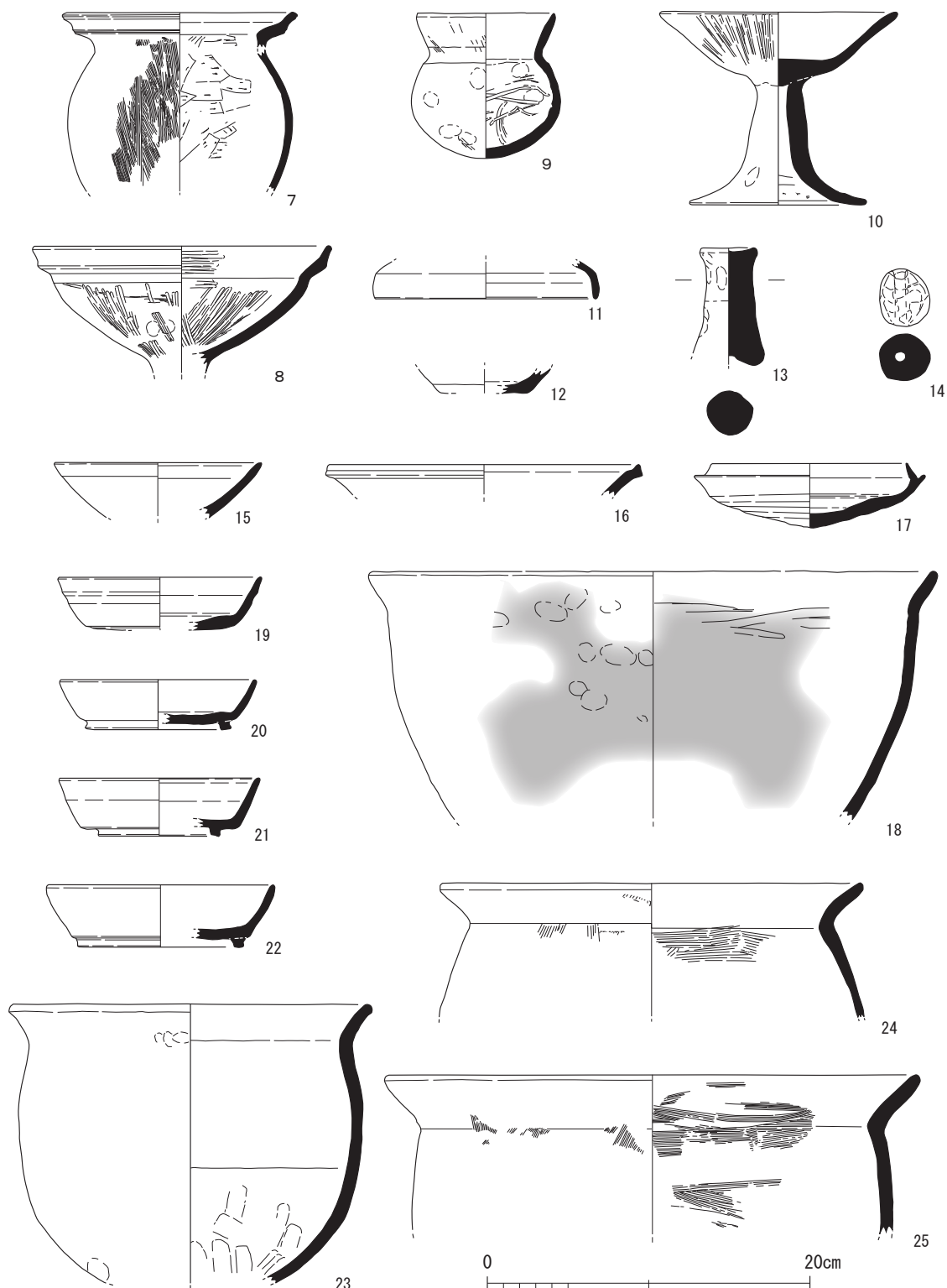


第58図 1区遺構内出土遺物1

14はSK1001から出土した土錘である。手びねり成形で指頭圧痕が良好に残存する。赤褐色の胎土で白色細砂を含む。直径1cmほどの穴を穿孔しており、ここに紐を通して使用したと考えられる。

15はS L 1321の周辺精査で出土した須恵器の杯である。体部は内湾するように口縁端部まで伸びる。

16はS L 1321の周辺精査で出土した須恵器の盤である。外面の突出した口縁部は黒く焼成跡が残る重ね焼きの痕跡が残る。また強く外反する口縁部の内側は粗く焼成時に露出していた印象を



第59図 1区遺構内出土遺物2

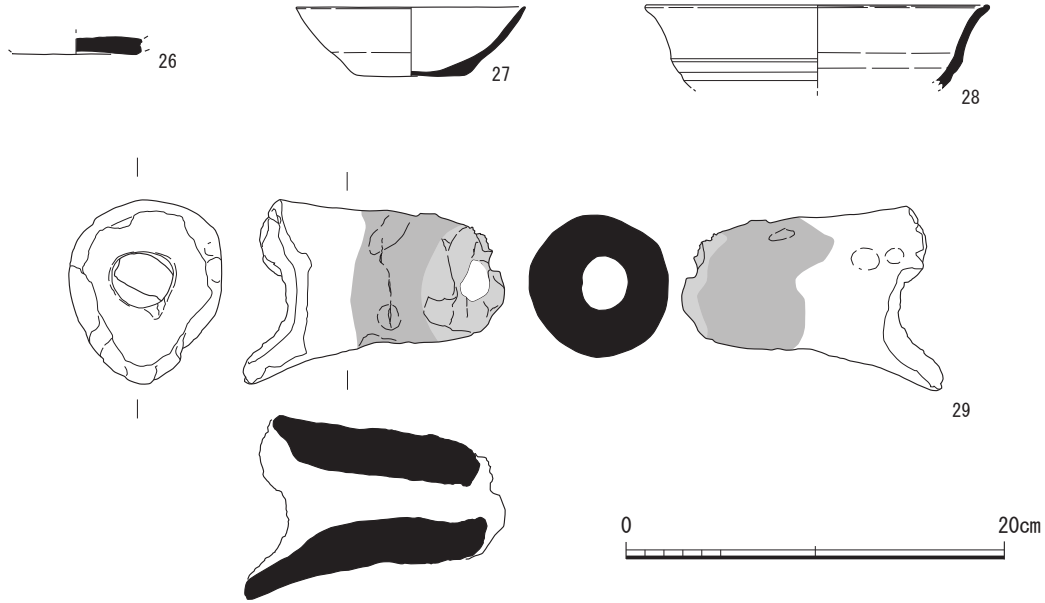
受けることから蓋ではなく盤とした。8世紀前半か。

17はSK1052から出土した須恵器の杯身である。6世紀末から7世紀前半。

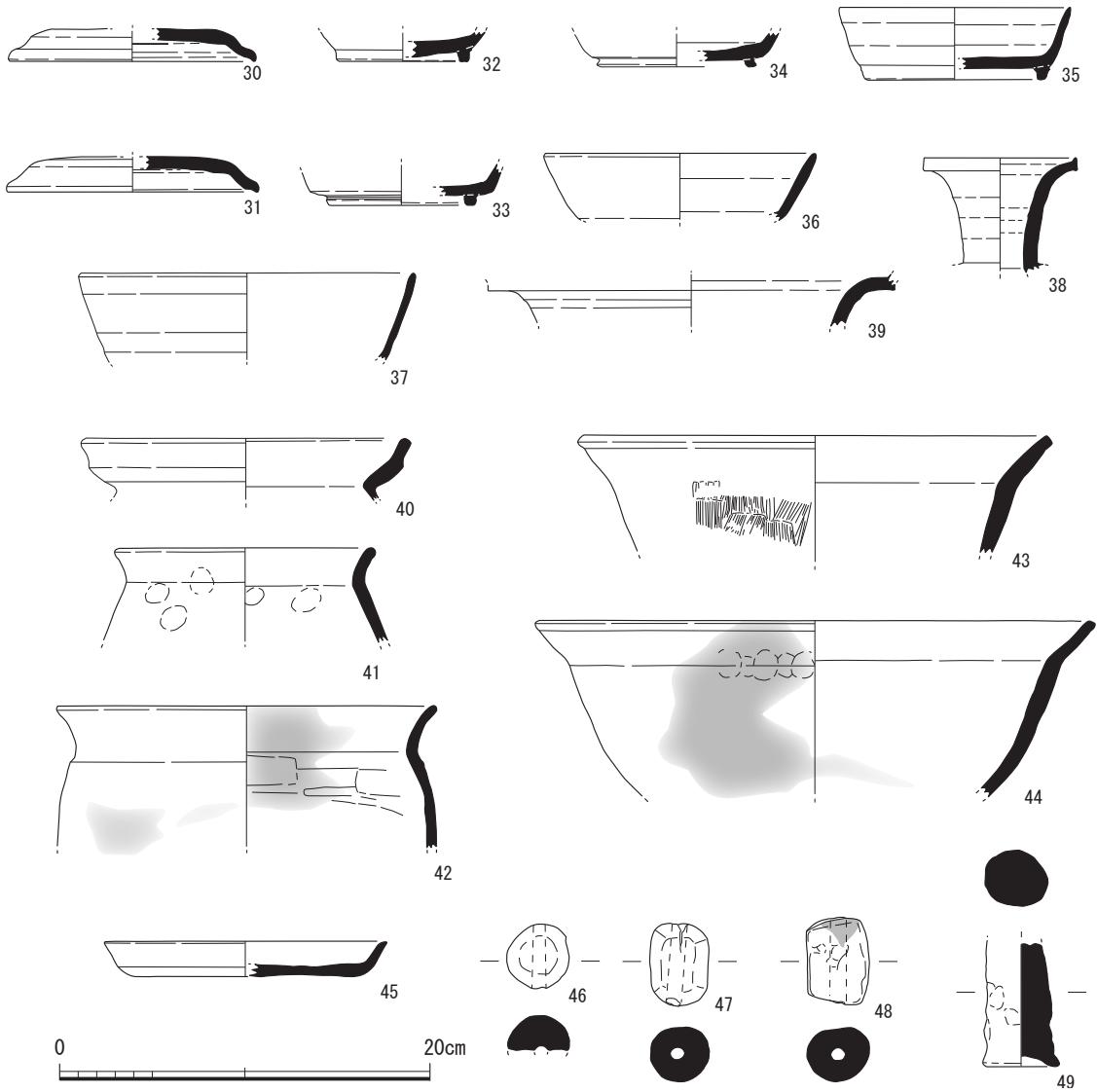
18はSK1052から出土した土師器の鍋である。丸みをもって立ち上がり頸部が外反する。外面に指頭圧痕を残す。内外面ともに煤が残存する。

19はS L 1325から出土した須恵器の杯身である。7世紀後半か。

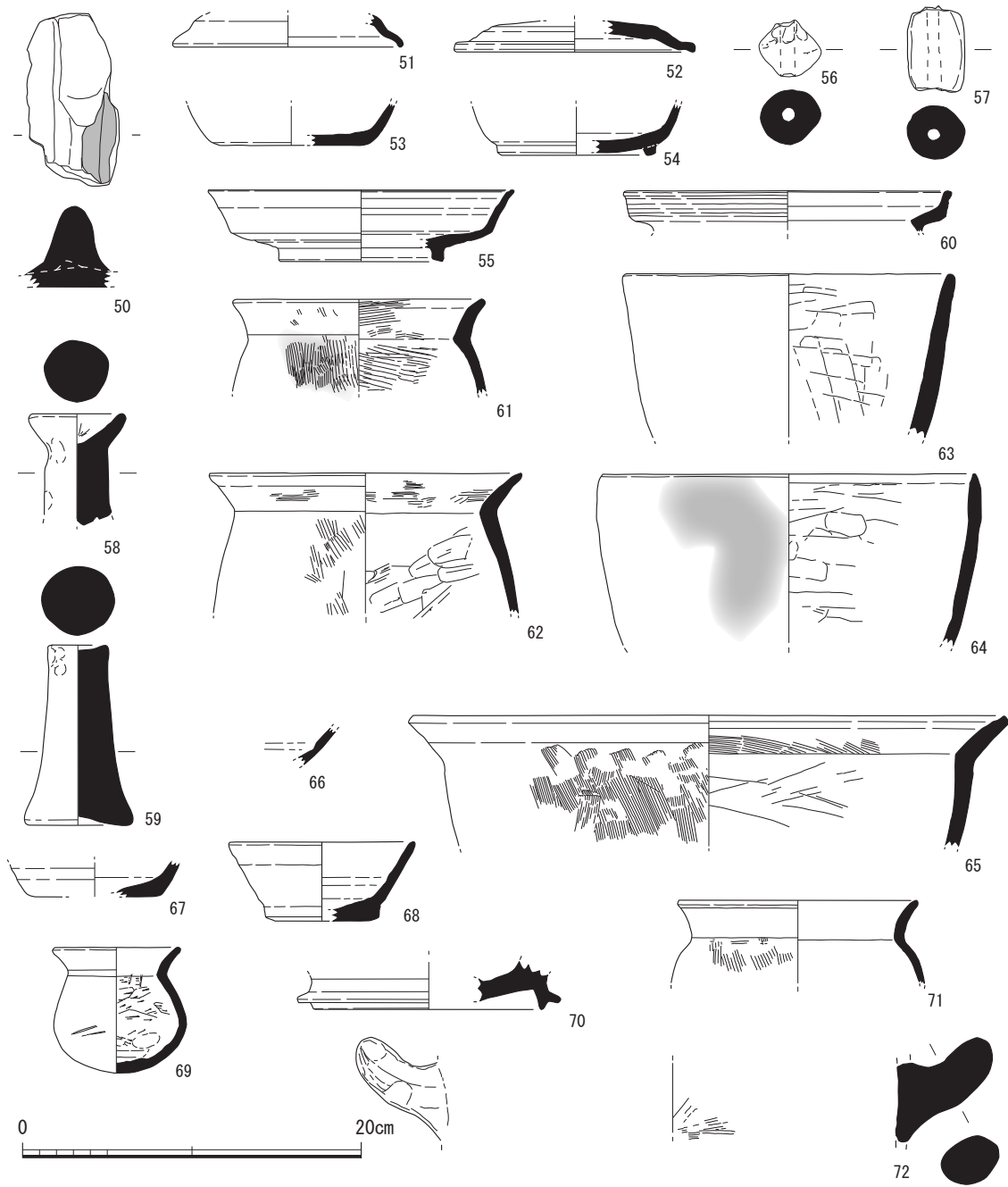
- 20はSK2439から出土した須恵器の杯身である。貼り付け高台である。8世紀前半。
- 21はSK1307から出土した須恵器の杯身である。貼り付け高台である。8世紀前半。
- 22はSK1087から出土した須恵器の杯身である。貼り付け高台である。8世紀前半。
- 23はSK1304から出土した土師器の甕である。内面底部にヘラによる調整痕、外面に指頭圧痕がある。6～7世紀か。
- 24はSK1150から出土した土師器の甕である。内外面にハケによる調整痕がある。律令期か。
- 25はS P 2404から出土した土師器の甕である。内外面にハケによる調整痕がある。肩部は張らず、口縁部はやや内湾するように外方に広がる。9世紀。
- 26はSK1148から出土した黒色土器である。底部のみが残存する。糸切痕を残す。
- 27はSK1201から出土した土師器の杯である。白色精緻な胎土で回転台成形である。
- 28はSK1324から出土した須恵器の椀である。腰部に強い稜線が入る。口縁端部は外反する。6世紀後半か。
- 29はS P 2387から出土した鞆の羽口である。炉の接続部はガラス質化しており、著しく被熱している。白色砂を含む赤褐色の胎土で、指頭圧痕を残す。
- 30から49は上層黒褐色土層から出土した。30・31は須恵器杯蓋である。8世紀。32から35は須恵器杯身である。貼り付け高台である。8世紀。36は須恵器杯身である。体部のみ残存する。38は須恵器の長頸瓶の頸部である。口縁端部が縁帯をつくる。8世紀。39は須恵器の壺の頸部である。口縁端部が縁帯をなす。8世紀か。40は甕の口縁部である。西谷3式か。45は土師器の皿である。器高が低く、口縁端部は外反する。46・47・48は土錘である。46は球形、47と48は円柱形を呈する。48には被熱痕が残る。手づくね成形。49は製塩土器の支脚である。脚柱部と底部のみ残存する。指頭圧痕が残る。
- 50は上層黒褐色土層の上層から出土した韓竈である。縁帯を張りつけて成型している。焚口にあたり、煤が付着している。
- 51から68は上層黒褐色土層の下層から出土した。55は須恵器の杯である。貼り付け高台である。56は土錘である。球形を呈する手づくね成形である。57は円柱形を呈する土錘である。58は製塩土器の支脚である。受け部が深く拡張して開く。59は製塩土器の支脚である。受け部上面はていねいにナデ調整されている。58ほど受け部の拡張はしない。60は擬凹線文の甕である。西谷2式か。63・64は土師質の製塩土器容器である。63は口縁部が外へ直線的にひらく鉢形と呈す。2次被熱を受けて劣化している。8世紀か。64は口縁部が上方にのびる直口形を呈する。2次被熱を受けている。内面にはヘラ調整が残存する。8世紀か。65は土師質の鍋である。体部は丸く、口縁部は外反する。外面にはハケ調整が残る。66は白磁の椀である。IV類の可能性ある。11世紀半ばから12世紀前半。67・68は土師器の杯である。深手の杯で糸切痕を残すが摩耗が激しく判然としない。
- 69は丸底壺である。内面に調整痕を残す。5世紀後半か。70は須恵器の瓶類の底部である。8世紀か。71は9～10世紀の土師質の甕である。肩部にハケ調整を残す。



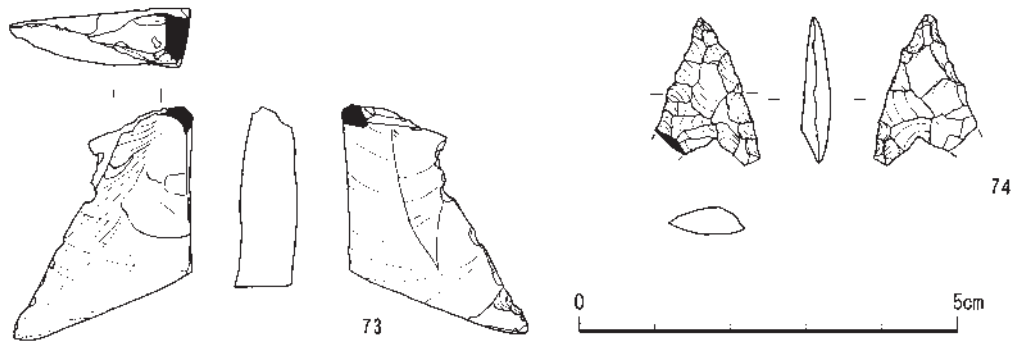
第60図 1区遺構内出土遺物3



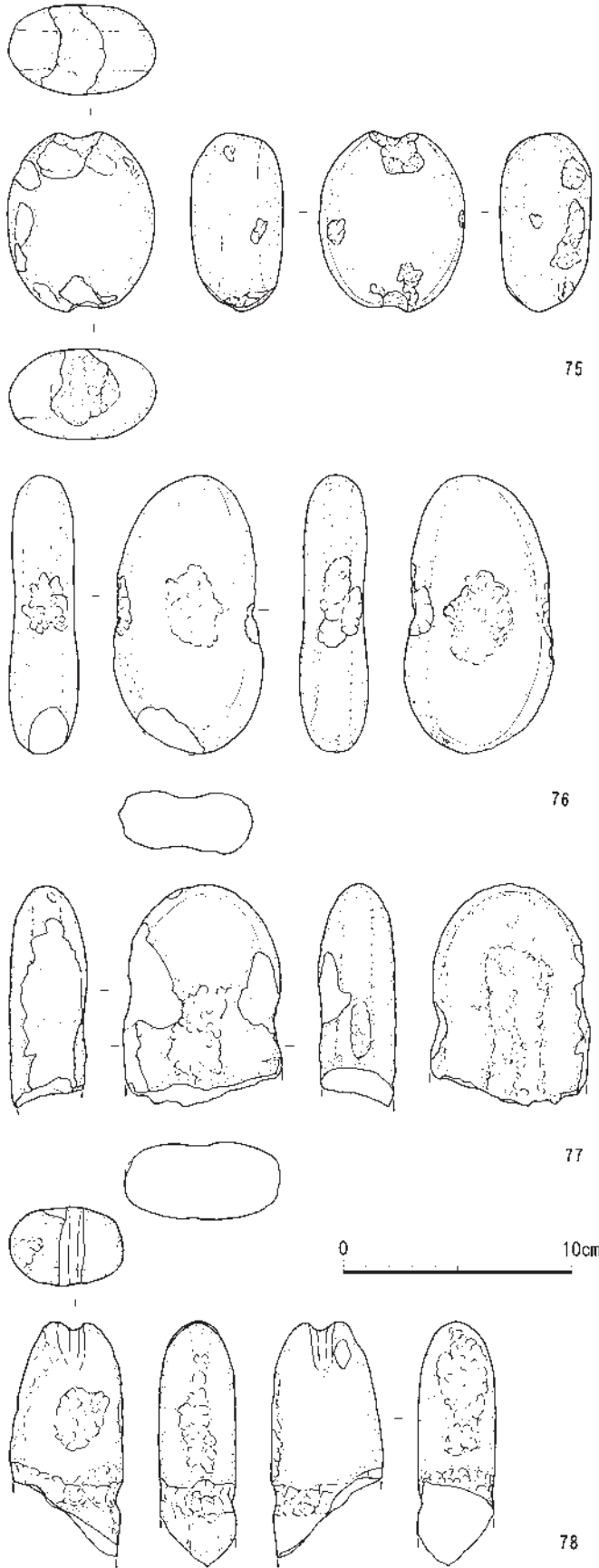
第61図 1区包含層出土遺物1



第62図 1区包含層出土遺物2



第63図 1区包含層出土石器



第64図 1区包含層出土石製品1

72は把手である。残存状況が悪く判然としない。

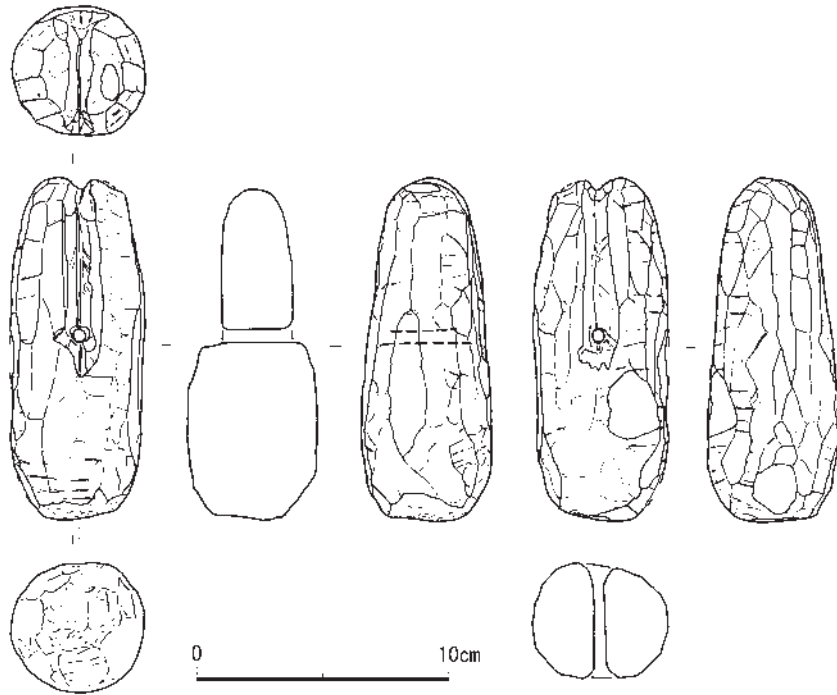
②石製品(第62～69図、付表9)

73は、長さ3.1cm、幅2.4cm、厚さ0.8cm、重さ4.2gを測る黒曜石製の剥離面打面の剥片である。一侧縁が折損しているが、幅広の剥片であったと考えられる。理化学分析による産地同定は実施していないが、隠岐群島産出の黒曜石であると推定する。厳密な帰属時期は不明であるが、縄文時代の所産であるとみなしうる。

74は、長さ2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.6gを測る流紋岩製の凹基部を持つ石鏃である。両器面に素材剥片の剥離面は残存しない。基部に欠損がみられ、製作時の偶発的な破損であると考えられる。形態的特徴および使用石材から、縄文時代の所産であるとみなしうる。

75は、長さ6.4cm、幅8cm、厚さ4.1cm、重さ270gを測るデイサイト質凝灰岩製の石錘である。よく円磨した原礫をもちいる。長軸の両端に敲打による凹部がみられる。凹部に紐のストレッチのような痕跡が認められることから、紐などを結びつけて使用したと考えられる。厳密な帰属時期は不明である。

76は、長さ12.4cm、幅6.6cm、厚さ2.7cm、重さ260gを測るデイサイト質凝灰岩製の石製品である。よく円磨した原礫をもちいる。表裏両面の中央部と短軸の両端に、敲打による凹部がみられる。表裏の凹部は、台石もしくは敲石としての使用痕の可能性が指摘で



第65図 1区包含層出土石製品2

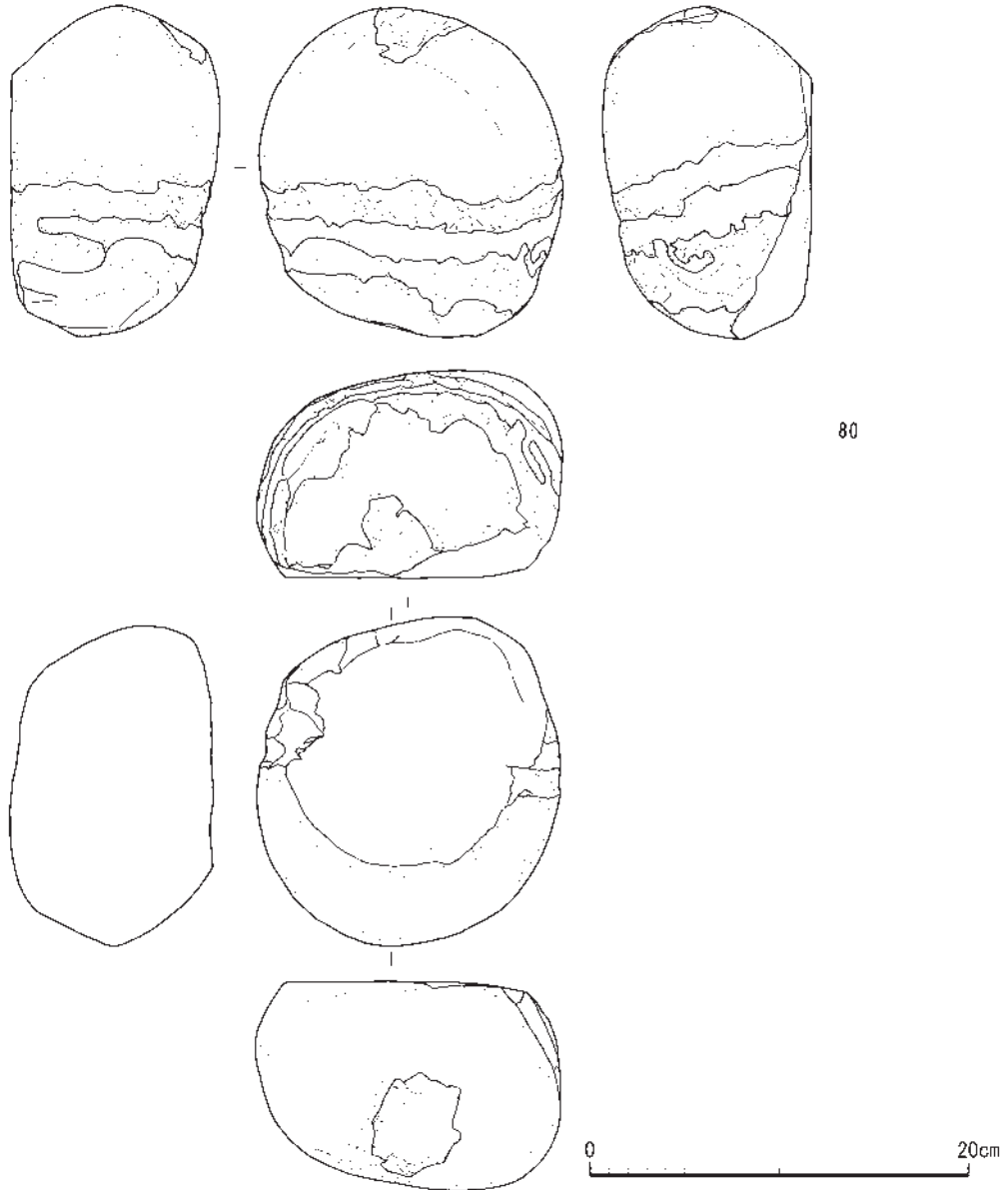
きる。短軸方向の凹部には、紐のスレのような痕跡は認められないが、ひとまず石錘として報告する。厳密な帰属時期は不明である。

77は、長さ9.8cm、幅7cm、厚さ3.4cm、重さ345gを測るデイサイト質凝灰岩製の石製品である。よく円磨した原礫をもちいたと考えられるが、器形の大部分が欠損している。長軸の両端に敲打による凹部がみられる。表裏両面の中央部と短軸端部が残存する箇所に、敲打による凹部がみられる。表裏の凹部は、台石もしくは敲石としての使用痕の可能性が指摘できる。短軸方向の凹部には、紐のスレのような痕跡は認められないが、ひとまず石錘として報告する。厳密な帰属時期は不明である。

78は、長さ10.5cm、幅5cm、厚さ3.5cm、重さ230gを測るデイサイト質凝灰岩製の石錘である。よく円磨した原礫をもちいたと考えられるが、器形の半分が欠損している。器形の平滑面と短軸方向の円周に、敲打による凹部がみられる。また、長軸の残存部には、擦切りによる凹部が認められる。厳密な帰属時期は不明である。

79は、長さ13.8cm、幅5.2cm、厚さ5.4cm、重さ430gを測る軽石質凝灰岩製の石錘である。切削しているようで、原礫の性状は不明である。器形の平滑面中央の穿孔を基点として、長軸方向の円周を半周する擦切りによる凹部が認められる。穿孔部および凹部が機能部と考えられる。厳密な帰属時期は不明であるが、器面の加工に金属器が想定できることから、弥生時代以降の所産と考えられる。

80は、長さ16.1cm、幅17.5cm、厚さ11cm、重さ4,535gを測るデイサイト質凝灰岩製の石製品である。片面に扁平部をもつ、よく円磨した原礫をもちいる。器形の短軸方向の円周に、敲打による凹部がみられる。本調査出土の石錘に比べ、質量が大きいことから、小型の碇石の可能性も



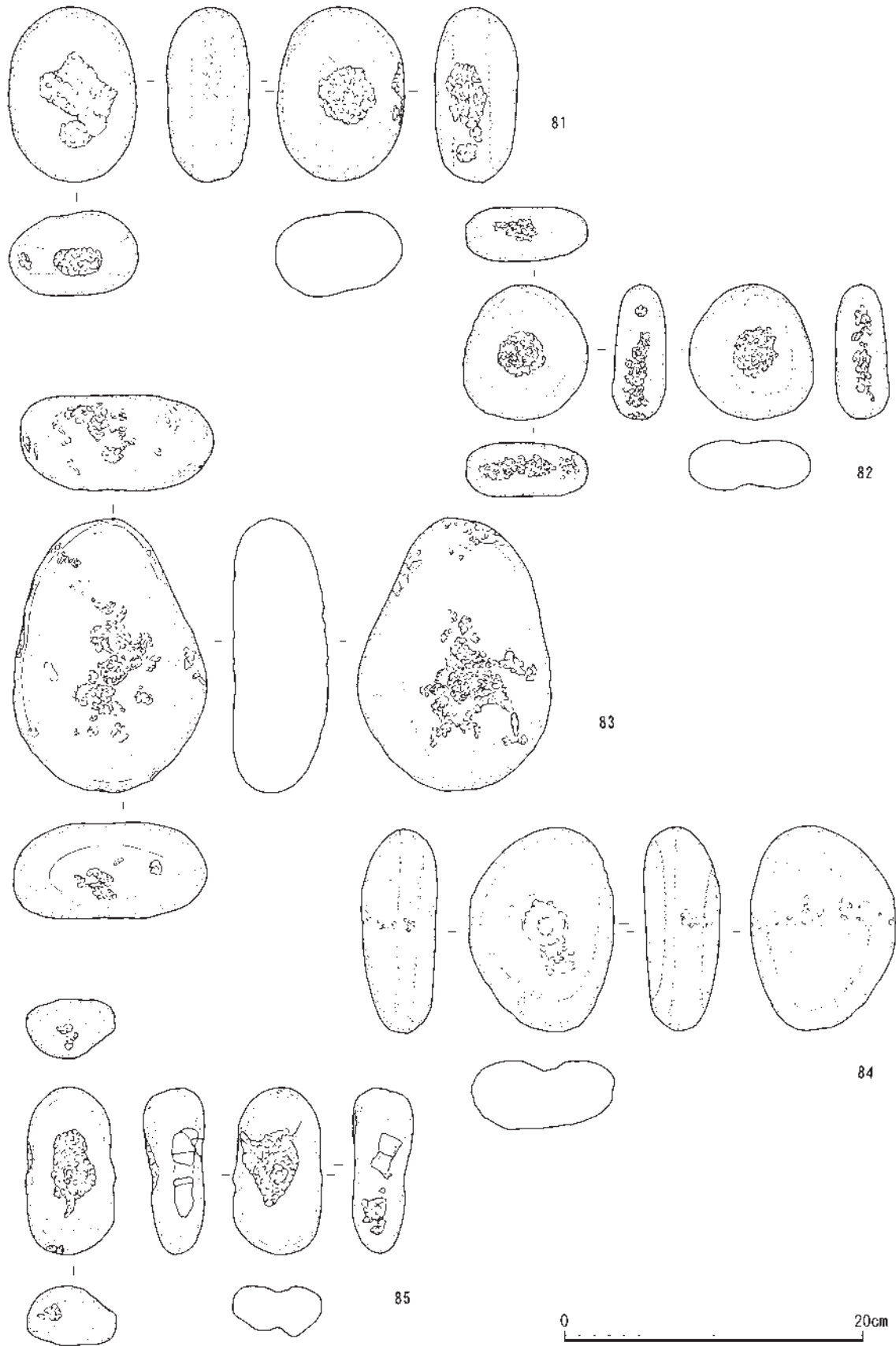
第66図 1区包含層出土石製品3

あるが、ひとまず石錘として報告する。厳密な帰属時期は不明である。

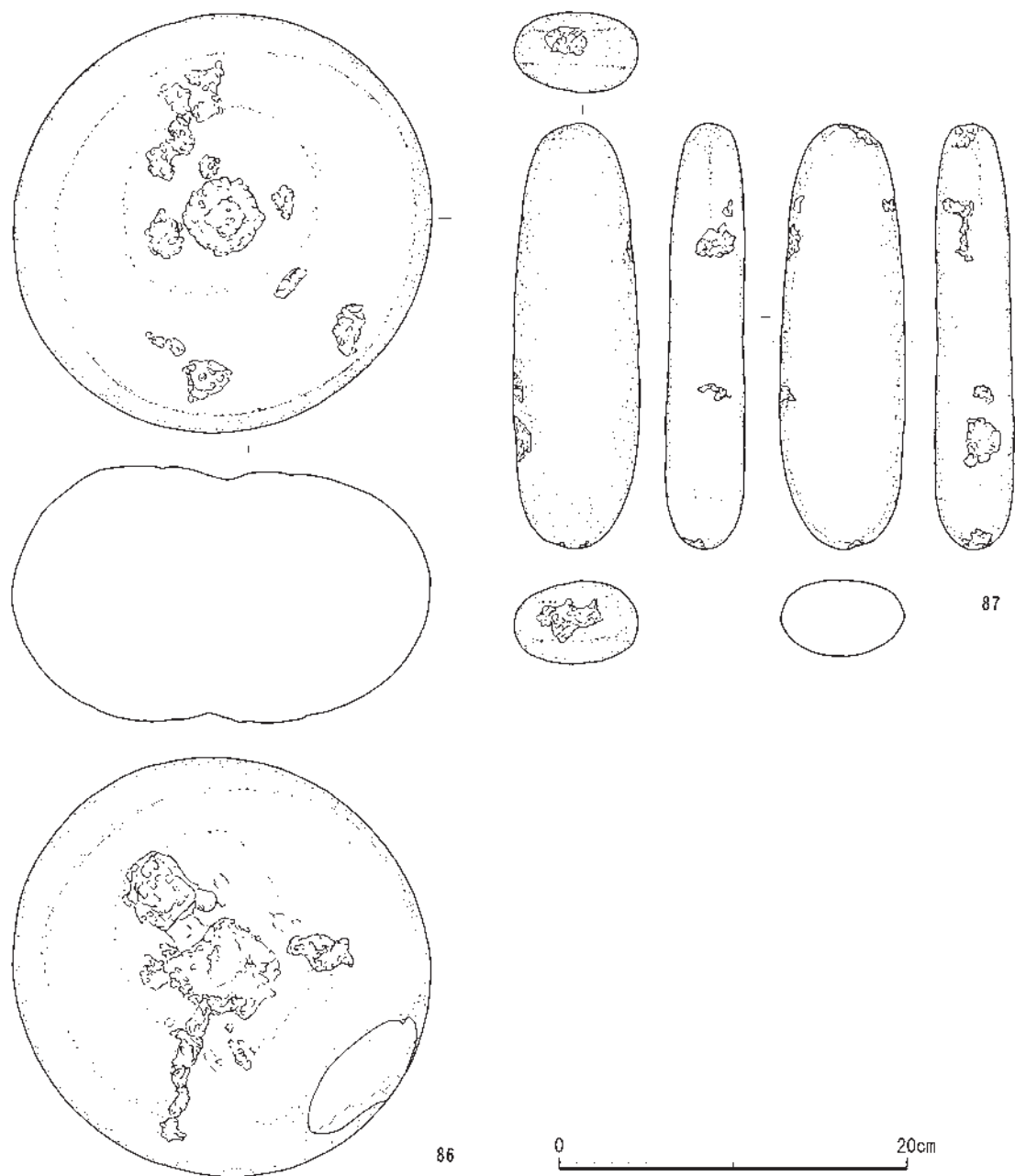
81は、長さ11.7cm、幅8.5cm、厚さ5.6cm、重さ845gを測るデイサイト質凝灰岩製の敲石である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の平坦面と短軸および長軸の端部に、敲打による凹部がみられる。8世紀の遺構に伴う。

82は、長さ9.5cm、幅8.3cm、厚さ3.6cm、重さ330gを測るデイサイト質凝灰岩製の敲石である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の平坦面と側縁部の広い範囲に、敲打による凹部がみられる。8世紀の遺構に伴う。

83は、長さ18.4cm、幅13cm、厚さ6.4cm、重さ1,915gを測るデイサイト質凝灰岩製の敲石である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の平坦面と側縁部の広い範囲に、あばた状の小さな凹部がまばらにみられる。8世紀の遺構に伴う。



第67図 1区包含層出土石製品4

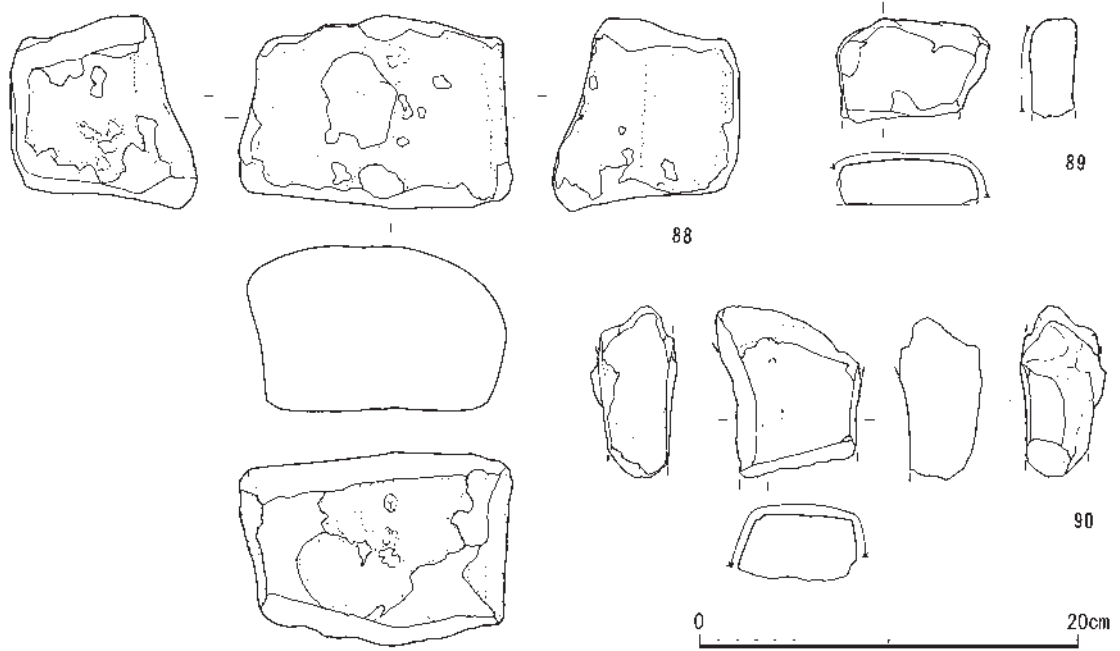


第68図 1区包含層出土石製品5

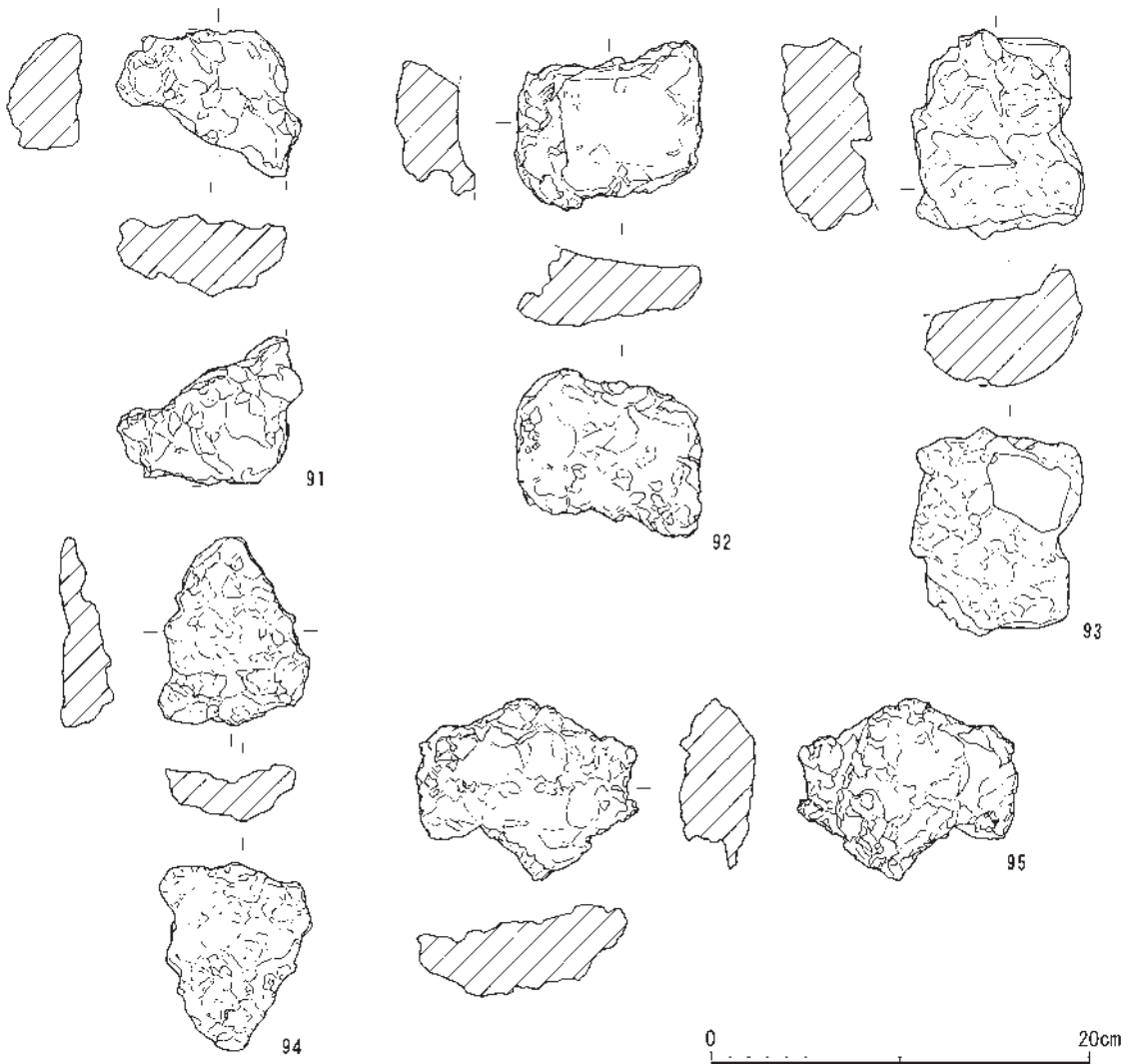
84は、長さ13.7cm、幅9.7cm、厚さ5cm、重さ780gを測るデイサイト質凝灰岩製の敲石である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の平坦面に、敲打による凹部がみられる。厳密な帰属時期は不明である。

85は、長さ11.2cm、幅6cm、厚さ5cm、重さ330gを測るデイサイト質凝灰岩製の敲石である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の表裏の両面に、敲打による凹部がみられる。8世紀の遺構に伴う。

86は、直径24.1cm、厚さ14.9cm、重さ1,230gを測るデイサイト質凝灰岩製の石製品である。よく円磨した原礫をもちいる。器形の表裏の両面に、敲打による凹部がみられる。凹部が平坦面



第69図 1区包含層出土石製品6



第70図 1区出土鍛冶滓

付表3 出土位置別鉄滓重量

次数	遺構・層位	鉄滓 (g)	地区	次数	遺構・層位	鉄滓 (g)	地区
2次	黒褐色土層（下層・VI層）	16,368	5トレンチ	4次	上層黒褐色（上層）	11	e 11
2次	耕作土重機掘削	117	5トレンチ	4次	上層黒褐色（上層）	130	f 9
2次	黒褐色土層（上層・V層）	3,356	5トレンチ	4次	上層黒褐色（上層）	85	f 10
2次	北側側溝掘削	480	5トレンチ	4次	上層黒褐色（上層）	673	g 9
4次	SK1001	273	g 9	4次	上層黒褐色（下層）	19	e 10
4次	SK1016	240	h 9	4次	上層黒褐色（下層）	17	e 11
4次	SK1024	126	g 8	4次	上層黒褐色（下層）	747	f 7
4次	SK1097	179	g 9	4次	上層黒褐色（下層）	440	f 8
4次	SK1159	108	h 9	4次	上層黒褐色（下層）	333	f 10
4次	SK1201	163	f 9	4次	上層黒褐色（下層）	747	g 7
4次	SK1225	485	g 8	4次	上層黒褐色（下層）	692	g 8
4次	SK1227	172	f 8	4次	上層黒褐色（下層）	466.5	g 9
4次	SK1313	203	f 10	4次	上層黒褐色（下層）	92	g10
4次	S P 2441	165	g 7	4次	上層黒褐色（下層）	126	h8
4次	SD1030	455	g 8	4次	掘削・精査	32	d9
4次	他遺構	18	d 10	4次	掘削・精査	92	e7
4次	他遺構	4	e 9	4次	掘削・精査	1,096	e 9
4次	他遺構	57	e 10	4次	掘削・精査	266	e 10
4次	他遺構	13	e 11	4次	掘削・精査	1,236	f 7
4次	他遺構	7	f 7	4次	掘削・精査	1034.5	f 8
4次	他遺構	171	f 8	4次	掘削・精査	276	f 9
4次	他遺構	274	f 9	4次	掘削・精査	9	f 10
4次	他遺構	171	f 10	4次	掘削・精査	873	g 7
4次	他遺構	28	g 7	4次	掘削・精査	604.5	g 8
4次	他遺構	851	g 8	4次	掘削・精査	494	g 9
4次	他遺構	241	g 9	4次	掘削・精査	32	h7
4次	他遺構	60	h 8	4次	掘削・精査	689	h8
4次	他遺構	3	h 9	4次	壁面・地区区分なし	89	
4次	上層黒褐色（上層）	1173	e 10				

にだけみられることや、器形の大きさから、台石の可能性も否定しがたい。8世紀の遺構に伴う。

87は、長さ24.7cm、幅7.3cm、厚さ4.7cm、重さ1,100gを測るデイサイト質凝灰岩製の石製品である。円磨した原礫をもちいる。器形の長軸方向の両端と側縁部の一部に、凹部がみられる。8世紀の遺構に伴う。

88は、長さ5.5cm、幅8.1cm、厚さ2.4cm、重さ2,015gを測る泥質砂岩製の砥石である。やや角ばった原礫をもちいる。器面に部分的な研磨痕がみられる。8世紀の遺構に伴う。

89は、長さ14.6cm、幅10.2cm、厚さ9.9cm、重さ135gを測る泥質砂岩製の砥石である。原礫の性状は不明である。器形の大部分に研磨痕がみられる。厳密な帰属時期は不明である。

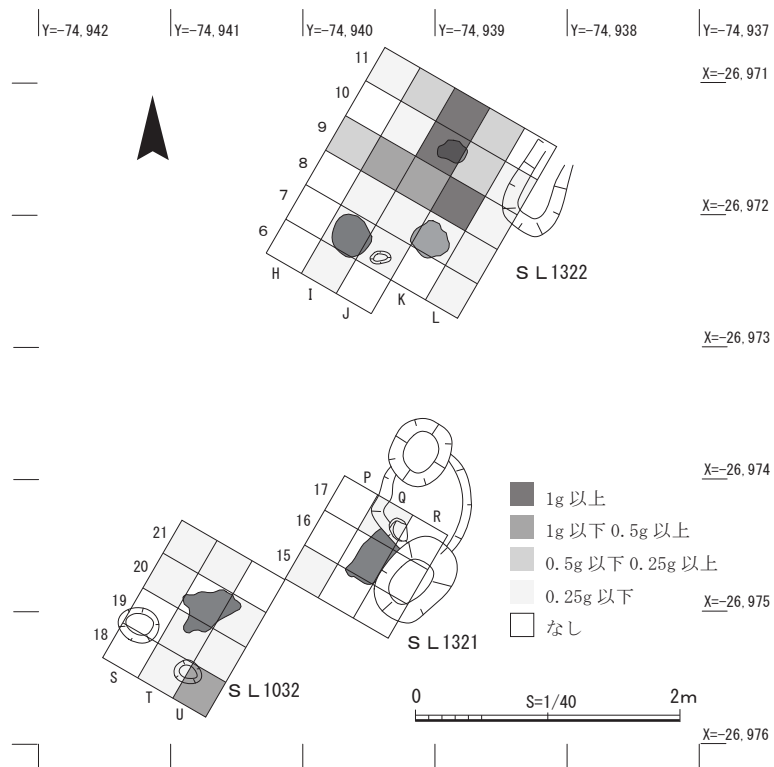
90は、長さ9cm、幅8.6cm、厚さ3.5cm、重さ290gを測る泥質砂岩製の砥石である。原礫の性状は不明である。器面の3面に研磨痕がみられる。厳密な帰属時期は不明である。

③鍛冶滓(第70図、付表3・10)

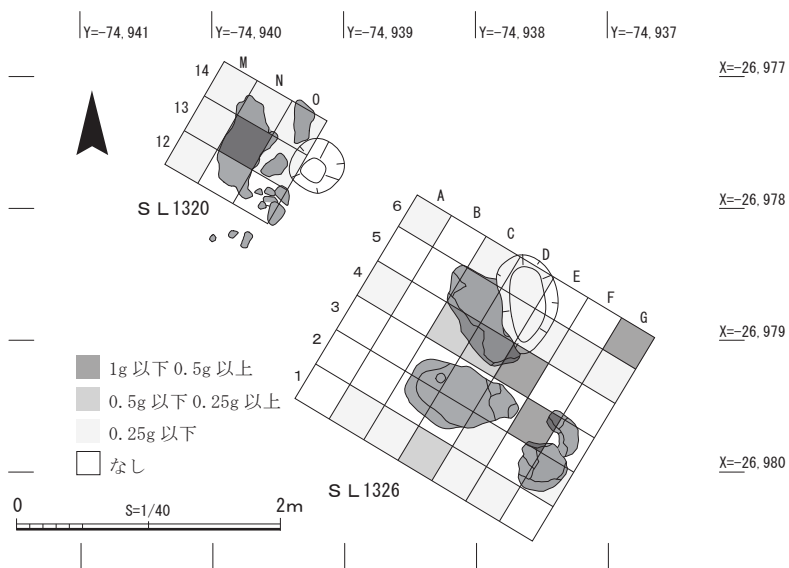
上野遺跡第4次調査の1区では、鍛冶炉が検出されているように鍛冶滓も周辺から出土している。滓の量は、付表3のとおりである。残存状況の比較的よい滓を抽出し、図化、分析を行った。

(5)鍛冶滓の分布について

1区では、鉄滓の出土がみられた。その出土量は付表3に示しているとおりである。最もまとまった量が出土しているのが第2次調査の5トレンチで、黒褐色層下層から16kgほどが出土して



第71図 鍛冶滓プロット1



第72図 鍛冶滓プロット2

いる。その次に多いのが5トレンチの黒褐色土層上層から出土した合計3.3kgの鉄滓である。その他、1区ではグリッド単位でみるとg 8の3.2kgやg-9の2.0kg、f 7の1.9kg、f 8の1.8kgが比較的量が多いといえる。これらのグリッドは第2次調査の5トレンチよりも標高の高い北側や西側に位置し、今回確認した鍛冶炉よりも地形的に高い位置から出土している。こうしたことから、調査区外にも鍛冶炉が営まれており、今回出土した炉は、一部に過ぎない可能性が指摘できる。e 9、e 10からもまとめて鉄滓が出土しているが、これらは今回検出した鍛冶炉よりも地形的に低い位置から出土していることから、これらの鍛冶炉で発生した鉄滓が流れたのであろう。

また、今回調査した鍛冶炉は可能なかぎりグリッドを設定して土を回収して、微細な鍛冶関連遺物の検出に努めた(第73、74図)。その結果、微細な鉄片や粒状滓、鍛造剥片が回収できたが、多くのグリッドで、1g以下の量しか対象の鍛冶関連遺物は残されていなかった。

3) 2区の調査

調査の概要(第73図)

2区は1区南側斜面に設定したものである。南北に約15m、東西に約7m、調査面積100㎡を測る長方形を呈する調査区である。調査区南西端の現地表面の標高はおよそ26m、調査区北端でおよそ19.5mである。傾斜は一定ではなく、表土上では4面の平坦面を有する。2区は地表面から0.5mほどを掘削した段階で黄褐色ないし赤褐色土を確認した。黄褐色や赤褐色土は、1区でも確認しており、いわゆるAT相当層とその下層の堆積土である。これら表土直下で露出した古層の土が一様ではないこと、斜面地に4段の平坦面が残されていることから、畑などとして土地を利用するために当地は、削平を受けていると思われる。この地山の上には近現代の産業廃棄物を包含する耕作土が堆積していた。このことは、前述の内容を裏付ける。削平した土は斜面下の北側に流したようで1区の第38図1層下層のように厚い黄褐色の土が堆積していたのは、もともと2区を含めた斜面地に堆積していた土砂が流し込まれた結果であると思われる。2区では遺物は出土せず、調査区北東側で検出した土坑も近代以降の耕作土を包含しており、近現代に掘削されたものであると判断した。先述したような状況を確認し、地形を測量して調査を終了した。

4) 3区の調査

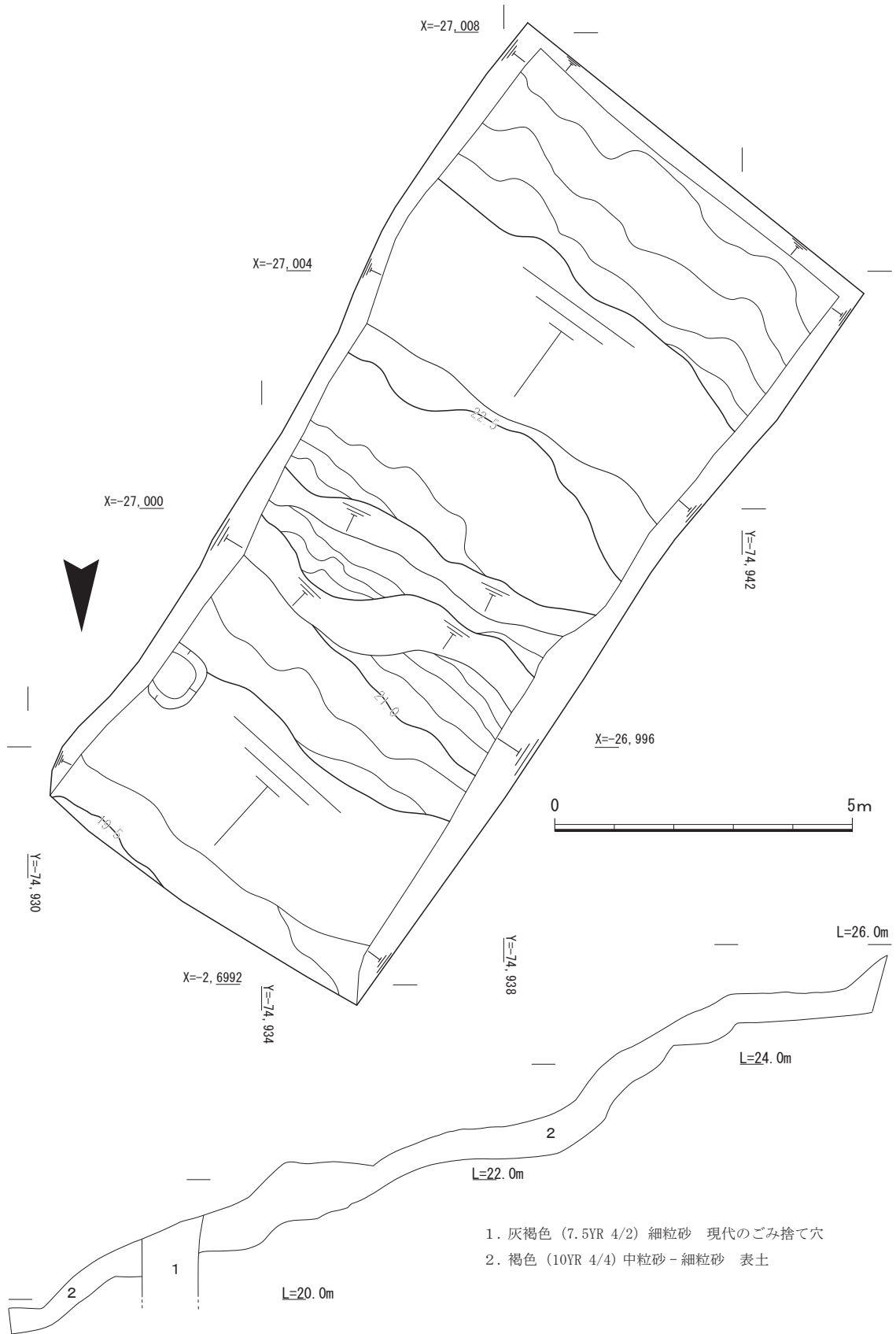
調査の概要(第74図)

3区は1区の東側の一段下の平坦面に設定したものである。南北約10m、東西約2m、調査面積20㎡を測る長方形を呈する調査区である。調査区西端の現地表面の標高は17.5m、南端が16.2m、北端が15.7m、東端が15.9mと南西側が高く北東側が低くなる地形である。

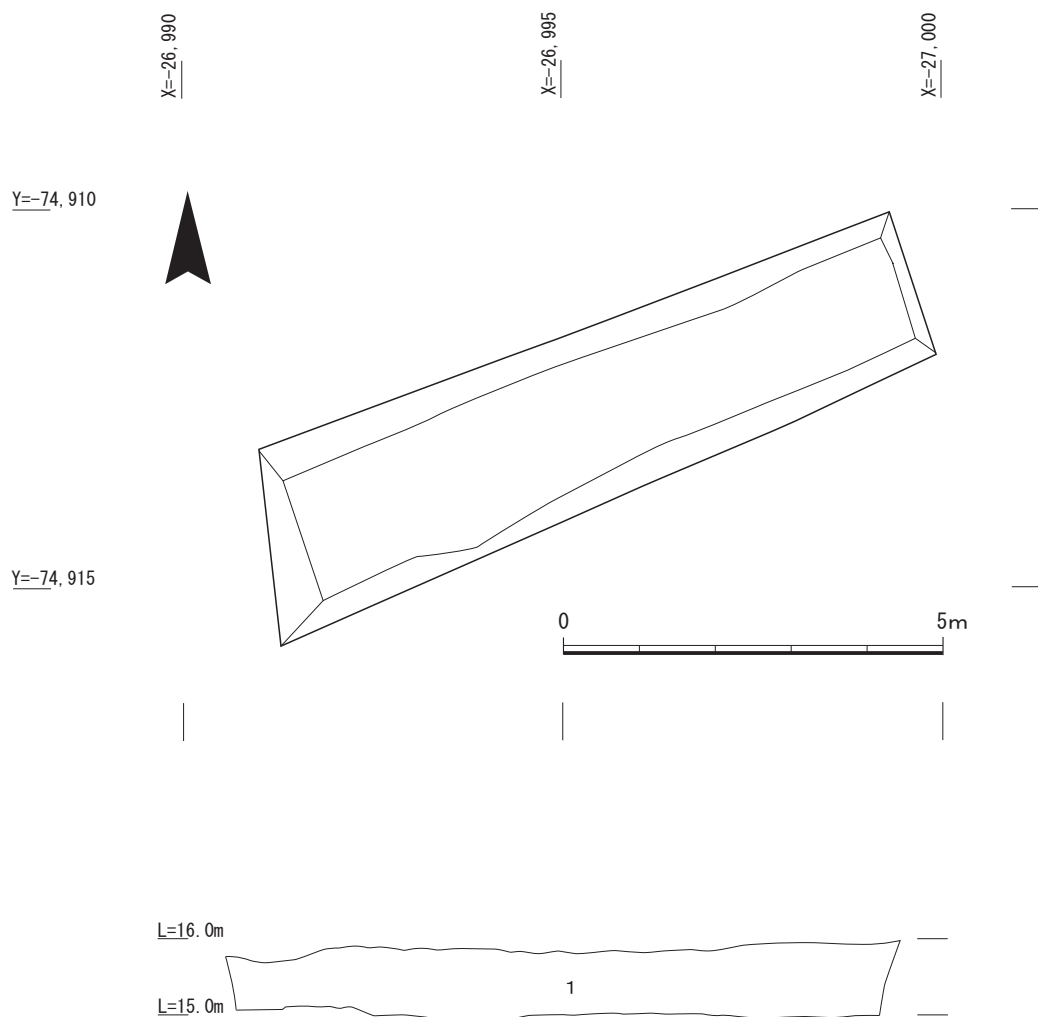
本来は1区から、上野遺跡北東部に位置する吉野川へ緩やかな傾斜が続いていたと思われるが、3区も2区と同様に削平を受けており、表土と古い耕作土を除去した1mほど掘下げた段階で硬い岩盤層や黄色の粘土層を確認した。遺構も残存していない。近代以降に1区周辺を畑作地として整地するなかで、3区も削平と造成を受けていると考えられる。また、3区東側には通学路として利用されている歩道が整備されているが、この道路も、もとあった緩やかな勾配の畑作地を削平して通した道路である。遺構・遺物ともに確認できず、地形を測量して調査を終了した。

5) 小結

上野遺跡第4次調査は1区で2面にわたって遺構を検出した。本調査において縄文時代の土器は確認できなかったが、石器が確認できた。弥生時代は、住居跡等は確認できなかったが谷部に流れ込んだように土器が出土している。年代は終末期と思われ、この段階の集落が近郊に位置していたと考えられる。古墳時代後期には竪穴建物を検出した。竪穴建物は調査地北西側に集中しており、意図的に北西側を選択していたと考える。調査前は、近代以降の整地の影響で南西高、北東低の地形であったが、確認できる堆積状況から古墳時代には北側にも高まりがあったことが



第73図 2区平面図・東壁断面図



1. 黒褐色（10YR 3/2）シルト質砂 中粒砂混じり極細粒砂 - 細粒砂

第74図 3区平面図・東壁断面図

推察される。竪穴建物が建てられていた時期に、調査地西から東にゆるやかに下がる谷があり、その北側に住居が営まれていたと考えられる。当地は日本海から強烈な風、豪雨が冬季に訪れる土地である。丘陵上や谷部南側では、その強風豪雨が直撃する。当地に住した人々は、このような自然の脅威から逃れるために、多少でも雨風をしのげる北側の高まりを利用したのだろう。

本調査全体としては、7世紀から8世紀の土器が多く出土した。当該期の遺構では鍛冶炉跡が目立つ。今回の調査で出土した土器のほとんどは、この律令期の土層から出土した。取り上げた敲石などは、使用された年代は縄文時代であると考えられるが、被熱痕があるものが多い。上野遺跡は粘土質土が堆積する、礫の入らない遺跡である。このような堆積環境の遺跡でありながら第1面では多くの重円礫や円礫が出土した。SK1238やSK1201のように集積して廃棄された遺構も残存していた。これらの多くは被熱している状況から、近郊から集められた石であり、律令期の鍛冶炉を構築する材の一部として選択されたのだと考える。炉は近場で何度か組み替えた状況がSK1238やSK1324などの群に見られるように、造り変える折々に材を入れ替えていたのだろう。また、同時期とみられる土錘や石錘と製塩土器が出土している。これらも上層からの出土が多く、

律令期前後に使用されたと思われる。日本海は夏期においては温暖な気候で海もおだやかである。仮説を重ねることになるが、日本海がおだやかな夏期は製塩や網漁で生計を立て、日本海が荒れる冬季には鍛冶炉を営み生計を立てていたのだろうか。(加藤雄太)

9. 総括

本遺跡の調査は、第1～3次調査は海岸段丘の上部で、後期旧石器時代から古代末までの遺構・遺物を確認し、第4次調査では傾斜地で弥生時代から古代末までの遺構・遺物を確認した。立地条件および確認した時代が異なることから、遺跡全体で時代ごとの変遷を概観し、特筆すべき事柄について記載する。

1) 遺跡の変遷

後期旧石器時代から奈良時代までの遺構、遺物を確認し、土地利用が時代によって異なることを確認した。ただし、段丘上部は近現代の耕作に伴うと考えられる大規模な削平により、後期旧石器時代を除く時期の遺構面や包含層の大部分が失われているため、正確に変遷を復元できていない可能性があることを了承願いたい。

後期旧石器時代前半期

段丘上のAT下位から石器ブロックを検出した。

縄文時代～弥生時代

段丘の上部、下部において土器片が疎らに出土している。遺構が確認できないことから、集落が営まれたとは言い難い。本遺跡の西方、宇川河口部の砂丘上に縄文時代の遺跡である平遺跡があることから、一時的な生活の場であったと推察する。

古墳時代

段丘上部は削平により、遺構・遺物は検出できなかった。一方、段丘下部は遺物包含層、遺構面が良好に残存し、竪穴建物跡や土坑などの集落遺構を検出している。

飛鳥時代～平安時代

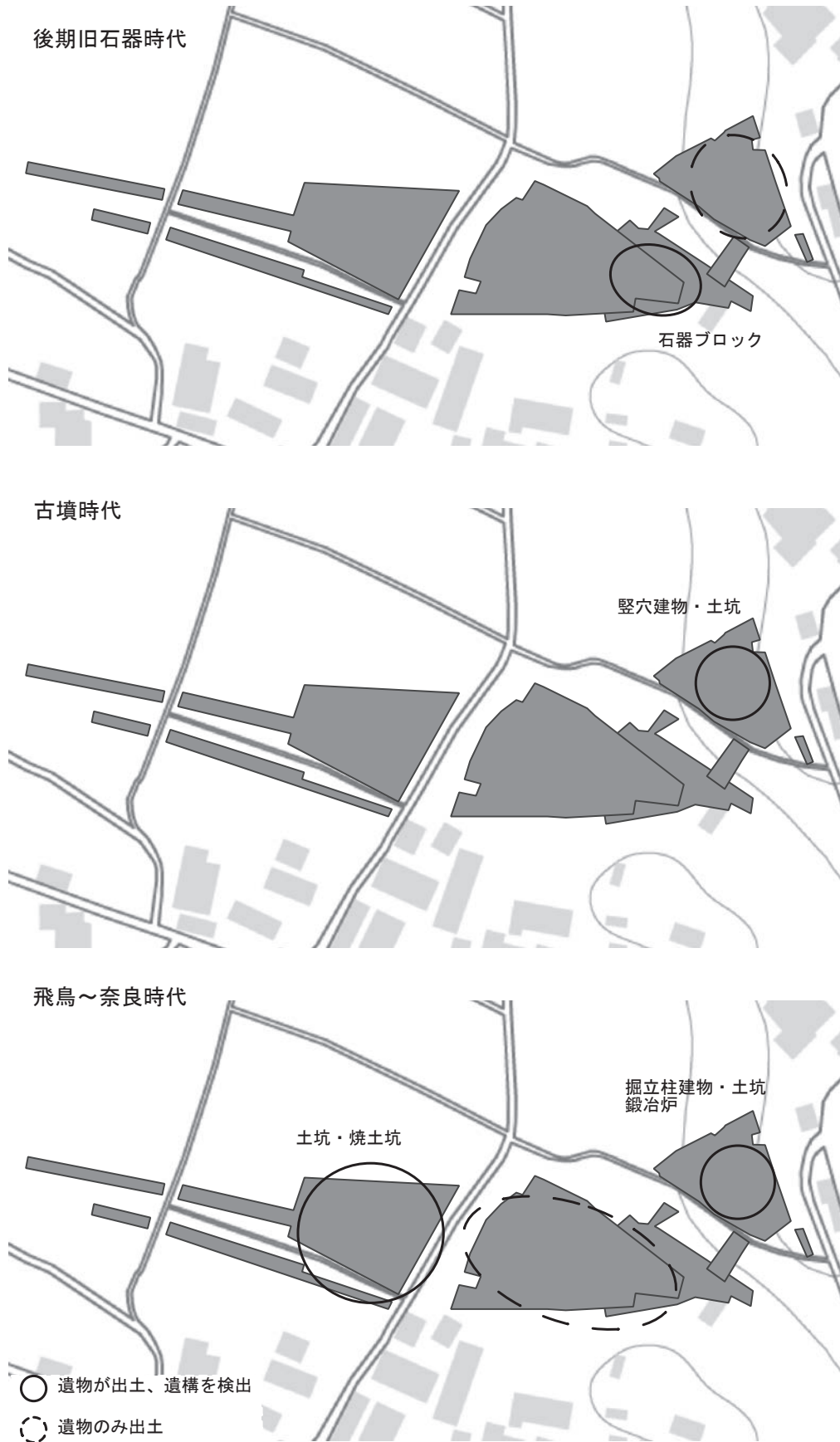
段丘の上下に遺構・遺物が広く分布し、段丘上部では、遺構の大部分が削平された土坑を検出した。段丘下部では、掘立柱建物、土坑、鍛冶炉からなる工房跡と判断しうる遺構群を検出した。

2) 旧石器時代の上野遺跡

本項では、段丘上で確認した後期旧石器時代前半期の石器群が、京都府内で初の発見例であることから、遺跡の立地、出土層位、石器群の特性について整理する。あわせて、周辺地域での同時期の遺跡と比較し、時代的な位置づけを試みたい。

(1) 遺跡の立地

遺跡は、丹後町から網野町にかけてよく発達する中位の海岸段丘面に位置し、西を宇川、東を吉野川に開析されて独立した段丘上に位置する。北西から南東にかけて緩やかに傾斜する段丘面の南東部で、石器群が出土している。この場所に石器群が展開した理由として、海浜部に特徴的な海陸風を避けるためであると考えられる。現在の集落が南側に展開することも証左となろう。



第75図 上野遺跡における遺構の変遷

(2) 出土層位

石器群は、A T包含層を上限として、約0.3mの厚さで上下に分布しているが、石器が最も集中して分布するIV層～V層に遺物が帰属していたと考えられる。遺物が上下に散布する要因として、地形の傾きや風雨による浸食あるいは冬季の凍上、耕作や樹根による土壌のかく乱が考えられる。Ⅷ層～Ⅸa層にDKPが堆積していることから、IV層～V層は約6万年前から約2万9000年前までの間に形成されたことが指摘でき、石器群の帰属年代とも換言できる。さらに、Ⅷ層においてSIの存在が示唆されることから、石器群の下限年代は約4万年前であると想定できる。

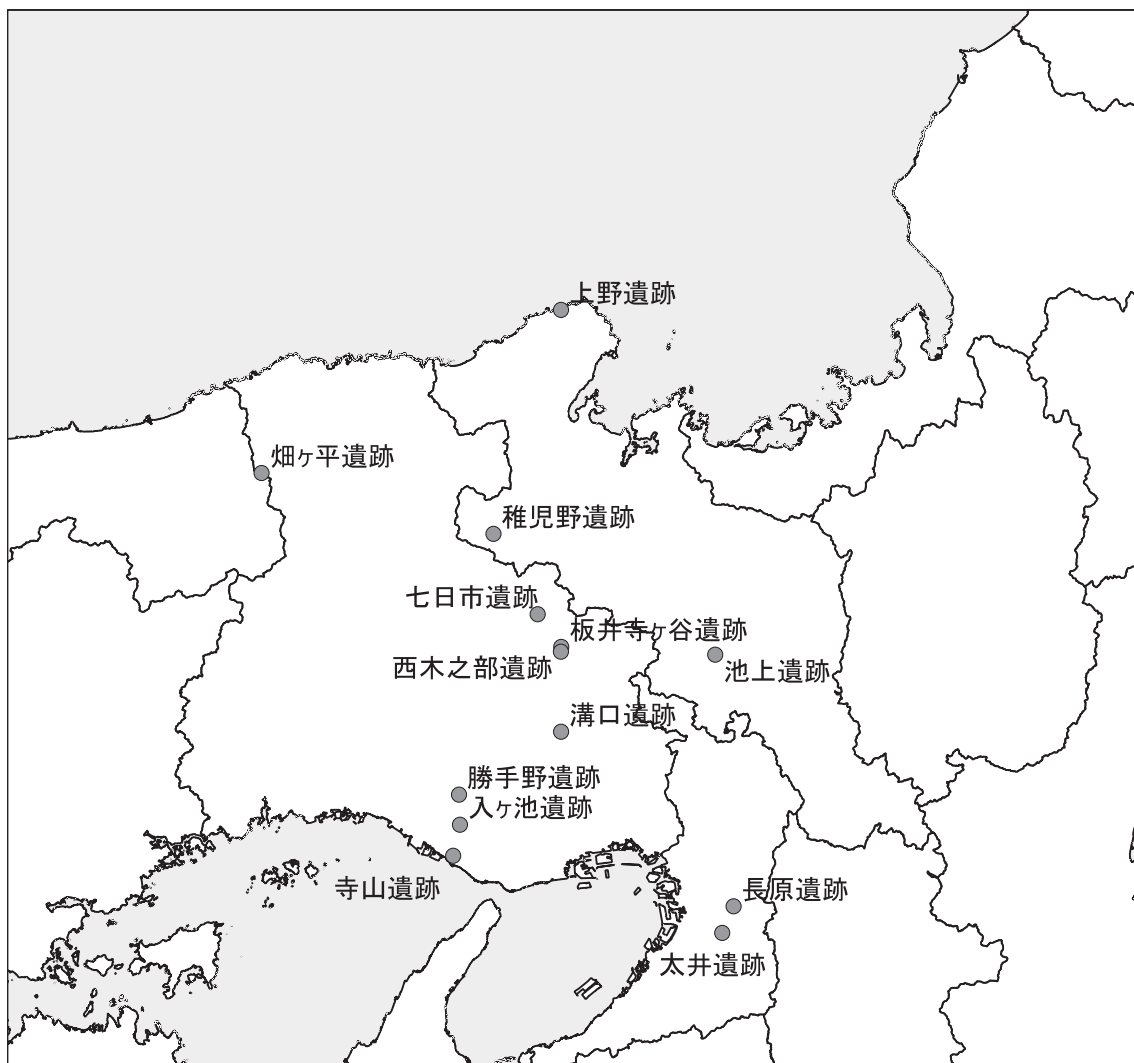
(3) 石器群の特性

各器種の特徴として剥片は、背面に自然面をもつものが多く、原礫か分割礫のような礫面を多く残した石核から剥離されたことが読み取れる。また、背面に先行剥離をもつものでは、剥離痕に規則性が見いだせず、定型的な剥片剥離技術は想定できない。剥片石器では、素材となる剥片にごく素朴な加工を施した石器が主体で、特徴的な2次加工は見いだせない。ただし、台形石器については、剥片端部の折取、基部や一側縁への急峻な2次加工や水平剥離が確認できることから、本石器群のなかでは、比較的規範の見いだせる石器であるといえる。石核類は、打面を固定しない、平坦な部分への頻繁な打面転移を繰り返すサイコロ状の石核となっている。一部の石核の端部には、道具類にみられる連続的で小さな剥離痕が確認できることから、礫器などと同様の機能を示す大型の道具類への転用が想定できる。以上の事柄から、雑多な形状の剥片を量産し、粗い2次加工を施すことで、簡便に道具を生産していることが読み取れ、後期旧石器時代後半期にみられるような定型的な石器製作技術の体系が存在しないといえよう。

石器群に用いられる石材は、近隣で採取可能な鉄石英や石英、凝灰岩などの石材は客体的で、チャートや玉髓、黒曜石などの遠方でしか採取することができない石材が主体である。このうち、黒曜石については隠岐群島からもたらされたものと考えられる。チャート・玉髓については、産地を特定することは極めて困難であるが、チャートについては、遺跡周辺の基盤岩が主に火成岩類であることから、丹波帯や舞鶴帯などが分布する南方である可能性が指摘できる。玉髓については、山陰地方に産出する玉髓に色調や質感が似ることから、この地域からもたらされたと考えられる。

(4) 近畿地方における上野遺跡の位置付け

本遺跡の石器群は、A T下位の台形石器に特徴づけられる石器群である。近畿地方において、同様の器種構成を示す石器群は、現在まで12カ所が知られている。いずれも内陸に位置し、日本列島の中央分水嶺の氷上回廊と呼ばれる南北に通る低地帯沿いに分布している。一方、上野遺跡は海岸段丘上に位置し、これまでに知られている同時期の遺跡としては、極めて異質であるといえる。また、石材組成についても、近畿地方の他の遺跡で一般的にみられるサヌカイトが欠落している。石材の欠落については、①サヌカイトの利用が開始される以前の石器群である。②サヌカイトのみ遺跡外へ持ち出した。の2通りの解釈が可能であるが、石器製作の際に生じる碎片にサヌカイトが全く含まれないことから、①の解釈が整合的であると考えられる。立地条件や石器組成



第76図 近畿圏内での台形様石器出土遺跡

が大きく異なることから、同時期の石器群と単純に比較検討することは難しいが、示準石器である台形石器については、製作技法に共通点が多く、他の石器群と同様に約3万4000年前の台形石器群に属すると考えて大過はないだろう。

今回、日本海側でA T下位の石器群が発見されたことで、後期旧石器時代前半期の人々が、瀬戸内海沿岸地域から水上回廊を経て、日本海沿岸地域まで移動していたことが明らかとなった。日本海側のA T下位の資料は本遺跡の資料が初出となるが、地形条件が類似する地点は数多いため、今後の資料の増加が見込めよう。(面 将道)

3) 上野遺跡から見た山陰・若狭地域の海岸段丘の可能性

(1) はじめに

上野遺跡は海拔27m前後の平坦な海岸段丘上に立地している。植村(1981)は中位の段丘として分類し13万年前の温暖期の海進によって形成された下末吉面相当の地形面としている。

日本海に面した上野遺跡のある地域は、鳥取県から京丹後市経ヶ岬に至る山陰海岸ユネスコ世

界ジオパークに指定され、日本海形成に関わる火成岩類や地層、気候変動に伴う海水面変化や地殻の変動によって形成された海岸段丘や砂丘などの海岸地形などを観察することができる(山陰海岸ユネスコ世界ジオパーク(sanin-geo.jp))。

京都府では砂丘の発達した京丹後市久美浜町、同網野町の海岸部、京丹後市峰山町の高原地帯、発達した海岸段丘とリアス式海岸がみられる京丹後市丹後町の海浜部の3つのエリアがある。

(2)上野遺跡の地形

丹後町海浜部エリアでは14~13Maに貫入した紫蘇輝石普通輝石安山岩(山元・星住1988)の柱状節理が認められ、立岩や丹後松島などは景勝地として知られている。

上野地区は西に宇川、東に吉野川が流れ段丘面が開析され、ちょうど上部が平坦な尾根から突き出した形状を示している。宇川と吉野川は丹後半島中央部の古第三紀花こう岩(中江2021)地帯を源流に持つことから海岸部の砂は花こう岩を起源とするものが主体で、砂鉄なども多く含まれる。石器石材であるチャートや玉髓は河原で採取できるとされているが、礫岩起源とされるチャートについては小型のものに限られるという。また、黒曜石は現地にはなく、分析結果から隠岐諸島産と^(注10)考えられる。

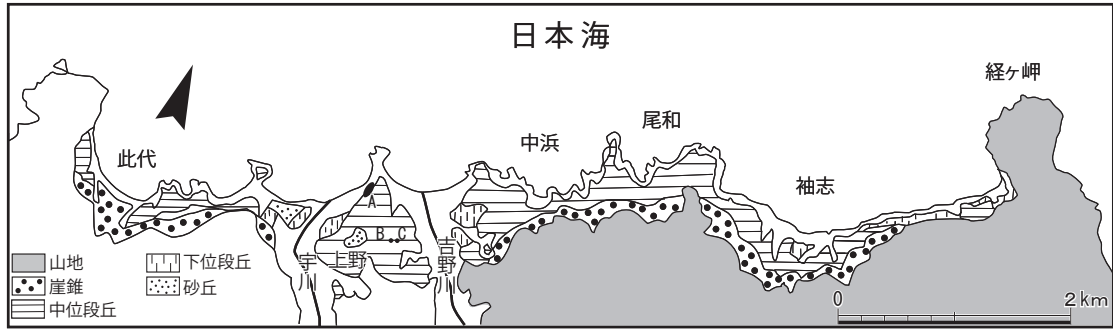
上野地区の地層については石田史郎らによって詳しく述べられている(石田・小滝・糸本2019)。基盤岩に火山岩である安山岩があり、その岩片を主体とする円礫層がある。気候変動による離水過程で砂浜、砂丘、土壌化した堆積層へと変遷する。石田らの露頭観察によって始良丹沢火山灰(AT)及び大山倉吉降下火砕物(DKP)が肉眼で確認されている。DKPの年代は約6万年前で、サイクリックな温暖期寒冷期を示す海洋酸素同位体ステージ(MIS)3の初頭と考えられる。MIS3は約6万年前に始まり3万年前に終わるMIS4~2の最終氷期の中でも温暖な時期である。

(3)火山灰とレス古土壌編年

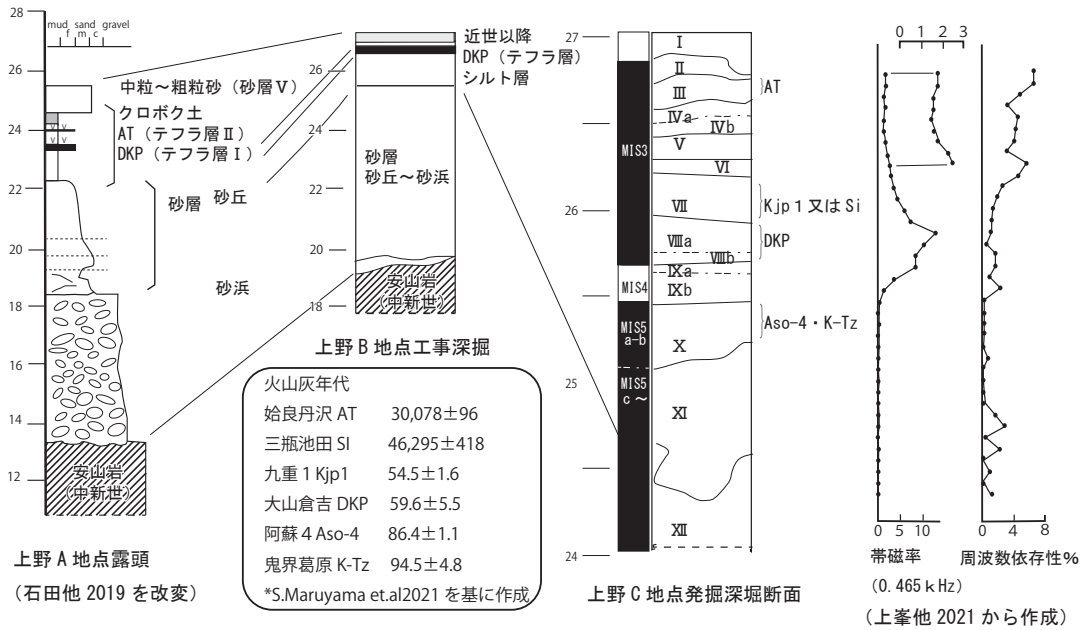
発掘調査ではさらに詳しく分析し、多くのことが分かった。調査地点ではATからDKPまでの風成層が約1.2mと厚く、MIS3の堆積物がみられる。DKPの下位には色の薄いIX層、暗色の部分が2層続くが下位に行くほど砂が優勢になる。この暗色部分は第1次調査区部分では赤みがより強く粘性があり砂の含有がほとんど見られなかった。第3次調査区は吉野川に近く開析された谷部に近いことから、古くから砂浜及び砂丘起源の砂粒が飛来しやすかったことと考えられる。

火山灰分析の結果、X層から阿蘇4(Aso-4; 8.8万年前)及び鬼界葛原火山灰(K-Tz; 9.5万年前)が検出されている。火山灰噴出時期はMIS5bにあたる時期である。MIS5は温暖期であるが細かく寒暖期が現れたため、a~eまでの5段階に分類されている。XI層及びXII層はMIS5b以前の地層と考えられる。また、発掘調査者の所見ではVII層中に火山灰層が薄層で認められる箇所がある。濃縮層は分析では認められなかったが、火山ガラス等が検出されている。その性格から同時期に類似した火山灰が飛来しているため特定は難しいが、三瓶池田降下軽石(SI)九重第1降下軽石(KjP1; マメンコ)のいずれかの可能性のある火山灰が検出されている。SIは4.6万年前、KjP1は5.4万年前の年代であり層序的には齟齬しない。

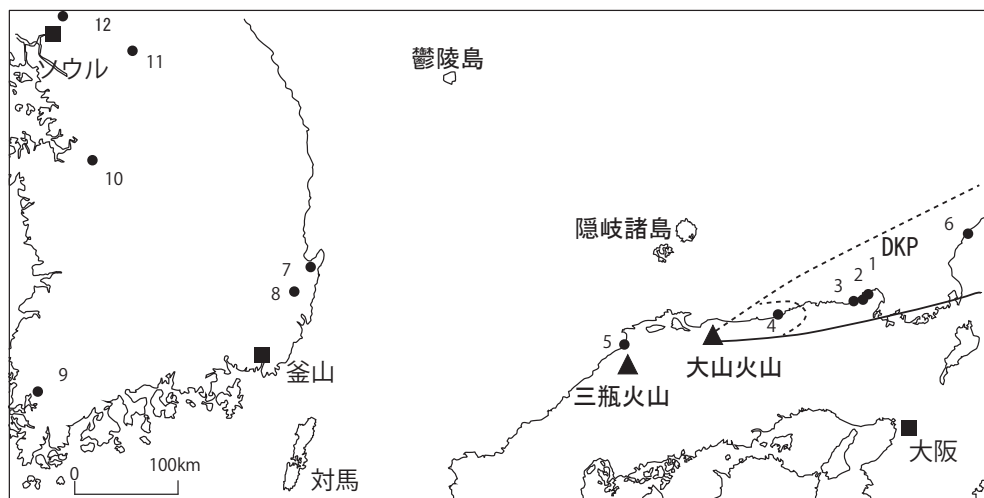
石田らの論考でも砂丘層の上部に火山灰を含むシルト層としてとらえられているが、このシル



第77図 上野遺跡周辺の地形面と土層観察地点



第78図 上野遺跡周辺の地層断面と火山灰・古地磁気分析結果



第79図 MIS3以前の広域火山灰及びレス古土壌の認められる地点

- 地点名
1. 京丹後市丹後町上野遺跡 (火山灰、古土壌有り)
 2. 京丹後市網野町掛津 (火山灰、古土壌有り)
 3. 京丹後市久美浜町葛野 (火山灰、古土壌有り)
 4. 鳥取砂丘見山火山灰、古土壌有り)
 5. 鳥根県出雲市砂原遺跡 (火山灰、古土壌有り)
 6. 福井県坂井市三国町加戸 (火山灰、古土壌有り)
 7. 大韓民国慶尚北道九龍洞 (古土壌有り)
 8. 大韓民国蔚山広域市彦陽 (火山灰、古土壌有り)
 9. 大韓民国全羅南道長洞里遺跡 (火山灰、古土壌有り)
 10. 大韓民国忠清北道萬水里遺跡 (火山灰、古土壌有り)
 11. 大韓民国江原道洪川盆地 (火山灰、古土壌有り)
 12. 大韓民国京畿道全谷里遺跡 (火山灰、古土壌有り)

ト層は土色の濃淡を持っている。成瀬俊郎ら(1983)は大陸から飛来するレスを母材とする古土壤層としている。同じレスを母材とする地層の先行研究である朝鮮半島南部の研究(成瀬2006・松藤編2008)では、色調の違う地層が汎地球的な気候変動に伴うもので、MISステージに対応することを明らかにした。また、このような対比は同じ日本海側の島根県砂原遺跡(砂原遺跡学術発掘調査団2013)の調査及び周辺調査でも明らかになっている。この成果を援用するとDKP直下のⅨ層は明るい層でMIS4の寒冷期に、X層がMIS5 a,b、XI層がMIS5 c以前に当たる。その下のⅫ層は古砂丘層である。地層が赤色化するのには地表に植物が繁茂し、根が発達し土壌化する過程において二次的に生成されたもので、気温が高いほど赤みが増す。海岸段丘の形成時期についてはMIS5の時期に形成されたとするならば、MIS5の時期でも最も温暖であったMIS5e期の海水面上昇に伴い形成されたのち、すぐに陸化したものと考えられる。同じ中位面にある砂原遺跡の報告書では中位面の露頭には大山松江火山灰(DMP; 13万年前)が認められないが、約11万年前に降下した三瓶木次火山灰(SK)が発見されていることからMIS5e期に形成されたとしている。その後のMIS5dの寒冷化に伴い急速に陸化したものと考えられる。

(4)小結

上野遺跡で見られたようなMIS5から始まるシルト質の堆積物は、石田ら(2019)の研究では京丹後市久美浜町でも確認できる。また成瀬・井上(1983)によると鳥取県から福井県まで同じようにAT、DKPを古土壤層の中から確認できる。同じ日本海側である島根県砂原遺跡も中位面にあり、MIS5以降の風成塵を起源とする堆積物が厚い。

このようにこれまで旧石器時代の遺跡の調査が比較的少なかった日本海側であるが、海に面した中位の海岸段丘上はMIS5以降の堆積層が厚い、研究にとって良好な環境であることが分かる。また、広域に広がる火山灰を肉眼で観察することができる。これによってMIS3の地層を限定することができる。MIS3は後期旧石器時代前半期にあたり、現代型新人が日本列島に移り住んだ時期を明らかにすることができる地域のひとつであることが分かる。また、MIS4以前の古代型新人がいたかどうかを検証することができる地域で、朝鮮半島東岸の海岸段丘上をはじめ、各遺跡とも火山灰やレス古土壤編年を用いて対比可能な学際的環境のそろった地域でもある。

(中川和哉)

注1 京丹後市史編さん委員会2015「図説京丹後市の自然環境」『京丹後市史本文編』京丹後市

注2 同志社考古学研究会1964「丹後町平遺跡発掘調査概報」『同志社考古』3・4

注3 堅田直1966「京都府丹後町平遺跡調査概報」『帝塚山大学考古学シリーズ』1

注4 河野一隆1997「平遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡発掘調査概報』第79冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

注5 面将道・加藤雄太2019「上野遺跡第2次・平遺跡第4次」『京都府埋蔵文化財情報』第135号 京都府埋蔵文化財調査研究センター

注6 大石雅興2023「平遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第144号 京都府埋蔵文化財調査研究センター

注7 京都府教育庁指導部文化財保護課『京都府中世城館跡調査報告書』第1冊 京都府教育委員会

注8 上峯篤史氏による理化学分析の結果をお聞きした。

注9 竹原一彦1987「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター

注10 故田代弘氏及び上峯篤史氏のそれぞれの踏査結果をお聞きした。

参考文献

石田志朗・小滝篤夫・糸本夏実2019「京都府，丹後半島の海成段丘堆積物」『地球科学』73巻，195～204

植村善博1981「丹後半島の海岸段丘」『地表空間の組織』立命館大学文学部地理学教室編、430-437

上峯篤史、村瀬早紀、村井咲月、岡 智康2021「帯磁率測定による地層対比と旧石器包含層の年代決定」日本文化財科学会第38回大会ポスター発表大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣

京丹後市史編さん委員会2010『京丹後市の考古資料』（京丹後市史 資料編）京丹後市

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1997「遠所遺跡」『京都府遺跡調査概報』第21冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

桐井理揮2018「丹後半島における古墳時代前期の土器様相についての予察」『京都府埋蔵文化財論集－創立40周年記念誌－』第8集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

旧石器文化談話会2021『旧石器考古学辞典』4訂版

砂原遺跡学術発掘調査団2013「付編 鳥根県出雲市多伎町砂原旧石器遺跡の研究」『東アジアにおける古環境変動と旧石器編年に関する基礎的研究』

高野陽子2006「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

田代弘1999「出現期の製塩土器支脚－久美浜町こくばら野遺跡の製塩土器と出土遺構をめぐって－」『京都府埋蔵文化財情報』第71号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

田代弘・水野聡哉1999「律令期の土器製塩遺跡における鍛冶遺構」『京都府埋蔵文化財情報』第74号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

筒井崇史・村田和弘・松尾史子2004「古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討（上）（下）」『京都府埋蔵文化財情報』第93号・第94号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

筒井崇史2001「丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の土器様相について－特に横穴墓出土資料からみた土器編年－」『京都府埋蔵文化財情報』第79号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

中江訓2021「京都府北部丹後地方に分布する古第三紀珪長質深成岩類の貫入年代と山陰帯深成活動の年代対比」『地質調査研究所報告』第72巻第1号、1-21

成瀬俊郎・井上克弘1983「山陰及び北陸海岸の古砂丘に埋没するレスについて」『地学雑誌』92. 2、44-57

成瀬俊郎2006『風成塵とレス』朝倉書店

松藤和人編2008『東アジアにおける旧石器編年・古環境変遷に関する基礎的研究』

山元孝弘・星住英夫1988「丹後半島新第三系の層序と中期中新世の火山活動」『地質雑誌』94、769-781

Seiji MARUYAMA et al 2021 Geochemical Variations in Eruptive Products of Sambe Volcano, Southwest Japan, Based on Correlations of Tephra Layers in Drill Cores from Lake Suigetsu, Journal of Geography (Chigaku Zasshi) 130(3)429-443

Tsuji et al. (2018). "High resolution record of Quaternary explosive volcanism recorded in fluvio-lacustrine sediments of the Uwa basin, southwest Japan". Quaternary International 471 (B): 278-297.

付表4 第1次調査出土土器観察表

()復元値 []:現存値 - :測定不能

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色 調	胎 土	調 整	備 考
1	土師器	甕	拡張区1	SK 01 南東区	(18.0)	(0.5)	—	口 1/12 強	口縁端部: にぶい 橙 (2.5YR6/4) 体部: 橙 (7.5YR7/6)	中粗 径3mm以下 の石英・長石・チ ャート多く含む	内: ナデ 外: マメツ	内面ア ク・コ ゲ付着
2	土師器	甕	拡張区1	SK 02 埋土	—	(6.7)	—	口 1/12 以下	内・外: 浅黄橙 (7.5YR8/4)	中粗 径3mm以下 の石英・長石・チ ャート・茶粒多く 含む	内: ナデ、マメツ、 ヘラケズリ 外: マメツ、ハ ケ	
3	製塩 土器	支脚	拡張区1	SK 02	—	(6.4)	—	口 6/12	内・外: 橙 (2.5YR6/6)	中粗 径1.5mm以下 の石英・長石・ チャート含む	内・外: ナデ、 ユビオサエ	
4	土師器	甕	3・4 トレン チ	極暗褐 色粘質 土	(17.0)	(4.6)	—	口 1/12 弱	内・外: にぶい褐 (7.5YR6/3)	粗 径4mm以下の 石英・長石・チ ャート含む	内・外: マメツ	

付表5 第2次調査出土土器観察表

()復元値 []:現存値 - :測定不能

番号	種 類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色 調	備 考
1	弥生土器	甕	拡張区2	2層	(16.0)	(5.7)	—	口) 1/12	内・外: 橙 (5YR6/6)	口縁部刻み目
2	須恵器	杯	拡張区2	2層	(15.2)	(3.0)	—	口) 1/12 以下	内・外: 青灰 (5PB6/1)	
5	黒色土器	椀	5トレンチ	黒色土層	—	(2.3)	(5.9)	底) ほぼ 完存	内: 黒 (N2/0) 外: にぶい橙 (7.5YR7/4)	
6	黒色土器	椀	5トレンチ	5層掘削	—	(1.3)	(6.5)	底) 2/12 弱	内: 暗灰 (N3/0) 外: 浅黄橙 (7.5YR8/3)	
7	黒色土器	椀	5トレンチ	5層掘削	—	(1.7)	(6.4)	底) 2/12	内・外: にぶい橙 (5YR7/4)	
8	黒色土器	椀	5トレンチ	6層精査	—	(2.1)	6.1	底) 6/12 強	内・外: 橙 (5YR7/6)	
9	須恵器	杯	5トレンチ	灰黒褐色粘 性砂質土	—	(1.6)	(8.6)	底) 2/12 弱	内・外: 灰白 (2.5Y7/1)	
10	須恵器	杯	5トレンチ	灰黒褐色粘 性砂質土	(13.7)	(3.0)	—	口) 1/12	内・外: 灰 (10Y6/1)	
11	土製品	土錘	5トレンチ	黒色土層	長2.8	最大径 1.4	孔径 0.35	ほぼ完存	内・外: 灰白 (7.5YR8/2) 一部 暗灰色	
12	土製品	土錘	5トレンチ	黒色土層	長4.4	最大径 2.0	孔径 0.35	10/12	内・外: にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒斑あり
13	土製品	土錘	5トレンチ	黒色土層	長2.55	最大径 2.75	孔径 0.65	完存	内・外: 橙 (7.5YR7/6) 黒っぽ い部分あり	
14	土製品	土錘	5トレンチ	黒色土層	長2.8	最大径 3.0	孔径0.7	ほぼ完存	内・外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 1/3位は褐灰 (7.5YR5/1)	
15	弥生土器	甕	5トレンチ	6層精査	(14.0)	(2.8)	—	口) 1/12	内: にぶい橙 (7.5YR7/3) 外: 褐 (7.5YR4/3)	外面口縁部ス ス付着

付表6 第2次調査出土石器観察表

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
3	剥片	流紋岩	拡張区2	表土掘削	—	—	—	7.6	4.6	1.3	31.6	剥離面打面
4	台形石器	チャート ①	4トレンチ	赤褐色ロ ーム	—	—	—	5.3	2.2	1.1	13.4	剥片素材、剥片末端・基 部を折取加工。器形調整 の水平剥離 (石核の可能 性)
16	剥片	玉髓	5トレンチ	黒色土層	—	—	—	10.4	5.0	1.3	50.8	剥離面打面
17	2次加工の ある剥片	玉髓	5トレンチ	黒色土層	—	—	—	5.8	5.7	1.7	49.6	線状褐鉄付着 二重風化 あり
18	嘴状石器	チャート ②	5トレンチ	黒色土層	—	—	—	3.3	3.2	1.7	15.9	自然面残存 亜角礫素材
	挟入石器	チャート ①	拡張区2	第2層精 査	—	—	—	3.0	2.8	1.2	9.6	断塊素材 自然面残存 角礫～亜角礫
	挟入石器	チャート ①	5トレンチ	第2層精 査	-27003.682	-74960.594	27.172	3.0	2.8	1.2	9.6	断塊素材 自然面残存 角礫～亜角礫

付表7 第3次調査出土石器観察表

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
1	台形石器	石英	1区	4層掘削	-27007.456	-74959.995	27.174	1.90	1.10	0.45	0.93	
2	2次加工のある剥片	チャート②	1区	4層精査	-27007.684	-74960.204	27.114	1.65	0.90	0.60	0.62	打面欠損
3	2次加工のある剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.283	-74964.133	27.118	1.15	1.10	0.45	0.51	打面欠損
4	2次加工のある剥片	玉髓	1区	4層	-27007.495	-74960.332	27.030	2.40	1.75	0.59	1.88	自然面打面
5	台形石器	チャート①	1区	3層精査	-27009.217	-74961.212	27.197	2.30	1.80	0.50	2.00	右側縁に急峻な2次加工
6	台形石器	凝灰岩	1区	4層精査	-27012.738	-74960.828	27.272	1.50	1.50	0.65	1.40	剥片素材 基部右縁に急峻な2次加工
7	鋸歯縁石器	チャート①	1区	4層精査	-27005.151	-74959.275	27.088	2.60	2.00	1.30	5.16	自然面残存 円礫素材か 剥片(断塊) 端部に2次加工
8	鋸歯縁石器	チャート②	1区	4層精査	-27011.804	-74960.467	27.218	2.20	2.70	1.65	11.77	断塊素材、自然面残存 亜円礫～円礫
9	鋸歯縁石器	鉄石英	1区	4層精査	-27010.285	-74962.480	27.184	2.45	3.15	1.25	8.64	断塊素材 自然面残存 亜角礫 鋸歯縁部から右 縁辺部にかけて使用痕あり
10	挟入石器	チャート②	1区	3層掘削	-27008.216	-74960.145	27.300	4.30	5.50	2.40	42.30	断塊素材 自然面残存 亜角礫 挟入部2か所 挟入部に使用痕あり
11	剥片	チャート②	1区	4層精査				5.30	2.90	1.00	14.10	自然面打面 亜角礫～亜円礫
12	剥片	チャート③	1区	4層精査	-27008.411	-74963.695	27.175	1.40	1.45	0.35	0.77	自然面残存 亜円礫～円 礫か
13	石核	チャート①	1区	3層精査	-27008.042	-74961.212	27.224	2.40	2.80	1.80	10.34	打面不明 自然面残存 角礫～亜角礫
14	石核	チャート①	1区	5層精査 (上面)	-27012.286	-74962.256	27.218	3.40	2.60	2.60	26.10	自然面打面、自然面残存 角礫～亜角礫打面端部に 使用痕
15	石核	チャート①	1区	4層精査	-27006.340	-74963.654	27.127	3.90	3.20	1.50	15.71	両極打法か
16	石核	チャート①	1区	4層精査	-27011.729	-74959.460	27.155	3.20	2.00	1.55	8.18	自然面なし 断塊素材か
18	石核	チャート①	1区	3層精査	-27010.610	-74960.286	27.249	2.80	2.80	2.60	17.00	剥離面打面 自然面なし サイコロ状
19	石核	チャート①	拡張区3	4層精査	-27007.649	-74961.040	27.256	1.50	2.90	1.80	9.38	自然面打面、節理破碎あり 角礫～亜角礫、自然 面の稜にツブレ痕密集 敲石の破片か
20	石核	チャート①	1区	4層精査	-27012.585	-74962.212	27.272	6.00	3.10	2.50	64.60	自然面残存 亜角礫素材 敲石転用
	剥片	チャート①	1区	3層掘削				2.65	3.00	0.80	8.00	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層精査				1.65	1.25	0.27	0.52	打面欠損
	碎片	鉄石英	1区	表土掘削				0.90	1.30	0.40	0.59	原礫か
	断塊	チャート①	1区	4層精査	-27001.560	-74960.163	27.165	4.35	2.10	1.10	12.54	節理断塊
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27002.601	-74965.227	27.063	0.48	0.28	0.07	0.02	
	断塊	チャート①	1区	4層精査	-27003.249	-74960.589	27.171	2.60	1.10	0.69	1.97	30と同一個体か
	破碎礫	チャート①	1区	4層精査	-27003.346	-74964.219	27.085	0.62	0.49	0.19	0.06	細礫 円礫か
	原礫	黒曜石	1区	4層精査	-27003.474	-74957.174	27.066	1.55	1.05	0.50	0.55	隠岐群島産
	2次加工のある剥片	凝灰岩	1区	4層精査	-27003.479	-74960.939	27.163	2.42	1.85	0.67	2.47	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27003.506	-74956.939	27.063	2.40	1.51	0.71	1.43	礫面打面 礫の性状不明

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	挟入石器	チャート①	拡張区2	4層精査	-27003.682	-74960.594	27.172	3.00	2.80	1.20	9.60	断塊素材 自然面残存 角礫~亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27004.025	-74961.085	27.146	3.00	2.85	0.95	6.07	自然面打面 自然面残存 亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27004.435	-74955.866	27.162	1.40	1.05	0.38	0.57	自然面打面 礫の性状不明
	石核	チャート①	1区	3層掘削	-27004.588	-74957.705	27.204	2.10	4.60	1.35	13.97	円礫素材か 自然面残存
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27004.846	-74964.191	27.127	0.90	1.90	0.16	0.39	剥離面打面
	原礫	チャート①	1区	4層精査	-27005.066	-74961.527	27.028	1.20	1.15	0.81	1.37	亜角礫
	石核	チャート①	1区	4層精査	-27005.445	-74957.705	27.092	3.55	3.25	2.35	30.70	円礫素材か 自然面残存
	挟入石器	チャート①	1区	4層掘削	-27005.630	-74964.612	27.164	1.05	1.20	0.45	0.43	打面欠損 右端部に使用痕あり
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27005.774	-74965.216	27.147	1.10	0.85	0.16	0.15	打面欠損
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27006.069	-74962.820	27.146	1.10	0.85	0.20	0.16	打面欠損
	碎片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.091	-74963.326	27.159	1.00	0.75	0.32	0.32	打点欠損
	断塊	鉄石英	1区	4層精査	-27006.370	-74956.491	27.152	2.10	1.55	0.55	1.39	打面欠損
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27006.391	-74963.839	26.989	0.83	0.40	0.22	0.10	礫の性状不明
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27006.505	-74963.575	27.157	1.40	0.65	0.26	0.18	打面欠損 打点欠損
	断塊	チャート①	1区	4層	-27006.566	-74964.047	27.015	1.50	0.75	0.30	0.30	節理面残存
	原礫	チャート①	1区	4層精査	-27006.606	-74964.589	27.155	0.87	0.70	0.53	0.42	亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.624	-74964.203	27.046	1.55	2.35	0.27	0.92	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.647	-74963.108	27.136	1.30	0.90	0.20	0.20	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.654	-74962.966	27.175	1.20	0.85	0.23	0.28	打面欠損
	剥片	チャート②	1区	4層掘削	-27006.667	-74963.852	27.210	1.20	0.95	0.25	0.24	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層下面精査	-27006.681	-74964.217	27.188	2.60	1.40	0.43	1.70	打面不明
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.704	-74963.563	27.205	1.10	0.95	0.15	0.20	打面欠損
	使用痕のある剥片	チャート①	1区	4層精査	-27006.770	-74961.364	27.220	1.20	0.85	0.17	0.21	剥離面打面 右側縁に使用痕
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27006.895	-74961.020	27.193	1.90	1.55	0.26	0.81	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27006.961	-74963.531	27.045	2.10	1.00	0.31	0.71	打面欠損
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27006.969	-74963.814	27.145	1.30	0.60	0.28	0.27	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27007.001	-74963.662	27.147	0.85	0.80	0.14	0.11	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27007.059	-74963.913	27.137	1.10	0.75	0.18	0.11	打面欠損
	碎片	黒曜石	1区	4層精査	-27007.075	-74963.144	27.026	0.80	0.45	0.13	0.04	隠岐群島産
	剥片	チャート①	1区	4層	-27007.083	-74960.515	27.052	0.80	1.00	0.26	0.23	節理面打面
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27007.159	-74961.830	27.250	1.59	0.84	0.65	0.70	亜円礫か
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27007.179	-74962.883	27.145	1.00	0.71	0.30	0.31	亜円礫か
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27007.206	-74960.598	27.154	1.05	0.45	0.13	0.07	打面欠損

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	碎片	黒曜岩	1区	4層下面 精査	-27007.261	-74962.936	27.220	0.95	0.60	0.34	0.17	隠岐群島産
	断塊	鉄石英	1区	4層掘削	-27007.287	-74964.543	27.143	1.95	1.55	1.13	2.86	自然面残存 角礫～亜角 礫か
	剥片	チャート ②	1区	4層精査	-27007.292	-74961.495	27.192	1.95	1.40	0.30	0.91	剥離面打面 自然面残存 亜円礫～亜角礫か
	剥片	凝灰岩	1区	4層精査	-27007.296	-74964.445	27.171	1.25	1.20	0.23	0.25	自然面打面 原礫の性状不明
	碎片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.309	-74964.006	26.968	0.75	0.55	0.30	0.14	
	剥片	チャート ③	1区	4層精査	-27007.353	-74963.205	27.205	1.67	0.88	0.45	0.64	打面折損
	使用痕のある 剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.373	-74963.404	27.124	1.20	1.05	0.35	0.34	打面欠損
	剥片	チャート ①	1区	4層掘削	-27007.376	-74964.198	27.187	2.20	1.40	0.69	1.62	打面欠損 自然面残存 角礫～亜角 礫か
	破碎礫	チャート ①	1区	4層精査	-27007.404	-74963.715	27.156	1.28	0.88	0.32	0.40	細礫 円礫か 節理破碎
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.412	-74959.964	27.114	2.10	1.60	0.38	1.07	節理面打面 礫の性状不 明
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.458	-74961.635	27.248	0.75	0.95	0.21	0.24	打面欠損
	剥片	チャート ②	1区	4層下面 精査	-27007.499	-74962.165	27.237	1.80	1.85	0.49	1.51	剥離面打面 自然面残存 亜円礫～円礫
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.511	-74963.198	27.182	2.45	2.10	0.50	2.49	剥離面打面
	剥片	鉄石英	1区	4層精査	-27007.521	-74963.066	27.048	0.75	1.20	0.28	0.35	剥離面打面
	剥片	チャート ①	1区	3層精査	-27007.523	-74964.358	27.126	1.35	0.95	0.23	0.29	剥離面打面
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.534	-74963.447	27.097	1.40	0.90	0.40	0.44	打面不明
	剥片	チャート ①	1区	4層	-27007.538	-74964.232	27.046	1.00	0.55	0.15	0.09	打面欠損
	使用痕のある 碎片	チャート ②	1区	4層精査	-27007.540	-74964.257	27.162	1.60	0.70	0.40	0.53	打面欠損
	断塊	チャート ②	1区	3層掘削	-27007.553	-74962.037	27.313	3.15	3.00	2.40	27.60	亜角礫～亜円礫
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.607	-74960.526	27.018	2.50	1.55	0.42	1.62	剥離面打面
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.608	-74963.555	27.170	2.05	1.55	0.39	1.28	剥離面打面
	剥片	チャート ①	1区	4層下面 精査	-27007.611	-74961.494	27.232	2.60	4.15	0.70	4.66	自然面打面 亜角礫～亜円礫
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.612	-74963.571	27.133	1.40	1.50	0.45	1.00	剥離面打面 自然面なし
	剥片	チャート ②	1区	4層精査	-27007.617	-74963.990	27.127	2.35	1.40	0.50	1.52	自然面打面 礫の性状不明
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.635	-74963.994	27.202	1.05	1.90	0.66	1.73	剥離面打面
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.643	-74960.607	27.145	1.10	1.05	0.30	0.38	自然面打面 原礫の性状不明
	剥片	チャート ②	1区	4層	-27007.688	-74963.229	26.992	1.00	0.40	0.35	0.12	自然面打面 礫の性状不 明
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.707	-74959.928	27.148	0.90	1.80	0.40	0.45	剥離面打面
	原礫	凝灰岩	1区	4層精査	-27007.713	-74963.420	27.095	12.56	4.95	3.65	282.50	
	剥片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.728	-74960.768	27.157	0.90	0.80	0.18	0.17	打面欠損
	碎片	チャート ①	1区	4層精査	-27007.758	-74963.321	27.143	0.80	0.70	0.26	0.18	打面欠損 自然面残存 亜角礫～亜 円礫
	剥片	チャート ①	1区	4層掘削	-27007.772	-74961.654	27.220	1.65	1.30	0.33	0.70	剥離面打面

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27007.778	-74962.576	27.161	1.60	1.00	0.41	0.47	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27007.802	-74961.050	27.130	1.55	0.30	1.10	0.38	剥離面打面
	抉入石器	チャート①	1区	4層掘削	-27007.828	-74962.995	27.046	1.70	1.60	0.75	1.00	断塊素材
	剥片	チャート①	1区	4層	-27007.829	-74960.542	27.041	1.70	1.45	0.14	0.39	打点欠損
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27007.834	-74960.257	27.131	0.50	1.10	0.25	0.15	打面欠損
	鋸歯縁石器	チャート①	1区	4層精査	-27007.848	-74964.481	27.061	3.50	3.00	1.30	10.95	剥片端部に鋸歯縁加工 自然面・節理面残存 角礫～亜角礫
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27007.853	-74960.503	27.177	1.40	1.35	0.54	0.65	剥離面打面
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27007.863	-74961.588	27.121	0.57	0.48	0.26	0.07	礫の性状不明
	断塊	チャート①	1区	4層掘削	-27007.888	-74960.707	27.232	2.45	1.80	0.92	2.98	打面欠損
	剥片	チャート②	1区	4層掘削	-27007.890	-74964.105	27.194	2.05	1.50	0.35	0.96	打面欠損 自然面残存 角礫～亜角礫
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27007.926	-74963.943	27.248	1.28	1.73	0.50	1.54	節理面打面 礫の性状不明
	碎片	チャート②	1区	4層精査	-27007.926	-74962.475	27.215	1.20	1.25	0.40	0.72	打面不明
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27007.943	-74964.407	27.137	1.60	1.20	0.28	0.44	自然面打面
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27007.962	-74962.764	27.187	1.00	0.60	0.40	0.24	打点欠損 打面欠損
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27008.026	-74960.330	27.066	0.75	1.10	0.27	0.20	剥離面打面
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27008.077	-74960.539	27.128	0.95	1.60	0.55	0.78	自然面打面 亜角礫素材か 背面端部にツブレ痕あり
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.096	-74959.293	27.135	1.05	0.65	0.25	0.11	打面欠損 打点欠損
	碎片	黒曜石	1区	4層精査	-27008.123	-74960.702	27.148	1.25	1.30	0.30	0.45	打面欠損 打点欠損 隠岐群島産
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27008.128	-74965.301	27.131	0.57	0.49	0.22	0.04	
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27008.157	-74959.747	27.064	1.17	0.92	0.42	0.63	節理破碎
	碎片	黒曜岩	1区	4層下面精査	-27008.171	-74962.344	27.231	1.00	0.60	0.15	0.11	隠岐群島産
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27008.187	-74963.927	27.082	2.00	1.15	0.49	0.84	剥離面打面 礫の性状不明 樹根?
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.188	-74964.154	27.132	3.10	2.10	0.69	3.58	自然面残存 亜角礫～亜 円礫か 節理面残存
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.195	-74959.876	27.134	1.25	1.10	0.22	0.26	自然面打面 礫の性状不明
	剥片	チャート②	1区	4層精査	-27008.202	-74964.520	27.117	1.30	1.00	0.26	0.33	自然面打面 礫の性状不明
	使用痕のある剥片(断塊)	チャート②	1区	4層精査	-27008.212	-74964.386	27.194	2.55	3.45	1.30	12.16	両面背面か 打点欠損 端部に連続的な2次加工 自然面残存 亜角礫～ 亜円礫か
	剥片	凝灰岩	1区	4層掘削	-27008.217	-74964.877	27.146	2.50	1.25	0.65	2.29	節理面打面 礫の性状不明
	破碎礫	チャート①	1区	4層精査	-27008.227	-74961.587	27.161	1.07	0.87	0.45	0.49	細礫
	剥片	チャート①	1区	4層下面精査	-27008.245	-74963.973	27.206	1.60	1.30	0.31	0.58	剥離面打面 自然面なし
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.315	-74960.640	27.133	0.85	0.90	0.18	0.12	打面欠損 打点欠損
	剥片	チャート②	1区	4層掘削	-27008.343	-74963.180	27.177	2.15	1.90	0.58	1.53	節理面打面 礫の性状不明

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	剥片	チャート②	1区	3層精査	-27008.347	-74960.215	27.198	1.95	1.20	0.40	0.89	剥離面打面 自然面残存 亜円礫～円礫
	使用痕のある剥片	チャート②	1区	4層	-27008.367	-74963.715	27.030	1.90	1.05	0.38	0.80	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層下面精査	-27008.367	-74965.345	27.023	1.05	2.35	0.23	0.64	剥離面打面
	剥片	チャート②	1区	4層掘削	-27008.375	-74960.681	27.083	1.35	1.65	0.50	1.80	剥離面打面 自然面残存 亜角礫
	剥片	チャート②	1区	3層精査	-27008.383	-74961.794	27.163	1.55	1.05	0.45	0.65	剥離面打面 自然面残存 亜円礫～円礫
	剥片	チャート②	1区	3層精査	-27008.389	-74960.382	27.206	1.50	2.95	0.82	2.49	剥離面打面
	破片	チャート②	1区	4層掘削(II層)	-27008.397	-74963.917	27.233	1.25	1.15	0.35	0.58	打面欠損 打点欠損 自然面残存 亜円礫～円礫
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27008.459	-74960.715	27.030	1.00	0.50	0.17	0.10	剥離面打面
	石核	凝灰岩	1区	3層精査	-27008.559	-74960.883	27.217	2.20	1.65	0.85	3.74	自然面残存 亜角礫～亜円礫
	破砕礫	鉄石英	1区	4層精査	-27008.582	-74959.840	27.137	1.28	1.00	0.58	0.82	角礫か
	剥片	チャート①	1区	3層精査	-27008.625	-74960.819	27.191	1.30	0.80	0.39	0.55	打面欠損 打点欠損
	原礫	石英	1区	4層精査	-27008.641	-74952.745	27.165	3.20	1.60	1.36	7.04	自然面残存 亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.767	-74960.480	27.243	2.75	1.85	0.50	2.32	打面欠損 上下両端にツブレ痕
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27008.836	-74958.939	27.076	2.40	1.75	0.65	3.20	自然面打面 礫の性状不明
	剥片	チャート②	1区	3層精査	-27009.021	-74962.374	27.168	0.75	0.90	0.15	0.10	自然面打面 礫の性状不明
	剥片	チャート②	1区	第3層精査	-27009.050	-74960.819	27.187	2.85	1.65	0.50	2.52	剥離面打面 自然面なし
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27009.092	-74961.328	27.238	2.25	2.10	0.40	1.86	自然面打面 自然面残存 角礫～亜角礫
	破砕礫	チャート①	1区	4層精査	-27009.522	-74954.011	27.172	0.77	0.65	0.32	0.17	細礫 円礫か
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27009.613	-74960.058	27.259	1.85	2.00	0.66	2.23	自然面打面 礫の性状不明
	破砕礫	チャート①	1区	4層精査	-27009.698	-74961.068	27.006	1.08	0.60	0.45	0.30	礫の性状不明
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27009.731	-74961.399	27.233	2.50	1.50	0.70	2.25	打面欠損 自然面残存 亜円礫～円礫
	剥片	チャート②	1区	4層掘削	-27010.190	-74962.981	27.086	1.35	0.70	0.20	0.13	打面欠損
	破片	チャート①	1区	4層	-27010.219	-74961.858	27.032	1.50	0.90	0.51	0.57	節理面残存
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27010.349	-74961.285	27.148	2.10	2.20	0.60	2.50	打面不明 自然面残存 礫の性状不明
	断塊	チャート②	1区	4層精査	-27010.478	-74959.715	27.245	1.60	1.35	0.58	1.52	打面欠損 自然面残存 角礫～亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27010.513	-74960.512	27.256	1.45	3.05	0.90	3.34	剥離面打面 自然面残存 角礫～亜角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27010.722	-74960.858	27.172	1.40	2.60	0.49	1.83	自然面残存 亜角礫素材か 自然面打面
	破片	チャート①	1区	4層精査	-27010.768	-74960.528	27.257	1.10	1.50	0.55	0.81	打面欠損

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27010.828	-74961.706	27.237	0.95	1.40	0.36	0.61	自然面残存 礫の性状不明
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27010.848	-74959.765	27.269	2.45	1.70	1.37	1.36	剥離面打面 自然面残存 礫の性状は不明
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27011.525	-74960.730	27.118	0.75	1.05	0.17	0.09	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	3層精査	-27011.535	-74962.732	27.212	0.90	1.40	0.36	0.35	自然面打面 垂円礫～円礫
	剥片	チャート①	1区	4層	-27011.556	-74960.261	27.066	0.65	0.50	0.21	0.03	打面不明
	剥片	チャート①	1区	4層	-27011.576	-74960.877	27.036	1.85	1.20	0.38	0.79	打点欠損
	断塊	チャート①	1区	4層精査	-27011.616	-74960.304	27.281	2.08	1.93	1.63	6.98	
	断塊	チャート①	1区	4層	-27011.669	-74964.062	27.006	1.35	1.05	0.97	1.39	自然面打面 自然面残存 垂角礫
	剥片	チャート①	1区	4層精査	-27011.673	-74961.897	27.167	1.20	0.75	0.19	0.17	打面欠損
	破片	チャート①	1区	4層精査	-27011.754	-74960.452	27.221	1.30	0.70	0.15	0.13	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層下面 精査	-27011.758	-74961.811	27.229	1.80	1.40	0.55	1.05	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	3層精査	-27011.770	-74961.704	27.209	1.40	0.80	0.25	0.34	剥離面打面
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27011.829	-74959.432	27.043	0.95	0.70	0.13	0.08	打面不明
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27011.954	-74960.711	27.156	1.05	0.50	0.21	0.11	打面欠損
	破砕礫	チャート①	1区	4層精査	-27012.046	-74963.903	27.122	1.84	1.62	0.91	2.89	細礫 円礫
	破片	チャート①	1区	3層精査	-27012.132	-74961.457	27.194	1.35	0.90	0.43	0.44	節理破砕に伴うか 自然面残存 礫の性状不明
	断塊	チャート①	1区	4層	-27012.175	-74961.319	27.034	1.10	0.90	0.21	0.29	節理破砕時の断塊か
	破片	チャート①	1区	4層精査	-27012.254	-74962.066	27.219	2.10	1.15	0.44	0.86	打面欠損 打点欠損
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27012.336	-74961.041	27.165	0.80	1.15	0.39	0.40	自然面打面 原礫の性状不明
	剥片	石英	1区	5層精査 (上面)	-27012.357	-74961.163	27.220	1.85	1.65	0.36	0.99	打面欠損
	剥片	凝灰岩	1区	4層精査	-27012.498	-74961.076	27.234	1.80	1.15	0.35	0.66	剥離面打面 自然面なし
	破片	チャート①	1区	5層精査 (上面)	-27012.827	-74960.561	27.218	0.70	0.50	0.26	0.11	打面欠損 打点欠損 自然面なし
	破片	チャート①	1区	4層精査	-27012.903	-74960.235	27.250	1.90	0.50	0.55	0.69	打面欠損 打点欠損
	剥片	チャート①	1区	4層掘削	-27012.911	-74959.599	27.186	1.25	1.50	0.30	0.72	自然面打面 垂角礫素材 か
	破片	チャート①	1区	5層精査 (上面)	-27012.920	-74960.641	27.229	0.95	0.35	0.10	0.03	打面欠損 打点欠損 自然面なし
	破片	チャート①	1区	4層	-27012.937	-74959.949	27.085	1.30	0.45	0.31	0.16	打点欠損
	破片	チャート①	1区	4層精査	-27012.996	-74960.257	27.113	1.20	0.64	0.23	0.16	礫の性状不明
	剥片	チャート①	1区	5層精査 (上面)	-27013.006	-74961.868	27.230	1.75	0.90	0.24	0.41	剥離面打面 自然面なし
	剥片	チャート①	1区	4層	-27013.075	-74958.444	27.152	1.40	1.10	0.23	0.38	自然面打面 礫の性状不明

番号	器種	石材	地区名	層位	出土位置			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
					X(m)	Y(m)	H(m)					
	破砕礫	石英	1区	4層精査	-27013.104	-74961.321	27.125	1.27	1.07	0.12	0.15	
	原礫	石英	1区	4層精査	-27013.283	-74960.256	27.135	1.20	1.10	0.35	0.57	脈石英か
	石核	チャート①	1区	4層精査	-27013.393	-74962.463	27.272	1.90	1.45	0.52	2.11	自然面打面 亜円礫～円礫
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27013.959	-74962.733	27.245	1.05	0.80	0.32	0.16	打面欠損
	剥片	チャート①	1区	4層	-27014.537	-74959.134	27.077	1.60	1.30	0.38	0.66	打面欠損
	碎片	チャート①	1区	4層精査	-27014.598	-74960.567	27.214	0.56	0.38	0.27	0.07	礫の性状不明
	破砕礫	チャート①	1区	4層精査	-27014.712	-74958.960	27.327	1.35	0.42	0.48	0.39	細礫 円礫
	剥片	チャート①	1区	4層	-27015.704	-74962.360	27.153	1.55	1.00	0.54	0.83	打面欠損
	原礫	凝灰岩	1区	4層精査	-27015.788	-74957.186	27.220	5.14	3.61	1.43	16.22	
	断塊	石英	1区	3層掘削	-27020.409	-74963.085	27.289	2.80	1.90	1.22	5.66	自然面残存 角礫～亜角礫
	使用痕のある剥片	玉髓	1区	4層精査	-27021.127	-74961.986		2.18	1.50	0.35	1.40	
	断塊	チャート①	1区	3層掘削	-27021.205	-74963.504		1.05	1.00	0.20	0.26	自然面残存 円礫～超円礫
	碎片	チャート①	1区	4層掘削	-27007.182	-74963.886	27.208	1.05	0.95	0.32	0.24	打面欠損
	石核	チャート①	1区	4層精査	-27012.514	-74961.503	27.252	2.40	1.50	0.60	1.90	剥離面打面
	石核	玉髓	1区					2.86	2.40	1.93	9.94	表採
	破砕礫	石英	1区	4層精査				1.79	0.85	0.35	0.64	脈石英か 出土位置不明

付表8 第4次調査出土土器観察表

() : 復元値 [] : 現存値 - : 測定不能

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	備考
1	土師器	高杯	1区	SH2280 東隅	-	(6.3)	-	-	内・外: にぶい黄橙 (10YR7/2)	
2	土師器	甕	1区	SH2280 内 SK2288	25.5	28.0	-	口) 6/12	内: 灰褐 (7.5YR6/2) 外: 灰褐 (5YR4/3) にぶい 橙 (7.5YR7/4)	外面煤付着
3	土師器	甕	1区	SH2280 東隅	25.6	(19.0)	-	口) 11/12	内: 明黄褐 (10YR7/3) 外 (煤): 黒褐 (10YR3/2)	外面煤付着
4	土師器	高杯	1区	SH2292 土器 溜まり	18.5	(8.2)	-	口) 6/12	内・外: 橙 (5YR6/6)	
5	土師器	甕	1区	SH2292 土器 溜まり 北隅	体部 23.6	(19.5)	-	-	内: 橙 (7.5YR7/6) 外: にぶい橙 (7.5YR6/4)	外面煤付着
6	土師器	甕	1区	SH2292 土器 溜まり	16.5	(18.2)	-	口) 4/12	内・外: 橙 (7.5YR6/6)	外面煤付着
7	弥生土器	甕	1区	SK2423	(14.0)	(11.1)	-	口) 3/12	内・外: 橙 (7.5YR6/8)	外面黒斑あり
8	弥生土器	高杯	1区	SK2423	18.3	(7.8)	-	口) 6/12	内・外: 橙 (5YR6/6) にぶい 黄橙 (10YR7/4)	
9	土師器	丸底壺	1区 e 11	SK1286	(8.4)	9.0	-	口) 3/12 (先端欠 損多し)	内・外: 明赤褐 (5YR5/8) 橙 (7.5YR6/6)	
10	土師器	高杯	f 9 NE	SK1038	14.6	12.0	-	口) 7/12 底) 7/12	内・外: 橙 (5YR6/6) (7.5YR7/6)	
11	須恵器	杯蓋	1区 g 9	SK1136	(13.6)	(2.3)	-	口) 1/12	内: 灰白 (N7/0) 外: 黒 (N2/0)、灰 (N6/0)	
12	土師器	杯	1区 g 9	SK1136	-	(1.5)	(5.0)	底) 2/12	内・外: 橙 (7.5YR6/6)	

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	備考
13	製塩土器	支脚	1区g9	SK1136	—	(7.3)	—	—	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	
14	土製品	土錘	1区g9	SK1001	長 3.6	幅 3.15	厚 2.9	完形	内・外：にぶい赤褐 (5YR5/4)	重さ 29.3 g
15	須恵器	杯	1区 SL1321 周囲	精査	(12.8)	(3.4)	—	口) 1/12	内・外：灰白 (7.5Y7/1)	
16	須恵器	盤	1区 SL1321 周囲	精査	(19.2)	(1.9)	—	口) 1/12 以下	内・外：灰 (N6/0)	
17	須恵器	杯身	1区f10	SK1052	(12.1)	4.0	—	口) 3/12	内・外：灰 (N6/0)	
18	土師器	鍋	1区f10	SK1052	(34.8)	(15.4)	—	口) 1/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/4) にぶい黄橙 (10YR4/3)	外面煤多く付着 一部植物繊維痕 残る
19	須恵器	杯身	1区g8	SL1325	(12.6)	(3.3)	—	口) 1/12	内・外：灰白 (5Y7/1)	
20	須恵器	杯身	1区g8	SK2439	(12.0)	3.1	—	口) 3/12 底) 6/12	内・外：灰白 (N7/0)	
21	須恵器	杯身	1区f10	SK1307	(12.4)	3.6	—	口) 3/12	内・外：灰 (N5/0)	
22	須恵器	杯身	1区g9	SK1087	(14.0)	3.9	(10.2)	口) 2/12	内・外：灰白 (N7/0)	
23	土師器	甕	1区g8	SK1304	(22.0)	(17.3)	—	口) 1/12	内・外：橙 (5YR6/6) にぶい 橙 (7.5YR6/4)	外面煤付着
24	土師器	甕	1区g8	SK1150	(26.0)	(8.3)	—	口) 2/12	内・外：橙 (5YR7/6)	
25	土師器	甕	1区g8	SP2404	(32.8)	(9.9)	—	口) 1/12 以下	内・外：にぶい黄褐 (10YR5/3)	外面煤付着？
26	黒色土器	椀	1区f9	SK1148	(6.6)	(0.9)	—	底) 11/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	内外面煤付着
27	土師器	杯	1区 f9	SK1201	(12.1)	3.7	(5.6)	口) 5/12 底) 2/12	内・外：橙 (7.5YR7/6)	
28	須恵器	椀	1区f9	SK1324	(18.0)	(4.4)	—	口) 4/12	内・外：灰 (N5/0)	口縁部・体部沈 線あり
29	土製品	羽口	1区g8	SP2387	最大幅 13.8	最大高 9.7	—	—	内・外：明黄褐 (10YR6/4) 灰白 (10YR8/2)	ガラス質、黒斑 部あり
30	須恵器	杯蓋	1区 e10・11	上層黒褐色土	(13.2)	(1.8)	—	口) 2/12	内・外：灰 (N6/0)	
31	須恵器	杯蓋	1区f9 SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(13.5)	(1.9)	—	口) 4/12	内・外：灰 (N6/0)	
32	須恵器	杯身	1区g9 NE・SE	上層黒褐色土	—	(1.6)	(7.0)	底) 3/12	内・外：灰 (5Y6/1)	
33	須恵器	杯身	1区g9 NE・SE	上層黒褐色土	—	(2.2)	(7.8)	底) 2/12	内・外：灰 (N6/0)	
34	須恵器	杯身	1区e10	上層黒褐色土	—	(1.8)	(8.2)	底) 1/12	内・外：灰白 (N7/0)	
35	須恵器	杯身	1区f9 SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(12.5)	3.9	—	底) 2/12	内・外：灰白 (2.5Y7/1)	
36	須恵器	杯身	1区f 9SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(14.6)	(3.6)	—	口) 3/12	内・外：灰白 (10YR7/1)	
37	須恵器	杯身	1区e10	上層黒褐色土	(18.0)	(4.7)	—	口) 1/12	内・外：灰 (5Y6/1) 灰白 (5Y8/1)	
38	須恵器	長頸壺	1区 e-11	上層黒褐色土	(4.1)	(6.2)	—	口) 1/12 以下	内・外：暗灰 (N3/0)	
39	須恵器	壺	1区g9 NE・SE	上層黒褐色土	—	(2.8)	—	—	内・外：灰 (5Y5/1)	
40	弥生土器	甕	1区e10	上層黒褐色土	(17.2)	(3.4)	—	口) 1/12 以下	内・外：橙 (7.5YR6/6)	
41	土師器	口縁部	1区e10	上層黒褐色土	(13.6)	(5.1)	—	口) 3/12	内・外：橙 (2.5YR6/6) (5YR6/6)	外面一部煤付着
42	土師器	甕	1区f 9SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(20.4)	(7.7)	—	口) 1/12 以下	内・外：橙 (7.5YR7/6)	
43	土師器	鍋	1区f 9SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(25.0)	(6.3)	—	口) 1/12 以下	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	備考
44	土師器	鍋	1区 f 9SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(30.0)	(9.5)	—	口) 1/12 以下	内・外：黒褐 (5YR3/1) にぶ い橙 (7.5YR7/4)	表面煤付着
45	土師器	皿	1区 f 9SWSE、f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土	(15.2)	1.9	—	口) 1/12 底) 3/12	内・外：浅黄橙 (7.5YR8/4)	底部粘土痕残る
46	土製品	土錘	1区 g 9 NE・SE	上層黒褐色土	長 3.5	幅 3.4	厚 1.85	6/12	内・外：浅黄橙 (10YR8/3)	重さ 17.1 g
47	土製品	土錘	1区 g 9 NE・SE	上層黒褐色土	長 4.4	幅 3.2	厚 2.9	完形	内・外：明褐 (7.5YR5/6)	重さ 45 g
48	土製品	土錘	1区 g 9 NE・SE	上層黒褐色土	長 4.75	幅 3.4	厚 2.95	完形	内・外：橙 (7.5YR6/6)	重さ 55.0 g
49	製塩土器	支脚	1区 g 9 NE・SE	上層黒褐色土	—	(6.9)	3.7	底) 5/12	内・外：橙 (7.5YR6/6)	
50	土製品	韓竈	1区 f 9	上層黒褐色土 (上層)	最大長 5.2	最大幅 10.0	厚 4.75	—	内・外：橙 (7.5YR7/6) にぶ い黄橙 (10YR7/4)	黒斑あり
51	須恵器	蓋	1区 g 9	上層黒褐色土 (下層)	(13.4)	(1.9)	—	口) 1/12	内・外：灰白 (7.5YR7/1) 灰 (7.5Y6/1)	
52	須恵器	蓋	1区 g 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	(14.0)	(1.9)	—	口) 3/12	内・外灰白 (7.5Y7/1) : 灰 (7.5Y5/1)	
53	須恵器	杯	1区 f 10	上層黒褐色土 (下層) 2/2	—	(2.4)	(8.4)	底) 4/12	内：灰 (5Y6/1) 外：灰白 (5Y8/1)	
54	須恵器	杯	1区 e 10	上層黒褐色土 (下層)	—	(2.9)	8.8	底) 5/12	内・外：灰白 (5Y8/1)	
55	須恵器	杯	1区 g 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	(18.0)	(4.2)	—	口) 1/12	内・外：灰 (N6/0)	口縁部沈線あり
56	土製品	土錘	1区 g 9	上層黒褐色土 (下層)	最大径 3.2	最大高 3.35	—	—	内・外：明褐 (7.5YR5/6)	一部黒斑か?
57	土製品	土錘	1区 g 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	長 5.1	幅 3.4	厚 3.15	ほぼ完形	内・外：明赤褐 (5YR5/6)	重さ 60.0 g 表 面煤付着
58	製塩土器	支脚	1区 f 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	—	(6.0)	(5.3)	底) 3/12	内・外：橙 (7.5YR6/6)	底部に工具痕?
59	製塩土器	支脚	1区 g 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	—	(10.7)	(6.4)	底) 9/12	内・外：橙 (7.5YR6/6)	底部煤付着?
60	弥生土器	甕	1区 e 10・ 11	上層黒褐色土 (下層)	(19.0)	(2.4)	—	口) 1/12 以下	内・外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 灰黄褐 (10YR4/2)	
61	土師器	甕	1区 g・f-7	上層黒褐色土 (下層)	(4.6)	(5.5)	—	口) 1/12	内：にぶい黄橙 (10YR7/3) 外：にぶい褐 (7.5YR5/3)、 黒 (2.5Y2/1)	
62	土師器	甕	1区 f 9 NW・SW	上層黒褐色土 (下層)	(18.4)	(8.3)	—	口) 2/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/3)	
63	製塩土器	容器	1区 f 10	上層黒褐色土 (下層)	(19.2)	(9.7)	—	口) 1/12 以下	内・外：橙 (5YR7/6)	
64	製塩土器	容器	1区 e-10	上層黒褐色土 (下層)	(22.0)	(11.1)	—	口) 1/12	内：灰褐 (7.5YR4/2) 外：黒 (2.5Y2/1)	表面煤付着
65	土師器	鍋	1区 g・ f-7	上層黒褐色土 (下層)	(35.0)	(7.7)	—	口) 1/12	内・外：にぶい黄橙 (10YR7/3)	
66	白磁	椀	1区 f 10	上層黒褐色土 (下層) 1/2	—	(2.2)	—	—	胎土：灰白 (5Y8/1) 釉：灰白 (5Y7/2)	
67	土師器	杯	1区 g・ f-7	上層黒褐色土 (下層)	—	(2.1)	(7.0)	底) 4/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	
68	土師器	杯	1区 f 9	上層黒褐色土 (下層)	(10.8)	4.7	—	口) 1/12	内・外：にぶい橙 (7.5YR7/4)	
69	土師器	丸底壺	1区	南壁断割り	7.3	7.4	—	口) 5/12	内・外：橙 (7.5YR6/8)	
70	須恵器	瓶	1区 g 18	第1面精査	—	(2.8)	(13.4)	底) 1/12	内・外：灰 (N6/0)	
71	土師器	甕	1区	排土	(14.0)	(4.9)	—	口) 3/12	内・外：橙 (5YR6/6) にぶい 黄橙 (10YR6/4)	
72	土師器	把手	1区	排土	—	(6.2)	—	—	内・外：浅黄橙 (10YR8/4) 橙 (7.5YR7/6)	

付表9 第4次調査出土石器・石製品観察表

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
73	剥片	1区 e 11	黄褐色土 (黒曜石?)	3.1	2.4	0.8	4.2	黒曜石
74	石鏃	1区	平面精査	2.0	1.3	0.4	0.6	流紋岩
75	石錘	1区 g 9 NESE	上層黒褐色土	6.4	8.0	4.1	270.0	デイサイト質凝灰岩
76	石錘	1区 f 9NW	第1面精査 (上層褐色土) (下層)	12.4	6.6	2.7	260.0	デイサイト質凝灰岩
77	石錘	1区 f 9NSW	上層黒褐色土 (下層)	9.8	7.0	3.4	345.0	デイサイト質凝灰岩
78	石錘	f aSW 1区 SE f 10NWNE e 10NWNE	上層黒褐色土層	10.5	5.0	3.5	230.0	デイサイト質凝灰岩
79	石錘	1区 e 8	精査	13.8	5.2	5.4	430.0	デイサイト質凝灰岩
80	石錘	1区 f 10	SK1238	16.1	17.5	11.0	4535.0	デイサイト質凝灰岩
81	敲石	1区 g 9	SK1092	11.7	8.5	5.6	845.0	デイサイト質凝灰岩
82	敲石	1区 f 9	SK1324	9.5	8.3	3.6	330.0	デイサイト質凝灰岩
83	敲石	H r g 9	SL1321 北側	18.4	13.0	6.4	1915.0	デイサイト質凝灰岩
84	敲石	1区 f 9NW	第1面精査 (上層褐色土) (下層)	13.7	9.7	5.0	780.0	デイサイト質凝灰岩
85	敲石	1区 g 8	SK1202	11.2	6.0	4.0	330.0	デイサイト質凝灰岩
86	石製品	1区 e 9	SK1122	直径 24.1	—	14.9	1230.0	デイサイト質凝灰岩
87	石製品	1区 f 9	SK1133	24.7	7.3	4.7	1110.0	デイサイト質凝灰岩
88	砥石	1区 e 9	SK1122	14.6	10.2	9.9	2015.0	泥質砂岩
89	砥石	1区 f 7SWSE g 7SWSE g 8 NWNE	上層黒褐色土 (下層) 1/2	5.5	8.1	2.4	135.0	泥質砂岩
90	砥石	1区 g 9NSW	上層黒褐色土 (下層)	9.0	8.6	3.5	290.0	泥質砂岩

付表10 第4次調査出土鉄滓、鉄製品観察表

番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
91	鉄滓	1区 g 8	SL1325	9.7	7.9	4.0	310.0
92	鉄滓	1区 g 9	SK1001	10.0	8.9	4.2	440.0
93	鉄滓	1区 g 8	SD1030	11.1	9.1	4.4	675.0
94	鉄滓	f 7SWSE f 8NE	精査	8.0	10.0	1.7	245.0
95	鉄滓	1区 g 9	SK1121	9.6	11.7	4.8	460.0

付 載 1 . 上 野 遺 跡 第 3 次 発 掘 調 査 に 係 る 火 山 灰 分 析 結 果 報 告

檀原 徹(株式会社京都フィッション・トラック)

1. はじめに

考古学においては、遺物の年代を知ることが最も重要な情報の1つである。ここでは上野遺跡で発掘された石器の年代推定に、発掘地点の地層に含まれる火山灰や軽石を分析する火山灰編年法(テフロクロロジー)を適用した結果を述べる。火山灰編年法とは、火山灰が短時間で広域に広がり降下堆積するという特質を利用し、自然から人間活動にまたがる多様な現象を時系列に従い解明する方法である。現在我が国では火山灰編年法の基礎が確立されている。その結果どこの火山から何年前に噴火した火山灰がどんな順番で堆積しているかというカタログ(たとえば火山灰アトラス(町田・新井2003))を見れば、調査地域ごとに予想される火山灰名と降灰順番がわかり、地層の年代推定を確実に行うことができる。そのため火山灰編年法は、我が国の考古学調査ではなくてはならない手法の1つとなっている。

2. 試料

対象試料は、令和元年度浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良業務に伴い調査発掘された上野遺跡において、(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより採取された火山灰試料24点である。

試料採取露頭は地表部から階段状に約3m掘り下げられた垂直の壁面で、上位よりI層からXII層まで分帯されている(図1)。そのうち試料は、III層(橙色ローム層)からXI層(細粒砂を含む極細粒砂層)まで、深度10cmごとに左右交互に振り分け、層位の間隙がないようにほぼ10cm大ずつ壁面より削り取られたスポット試料である。ただしNo.14,15,16,17の4試料とNo.18,19,20,21の4試料は水平的に交互に対応する同層準どうしの試料のため、後者(No.18~21)の分析は割愛し、No.17試料の下位層試料はNo.22試料から最下位のNo.27試料(ただしNo.28はDKPの予備試料)とされた。したがって試料は上述のように24個となり、通番17以深では通番と試料番号がズレるため注意が必要である。

3. 分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

(1)前処理

まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、21ビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1~2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交

換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60.120,250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120-250mesh(1/8-1/16mm)粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石薄片を作成した。

(2)全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の5項目について、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

(3)重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(BHb)・緑色普通角閃石(GHb)・不透明(鉄)鉱物(Opq)・カミングトン閃石(Cum)・ジルコン(Zr)・黒雲母(Bt)・アパタイト(Ap)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4)火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1976)^(注1)に準拠してH：扁平型(H a, H b)、C：中間型(C a, C b)、T：多孔質型(T a, T b)に分類した。またこれらの形態に属さないものを、I t：不規則型として一括し示した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色ガラスやスコリア質のものおよび亀ノ甲型と呼ばれる特異な形態をもつ火山ガラス(branching quench-crack structure :Buttner et al.,1999)^(注2)の有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・檀原(1995)^(注3)に基づき水和(hydration)やスーパーハイドレーション(super hydration)の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

(5)火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120-250mesh(1/8-1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)^(注4・5)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり50個以上の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法^(注6)は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名(Series およびSample Name)が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度 t か

ら浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。1つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。全試料の屈折率測定を実施した。

(6) 鉱物の屈折率測定

基本的には火山ガラスの屈折率と同様な操作を経て測定作業を行うが、鉱物の屈折率測定は光学的方位をチェックする必要がある点で大きく異なっている。今回の測定は、屈折率値の精度を高めるため30結晶の測定を目指しているが、含有結晶量が少ない場合にはそれ以下になる場合もある。対象鉱物は直方輝石 (Opx) 7 試料および角閃石 (Hb) 5 試料で、鎌田・檀原ほか(1994)^(注7)、山下ほか(2007)^(注8)などに準じ対象鉱物片の屈折率を測定した。さらに屈折率と固溶体鉱物名との関係を、OpxではLeake(1968)^(注9)に従い表記した。Opx(直方輝石)は7 試料を、Hb(角閃石)は5 試料の測定を実施した。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、前述の火山ガラスと同様に表示されている。

(7) 顕微鏡写真撮影

前処理で作成された岩石薄片を用い、顕微鏡写真撮影を行った。撮影画面の設定は、分析結果を最もよく反映するように火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の粒子がバランスよく収まるよう配慮した。写真撮影は代表的な4枚のテフラ層を対象にした。

4. 結果と考察(テフラ対比)

今回のテフラ分析結果は前掲の図1に集約される。また各測定項目の具体的なデータは、試料ごとにまとめられた「テフラ分析結果表」にカード形式で示される。さらに火山ガラスや鉱物の屈折率データの詳細は巻末にデータ・シートとして収録され、主な火山灰については顕微鏡写真も添付されている。以下にはこれらの分析データをもとに、広域～中域テフラへの対比の可能性を検討し、その結果を簡単に述べる^(注10・11)。なお以下には煩雑さを避けるため試料名と通番No.のみで呼称することをお断りしておきたい。

4-1. 通番1 試料(Ⅲ層)

バブル・ウォール型火山ガラスが優勢で含有率も40%を越える。火山ガラスの屈折率値から、70%強をATガラス、25%をK-Ah(鬼界-7カヤ)ガラスが占めると判断される。直下にAT層準が位置することから、再堆積AT層にK-Ahテフラが混入するとみなされる。ただし近畿地方においては、K-Ah降灰層準は黒ボク層の中～下位で検出されることから、K-Ah降灰層準は本試料採取位置より上位の黒ボク層にある可能性が高い。

4-2. 通番2,3 試料(Ⅲ層～Ⅳa層)

火山ガラスの屈折率値が1.497-1.501(モード:1.499)のバブル・ウォール型主ガラスを62-65%

含む典型的な広域テフラ層である。直方輝石に $\gamma = 1.731-1.735$ 程度の値をもつ特徴的なフェロハイパシも検出されることから、AT(始良Tn)テフラに対比される。純層ではないもののほぼそれに匹敵する純度をもち、AT降灰層準がこの層準にあることが確実である。そのため旧石器産出層準はATの降灰層準あるいはその下位と判断できる。

4-3. 通番9試料(VI層)

全鉱物組成および重鉱物組成において、上下層(通番8および10試料)データの比較により、火山ガラスと直方輝石(Opx)の含有率がわずかながら高いため、特定テフラの混入の可能性が疑われ重鉱物(OpxとHb)の屈折率測定を実施した。しかし結果としてOpxとHbの屈折率値が下位のDKPテフラと極めてよく一致し、著変が認められないことから、特定テフラ挟在の可能性は低いと判断された。

4-4. 通番11試料(VII層)

テフラ試料が採取されたトレンチ断面露頭において、調査時に水平方向に右手約4m付近で火山灰に似た黄色層が観察されたとの情報が寄せられていた。しかし薄片検鏡データからは著変は認められず、火山ガラスの屈折率測定が完了した時点でも積極的な特定テフラの混入の可能性の指摘は困難であった。

ここで今回の全測定データがまとまった段階(図1参照)で、トータルに測定結果の検討を行うと、以下のようなテフラ混入の可能性が生まれる。

調査地に近い福井県の水月湖でのテフラ研究の最新の成果(Maruyama et al.,2019)*10によれば、本試料直下のDKPテフラ(後述)の上位には三瓶池田(SI)、三瓶小屋原?(Sambe-Koyahara?)、三瓶雲南(Sun)および九重第1(Kj-P1)の4枚のよく似たテフラの存在が知られている。このうち九重第1テフラは水月湖コア中で薄層のため、対比の可能性が低い。残る3枚のテフラは互いに良く似るが、火山ガラスの屈折率分布がバイモーダルな三瓶池田(SI)テフラが本試料の分布型とよく合致する。したがってここでは、本試料中に含まれるテフラは三瓶池田(SI)の可能性が高いと判断される。なお重鉱物(共通する鉱物はHb)の屈折率は3つのテフラで分布が非常によく似るため、測定対象から除外した。

4-5. 通番12,13試料(VII、VIIIa層)

2つの試料とも結晶質テフラ純層と考えられる。ただし通番12と13試料はVII層とVIIIa層の2つの層に分けられており、矛盾を感じざるを得ない。ここでは下位の通番13試料(VIIIa層)をもってテフラ純層(降灰層準)とする。本テフラは特徴的な扁平の直方輝石(Opx)や緑色普通角閃石(GHb)の自形結晶を主とする結晶質テフラで、 $n=1.502-1.508$ (モード:1.507)の屈折率をもつ軽石型火山ガラスを含み、その記載岩石学的特徴から大山倉吉(DKP)テフラに確実に対比される。

4-6. 通番19,20試料(X層)

浅黄橙色の極細粒砂からなるX層は、構成粒子の大部分が斜長石・石英と少量のカリ長石で占められる。ただし微量含まれる火山ガラスや重鉱物・軽鉱物には広域テフラ起源と考えられるものが認められ、見逃すことができない貴重なテフラ情報を提供してくれることとなった。

具体的には、火山ガラスには鬼界-葛原 (K-Tz) と阿蘇4 (Aso-4) ガラスと思われるものが、直方輝石にはAso-4起源と思われるブロンザイトが、褐(緑)色普通角閃石(BHb)にはAso-4に特徴的な $n_2=1.689-1.691$ 付近のものが、そしてK-Tzに特徴的な高温型石英(β -Qz)が一部火山glに付着するものも含まれることが観察される。これらの火山ガラスや鉱物は細砂中に拡散し微量にしか過ぎないものの、これら特徴的な粒子は通番19、20試料層準にほぼ集中して共存し、下位層ではまったく検出されない。

以上の状況を総合すると、通番19,20試料層準がK-TzおよびAso-4テフラの潜在層準と判断される。

4-7. 通番24試料(DKP予備試料)

前述のDKPテフラと酷似するテフラ純層試料である。鉱物組み合わせや扁平なOpxを含む自形重鉱物結晶の特徴からDKPテフラであることは間違いない。

注1 吉川周作(1976):大阪層群中の火山灰層について。地質学雑誌.82(8)、479-515.

注2 Buttner,R. Dellino,D. and Zimanowski,B.(1999):Identifying magma-water interaction from the surface features of ash particles.Nature,401,688-690.

注3 山下透・檀原徹(1995):火山ガラスのhydrationとsuper hydration-日本の広域テフラについて-.フィッシュン・トラックニュースレター第8号、41-46.

注4 横山卓雄・檀原徹・山下透(1986):温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究.25(1)、21-30.

注5 Danhara T.,Yamashita T.,Iwano H. and Kasuya M.(1992):An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method.Quaternary International.13/14,89-91.

注6 檀原徹(1993):温度変化型屈折率測定法.日本第四紀学会編.第四紀試料分析法2.研究対象別分析法.149-157.東京大学出版会.

注7 鎌田浩毅・檀原徹・林田明・星住英夫・山下透(1994):中部九州の今市火砕流堆積物と類似火砕流堆積物の対比および噴出起源の推定.地質学雑誌.100(4)、279-291.

注8 山下透・檀原徹・岩野英樹・星博幸・川上裕・角井朝昭・新正裕尚・和田穰隆(2007):紀伊半島北部の室生火砕流堆積物と周辺に分布する凝灰岩の対比およびそれらの給源:軽鉱物屈折率を用いたモード分析によるアプローチ.地質学雑誌,113,340-352.

注9 Leake,B.E.(1968):Optical properties and composition in the orthopyroxene series.Mineral.Mag.36,745-747.

注10 町田洋・新井房夫(2003):「新編火山灰アトラス」:日本列島とその周辺」東京大学出版会.

注11 Maruyama,S.,Takemura,K.,Hirata,T.,Yamashita,T. and Danhara,T.(2019): Petrographic Properties of Visible Tephra Layers in SG93 and SG06 Drill Core Samples from Lake Suigetsu, Central Japan. Journal of Geography (Chigaku Zasshi),128(6),879-903.

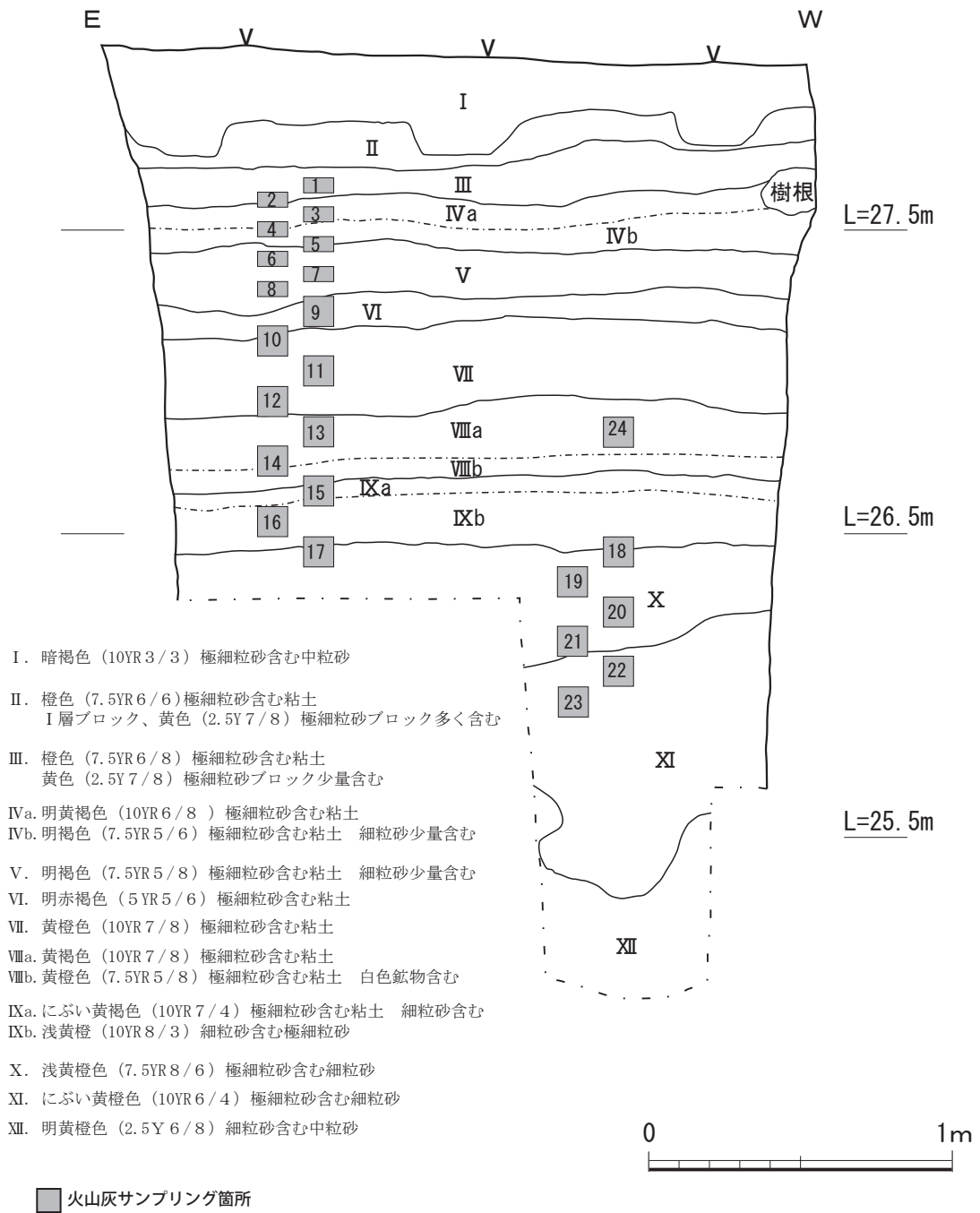


図1 上野遺跡第3次調査火山灰サンプリング位置図

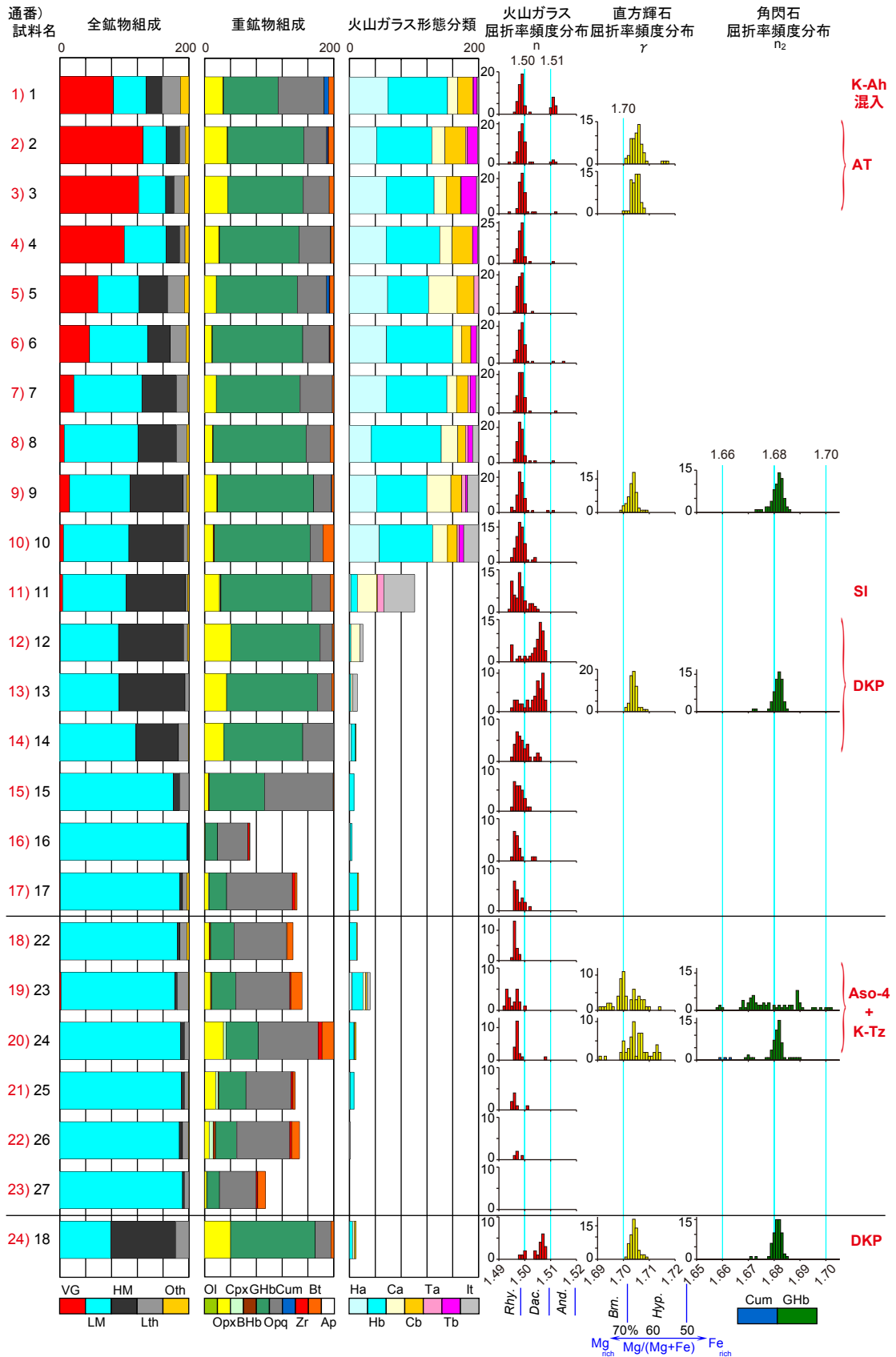


図2. 京都府丹後町上野遺跡第三次調査のテフラ分析結果図

写真1. 顕微鏡写真 通番1 (Ⅲ層) K-Ah 火山灰層

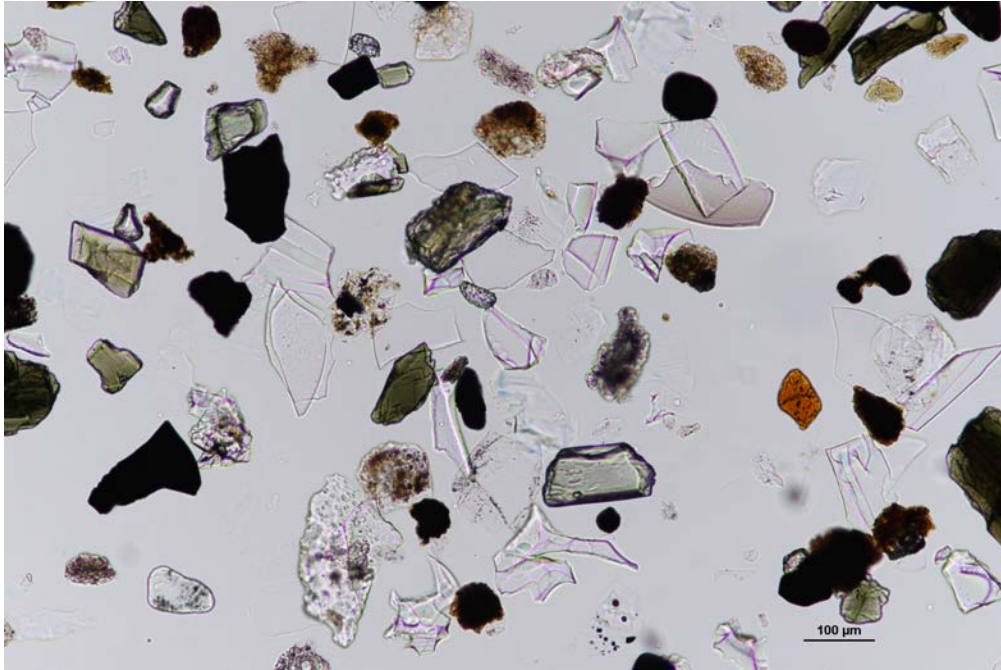


写真2. 顕微鏡写真 通番3 (IVa層上部) AT火山灰層

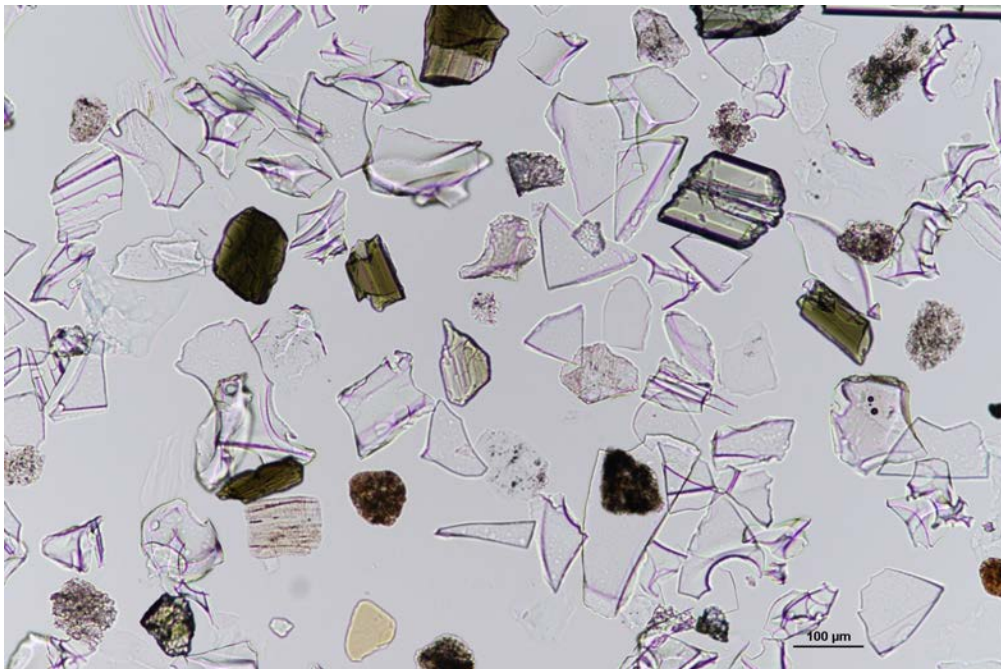
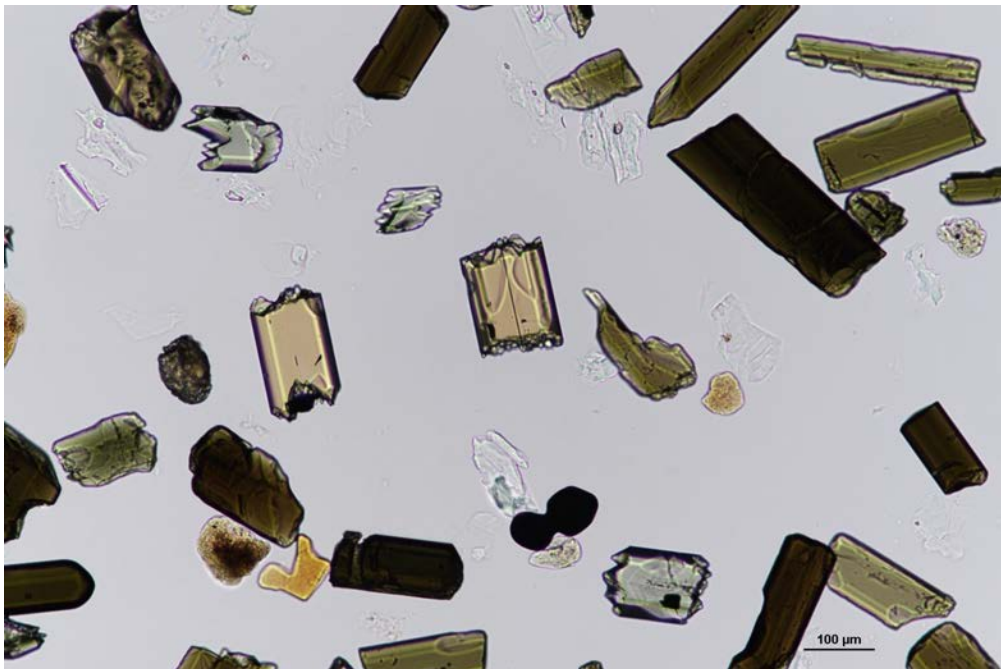


写真3. 顕微鏡写真 通番11 (VII層) SI火山灰層



写真4. 顕微鏡写真 通番13 (VIIIa層) DKP火山灰層



付 載 ２ ． 上 野 遺 跡 出 土 鉄 滓 の 調 査

日鉄テクノロジー株式会社九州事業所 鈴木瑞穂

1. 調査対象

上野遺跡は京丹後市丹後町上野地内に所在する。第4次調査地区では古代の鍛冶炉跡が10基検出された。それに伴い、推定年代が飛鳥時代～奈良時代とされる鉄滓も複数出土している。そのため遺跡内の鉄器生産の実態を検討する目的から、鉄滓5点(UEN-1～5)を調査した(付表1)

2. 調査項目

(1) 外観観察

鉄滓の外観的な特徴を記載した。

(2) 顕微鏡組織

鉄滓の断面観察のため、試料を切り出し後樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ mと1 μ mで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影した。

(3) 化学組成分析

鉄滓の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した(付表2)。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

付表1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器 反応	調査項目	
					大きさ (mm)	重量 (g)		顕微鏡 組織	化学分析
UEN-1	上野 (4次)	-	椀形鍛冶滓	飛鳥-奈良 時代ごろ	98 × 72 × 25	240.5	なし	○	○
UEN-2		SD1030	椀形鍛冶滓		106 × 90 × 46	670.8	なし	○	○
UEN-3		SK1121	椀形鍛冶滓		114 × 94 × 38	459.4	なし	○	○
UEN-4		SK1001	椀形鍛冶滓		99 × 73 × 40	441.4	なし	○	○
UEN-5		SL1325	椀形鍛冶滓		102 × 63 × 34	306.9	なし	○	○

3. 調査結果

1) UEN-1：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

今回調査した鉄滓5点中では最も小さく、やや偏平な細長い形状の椀形鍛冶滓(240.5g)である。側面1面は直線状の破面である。破面側は幅・厚さともにあり、破面の延長上に羽口先端が位置していたと推測される。表層は広い範囲で薄く黄褐色の土砂や茶褐色の銹化物が付着する。ただし金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。また上下面とも木炭痕が残り、特に下面表層には木炭による微細な凹凸がみられる。

(2) 顕微鏡組織

写真1①～③に示す。①右上の黒色部は鉄滓表面に付着した木炭破片で、②はその拡大である。また素地は鍛冶滓である。③はその拡大で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル(Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)、白色粒状結晶ウスタイト(Wustite： FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が晶出する。

(3) 化学組成分析

付表2に示す。全鉄分(Total Fe)54.65%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.21%、酸化第1鉄(FeO)が48.86%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)23.54%の割合であった。造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)の割合は16.15%と低めである。このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)は2.75%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱^(注1))起源の二酸化チタン(TiO_2)は7.39%、バナジウム(V)が0.17%と鍛冶滓としては高値である。また酸化マンガン(MnO)は0.34%、銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄由来の鉄チタン酸化物〔ウルボスピネル(Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)〕と、鉄素材の酸化で生じたと推測されるウスタイト(Wustite： FeO)が確認された。砂鉄系精錬鍛冶滓に一般的な晶癖といえる。また化学組成をみても、鍛冶滓としてはチタニア(TiO_2)の含有割合が高い。この特徴から、砂鉄(含チタン鉄鉱)を始発原料とした精錬鍛冶滓と推定される。鍛冶原料鉄(未加工の製錬鉄塊系遺物)の不純物除去の際の反応副生物といえる。

2) UEN-2：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

大形で厚手の椀形鍛冶滓(670.8g)と推定される。側面1面は破面である。表層は広い範囲で薄く黄褐色の土砂や茶褐色の銹化物が付着する。金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。また上下面とも木炭痕が多数散在する。一方で下面表層には部分的に鍛冶炉床土が付着する。

(2) 顕微鏡組織：写真1④～⑥に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また④左下の黒色部は微細な木炭破片で、⑥左上はその拡大である。

(3) 化学組成分析：付表2に示す。全鉄分(Total Fe)49.64%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は

付表2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	* * * * *									
					全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)
UEN-1	上野	-	椀形鍛冶滓	飛鳥-奈良時代ごろ	54.65	0.21	48.86	23.54	9.99	3.15	1.02	1.73	0.18	0.08
UEN-2	(4次)	SD1030	椀形鍛冶滓		49.64	0.15	46.49	19.09	17.88	5.27	1.77	1.24	0.66	0.36
UEN-3		SK1121	椀形鍛冶滓		43.39	0.21	35.14	22.68	21.59	5.67	1.39	1.50	0.75	0.39
UEN-4		SK1001	椀形鍛冶滓		47.43	0.08	44.09	18.70	18.39	5.22	1.40	1.55	0.45	0.20
UEN-5		SL1325	椀形鍛冶滓		47.69	0.14	50.74	11.60	20.40	5.56	2.28	1.67	0.83	0.39
					Σ*									
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分
UEN-1	上野	-	椀形鍛冶滓	飛鳥-奈良時代ごろ	0.34	7.39	0.08	0.03	0.32	0.24	0.17	<0.01	0.04	16.15
UEN-2	(4次)	SD1030	椀形鍛冶滓		0.23	3.18	0.09	0.05	0.30	0.29	0.10	<0.01	<0.01	27.18
UEN-3		SK1121	椀形鍛冶滓		0.28	4.58	0.09	0.07	0.29	0.57	0.14	<0.01	<0.01	31.29
UEN-4		SK1001	椀形鍛冶滓		0.29	6.32	0.06	0.07	0.25	0.18	0.11	<0.01	0.03	27.21
UEN-5		SL1325	椀形鍛冶滓		0.26	4.30	0.05	0.05	0.27	0.14	0.07	<0.01	0.02	31.13

0.15%、酸化第1鉄(FeO)が46.49%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)19.09%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は27.18%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は3.01%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は3.18%、バナジウム(V)が0.10%と鍛冶滓としては高めであった。酸化マンガン(MnO)は0.23%、銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は椀形鍛冶滓(UEN-1)よりもチタニア(TiO₂)の含有割合が低いが、砂鉄由来の鉄チタン酸化物の影響が確認された。砂鉄(含チタン鉄鉱)を始発原料とした精錬鍛冶滓と推定される。

3) UEN-3：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察

ほぼ完形の椀形鍛冶滓(459.4g)と推定される。表層は広い範囲で薄く黄褐色の土砂や茶褐色の錆化物が付着する。金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。上下面とも木炭痕が多数散在する。特に下面表層は小形の木炭痕による凹凸が著しい。

(2) 顕微鏡組織

写真2①~③に示す。①の上側の灰褐色粒は錆化鉄で、②はその拡大である。内部に針状セメントイト(Cementite: Fe₃C)痕跡が残存する。本来は過共析(C>0.77%)組織の高炭素鋼であったと推定される。

これに対して①の素地は鍛冶滓で、③はその拡大である。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

（3）化学組成分析

付表2に示す。全鉄分(Total Fe)43.39%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.21%、酸化第1鉄(FeO)が35.14%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)22.68%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は31.29%とやや高めで、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は2.89%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は4.58%、バナジウム(V)が0.14%と鍛冶滓としては高めであった。酸化マンガン(MnO)は0.28%、銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓(UEN-1、2)と同様、砂鉄由来の鉄チタン酸化物の影響が確認された。砂鉄(含チタン鉄鉱)を始発原料とした精錬鍛冶滓と推定される。

4)UEN-4：椀形鍛冶滓

(1)外観観察

やや大形の椀形鍛冶滓の中核部破片(441.4g)と推定される。側面3面は直線状の破面である。表層は広い範囲で薄く黄褐色の土砂や茶褐色の銹化物が付着する。金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。全体に気孔は少なく緻密で重量感がある。また側面の一部を除き木炭痕は少ない。下面表層には部分的に鍛冶炉床土が付着する。

(2)顕微鏡組織

写真2④⑤に示す。素地部分は鍛冶滓である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微小明白色粒は金属鉄である。

(3)化学組成分析：付表2に示す。全鉄分(Total Fe)47.43%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.08%、酸化第1鉄(FeO)が44.09%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)18.70%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は27.21%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は2.95%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は6.32%と高値で、バナジウム(V)は0.11%であった。また酸化マンガン(MnO)は0.29%、銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓(UEN-1～3)と同様、砂鉄由来の鉄チタン酸化物の影響が確認された。砂鉄(含チタン鉄鉱)を始発原料とした精錬鍛冶滓と推定される。

5)UEN-5：椀形鍛冶滓

(1)外観観察：大形の椀形鍛冶滓の側面破片(306.9g)と推定される。側面1面は直線状の破面である。表層は広い範囲で薄く黄褐色の土砂や茶褐色の銹化物が付着する。金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で着磁性がある。全体に気孔は少なく緻密で重量感がある。上下面とも木炭痕が多数散在する。特に下面表層は小形の木炭痕による凹凸が著しい。

(2)顕微鏡組織：写真2⑥⑦に示す。素地部分は鍛冶滓である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微小明

白色粒は金属鉄である。

(3) 化学組成分析

付表2に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.69% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.14%、酸化第1鉄 (FeO) が50.74%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 11.60%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) の割合は31.13%とやや高めで、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は3.95%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は4.30%、バナジウム (V) が0.07%と鍛冶滓としては高めであった。酸化マンガン (MnO) は0.26%、銅 (Cu) は<0.01%と低値であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓 (UEN-1~4) と同様、砂鉄由来の鉄チタン酸化物の影響が確認された。砂鉄 (含チタン鉄鉱) を始発原料とした精錬鍛冶滓と推定される。

4. まとめ

上野遺跡から出土した鉄滓5点 (UEN-1~5) は、すべて精錬鍛冶滓と推定される。地域の製鉄遺跡から、未加工の鍛冶原料 (製錬鉄塊系遺物) が搬入されて、遺跡内で不純物 (鉄塊と未分離の砂鉄製錬滓) を除去した後に、熱間で鍛打加工をしていた可能性が高いと考えられる。

7世紀後半に東日本各地に製鉄遺跡が出現して以降、周辺地域の鍛冶遺跡でも、チタニア (TiO₂) を数%含有する精錬鍛冶滓が普通に確認されるようになる。製鉄遺跡で生産された鍛冶原料の多くが、未加工の状態で鍛冶遺跡に搬入され、不純物除去作業が広く行われたことが明らかになっている。ただし近畿地方では、砂鉄を製鉄原料とした鉄産地の周辺を除くと、精錬鍛冶滓の確認例はきわめて少ない特徴がある。^(注2)

しかし京丹後市は古代の製鉄遺跡が多数分布する地域である。すでにニゴレ遺跡^(注3)、遠所遺跡^(注4)、黒部遺跡^(注5)などで生産関連遺物の理化学的分析調査もされている。これらの製鉄遺跡出土砂鉄の多くが、チタニア (TiO₂) を10~15%含有している。製錬滓のチタニアの含有割合も10%弱から20%超と高値傾向が確認されている。この調査結果から主に火山岩起原の砂鉄 (含チタン鉄鉱) が製鉄原料であったと推定される。

今回調査した上野遺跡出土鉄滓5点がすべて精錬鍛冶滓であったのは、地域周辺の製鉄遺跡から鍛冶原料 (未加工の製錬鉄塊系遺物) が供給され、鍛冶遺跡で不純物除去作業を相当量行う必要があったことを示唆する結果といえる。

注1 木下亀城・小川留太郎1995『岩石鉱物』保育社

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

- 注2 鈴木瑞穂2014「鍛冶関連遺物の理化学的調査結果からみた古代の鉄素材と鍛冶技術」『たたら研究』53号たたら研究会
- 注3 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1996『京都府遺跡調査概報』第71冊
- 注4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1997『遠所遺跡』京都府遺跡調査報告書第21冊
- 注5 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1997『京都府遺跡調査概報第76冊』京都府遺跡調査概報76冊

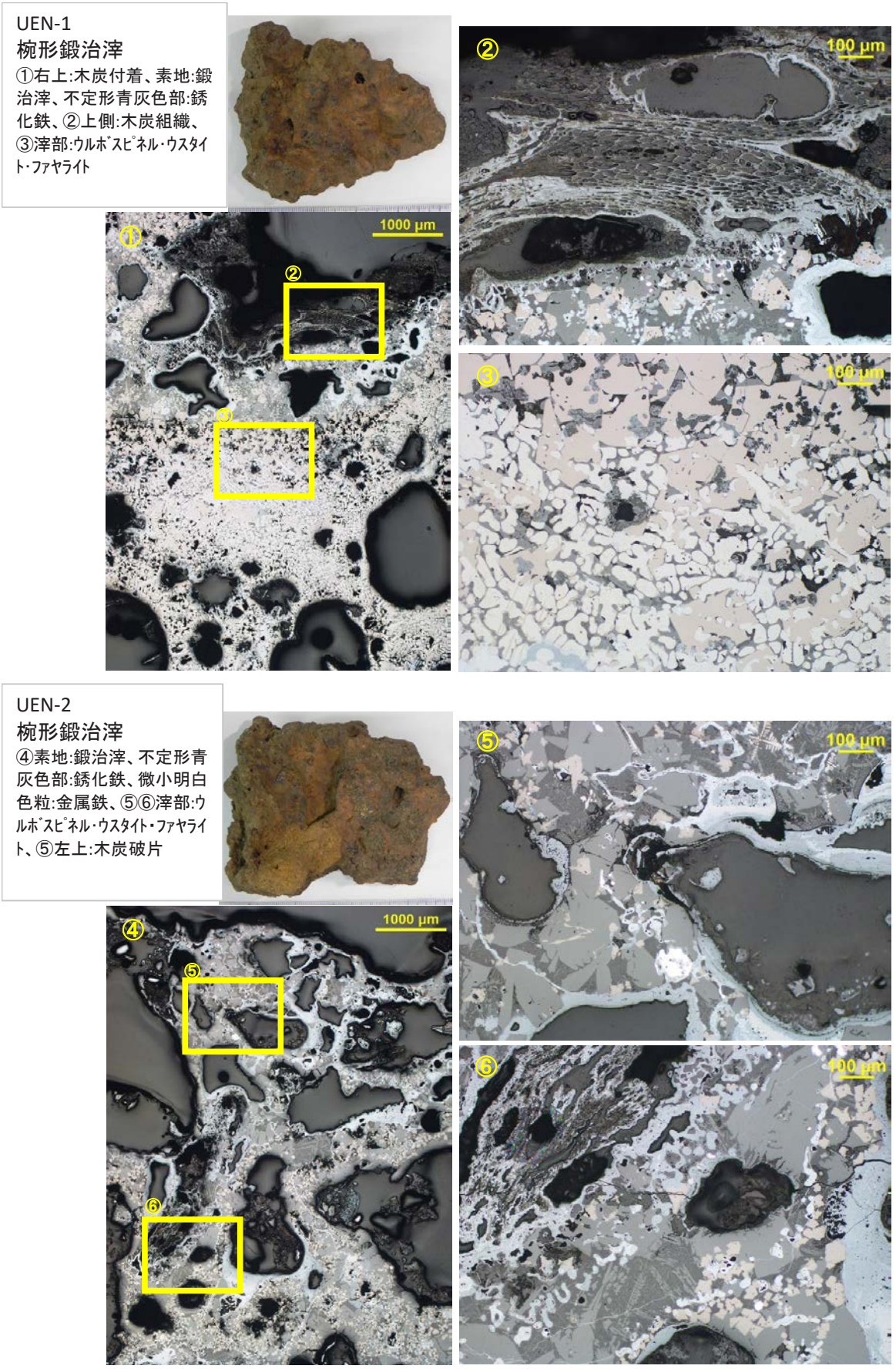


写真1 椀形鍛治滓の顕微鏡写真

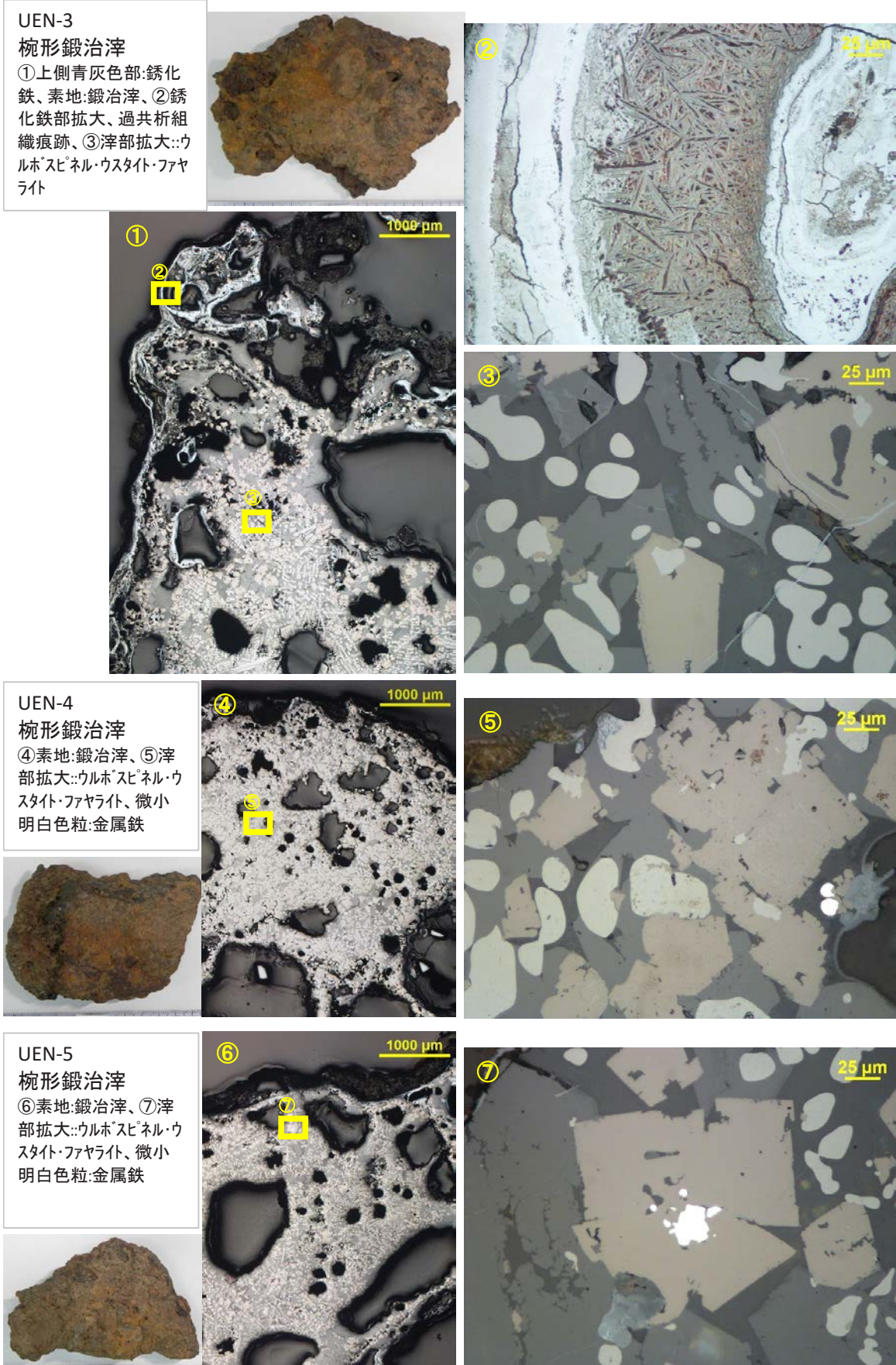


写真2 椀形鍛冶滓の顕微鏡写真

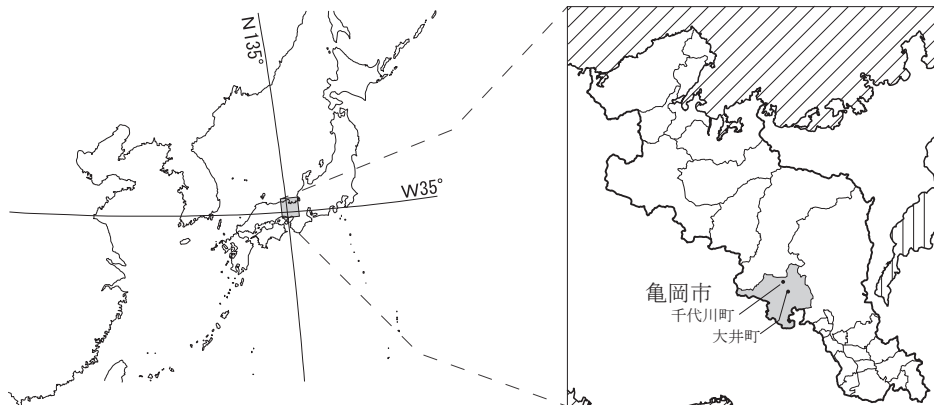
2. 南金岐遺跡第2次・千代川遺跡 第36次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都縦貫自動車道インターチェンジ料金所新設工事に伴い、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所からの依頼を受けて実施した。京都縦貫自動車道路に伴う発掘調査は、過去、国道9号バイパス関係遺跡発掘調査として建設省近畿地方建設局の依頼を受け、1980～1990年にかけて実施してきた。同バイパスは京都市右京区大枝町沓掛町～亀岡市千代川町に至る39km間であり、その路線内に周知されていた10遺跡が調査対象だった。今回の発掘調査対象地は、南金岐遺跡と千代川遺跡の2遺跡であり、いずれも縦貫道西側側道に沿う地点である。南金岐遺跡の発掘調査は、先述の国道9号バイパス関係遺跡発掘調査(昭和56年度)に続く調査である。千代川遺跡では、これまで京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、当調査研究センターにより、国道9号バイパス関係遺跡発掘調査のほかに、府道改良工事(1983～90年)、府立丹波養護学校建設に伴う発掘調査(1983～84年)、丹波国府確認調査(1993～97年)を実施してきている。現在、千代川遺跡では農林水産省近畿農政局を事業主体とする国営緊急農地再編事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査を当調査研究センターが実施している。

今年度、千代川遺跡の京都縦貫道路調査対象地に隣接して国営農地関連発掘調査(以下、国営亀岡)が計画されたことから、関係諸機関による事前調整が行われ、調査期間の短縮・経費削減を主目的として同時に発掘調査を実施することとなった。

今回の発掘調査は南金岐遺跡が第2次調査、千代川遺跡が第36次調査となる。現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会をはじめ、各関係機関のご指導、ご助言をいただいた。記して感謝します。なお、今回の発掘調査にかかる経費は、全額、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。



第1図 調査地の位置

〔調査体制〕

〈南金岐遺跡第2次〉

調査責任者 調査課長 小池 寛
調査担当者 調査課調査第3係長 村田和弘
同 調査第3係副主査 竹原一彦
調査場所 京都府亀岡市大井町南金岐重見
現地調査期間 令和5年7月21日～令和5年9月22日
調査面積 250㎡

〈千代川遺跡第38次〉

調査責任者 調査課長 小池 寛
調査担当者 調査課調査第3係長 村田和弘
同 調査第3係副主査 竹原一彦
調査場所 京都府亀岡市千代川町北ノ庄淵田ほか
現地調査期間 令和5年9月14日～令和5年11月20日
調査面積 420㎡

〔整理作業体制〕

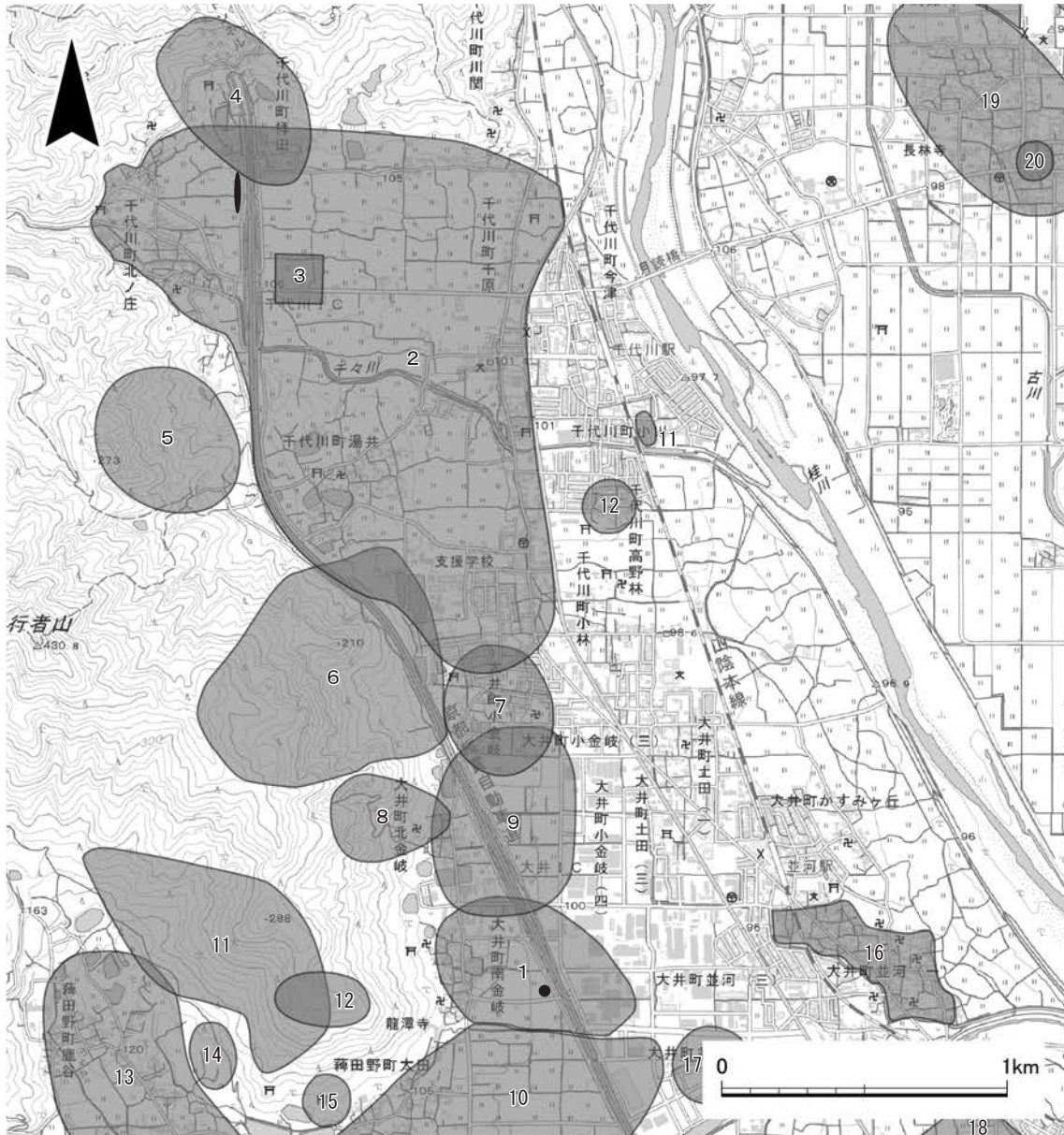
整理作業責任者 調査課長 小池 寛
整理作業担当者 調査課調査第3係長 村田和弘
同 調査第3係副主査 竹原一彦
整理作業期間 令和5年12月1日～令和6年3月29日

2. 位置と環境（第2図）

亀岡市は京都府のほぼ中央西寄りに位置し、東は京都市・向日市・長岡京市、北は京丹波町、西と南は大阪府に接している。市域は広く山地が多い。淀川水系に属する桂川(大堰川)が流れる市域東部と支流の本梅川が開析した西側に盆地が存在する。桂川の源流は京都市左京区佐々里峠付近であり、その流れは亀岡市東端部の保津峠を経て山城国に入り淀川となって大阪湾へと注ぐ全長約145kmの河川である。亀岡盆地は丹波山地に囲まれ、保津峠に堰き止められた桂川により、古くは湖であったとされる。盆地周辺部は湖水が解消し陸地化していく過程で河岸段丘が形成されていく。この河岸段丘はやがて人々の生活の場として利用されるようになる。

亀岡盆地の北西部、南金岐遺跡・千代川遺跡周辺の遺跡を概観する。亀岡市では旧石器時代の明確な遺跡はみつからないが、曾我部町鹿谷遺跡から、黒曜石製の槍先形尖頭器とサヌカイト製の楔形石器が出土している。

縄文時代では、縄文～中世の複合遺跡である千代川町千代川遺跡第11次調査(温井地区)で晩期の土器に混じって草創期のサヌカイト製の有舌尖頭器3点が出土している。また、第16次調査(北ノ庄地区)では中期～晩期土器がまとまって出土している。大井町北金岐遺跡では、大溝S D01



- | | | | | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 南金岐遺跡 | 2. 千代川遺跡 | 3. 桑寺廃寺 | 4. 拝田古墳群 | 5. 北ノ庄古墳群 | 6. 小金岐古墳群 | 7. 馬場ヶ先遺跡 |
| 8. 北近岐古墳群 | 9. 北近岐遺跡 | 10. 太田遺跡 | 11. 鹿谷古墳群 | 12. 太田山城跡 | 13. 鹿谷遺跡 | 14. 鹿谷池田古墳群 |
| 15. 太田城跡 | 16. 並河城跡 | 17. 野寺廃寺 | 18. 穴川遺跡 | 19. 馬路遺跡 | 20. 馬路館跡 | |

第2図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都市北西部)

から大量の弥生土器に混じって80点を超える晩期の土器片が出土している。また、曾我部町太田遺跡、稗田野町天川遺跡においても後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代では、行者山の東裾に広がる扇状地に大井町北金岐遺跡、南金岐遺跡、馬場ヶ先遺跡、太田遺跡などが所在する。太田遺跡は弥生時代前期を中心とする集落遺跡で、第Ⅰ様式土器が出土する土坑群と第Ⅱ様式土器が出土する溝状遺構が検出された。溝状遺構は集落を取り巻く多重環濠の一部とみられる。千代川遺跡第11次調査では前期・中期の遺構・遺物が出土している。遺構には方形周溝墓が含まれる。第6・7次調査(北ノ庄桑寺地区ほか)では中期の集落跡・水田跡・方形周溝墓が検出された。ここでは第Ⅲ・Ⅳ様式の土器・石器が出土した。南金岐遺跡では9号

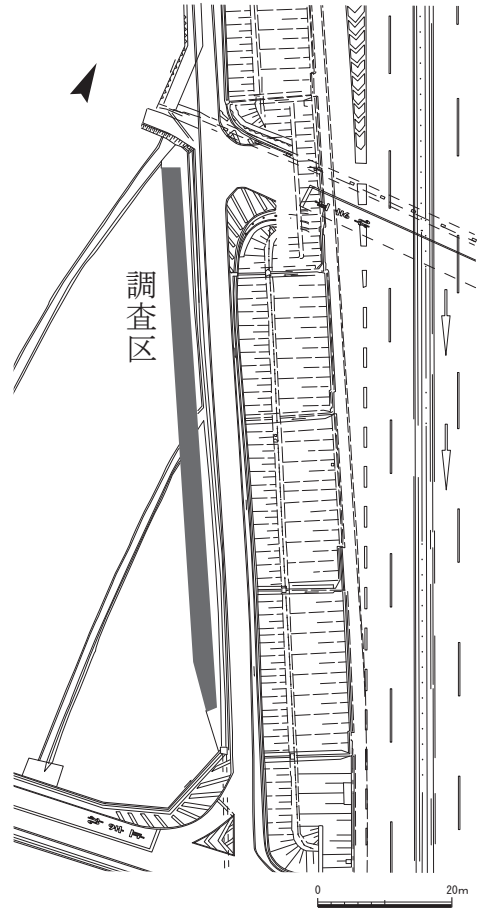
バイパス関連の調査で中期の方形周溝墓3基と溝状遺構が検出されている。北金岐遺跡は南金岐遺跡の北側に所在し、今回の調査地の北約100mに位置する。後期の集落遺跡であり、範囲は東西500m・南北600mと推定され、竪穴住居跡3基と大溝(幅約6m・検出長50m)が検出された。大溝からは大量の土器が出土し、水量調節の堰も検出された。天川遺跡(稗田野町天川地区)は中期の集落遺跡であり、11基の方形周溝墓が検出された。多くの周溝は8m前後を測る。

古墳時代の集落遺跡では、千代川遺跡と行者山南麓裾の鹿谷遺跡が知られる。千代川遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭に集落が形成され、前期～中期(前半)にその盛期を迎える。鹿谷遺跡(古墳時代中期～白鳳時代)では、100基近くの竪穴住居跡が検出されている。5世紀の遺物には陶質土器・大型甑・竈など渡来系色が強いものが含まれ、製塩土器・片刃逆刺鉄鏃など広範囲な交流を示すものが多い。6世紀以降では青野型住居跡など中丹地域の地域色が顕在化していく。このような地域間交流や土器・住居形態の変遷などから、鹿谷遺跡は口丹波地域の拠点集落の一つとみられる。古墳では、千代川遺跡の北西部丘陵に拝田古墳群、同西部丘陵に北ノ庄古墳群・小金岐古墳群(大井町小金岐地区)・鹿谷古墳群・鹿谷池田古墳群が知られる。拝田古墳群は17基からなる古墳群である。16号墳は全長44mの前方後円墳(6世紀前半)で、奥壁に石棚を有する横穴式石室をもつ。9号墳は8mの円墳で、横穴式石室玄室に石障が設けられている。10号墳は22～25mの楕円形墳である。埋葬施設は二段墓壇の木棺直葬墓で、棺内から内行花文鏡1面・鹿角装鉄剣1点・鉄刀1点・鹿角装刀子2点・玉類が、棺外から鉄刀・鉄鏃が出土している。北ノ庄古墳群(6世紀)は開発の影響で一部古墳が消失したものとみられるが、現在14基が残る。4号墳は14mの円墳で、横穴式石室の天井の一部が高い特徴がある。この中高式石室は北部九州系石室と呼ばれるものであり、伯耆・丹後地域にも類例が認められる。小金岐古墳群(6世紀)は行者山丘陵東斜面に営まれた総数200基を超える群集墳である。古墳の多くは円墳で、最大規模で直径約20m、多くは10m前後である。京都府下最大の群集墳である。1号墳(6世紀末)は直径20m・高さ3.5mと最大規模を測る。埋葬施設は両袖式横穴式石室で、玄室長4m・幅1.9m、羨道長5.0m・幅1.2mを測る。副葬品には須恵器・土師器・土玉・銀環、鉄刀・鉄鏃・刀子・留金具、滑石製紡錘車がある。鹿谷古墳群と鹿谷池田古墳群は、鹿谷遺跡背後の丘陵上と裾部に営まれる。鹿谷古墳群(中期～後期)は隣接する鹿谷池田古墳群と稗田野西山古墳群と支群を形成し、総数30基で構成される。特に鹿谷古墳群は学史上重要視される遺跡で、明治5年(1872)に大阪造幣局の技師であった英国人ウイリアム・ガーランドによって調査された。彼が記録した古墳は6基であり、そのうち3基(18～20号墳か)の横穴式石室には石棚が存在した。さらに両袖式石室の18号墳(後期)には石障も有している。18号墳からは、副葬品として石障内に小玉と耳環、西壁側に大刀と脚付きの子持ち壺が正立状態で検出された。さらに石棚上に金銅装の馬具が置かれていたという。石室や副葬品の内容から、被葬者は鹿谷遺跡と周辺集落を纏めた首長と判断される。現在これらの古墳は消滅している。

奈良・平安時代では、古代の官道の一つである山陰道が盆地内を通り、当地に丹波国府・丹波国分寺・丹波国分尼寺が置かれた。国分寺は桂川左岸の千歳町国分地区に位置している。国分尼

寺は河原林町河原尻に所在する。丹波国府所在地は未だに特定されていないが、千代川遺跡も国府推定地の一つであった。千代川町には「国司牧」・「国主ヶ森」など国府に関係が深い小字名が残る。京都縦貫自動車道建設工事に伴う発掘調査では、7世紀末から9世紀後半の掘立柱建物群や溝・流路・井戸が検出されたが、国庁に該当するような遺構は見つかっていない。各遺構から多数の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、木器、瓦、木簡、石帯などが出土し、一部の土器には「大家」、「中家」、「小家」、「大長」、「司」、「厨」などの墨書土器もみられた。これらは奈良～平安時代の官衙的性格を示す遺物である。国府推定地内には古代寺院の桑寺廃寺が存在する。府道拡幅工事の際、基壇状の高まりや築地もしくは柵列の一部が検出された。須恵器・土師器とともに素弁八葉蓮華文と複弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土し、創建年代は白鳳時代と推定される。

中世では千代川遺跡で掘立柱建物、井戸、溝、土坑が各所で検出されたほか、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などの遺物も多数出土している。太田遺跡では掘立柱建物8棟、井戸6基柵列、溝などの遺構が検出されている。土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、羽釜、鍋、銭貨、鍛冶滓が出土している。

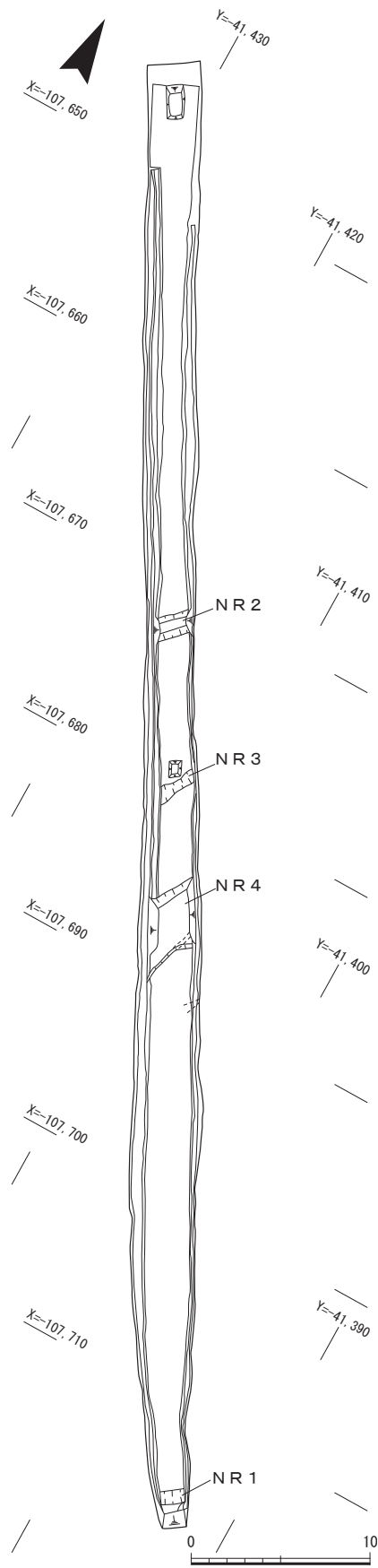


第3図 南金岐遺跡調査地位位置図

3. 南金岐遺跡の調査

1) 調査の概要と基本層序

調査地は、亀岡盆地西側の行者山(標高431m)東裾の扇状地に位置し、南北2筆に分かれた階段状の水田で、北側が高く標高約100.3mを測る。京都縦貫道路西側側道沿いに設定した調査区は南北に細長く、全長約90m・最大幅2.9mの規模を測る(第3図)。調査開始に伴い耕作土は排土置き場の横に仮置きしたのち、表層部の重機掘削を実施した。調査区の基本層序(第5図参照)は以下のとおりである。調査で検出した自然流路(NR 1～4)の埋土以外はほぼ水平堆積層である。1層は、オリーブ褐色小石混じり細砂層で、水田床土である。2層は明灰黄色小石混じり微砂、3層は暗オリーブ褐色粘質微砂である。4層は黄褐色粘質極細砂、5層は黄灰色粘質極細砂である。この2層から5層では、器表面が摩滅した土師器皿・瓦器椀片が含まれているが、いずれも細片が多く出土量も僅かである。6層は、花崗岩質のにおい黄色細砂(2mm大)～粗砂(5mm大)が調査区のほぼ全域に広がる。この砂層と下層の黒色シルトの境界面は凹凸面が形成されており、



第4図 検出遺構配置図

大規模洪水に関連する事象とみられる。この6層では、調査区中央付近から打製石鏃(第6図1)・須恵器杯身(8)・杯蓋(10)の出土をみた。7層は黑色シルトで遺物の出土は確認できない。

2) 検出遺構(第4図)

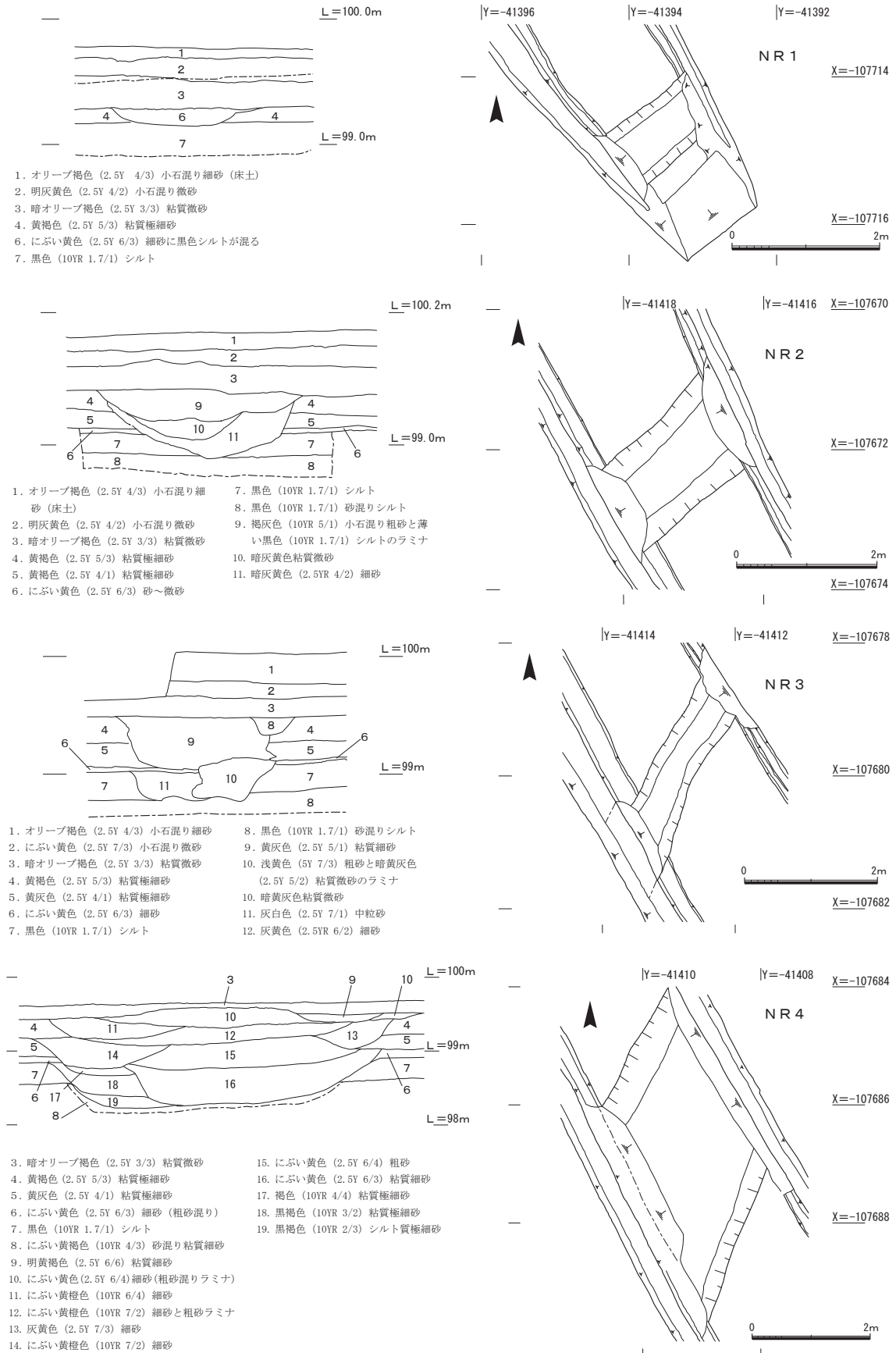
調査地の中央から南部にかけて4本の自然流路跡(NR 1~4)を検出したが、それ以外の遺構は確認できない。

自然流路NR 1(第5図) 調査区南端で検出した浅い流路跡である。主軸は北から東に51°振っている。検出長は1.35m、幅0.8m、深さ8cmの規模を測る。流路は黄褐色粘質極細砂(標高99.6m)を切り、埋土はにぶい黄色細砂であるが、所々に黑色シルトが混じっている。遺物は出土していない。

自然流路NR 2(第5図) 調査区中央から検出した流路跡である。主軸は北から東に約48°振っている。検出長は1.96m、幅1.3m、深さ0.53mの規模を測る。流路は第4層の黄褐色粘質極細砂(標高99.5m)を切り、堆積土は3層に分かれる。上層(第9層)は褐灰色小石混じり粗砂と薄い黑色シルトがラミナ堆積する。中層(第10層)は暗灰黄色微砂であり、水路内の南側に偏って堆積している。下層(第11層)は暗灰黄色細砂である。埋土中から遺物の出土はみられない。

自然流路NR 3(第5図) NR 2の南東約8.0mの位置で検出した。主軸は北から東に27°振る。検出長は2.6m、幅0.7m、深さ0.9mの規模を測る。流路は堆積土の状況から新旧2時期に分かれるが、時期差による位置の移動はみられない。西壁の精査の結果、標高99.1m付近ににぶい黄色細砂(第6層)が水平堆積する。第6層は旧流路の埋土である灰白色中粒砂(第11層)と周辺部を広範囲に覆う。新流路は標高99.5mの黄褐色極細砂(第4層)を切る状況にある。埋土上層は黄灰色粘質細砂(第9層)であり、下層はにぶい浅黄橙色粗砂と暗黄灰色粘質微砂のラミナ(第10層)である。この第10層では須恵器杯蓋・杯身(第6図6・9)が出土した。NR 3の北側約2mの位置で、第6層から須恵器杯蓋・杯身(第6図7・8・10)が出土している。

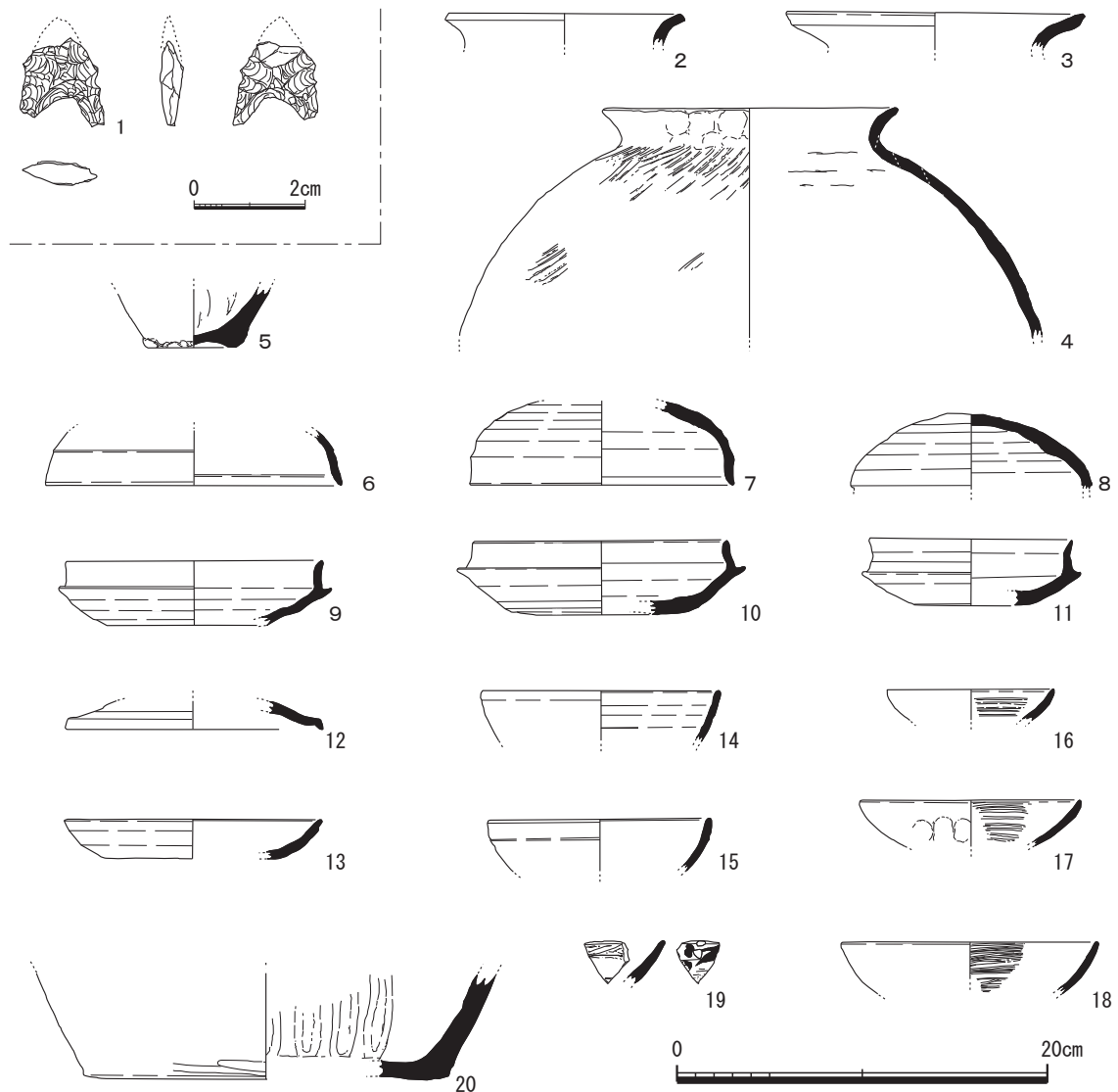
新流路は第6層堆積以前の流路であり、黑色シルト(第7層)を切り込む。堆積土の灰白色中粒砂(第11層)から須恵器



第5図 自然流路NR 1～4実測図

杯身(第6図11)が出土した。

自然流路NR4(第5図) NR3から南に約3.5m離れた位置で検出した。検出長約2.5m、幅約3.0m、深さ0.7mの規模を測る。主軸は北から東に約23°振っている。NR3と同様にほぼ同一場所で、時期差のある流路の変遷(3時期)が西壁断面の精査で判明した。もっとも新しい流路は第4層を切るもので検出面は標高99.5m、底面は99.05mである。堆積土はにぶい黄色～黄橙色の細砂と粗砂ラミナ(第10～12層)である。中間の流路は標高99.2mの黄灰色粘質極細砂(第5層)を切り込む。底面は98.8mである。この第5層も中世の遺物を含む。最下部の流路は標高98.9mの黒色シルトを切り込む。水路の深さは0.6m(標高98.3m)を測る。堆積土のうち上層はにぶい黄色粘質細砂(第16層)と褐色粘質極細砂(第17層)である。下層は黒褐色の粘質極細砂(第18層)と黒褐色シルト質極細砂(第19層)である。上部の第12層では弥生時代後期の甕口縁部(第5図2)が中世の土器に混じって出土している。最下層の第19層では弥生土器の甕と底部(第5図4・5)が出土した。特に甕(第5図4)は大小の破片が集中して出土した。



第6図 南金岐遺跡出土遺物

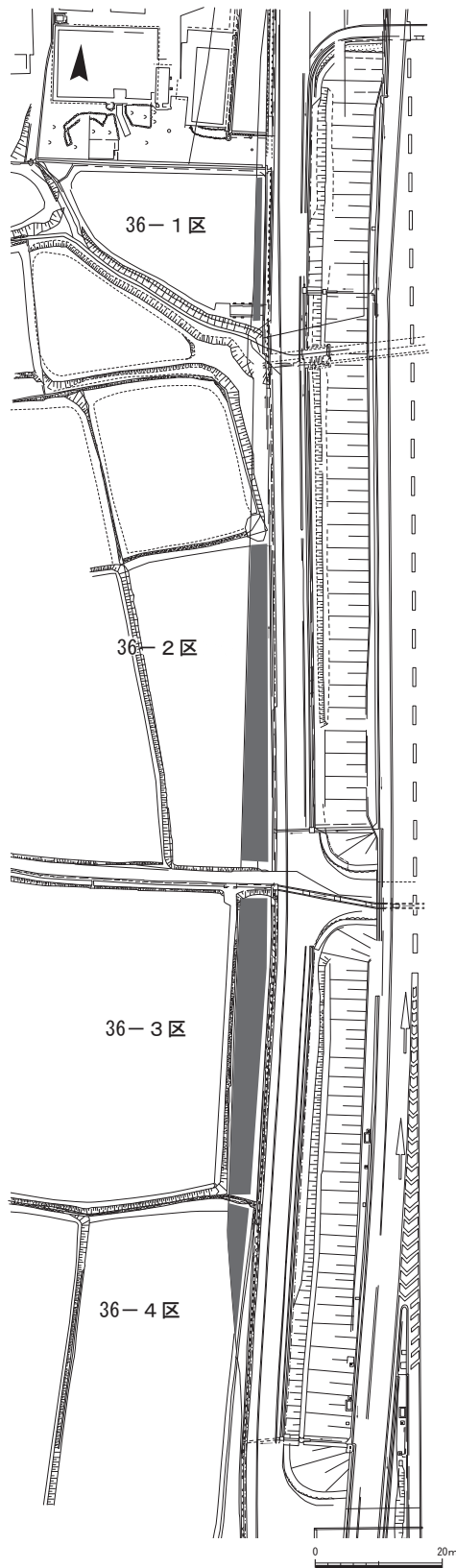
付表1 南金岐遺跡出土土器観察表

() : 復元値、〈 〉 : 現存値、- : 不明

番号	種類	器種	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率(口 縁)	色調	胎土	調整
2	弥生土器	甕口縁	NR 4 第12層	13.0	(1.7)	-	3/12	内・外： 浅黄橙色 (10YR8/3)	密径2mm以下の砂粒 を多く含む	内外：ヨコナデ
3	弥生土器	甕口縁	西壁第15層にぶ い黄色粗砂	16.0	(2.1)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	密径2mm以下の砂粒 を多く含む	内外：ヨコナデ
4	弥生土器	甕	NR 4 第19層	15.8	(12.4)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm大の石英粒含む。 砂粒多く含む	内： 外：並行タタキ
5	弥生土器	底部	NR 4 第19層	-	(3.1)	5.5	-	灰黄褐色 (10YR/2)	やや粗。3mm以下の砂 粒を多く含む	内：弱いヘラケズリ 外：凹底
6	須恵器	杯蓋	NR 3 第10層	16.0	(2.9)	-	1/12	灰色 (N4/0)	良好、1.5mm以下の砂 粒を含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、天井ヘラ ケズリ
7	須恵器	杯蓋	第6層	14.2	(4.5)	-	5/12	灰白色 (N7/0)	良好、チャートの小石 を含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、天井ヘラ ケズリ
8	須恵器	杯蓋	第6層	(13.0) 前後	(3.5)	-	-	灰白色 (N7/0)	良好、白灰色系の小石 を含む	内：回転ナデ 外：回転ナデ、天井回転 ヘラケズリ
9	須恵器	杯身	NR 3 第10層	(13.1)	(3.5)	(6.9)	1/12	灰白色 (N7/0)	良好、1mm以下の砂粒 を含む	内：回転ナデ 外：上部回転ナデ、天井 回転ヘラケズリ
10	須恵器	杯身	NR 3 北側、第 6層にぶい黄色 細砂	(13.2)	4.0	(6.0)	1/12	灰白色 (N7/0)	良好、2mm以下の砂粒 を含む	内：回転ナデ 外：上部回転ナデ、天井 回転ヘラケズリ
11	須恵器	杯身	NR 3 第11層灰 白色中粒砂	11.0	3.6	60.0	1/12	灰白色 (N7/0)	良好、1.5mm以下の砂 粒を含む	内：回転ナデ 外：上部回転ナデ、天井 回転ヘラケズリ
12	須恵器	蓋	第3層、黄褐色 粘質微砂	(13.8)	(1.8)	-	1/12	灰色 (N6/0)	良好、1mm以下の砂粒 を含む	内外：回転ナデ
13	須恵器	椀	東壁、暗灰黄色 粘質微砂	(11.8)	(2.8)	-	1/12	灰白色(N 8/0)	良好、2mm以下の砂粒 を含む	内外：回転ナデ
14	土師器	皿	第6層	(13.6)	2.1	-	2/12	灰白色 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、体部 未調整
15	瓦器	椀	東壁、灰黄褐色 粘質極細砂	(11.8)	(2.8)	-	1/12	灰白色 (10YR8/2)	良好、2mm以下の砂粒 を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ体部外 面未調整
16	瓦器	椀	東壁、灰黄褐色 粘質極細砂	(9.0)	(1.8)	-	2/12	内：灰白色 (N7/0) 外：暗灰色 (N3/6)	良好、1mm以下の砂粒 を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ体部外 面未調整。暗文
17	瓦器	椀	西壁、灰黄褐色 粘質極細砂	(12.0)	(1.8)	-	2/12	灰色 (N4/0)	良好、1mm以下の砂粒 を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ体部外 面未調整。暗文
18	瓦器	椀	西壁第5層黄灰 色粘質極細砂	(13.8)	(2.8)	-	1/12	黄灰色 (2.5Y4/1)	良好、2mm以下の黒色 砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ体部外 面未調整。暗文
19	染付	椀	西壁整形時	-	(2.8)	-	1/12	黄灰色 (2.5Y4/1)	精良	内外：呉須による施文
20	陶器	甕底部	重機掘削表採	-	(5.7)	19.8	1/12	褐灰色 (5YR5/1)	良好、2～3mm大の石 英を多く含む	内：体部下端、指頭によ るナデ上げ 外：体部下端ヘラ状工具 で一重の凹縁仕上げ

3) 出土遺物(第6図)

今回の調査で出土した遺物は少なく、整理コンテナ1箱であった。出土遺物は石器と土器である。1はチャート製の打製石鏃であり、今回1点だけの出土である。出土地点はトレンチ中央部、NR 4の南側やや離れた第6層中である。現存長1.6cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重量1.2gを測る。凹基式で、両面は丁寧な押圧剝離で刃部を整えるが、先端部を欠損する。2～5は弥生時代後期の土器である。甕2～4の口縁は単純に短く外反するが、3の端部は尖り気味に収める。4の甕体部は丸みが強く、外面は並行タタキを施す。口縁部と体部下半付近に煤の付着が認められる。NR 4第19層から出土した。5は甕底部である。外底部は凹面である。6～12は須恵器である。



第7図 千代川遺跡36次調査区配置図

6～8は古墳時代後期の杯蓋であり、9～11は杯身である。器表面は僅かながら摩滅がみられる。12は平安時代の須恵器蓋である。13は平安時代前期の土師器皿である。口縁部外面は二段にわたってナデ仕上げする。14～18は瓦器椀である。多くの瓦器椀は第4層を中心に出土している。19は染付椀の破片で、20は陶器甕の底部で、ともに近世に含まれる。出土地点は不確定であるが、第2層もしくは第3層出土とみられる。

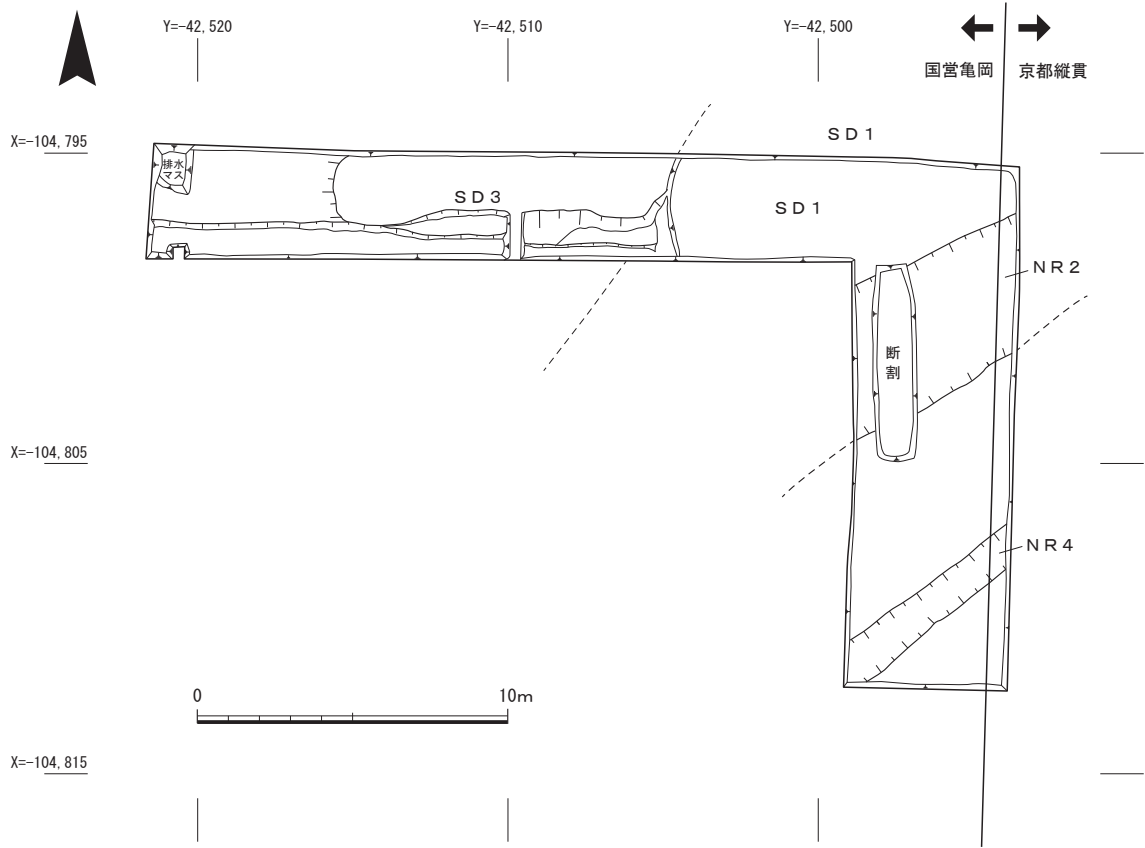
4) 小結

南金岐遺跡第2次調査では、人の手が加わった遺構を検出することはできず、4本の自然流路の存在を確認した。当地では黒色シルト(クロボク)層が広範囲に存在しており、その多くは扇状地の谷地形に厚く堆積する傾向が強い。集落は扇状地の中でも微高地を中心に営まれることから、今回の調査区は集落域から離れた位置に該当すると判断される。また、今回自然流路内を中心に弥生時代後期から古墳時代後期の土器の出土をみた。なかでも弥生土器の表面の摩滅が少ないことから近隣地に集落が存在する可能性を示唆する。調査区の西側山裾には現在、南金岐集落が存在している。この山裾の微高地を中心に古代集落が存在していると推測される。また、古墳時代後期の須恵器の出土は、西側丘陵に展開する京都府下最大規模の小金岐古墳群を築いた集団(集落)との関連を示すものであろう。

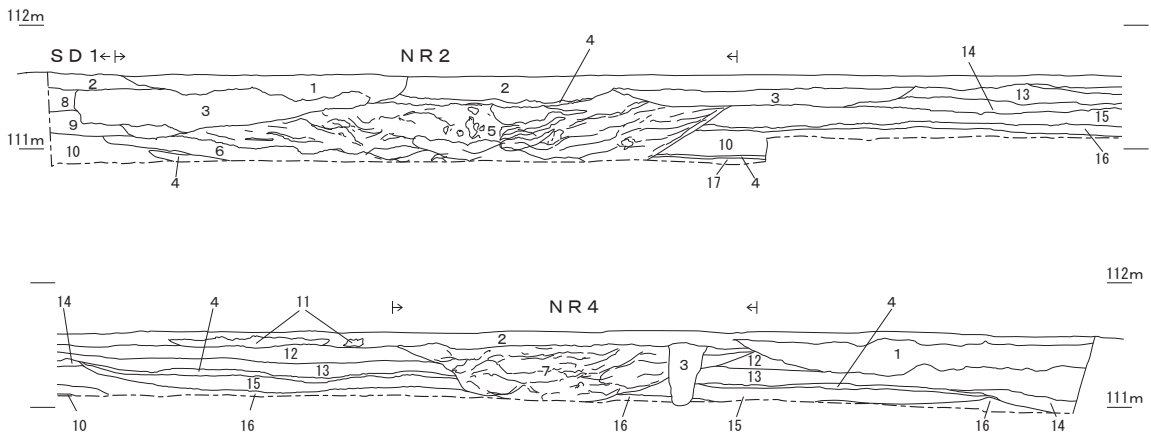
4. 千代川遺跡の調査

1) 調査の概要

千代川遺跡では、京都縦貫道の西側側道に沿って4か所の調査区を設けた。調査区は小河川・農道・畦畔で区切られ、北から南に順次36-1区～36-4区の地区名を付した。このうち36-1区と36-3・4区では、調査区西側で国営農地関連の発掘調査を同時に実施したことから、各々の調査範囲を示す境界を視覚的に明示することができなかった。境界に関しては調査区平面図(第8・13図)に示した。京都縦貫道の調査区は境

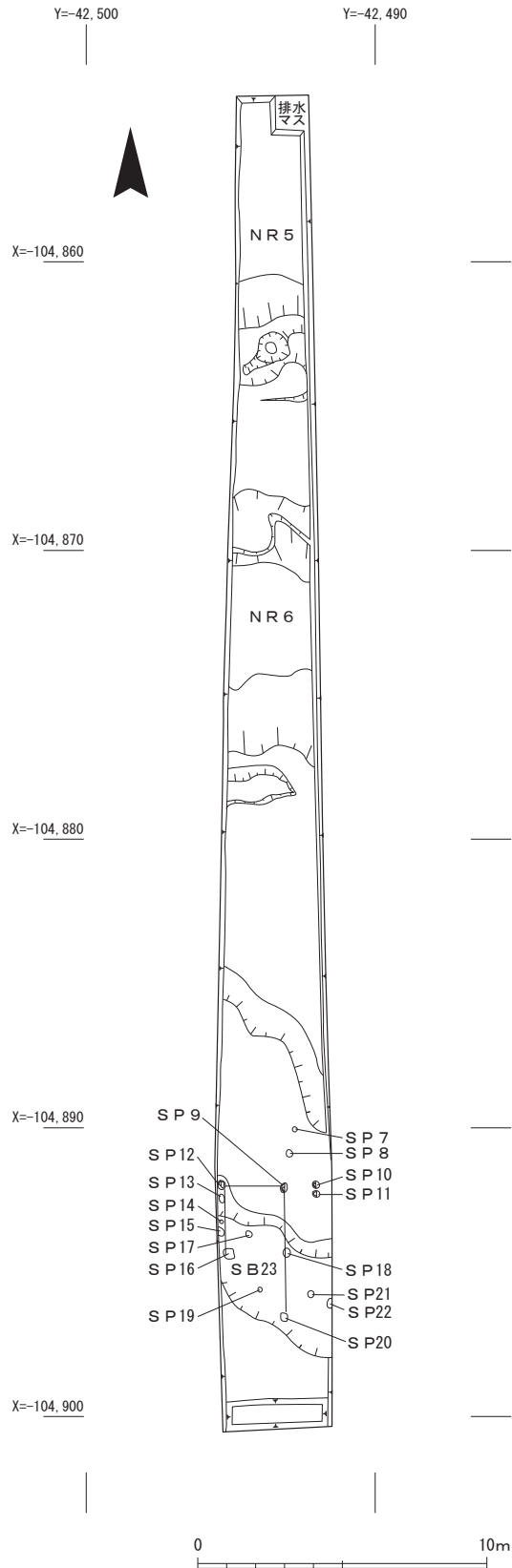


第8図 千代川遺跡36-1区検出遺構配置図



- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 攪乱 2. 暗褐色 (10YR 3/3) 小石混り砂質土 3. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質細砂 (暗キヨ) 4. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質極細砂 5. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質極細砂と浅黄色 (2.5Y 7/3) 粗砂のラミナ 6. 灰黄褐 (10YR 5/2) 粘質細砂 7. 6と浅黄色 (2.5Y 7/3) 粗砂のラミナ 8. 褐灰色 (10YR 6/1) 粘質細砂 9. 褐灰色 (10YR 6/1) 粘質細砂に少量の木石混り | <ul style="list-style-type: none"> 10. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 粘質細砂 11. 灰白色 (2.5Y 5/1) 粘質砂 12. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 極細砂 13. にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 極細砂 14. にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粘質極細砂 15. 灰白色 (2.5Y 8/2) 粘質微砂 16. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘質細砂 |
|--|--|

第9図 千代川遺跡36-1区東壁断面図



第10図 36-2区検出遺構配置図

界ラインの東側である。

2) 検出遺構

(1) 36-1区(第8・9図)

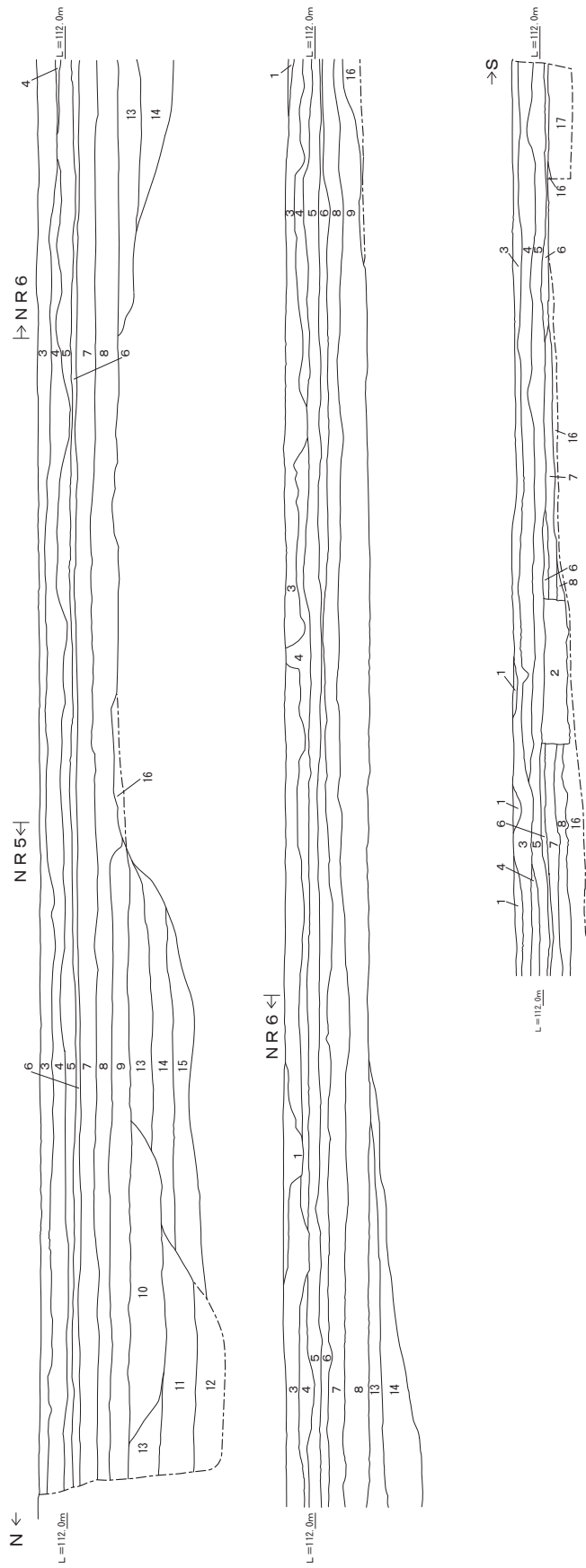
拝田古墳群が分布する北側裾に近い水田に設けた調査区である。現状は丘陵裾に沿って東西に流れる千々川支流の小河川の影響で谷地形となっている。調査区は南北に細長く、全長16.5m・幅約0.7mである。ここでは2本の自然流路(NR 2・4)を検出した。

自然流路NR 2 調査区北端部で検出した流路跡である。検出面(標高約111.4m)で幅約5mを測る。主軸は北から東に約71°振る。深さは排土置き場の制約から0.5mまでしか確認できなかったが、斜面の傾斜状況から底までは残り僅かと判断する。埋土は黒褐色極細砂と浅黄色粗砂のラミナ(第9図5層)が大部分を占める。ラミナは波打つような堆積状況がみられた。この第5層では須恵器杯底部(第14図5)が出土した。

自然流路NR 4 調査区南部で検出した。流路は標高111.5mの灰黄色極細砂から切り込まれ、底面は111.0mを測る。主軸は東から南に約11°振る。堆積土は灰黄色粘質細砂と浅黄色粗砂のラミナである。出土遺物はみられない。

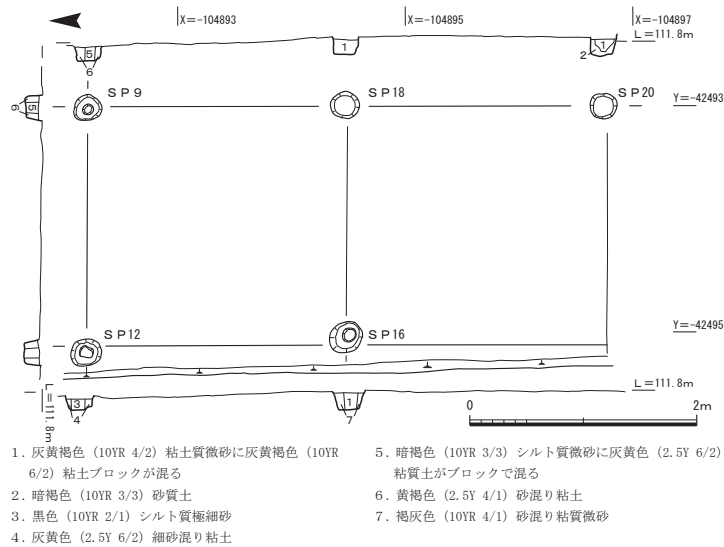
(2) 36-2区(第10~12図)

36-1区から小河川を挟んだ南側に位置する。現状は微高地であり、水田が営まれている。調査区は全長約46m・幅2~4mの規模を測る。遺構面を形成する地盤は固い浅黄色砂混じり粘質微砂(第16層)であり、調査区の南側の微高地(標高約111.9m)から、北の谷地形に向かって緩やかに下っていく。調査区最南端で角の取れた厚い礫層(第17層)を検出したが、この礫層は先述の第16層の下に潜る状況が確認できた。強い水流の堆積層とみられる。標高約111.6~



- 1. 攪乱
- 2. 暗渠
- 3. 暗褐色 (10YR 3/3) 小石混り粘質砂
- 4. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 小石混り細砂に暗褐色 (10YR 2/3) 粘質土ブロックが混る
- 5. 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質細砂
- 6. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細砂
- 7. 暗褐色 (10YR 3/2) 中粒砂混り粘質微砂 (中世遺物)
- 8. 黒褐色 (10YR 2/3) シルト質微砂
- 9. 灰白色 (10YR 3/1) 細砂
- 10. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 粗砂
- 11. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘質細砂
- 12. 灰白色 (2.5Y 8/1) 粗砂
- 13. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質微砂
- 14. 黒褐色 (10YR 2/2) シルト質極細砂
- 15. 黒褐色 (10YR 2/2) シルト
- 16. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂混り粘質微砂
- 17. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂礫 (5~10cm大)

第11図 千代川遺跡36-2区東壁断面図



第12図 36-2区SB23平・断面図

111.9mに暗褐色中粒砂混じり粘質微砂層(第7層)が水平堆積し、その範囲は調査区全体に及ぶ。この第7層中には土師器皿や瓦器椀の破片が含まれているが、調査区北側からの出土が多い。調査区内では、微高地面で総柱建物1棟(SB23)の一部を検出した。調査区北側の斜面部では2本の自然流路(NR5・6)を検出した。

掘立柱建物跡SB23(第12図)

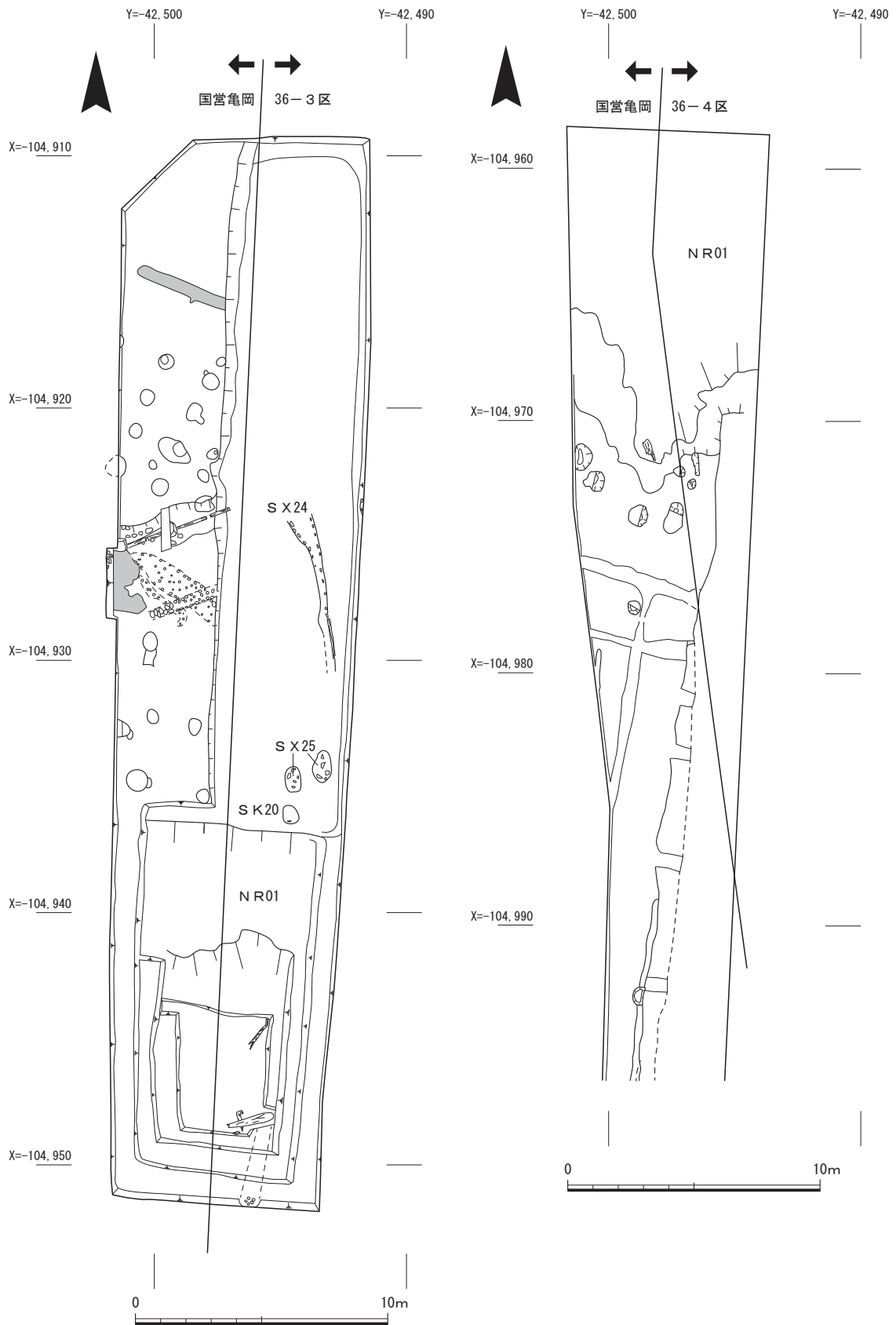
調査区南部の微高地から検出した建物跡である。幅の狭い調査区の制限上、建物の全容は不明である。建物柱穴は5基(SP9・12・16・18・20)を検出した。柱穴の掘形は円形で、直径は約0.25m・深さ約0.15m前後を測る。このうちSP9・12・18で柱痕跡が確認できた。柱痕跡は円形で直径0.12mを測る。柱穴列は整然と並ぶ。柱穴列1間の間隔は東西側が南北間より長い状況から、SB23は東西棟建物と推定される。柱痕跡の心々間距離は、東西の桁行がSP12とSP16間が2.32m、南北の梁間はSP9とSP12間は2.15mを測る。SP20の掘形埋土から瓦器椀(第13図38・41)が出土した。

自然流路NR5(第11図) 調査区の北端で南岸を検出したが、北岸部は調査区外で幅は不明である。流路は、南岸から調査区北端まで約8m分を検出した。流路の堆積土は標高110.4mまで掘削を行ったが、下端部からの湧水と東壁面の崩落が始まった。作業の安全を考慮した結果、これ以上調査ができないと判断した。調査区東壁の観察では、NR5の堆積土は黒褐色シルト質土(第13~15層)が厚く堆積するが、北端近くでは灰白~灰黄色系の細砂や粗砂(第10~12層)が黒褐色系シルトを切って堆積する。土砂の堆積が進むにつれ流路は規模を小さくし、土質も微砂~粗砂に変化していく。NR5第10層の上面は標高111.3mであり、NR5南岸の標高とほぼ合致する。慎重に調査を行ったが遺物は出土しなかった。

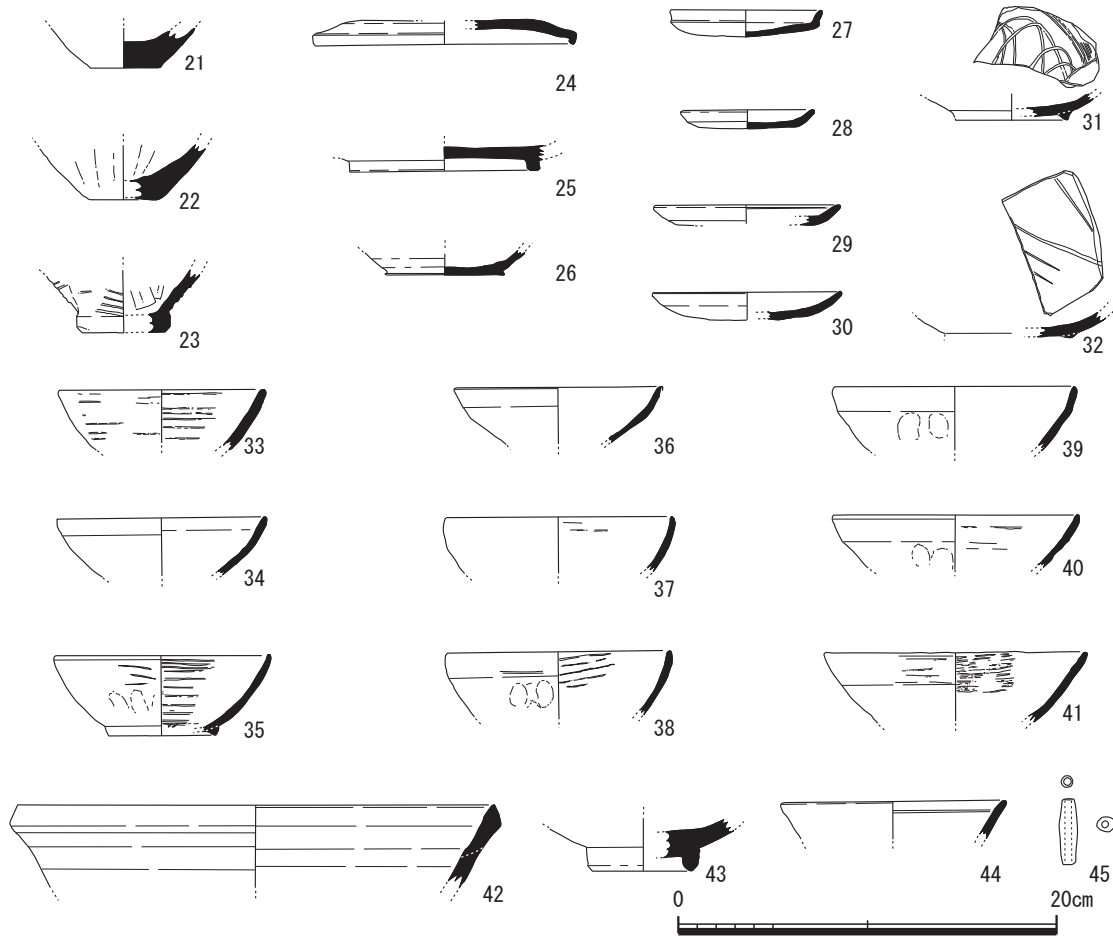
自然流路NR6(第10図) NR5の南側約6.3m離れた位置で検出した流路跡であり、その間は微高地となっている。流路は幅約9.4m・深さは0.8mを測る。検出面の標高は約111.4mを測る。堆積土は2層に分かれ、上層は黒褐色粘質微砂(第13層)、下層は黒褐色シルト質極細砂(第14層)である。小さな土器破片が出土したが、図化に至らない。詳細は不明であるが、弥生土器とみられる。

(3)36-3区(第13図)

調査区は、36-2区から農道を挟んだ南側に位置する。現状は、微高地に設けられた比高差約0.6mの2筆の水田があり、低い東側が今回の調査対象地となった。調査区は南北約41.5m・東西



第13図 36-3区・36-4区検出遺構配置図



第14図 千代川遺跡第36次調査出土遺物

約4.0～5.3mの規模を測る。西側の国営農地関連調査地では標高約111.8mで遺構面を検出したが、今回の調査面の標高は111.5mであるため、36-3区は大規模な削平を受け、多くの遺構がすでに失われていると判断される。検出した遺構は、土坑SK20・暗渠SX24・集石SX25・自然流路NR01である。

土坑SK20 調査区南部、NR01北岸で検出した。掘形は円形で、直径0.7m・深さ0.08mを測る。出土遺物はみられない。

暗渠SX24 北北西から南南東に直線的の伸びる暗渠の一部であり、調査区中央で検出した。幅約0.3～0.9mの素掘り溝であり、検出長は約6mを測る。溝内には拳大の川原石と枝を払った細い丸太を入れ込む。方位は北から西に20°振っている。出土遺物はみられない。

集石SX25 NR01北岸で検出した。周囲が砂と粘質土が広がる中で、直径約1mの範囲に拳～人頭大の川原石が集中する状況から、集石遺構と判断した。集石は2か所に分かれ、約0.8mの間隔が空く。精査を行ったが、掘形や遺物がなく性格は不明である。

自然流路NR01 調査区南端で流路の北岸部を検出した。流路南岸部は南隣の36-4区で検出している。両区の検出状況から、流路幅は約33mと判明した。方位は東から南に6°振っている。検出面は標高約111.6m、最深部は約108.6mである。堆積土は暗オリーブ褐色～黒褐色シルト質

極細砂である。底面近くから板材や丸太の出土がみられた。

(4)36-4区(第13図)

最南端の調査区である。上下2段の水田のほぼ下段が該当する。調査区の形状は二等辺三角形に近く、頂点は南側である。規模は全長約30mを測る。36-3区と同様に遺構面は大きく削平を受けている。ここでは36-3区から続くNR01の南岸を検出した。検出地点は調査区北端から南約12m付近に位置する。他に遺構は存在しない。

3)出土遺物(第14図)

全て36-2区から出土した遺物である。21~23は弥生土器の底部である。21は遺物包含層の第7層から出土した。22・23は自然流路NR6第13層の出土である。21は平底であるが、23は凸基底である。23は体部外面を並行タタキする。24・25は瓦器を含む第5層と第7層から出土した須恵器である。24は転用硯として再利用された杯Bの蓋である。天井部内面は特に平滑で摺り面となる。25は杯Bの底部である。26は平底椀の底部で、底面には回転糸切痕が残る。27~30は、第7層から出土した土師器皿である。31~41は、瓦器椀である。38・41の2点は、総柱建物SB23の柱穴SP20から出土した。他の瓦器椀は第7層から出土し、全体的にローリングの影響を受け摩滅が進行している。42は須恵質鉢の口縁部、43は陶器椀の底部である。いずれも第7層から出土した。43は削り出し高台で、内外両面は施釉(灰オリーブ色)している。44は青磁椀の口縁部である。釉薬は灰黄色である。45は土師質の土錘(漁労具)である。体部中央に直径3mmの円柱孔を通す。

4)小結 今回の千代川遺跡第36次調では、京都縦貫道路の西側の遺跡の状況が確認できた。調査地は北と西側の丘陵裾に近く、扇状地は千々川や支流の小河川により微高地と谷部が幾重にも連なる状況が明らかになった。谷地形は流路跡でもある。底面付近では、弥生土器(第14図22・23)の出土も確認されている。流路の多くは中世の終わり頃には埋没したとみられる。36-1区NR2・4は砂礫の堆積が耕作土直下にまで及び、近代まで土砂の堆積が続いたとみられる。36-2区は微高地である。ここでは中世の掘立柱建物SB23を検出した。中世の集落は建物が密集することなく各微高地に点在するとみられる。

付表2 千代川遺跡出土土器観察表

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
21	弥生土器	底部	2区中央	第7層、暗褐色(10YR3/2)中粒砂混じり粘質微砂	—	(2.1)	3.7	2/12	浅黄褐色(10YR8/3)	密径2mm以下の砂粒を多く含む	内：ヘラケズリ 外：ナデ	
22	弥生土器	底部	2区北部	NR6第13層	—	(2.9)	3.6	2/12	内：褐灰色(10YR5/1) 外：灰白色(10YR8/2)	密径2mm以下の砂粒を多く含む	内：ヘラケズリ 外：摩滅、調整不明	
23	弥生土器	底部	2区北部	NR6第13層	—	2.5	4.3	2/12	にぶい黄褐色(10YR7/3)	密径2mm以下の砂粒を多く含む	内：ヘラケズリ 外：並行タタキ	
24	須恵器	蓋	2区北部	東壁第7層、暗褐色(10YR3/2)中粒砂混じり粘質微砂	14.0	(1.3)	—	1/12	褐灰色(10YR6/1)	密径1mm以下の砂粒を多く含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、天井面ヘラ切り未調整	転用硯、内天井面に摺り面あり

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
25	須恵器	杯底部	1区北部	NR 2 第5層	—	1.0	10.0	1.5/12	灰色 (N6/0)	密 径1mm以下の砂粒を多く含む	内：回転ナデ 外底面：、ヘラ切り未調整	貼付け高台
26	須恵器	杯底部	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	(1.3)	6.1	5/12	灰色 (N6/0)	蜜 1mm以下の砂粒を含む	内外：回転ナデ 外底面：回転糸切	
27	土師器	皿	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	7.8	1.4	—	完形	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	
28	土師器	皿	2区南部	東壁第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	6.8	1.0	—	2.5/12	橙色 (7.5YR7/6)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	
29	土師器	皿	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	9.8	(1.1)	—	1.5/12	灰白色 (10YR8/2)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	
30	土師器	皿	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	9.8	(1.5)	—	1.5/12	灰白色 (2.5Y8/2)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	
31	瓦器	椀	2区中央	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	(1.4)	6.0	2.5/12	灰色 (N4/0)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	内面・見込みに暗文 貼付け高台
32	瓦器	椀	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	(1.3)	(6.4)	4.5/12	暗灰色 (N3/0)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	見込みに暗文 貼付け高台
33	瓦器	椀	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(10.8)	(3.3)	—	1.5/12	暗灰色 (N3/0)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部未調整	内：粗い暗文 外：口縁に粗い暗文
34	瓦器	椀	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(12.0)	(3.1)	—	1.5/12	灰色 (N5/0)	良好 1mm以下の砂粒を含む	器表面摩滅、調整不明	
35	瓦器	椀	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(11.2)	4.2	—	1.5/12	灰色 (N5/0)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部ユビオサエ未調整	内：粗い暗文 外：口縁に粗い暗文
36	瓦器	椀	2区北部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	12.0	(2.9)	—	2.5/12	暗灰色 (N3/0)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	器表面摩滅、調整不明	
37	瓦器	椀	2区南部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	12.0	(3.0)	—	1.5/12	褐灰色 (10YR5/1)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	器表面摩滅 内：粗い暗文	内：粗い暗文
38	瓦器	椀	2区南部	S B 23 - P20 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	(11.8)	(3.4)	—	1/12	暗灰色 (N3/0)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部ユビオサエ未調整	
39	瓦器	椀	2区南部	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(12.8)	(3.5)	—	1/12	暗灰色 (N3/0)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部ユビオサエ未調整	
40	瓦器	椀	2区中央	第7層、暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(13.1)	(2.8)	—	1/12	灰白色 (10YR7/1)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部ユビオサエ未調整	内：粗い暗文 外：口縁に粗い暗文
41	瓦器	椀	2区南部	S B 3 - P20 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	(13.8)	(3.7)	—	1/12	暗灰色 (N3/0)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	内：回転ナデ 外：口縁回転ナデ、底部ユビオサエ未調整	内：粗い暗文 外：口縁に粗い暗文
42	須恵質	捏ね鉢	2区北部	西壁第7層暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	(25.2)	(4.8)	—	1/12	黄灰色 (2.5Y6/1)	良好 1mm以下の砂粒を含む	内外面：回転ナデ	
43	陶器	椀底部	2区北部	東壁第7層暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	(2.7)	6.0	3/12	灰オリブ色 (7.5Y6/2)	蜜 1mm以下の砂粒を含む	高台：削りだし 内外面：施釉	内外面：施釉
44	青磁	椀	2区北部	東壁第7層暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	(2.8)	—	—	釉 灰黄色 (2.5Y6/2)	蜜	内：ろくろナデ 外：へ回転ラケズリ	
45	土師質	土錘	2区北部	東壁第7層暗褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じり粘質微砂	—	3.5	幅 1.0	完形	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	良好 0.5mm以下の砂粒を含む	体部中央に径3mmの紐通し穴 外：ナデ	

3. 芝山遺跡・芝山古墳群第22次 (X-1・2区)発掘調査報告

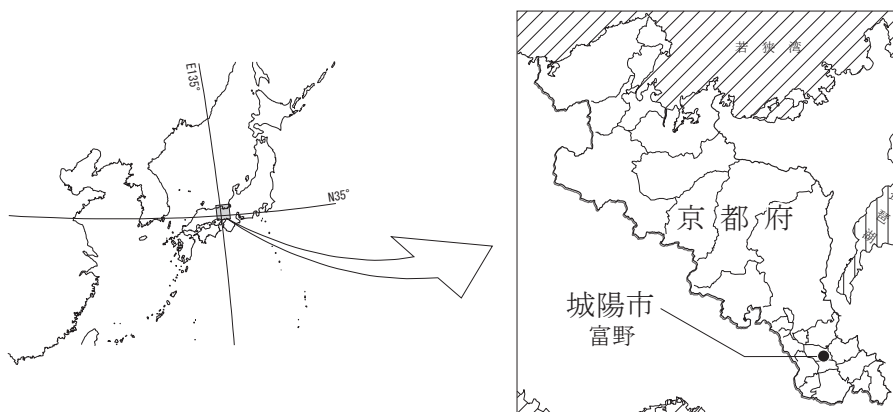
1. はじめに

今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業(大津～城陽)に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。新名神高速道路は愛知県名古屋市を起点とし、兵庫県神戸市に至る総延長約174kmの高速道路である。既存の名神高速道路や京滋バイパス、近畿自動車道などと交通機能を分担することで、名神高速道路等の渋滞の緩和、利用者の利便性の向上を図ることを目的として建設が進められている事業である。新名神高速道路の予定路線のうち、京都府内では宇治田原町、城陽市、京田辺市、八幡市を通過する路線として17.7kmが計画された。このうち、本書で報告する芝山遺跡・芝山古墳群が所在する城陽市域には、この他に下水主遺跡・水主神社東遺跡・小樋尻遺跡が所在する。

発掘調査は、下水主遺跡で平成24年度～令和3年度(第1・4・6・9～12次)、水主神社東遺跡で平成23年度～令和元年度(第1・2・5～8・11・13次)、小樋尻遺跡で平成29年度～令和2年度(第3・5・6・8・11次)、芝山遺跡・芝山古墳群で平成27年度～令和3年度(第15～21次)に実施されている。このうち、下水主遺跡と水主神社東遺跡第1・2・5～7次調査、芝山遺跡・芝山古墳群については、報告書が刊行されている^(注1)。

新名神高速道路整備事業に伴う平成27年度～令和3年度の芝山遺跡・芝山古墳群の発掘調査では、A地区からW地区の調査区名が付けられていたことから、今回の調査区はX地区とした。

今回の調査区は、3か所に分かれることから調査順にX-1地区、X-2地区、X-3地区とした。X-1・2地区は、新名神高速道路と一般府道山城総合運動公園城陽線(府道256号)が立体交差する南西側にあたる。X-1地区は、平成14年度の一般府道上狛城陽線(現在の一般府道山城総合運動公園城陽線)建設に伴う第13次調査E地区の北西隅、X-2地区は南西隅に接している。X-3地区は、X-1・2地区から東へ約230mの所で、令和2年度のV-5地区の南側に接して



第1図 調査地の位置

いる。なお、X-3地区では令和2年度の調査で確認したV-2号墳の埋葬施設を2基検出し、副葬品等がまとまって出土したことから、整理作業及び報告書の刊行は次年度以降に行うこととした。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会のほか、各関係機関、地元の方々にご指導・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が全額負担した。本文は、現地調査を担当した調査課副主査小泉裕司が執筆した。

〔調査体制〕

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第4係副主査	小泉裕司

調査場所 京都府城陽市富野中ノ芝

現地調査期間 令和5年5月22日～令和5年7月28日(X1・2区)

整理作業期間 令和5年8月1日～令和6年3月29日

調査面積 378㎡

2. 遺跡の環境

1) 地理的環境

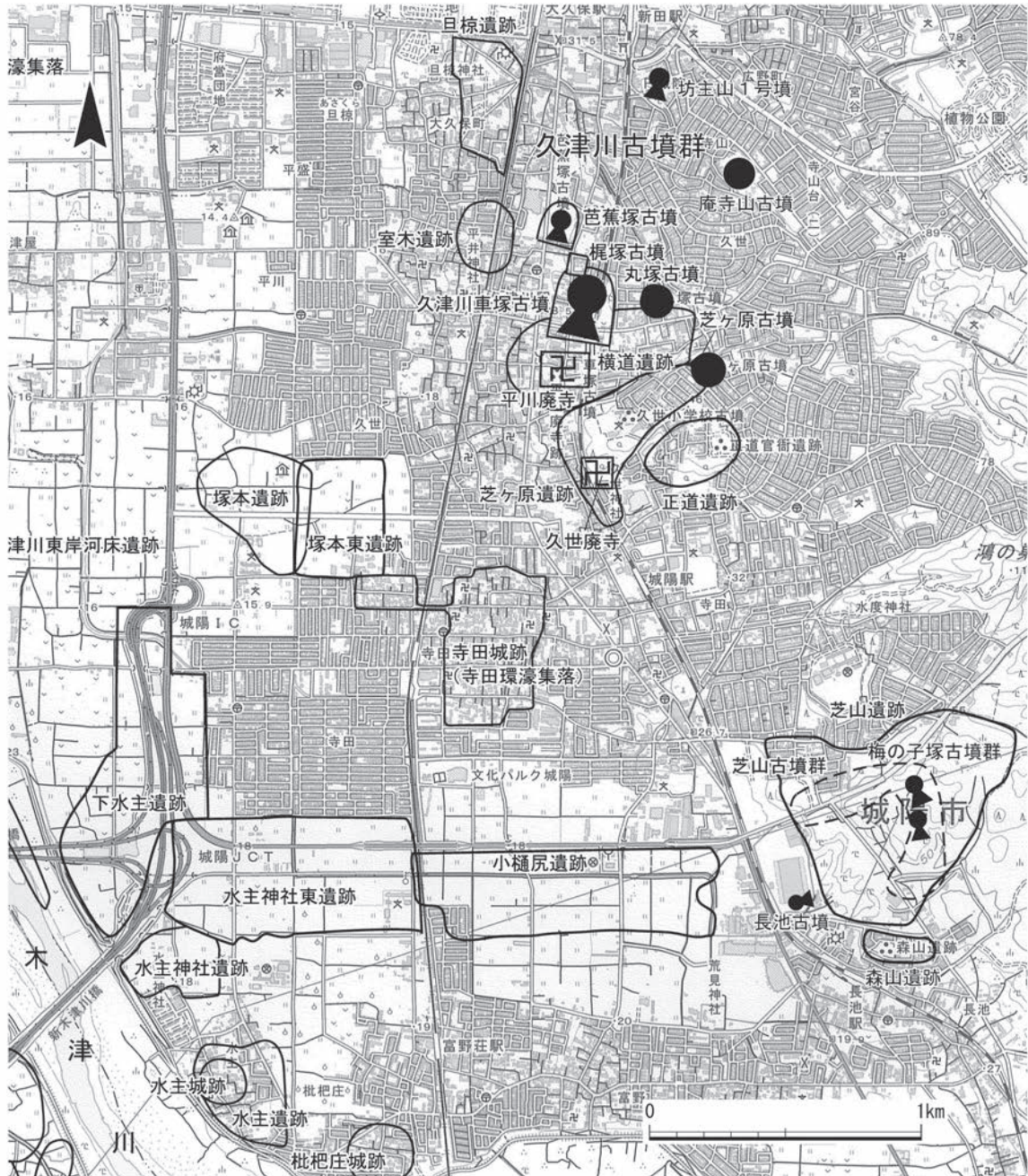
芝山遺跡・芝山古墳群が所在する城陽市は、近畿地方のほぼ中央部の内陸に位置する。市域は南北5.4km、東西9.0kmで東西にやや長く、東部の山地・丘陵と西部の平野に大きく二分される。市域の東部を南北にのびる山地は、鷲峰山(682m)山塊に連なるもので、市域最高地点は片原山(433m)である。山麓には、宇治丘陵と呼ばれる大阪層群からなる洪積丘陵が東から西へのびている。宇治丘陵からは、北から大谷川、長谷川、青谷川が西へ流下し、扇状地を形成している。市域西部には木津川が形成した沖積平野が、河川に平行して南北に広がっている。^(注2)

2) 歴史的環境

市域では、主に縄文時代から奈良時代の遺跡が知られるが、市域北部の大谷川扇状地周辺に集中する傾向がある。

市域における最も古い人々の営みの痕跡としては、大谷川扇状地南側の丘陵上に所在する芝ヶ原遺跡で約2万年前の舟底形石器とナイフ形石器が出土している。

縄文時代には、芝山遺跡・芝山古墳群の南側の丘陵上に所在する森山遺跡で後期後半の集落が営まれている。また、芝山遺跡・芝山古墳群や森山遺跡が所在する丘陵の西側に広がる平野部では、水主神社東遺跡で縄文時代後期～晩期の自然流路内に設置された木組み遺構や木道、杭列、小樋尻遺跡で縄文時代晩期の竪穴建物や土器棺が確認されている。このほかに下水主遺跡の自然流路から縄文時代晩期の土器、小樋尻遺跡の自然流路から縄文時代後期～晩期の土器が出土して

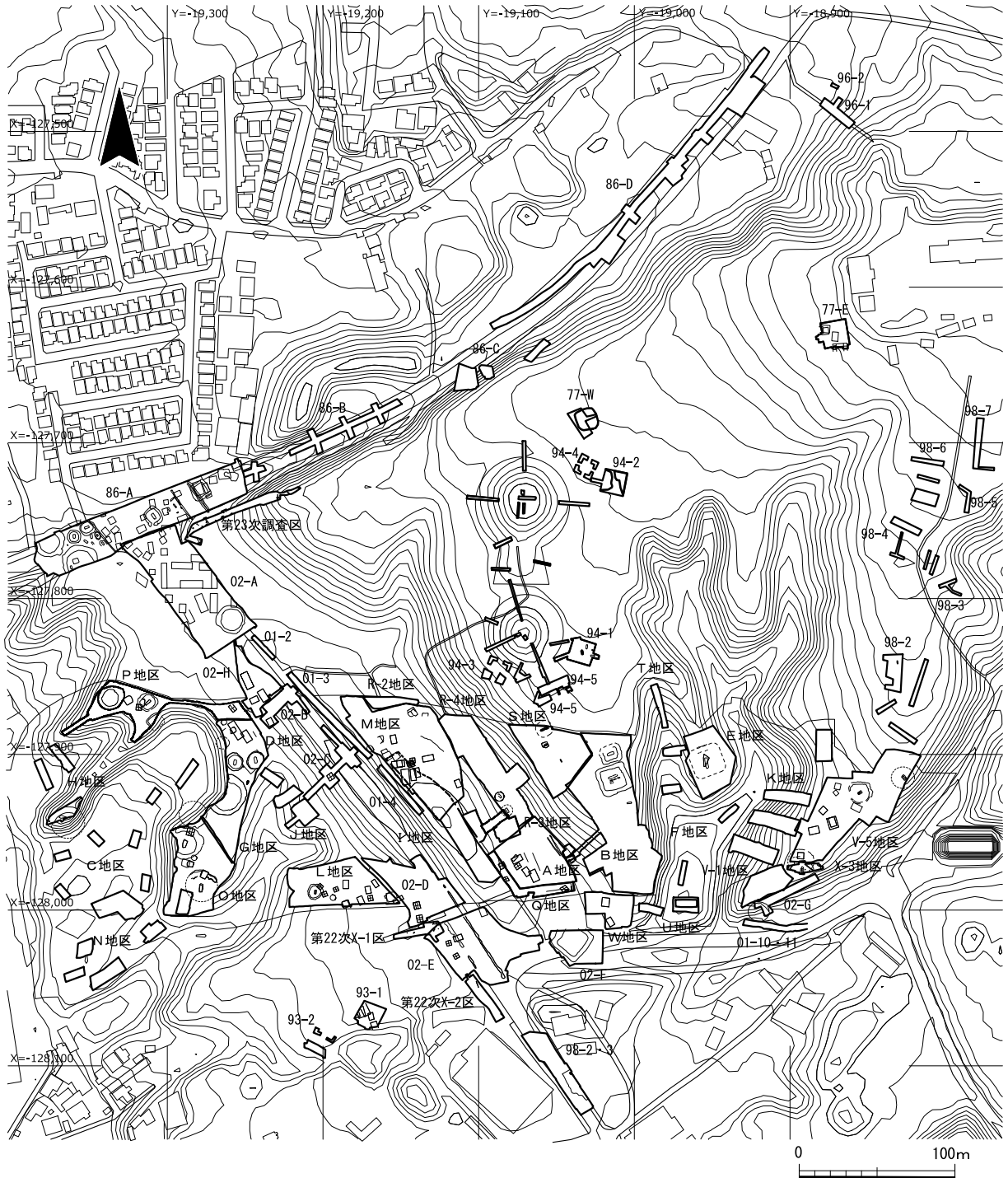


第2図 周辺遺跡分布図(25,000分の1)

いる。これら近年の調査により、平野部における縄文時代後期～晩期の縄文人の営みが明らかになりつつある。

弥生時代の人々の営みを知る遺跡は少ないが、森山遺跡や下水主遺跡で弥生時代後期の小規模な集落が営まれている。

古墳時代初めには、大谷川扇状地南側の丘陵上に芝ヶ原古墳が築造される。これを契機として、大谷川扇状地とそれを望む丘陵上を中心に古墳時代前期～後期にかけて有力首長墳が連綿と築かれ、久津川古墳群が形成される。古墳時代前期には、西山古墳群、尼塚古墳群、上大谷8・15号墳、尼塚方墳などが築造される。また、芝山遺跡・芝山古墳群が所在する同じ丘陵上には前方後円墳2基からなる梅の子塚古墳群が築造される。古墳時代中期には、南山城地域最大の前方後円



- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 77-0 : 第1次調査 『城陽埋蔵文化財調査報告書』第7集 | 01-0 : 第10次調査 『京都府遺跡調査概報』第105冊 |
| 86-0 : 第2・3次調査 『京都府遺跡調査概報』第20冊・第25冊 | 02-0 : 第13・14次調査 『京都府遺跡調査概報』第110冊 |
| 93-0 : 第4次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | A~W地区(第15~21次調査) |
| 94-0 : 第5次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | 『京都府遺跡調査報告集』第189冊 |
| 96-0 : 第6次調査 『京都府遺跡調査概報』第77冊 | X地区 第22次調査 本報告書 |
| 98-0 : 第8次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集 | 第23次調査区 『京都府遺跡調査報告集』第194冊 |
| ※地図中央南端 | |
| 98-0 : 第9次調査 『京都府遺跡調査概報』第89冊 | |
| ※地図中央東端 | |

第3図 芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図

墳である久津川車塚古墳(全長272m)や芭蕉塚古墳(全長161m)が築造され、古墳時代中期に南山城地域を治める大首長がこの地に存在したことを示している。この他に丸塚古墳・梶塚古墳・芝ヶ原9・10号墳などが築造される。古墳時代後期には、芝ヶ原1～7号墳や上大谷1～5号墳などが築造される。また市域南部の青谷地域では、久津川古墳群ではほとんどみられない横穴式石室を埋葬施設とする冑山古墳群、黒土1号墳、茶臼塚古墳などが築造される。古墳時代後期に最新の技術を有した新興の有力首長が青谷地域に出現したことを示している。一方、古墳時代の集落は、平野部に所在する塚本東遺跡で古墳時代初めの集落、森山遺跡で古墳時代前期の有力首長の居館跡とされる方形周溝状遺構や竪穴建物が確認されている。

古墳時代末から飛鳥時代には、大谷川扇状地周辺に所在する正道遺跡、芝ヶ原遺跡、古宮遺跡、横道遺跡、室木遺跡で集落が造営され始め、奈良時代まで存続する。

奈良時代には、大谷川扇状地に平川廃寺、その南側丘陵端に久世廃寺、南側丘陵上に久世郡衙と推定される正道官衙遺跡が造営される。奈良時代には、大谷川扇状地周辺が南山城地域における政治・文化の中心のひとつであったことを示している。

3) 芝山遺跡の既往調査

芝山遺跡は東から西へ延びる丘陵上に所在し、東西約950m、南北約840mを遺跡範囲とする縄文時代から中世の複合遺跡である。昭和52年度に城陽市教育委員会により関西電力株式会社の送電用鉄塔の建設に伴う発掘調査が初めて行われ、以降平成15年度まで断続的に、府道の建設や関西電力株式会社の送電用鉄塔の建て替えに伴う発掘調査が当調査研究センターと城陽市教育委員会により実施されている。平成27年度から令和2年度には新名神高速道路建設に伴う発掘調査を当調査研究センターが実施している。これまでの発掘調査では、縄文時代から弥生時代には縄文土器や弥生土器、石器が出土しているが、集落などの人々の営みを示す遺構は確認されていない。古墳時代前期には竪穴建物2基が確認され、小規模な集落が営まれている。古墳時代後期末ごろから竪穴建物が造られ、大規模な集落が営まれる。この集落は飛鳥時代後半に掘立柱建物へ移行し、平安時代初めまで存続する。掘立柱建物の大半は奈良時代のもので、特に奈良時代前半には官衙的な建物群が出現する。また、官衙的建物群の東側を南北に平行して走る溝が部分的に検出されており、道路遺構の側溝の可能性が指摘されている。平安時代初め以降は、中世と推定される掘立柱建物1棟の他には顕著な遺構は確認されておらず、中世の瓦や輸入陶磁器がわずかに出土している程度である。近世以降は耕作溝や粘土採掘坑が確認されており、耕作地などとして土地利用されている。

芝山遺跡内では、昭和52年度の第1次調査で一辺約11mの方墳1基が確認され、その後昭和60年度の第2次調査で10～20mの方墳や円墳が10基、平成6年度の第5次調査で一辺約11m程度の方墳3基が確認された。これらのことから芝山遺跡内に削平された10～20mの方墳や円墳が多数存在することが想定されたため、芝山古墳群として取り扱われるようになった。芝山古墳群では、これまでの調査で4世紀末～6世紀末に築造された10～20mの方墳や円墳が、39基確認されている。^(注3)

付表1 芝山遺跡・芝山古墳群調査回数一覧表

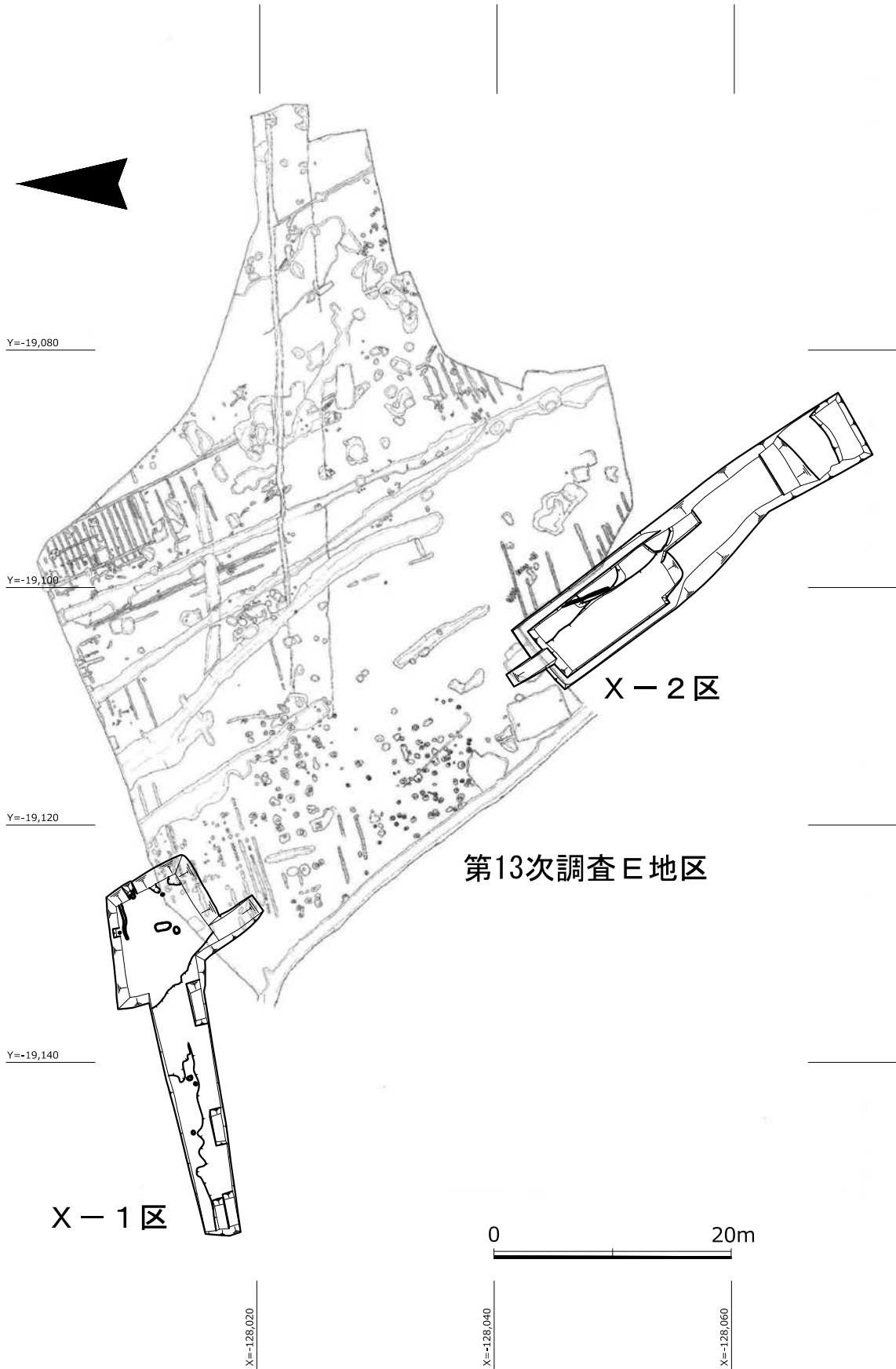
年度	回数	調査期間	調査面積	調査機関	報告書	発行年	備考
昭和52年度	1次	1977.4.1～ 1977.5.2	560㎡	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集	1978年	
昭和60年度	2次	1985.5.21～ 1986.3.25	3,760㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第20冊	1986年	
昭和61年度	3次	1986.5.6～ 1986.9.2	4,960㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第25冊	1987年	
平成5年度	4次	1994.2.1～ 1994.3.26	300㎡	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集	1995年	
平成6年度	5次	1994.8.1～ 1995.1.31	753㎡	城陽市教育委員会			
平成7年度	—	1995.12.20～ 1995.12.21	14㎡	城陽市教育委員会	—	—	試掘
平成8年度	6次	1996.12.17～ 1997.1.27	180㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第77冊	1997年	
平成9年度	7次	1997.3.17	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第34集	1998年	試掘
平成10年度	8次	1998.5.12～ 1998.10.31	1,089㎡	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集	1999年	
平成10年度	9次	1998.12.9～ 1999.2.18	680㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第89冊	1999年	
平成13年度	10次	2001.12.17～ 2002.2.27	1,600㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第105冊	2002年	
平成13年度	11次	2002.1.31～ 2002.2.8	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第44集	2003年	試掘
平成14年度	12次	2002.5.9～ 2002.5.31	240㎡	城陽市教育委員会			
平成14年度	13次	2002.7.8～ 2003.2.27	4,500㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第110冊	2004年	
平成15年度	14次	2003.4.16～ 2003.8.13	1,800㎡	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
平成27年度	15次	2016.1.26～ 2016.3.4	550㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
平成28年度	16次	2016.4.25～ 2017.3.7	7,000㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
平成29年度	17次	2017.4.17～ 2018.2.27	2,865㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
平成30年度	18次	2018.4.12～ 2018.9.4	2,855㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第189冊	2023年	
平成30年度	19次	2018.7.9～ 2019.2.27	3,028㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
平成31年度	20次	2019.4.22～ 2020.2.27	5,559㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
令和2年度	21次	2020.5.7～ 2021.2.26	4,850㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター			
令和5年度	22次	2023.5.22～ 2023.10.30	492㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告書、 X-III地区未報告	2024年	
令和5年度	23次	2023.8.1～ 2023.10.25	350㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告集	2024年	

3. 調査概要

1) X-1地区

(1)基本層序

基本層序は、盛土、にぶい黄褐色粘質土層(第6・7図第1層)及び褐灰色粘質土層(第7図第2層)の堆積土、黄褐色系粘質土層(第6図第2・4層)、にぶい黄橙色粘質土(第7図第6層)である。黄褐色系粘質土層(第6図第2・4層・第7図第6層)が地山層で、遺構検出面となる。



第4図 X-1・2区調査トレンチ配置図

(2) 検出遺構

調査区東半は東西約11m、南北約10mで、調査区西半は東西約20.5m、南北約4mである。遺構は地山層で検出し、遺構の検出標高は34.9mである。

調査区東半は、調査区の南側半分が第13次調査E地区と重なる。遺構は、溝1条(S D01)と土坑3基(S K02・03・04)、ピット状遺構1基を検出した。溝S D01は、調査区北壁沿いで検出した東西溝で、幅は約25cm、深さは2～10cm、検出長は約3mである。西端は調査区内で途切れ、東側は調査区外へ延びる。埋土からの出土遺物はなかった。土坑S K02・03は、調査区中央付近で検出した楕円形状土坑である。土坑S K02は、南北長が約1.3m、東西長が約0.7m、深さが約28cmある。埋土からの出土遺物はなかった。土坑S K03は、南北長が約0.95m、東西長が約1.2m、深さが約24cmある。埋土からの出土遺物はなかった。土坑S K04は調査区東壁沿いで検出した不定形状の土坑で、可能な限り拡張したが、土坑の北・東側は調査区外となる。東西の検出長は約70cm、南北の検出長は約45cmあり、土坑内は円形状に掘り込まれている。検出径は約40cm、深さは約28cmである。埋土から土師器細片が出土した。

調査区西半の大半は埋設管敷設工事による攪乱を受けるが、調査区北壁沿いの西壁から東へ約13.5m、幅1～2mの範囲で地山層を検出した。地山層上面ではピット状遺構3基を検出したが、遺構埋土や遺構面からの出土遺物はなかった。

2) X-2地区

(1) 基本層序

基本層序は、盛土、褐灰色粘質土層(第8図第1層)と黄褐色系粘質土層(第8図第2・7層)と褐色系粘質土層(第8図第8・9層)の堆積土、黄橙色粘質土層(第8図第10層)である。黄橙色粘質層(第8図第10層)が地山層で、遺構検出面となる。

(2) 検出遺構

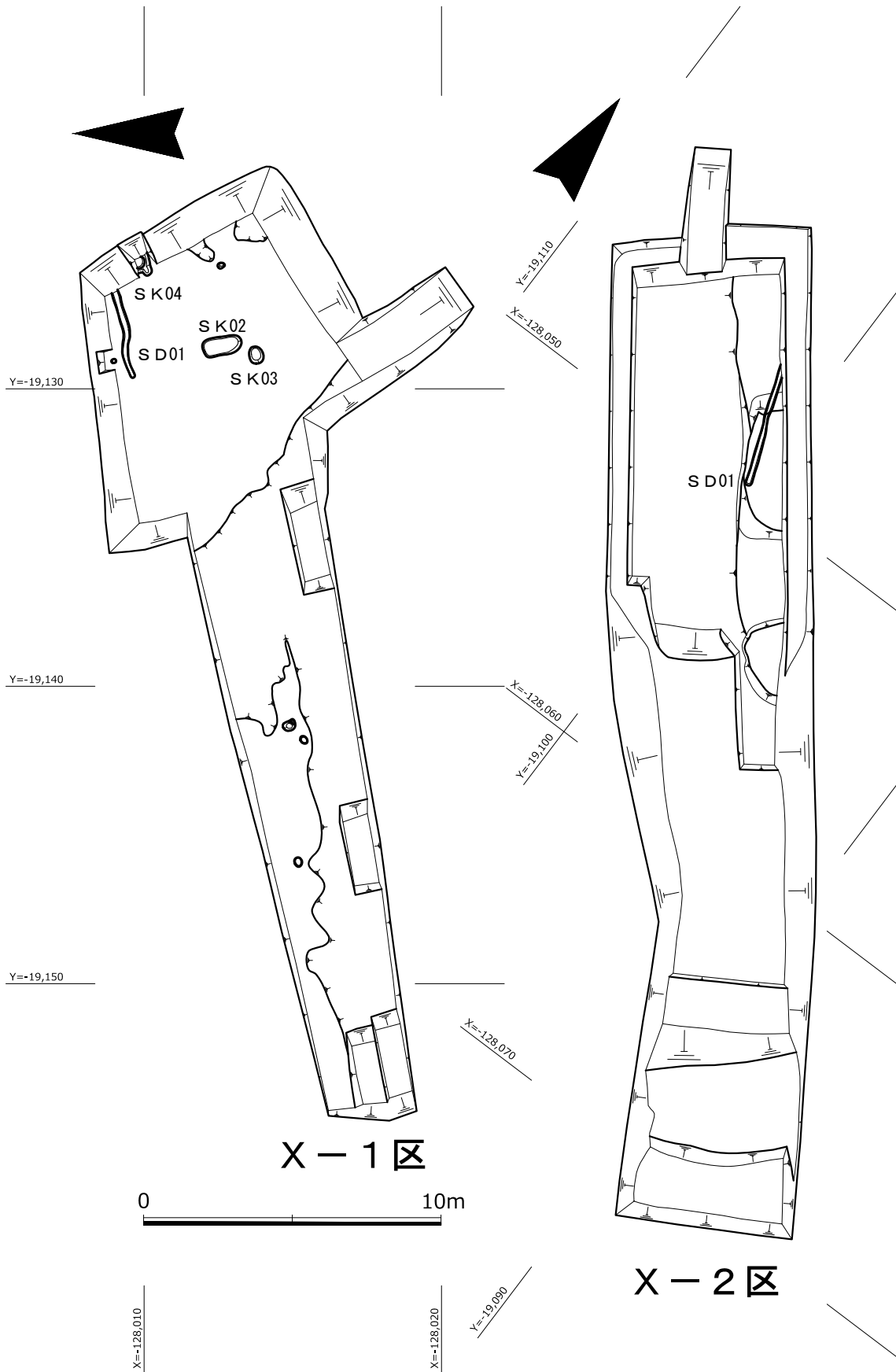
調査区は、南北約34m、東西約7mである。調査区の大半が埋設管敷設工事により攪乱を受けるが、調査区北半の東壁沿いで北壁から南へ約14m、幅約1.5mの範囲で地山層を検出した。地山層上面では溝1条(S D01)を検出し、遺構の検出標高は36.8mである。溝S D01は、調査区東壁沿いで検出した南北溝で、幅は約20cm、深さは3～10cm、検出長は約3mである。埋土からの出土遺物はなかった。

4. 出土遺物

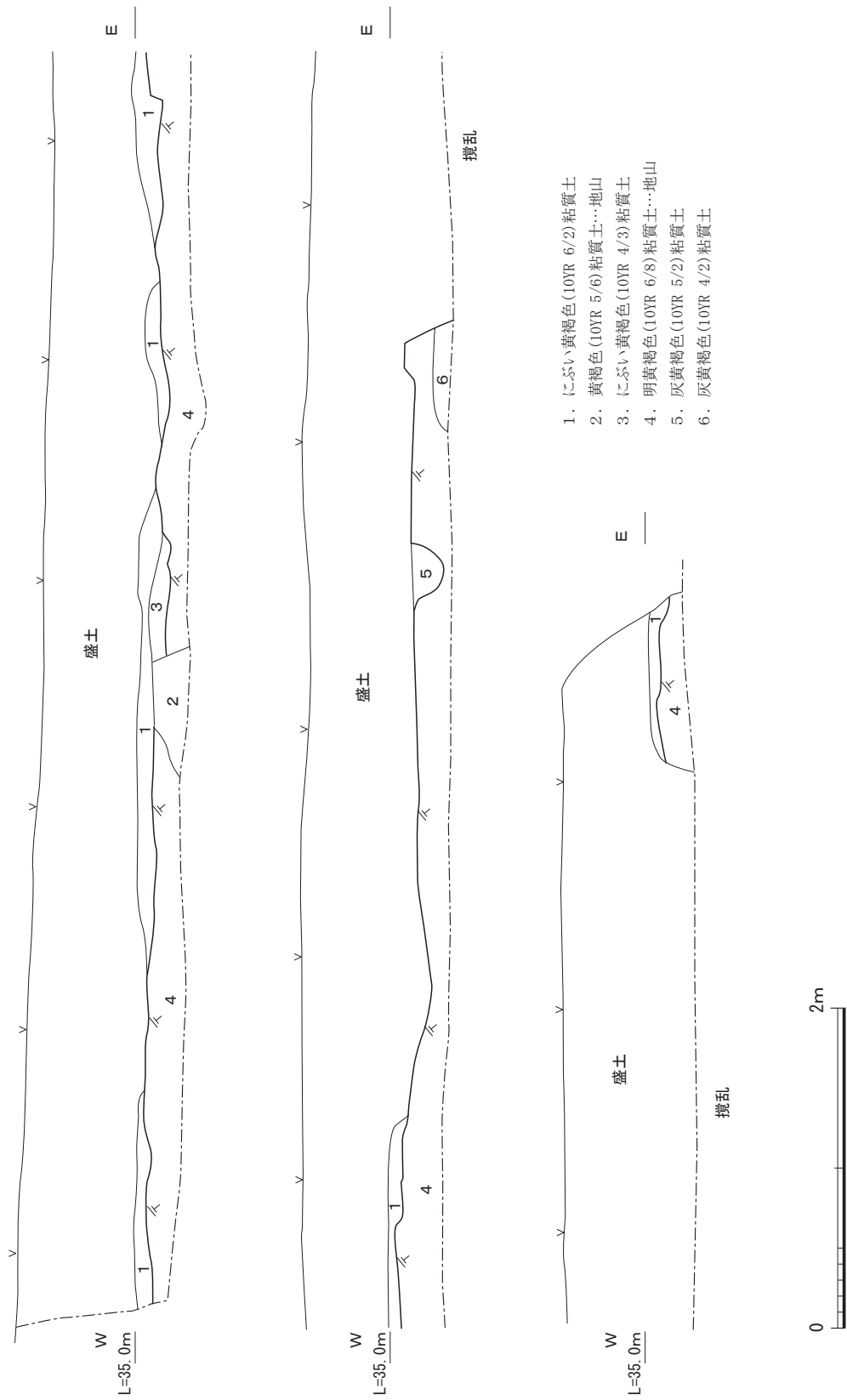
出土遺物は土師器と須恵器で、全てが細片で図示できるものはなかった。

5. 調査の成果

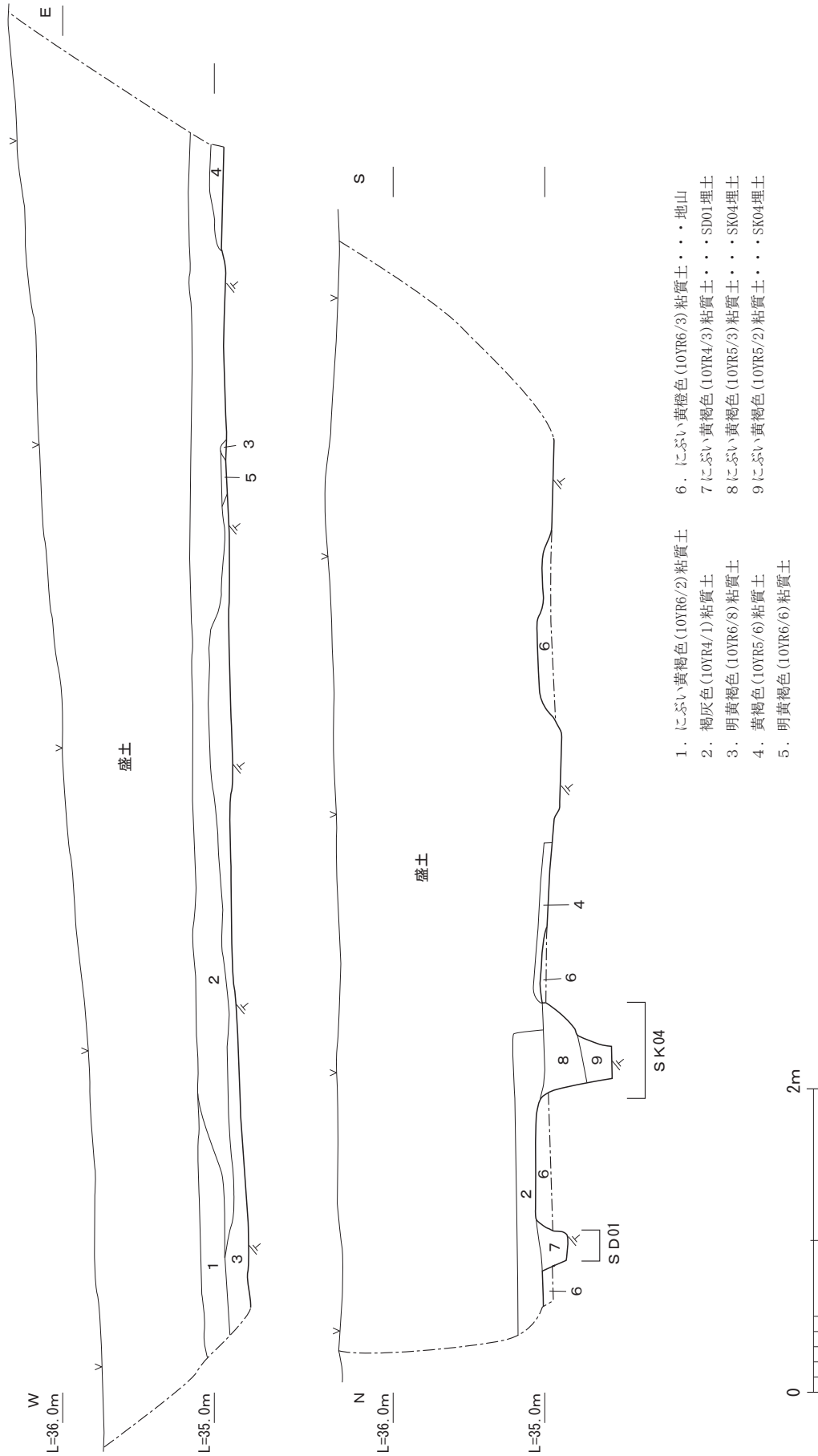
X-1・2区とも埋設管敷設工事による攪乱の影響があり、検出遺構や出土遺物は少量であった。第13次調査E地区の調査では、X-1区と一部重なるE区の北西隅やX-2区と隣接するE区の南側は、遺構密度が低く顕著な遺構はほとんど検出されていない。今回の調査においても、



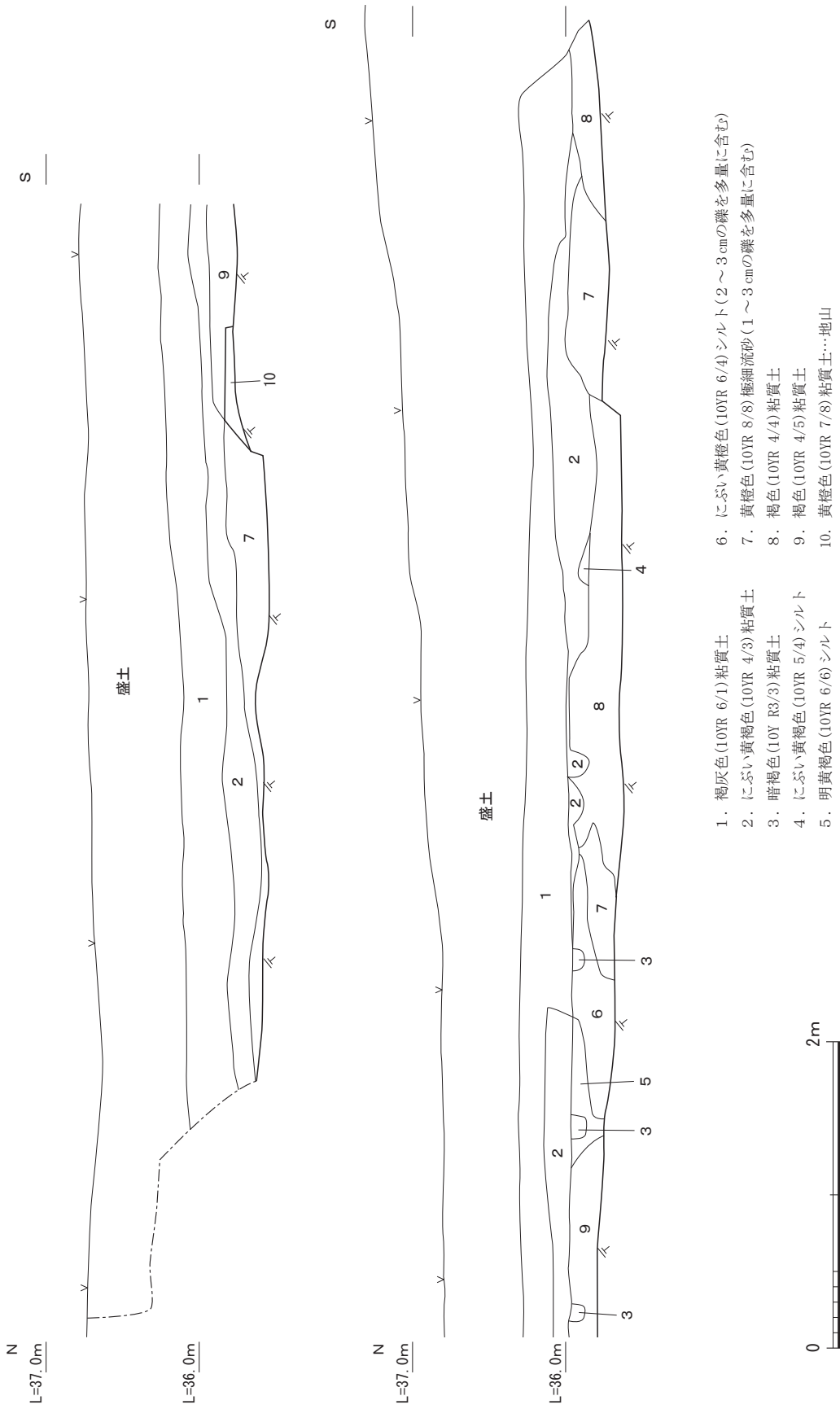
第5図 X-1・2区調査トレンチ平面図



第6図 X-1区西半調査トレンチ土層断面図



第7図 X-1区東半調査トレンチ土層断面図



第8図 X-2区調査トレンチ土層断面図

第13次調査E地区の遺構検出状況と一致している。

また、第13次調査E地区では後世の東西及び南北方向の耕作溝が多数検出されている。今回検出したX-1区の東西溝SD01とX-2区の南北溝SD01は、規模や方位が第13次調査E地区の耕作溝群とほぼ一致しており、これらと一連の耕作溝と判断される。(小泉裕司)

注1 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2016「新名神高速道路整備事業関係遺跡(1)水主神社東遺跡第1・2・5次、(2)下水主遺跡第1・4次」『京都府遺跡調査報告集』第167冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2017「新名神高速道路整備事業関係遺跡(1)下水主遺跡第4次(F地区)」『京都府遺跡調査報告集』第168冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡下水主遺跡第1・4・6次」『京都府遺跡調査報告書集』第173冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2018「新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第6・9次、水主神社東遺跡第6・7次」『京都府遺跡調査報告集』第174冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第189冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「4. 新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第10~12次」『京都府遺跡調査報告集』第192冊

注2 城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

注3 歴史的環境の執筆にあたって下記の文献を参照した。

城陽市史編さん委員会編1999『城陽市史』第3巻 城陽市役所

城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1987「芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第25冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2004「4. 芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第110冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第189冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「3. 小樋尻遺跡第13次」『京都府遺跡調査報告集』第192冊

4. 芝山遺跡・芝山古墳群第23次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般府道山城総合運動公園線橋りょう新設改良事業に伴い、京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施したものである。一般府道山城総合運動公園線橋りょう新設改良事業は、4車線化整備による渋滞の緩和、安全で円滑な走行に寄与、新名神高速道路城陽JCT・ICへのアクセス向上を図ることを目的として、新名神高速道路、国道24号や市道東部丘陵線と一体となって整備する延長約1.4kmの事業である。

調査区は、一般府道山城総合運動公園城陽線（府道256号）の城陽橋東詰交差点の南東側にあたり、昭和61年度の一般府道山城総合運動公園城陽線建設に伴う芝山遺跡・芝山古墳群第3次調査A地区の南側、平成14・15年度の一般府道上粕城陽線建設に伴う芝山遺跡・芝山古墳群第13・14次調査A地区の東側に接している。

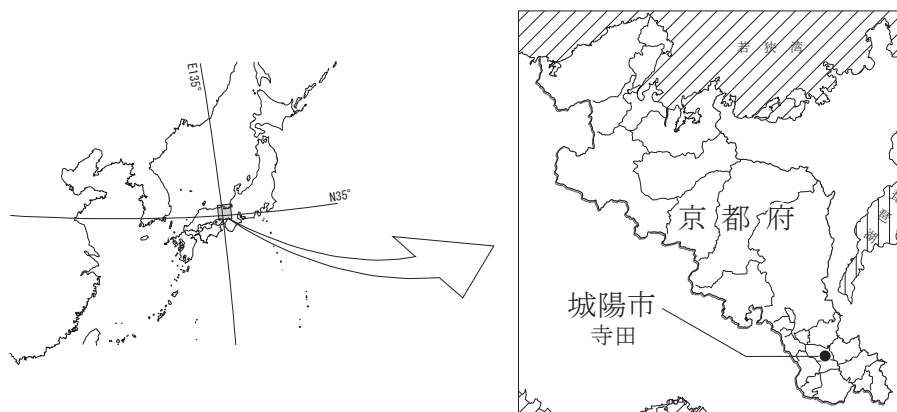
現地調査にあたっては、京都府教育委員会、城陽市教育委員会のほか、各関係機関、地元の方々にご指導・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、京都府山城北土木事務所が全額負担した。

本文は、「3. 調査の経過」を京都府教育庁指導部文化財保護課桐井理揮、それ以外については現地調査を担当した調査課副主査小泉裕司が執筆した。

〔調査体制〕

調査責任者	調査課長	小池 寛
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 調査第4係副主査	小泉裕司
調査場所	京都府城陽市寺田南中芝	



第1図 調査地の位置

現地調査期間 令和5年8月22日～令和5年10月25日

整理作業期間 令和5年11月1日～令和6年3月29日

調査面積 350㎡

2. 遺跡の環境

1) 地理的環境

芝山遺跡・芝山古墳群が所在する城陽市は、近畿地方のほぼ中央部の内陸に位置する。市域は南北5.4km、東西9.0kmで東西にやや長く、東部の山地・丘陵と西部の平野に大きく二分される。市域の東部を南北にのびる山地は、鷲峰山(682m)山塊に連なるもので、市域最高地点は片原山(433m)である。山麓には、宇治丘陵と呼ばれる大阪層群からなる洪積丘陵が東から西へのびている。宇治丘陵からは、北から大谷川、長谷川、青谷川が西へ流下し、扇状地を形成している。市域西部には木津川が形成した沖積平野が、河川に平行して南北に広がっている^(注1)。

2) 歴史的環境

市域では、主に縄文時代から奈良時代の遺跡が知られるが、市域北部の大谷川扇状地周辺に集中する傾向がある。

市域における最も古い人々の営みの痕跡としては、大谷川扇状地南側の丘陵上に所在する芝ヶ原遺跡で約2万年前の舟底形石器とナイフ形石器が出土している。

縄文時代には、芝山遺跡・芝山古墳群の南側の丘陵上に所在する森山遺跡で後期後半の集落が営まれている。また、芝山遺跡・芝山古墳群や森山遺跡が所在する丘陵の西側に広がる平野部では、水主神社東遺跡で縄文時代後期～晩期の自然流路内に設置された木組み遺構や木道、杭列、小樋尻遺跡で縄文時代晩期の竪穴建物や土器棺が確認されている。このほかに下水主遺跡の自然流路から縄文時代晩期の土器、小樋尻遺跡の自然流路から縄文時代後期～晩期の土器が出土している。近年の調査により、平野部における縄文時代後期～晩期の縄文人の営みが明らかになりつつある。

弥生時代の人々の営みを知る遺跡は少ないが、森山遺跡や下水主遺跡で弥生時代後期の小規模な集落が営まれている。

古墳時代初めには、大谷川扇状地南側の丘陵上に芝ヶ原古墳が築造される。これを契機として、大谷川扇状地とそれを望む丘陵上を中心に古墳時代前期～後期にかけて有力首長墳が連綿と築かれ、久津川古墳群が形成される。古墳時代前期には、西山古墳群、尼塚古墳群、上大谷8・15号墳、尼塚方墳などが築造される。また、芝山遺跡・芝山古墳群が所在する同じ丘陵上には前方後円墳2基からなる梅の子塚古墳群が築造される。古墳時代中期には、南山城地域最大の前方後円墳である久津川車塚古墳(全長272m)や芭蕉塚古墳(全長161m)が築造され、古墳時代中期に南山城地域を治める大首長がこの地に存在したことを示している。この他に丸塚古墳・梶塚古墳・芝ヶ原9・10号墳などが築造される。古墳時代後期には、芝ヶ原1～7号墳や上大谷1～5号墳などが築造される。また市域南部の青谷地域では、久津川古墳群ではほとんどみられない横穴式石

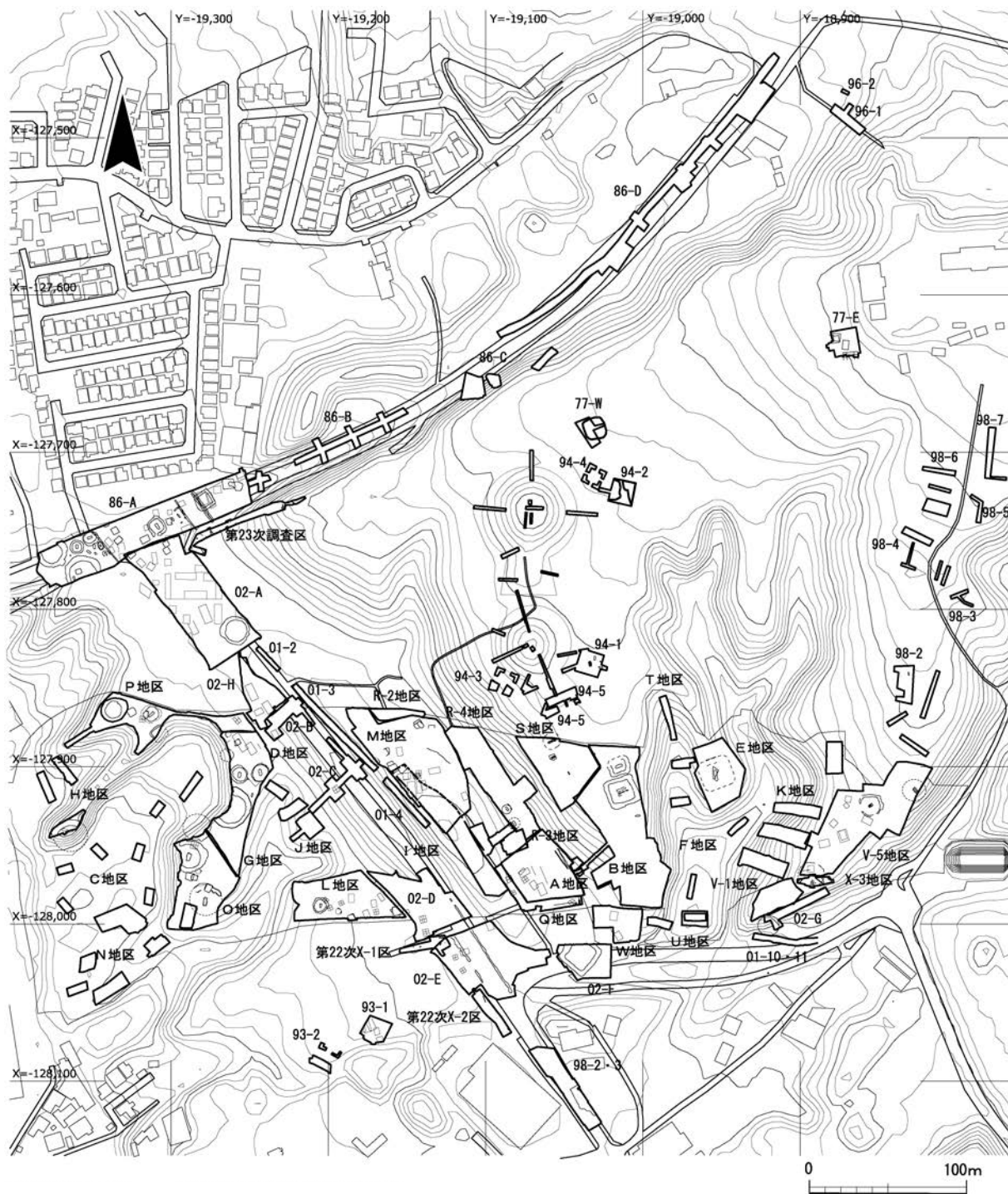


第2図 周辺遺跡分布図(25,000分の1)

室を埋葬施設とする冑山古墳群、黒土1号墳、茶臼塚古墳などが築造される。古墳時代後期に最新の技術を有した新興の有力首長が青谷地域に出現したことを示している。一方、古墳時代の集落は、平野部に所在する塚本東遺跡で古墳時代初めの集落、森山遺跡で古墳時代前期の有力首長の居館跡とされる方形周溝状遺構や竪穴建物が確認されている。

古墳時代末から飛鳥時代には、大谷川扇状地周辺に所在する正道遺跡、芝ヶ原遺跡、古宮遺跡、横道遺跡、室木遺跡で集落が造営され始め、奈良時代まで存続する。

奈良時代には、大谷川扇状地に平川廃寺、その南側丘陵端に久世廃寺、南側丘陵上に久世郡衙と推定される正道官衙遺跡が造営される。奈良時代には、大谷川扇状地周辺が南山城地域における政治・文化の中心のひとつであったことを示している。



- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 77-○：第1次調査 『城陽埋蔵文化財調査報告書』第7集 | 01-○：第10次調査 『京都府遺跡調査概報』第105冊 |
| 86-○：第2・3次調査 『京都府遺跡調査概報』第20冊・第25冊 | 02-○：第13・14次調査 『京都府遺跡調査概報』第110冊 |
| 93-○：第4次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | A～W地区(第15～21次調査) |
| 94-○：第5次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集 | 『京都府遺跡調査報告集』第189冊 |
| 96-○：第6次調査 『京都府遺跡調査概報』第77冊 | X地区 第22次調査 『京都府遺跡調査報告集』第194冊 |
| 98-○：第8次調査 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集 | 第23次調査区 本報告書 |
| ※地図中央南端 | |
| 98-○：第9次調査 『京都府遺跡調査概報』第89冊 | |
| ※地図中央東端 | |

第3図 芝山遺跡・芝山古墳群全調査区配置図

3) 芝山遺跡の既往調査

芝山遺跡は東から西へ延びる丘陵上に所在し、東西約950m、南北約840mを遺跡範囲とする縄文時代から中世の複合遺跡である。昭和52年度に城陽市教育委員会により関西電力株式会社の送電用鉄塔の建設に伴う発掘調査が初めて行われ、以降平成15年度まで断続的に、府道の建設や関西電力株式会社の送電用鉄塔の建て替えに伴う発掘調査が当調査研究センターや城陽市教育委員会により実施されている。平成27年度から令和2年度には新名神高速道路建設に伴う発掘調査を当調査研究センターが実施している。これまでの発掘調査では、縄文時代から弥生時代には縄文土器や弥生土器、石器が出土しているが、集落などの人々の営みを示す遺構は確認されていない。

付表1 芝山遺跡・芝山古墳群調査回数一覧表

年度	回数	調査期間	調査面積	調査機関	報告書	発行年	備考			
昭和52年度	1次	1977.4.1～ 1977.5.2	560 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集	1978年				
昭和60年度	2次	1985.5.21～ 1986.3.25	3,760 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第20冊	1986年				
昭和61年度	3次	1986.5.6～ 1986.9.2	4,960 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第25冊	1987年				
平成5年度	4次	1994.2.1～ 1994.3.26	300 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第28集	1995年				
平成6年度	5次	1994.8.1～ 1995.1.31	753 m ²	城陽市教育委員会						
平成7年度	—	1995.12.20～ 1995.12.21	14 m ²	城陽市教育委員会	—	—	試掘			
平成8年度	6次	1996.12.17～ 1997.1.27	180 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第77冊	1997年				
平成9年度	7次	1997.3.17	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第34集	1998年	試掘			
平成10年度	8次	1998.5.12～ 1998.10.31	1,089 m ²	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集	1999年				
平成10年度	9次	1998.12.9～ 1999.2.18	680 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第89冊	1999年				
平成13年度	10次	2001.12.17～ 2002.2.27	1,600 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第105冊	2002年				
平成13年度	11次	2002.1.31～ 2002.2.8	—	城陽市教育委員会	『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第44集	2003年	試掘			
平成14年度	12次	2002.5.9～ 2002.5.31	240 m ²	城陽市教育委員会						
平成14年度	13次	2002.7.8～ 2003.2.27	4,500 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査概報』第110冊	2004年				
平成15年度	14次	2003.4.16～ 2003.8.13	1,800 m ²	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
平成27年度	15次	2016.1.26～ 2016.3.4	550 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第189冊	2023年				
平成28年度	16次	2016.4.25～ 2017.3.7	7,000 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
平成29年度	17次	2017.4.17～ 2018.2.27	2,865 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
平成30年度	18次	2018.4.12～ 2018.9.4	2,855 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
平成30年度	19次	2018.7.9～ 2019.2.27	3,028 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
平成31年度	20次	2019.4.22～ 2020.2.27	5,559 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
令和2年度	21次	2020.5.7～ 2021.2.26	4,850 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター						
令和5年度	22次	2023.5.22～ 2023.10.30	492 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター				本報告書、一部未報告	2024年	
令和5年度	23次	2023.8.1～ 2023.10.25	350 m ²	(公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター				本報告書	2024年	

古墳時代前期には竪穴建物1基が確認され、小規模な集落が営まれている。古墳時代後期末ごろから竪穴建物が造られ、大規模な集落が営まれる。この集落は飛鳥時代後半に掘立柱建物へ移行し、平安時代初めまで存続する。掘立柱建物の大半は奈良時代のもので、特に奈良時代前半には官衙的な建物群が出現する。また、官衙的建物群の東側を南北に平行して走る溝が部分的に検出されており、道路遺構の側溝の可能性が指摘されている。平安時代初め以降は、中世と推定される掘立柱建物1棟の他には顕著な遺構は確認されておらず、中世の瓦や輸入陶磁器がわずかに出土している程度である。近世以降は耕作溝や粘土採掘坑が確認されており、耕作地などとして土地利用されている。

芝山遺跡内では、昭和52年度の第1次調査で一辺約11mの方墳1基が確認され、その後昭和60年度の第2次調査で10～20mの方墳や円墳が10基、平成6年度の第5次調査で一辺約11m程度の方墳3基が確認された。これらのことから芝山遺跡内に削平された10～20mの方墳や円墳が多数存在することが想定されたため、芝山古墳群として取り扱われるようになった。芝山古墳群では、これまでの調査で4世紀末～6世紀末に築造された10～20mの方墳や円墳が39基確認されている。^(注2)
(小泉裕司)

3. 調査の経過

一般府道山城総合運動公園線橋りょう新設改良事業に伴い、遺跡地内で新たに道路建設が行われるのに先立ち京都府教育委員会文化財保護課が試掘調査を行った。試掘調査は令和5年6月15日に実施し、試掘調査面積は30㎡である。

試掘調査は、道路建設工事対象地内に3か所の調査区を設定し、重機による表土掘削を行った。その結果、いずれの調査区でも表土直下で遺構・遺物を確認した。出土遺物には、これまで試掘調査対象地周辺の調査では出土していない円筒埴輪片も含まれており、試掘調査対象地周辺に未知の古墳が存在する可能性があるかと判断した。

以上のような所見から、工事対象地全域を対象として本調査を行う必要があると判断し、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を行うこととなった。(桐井理揮)

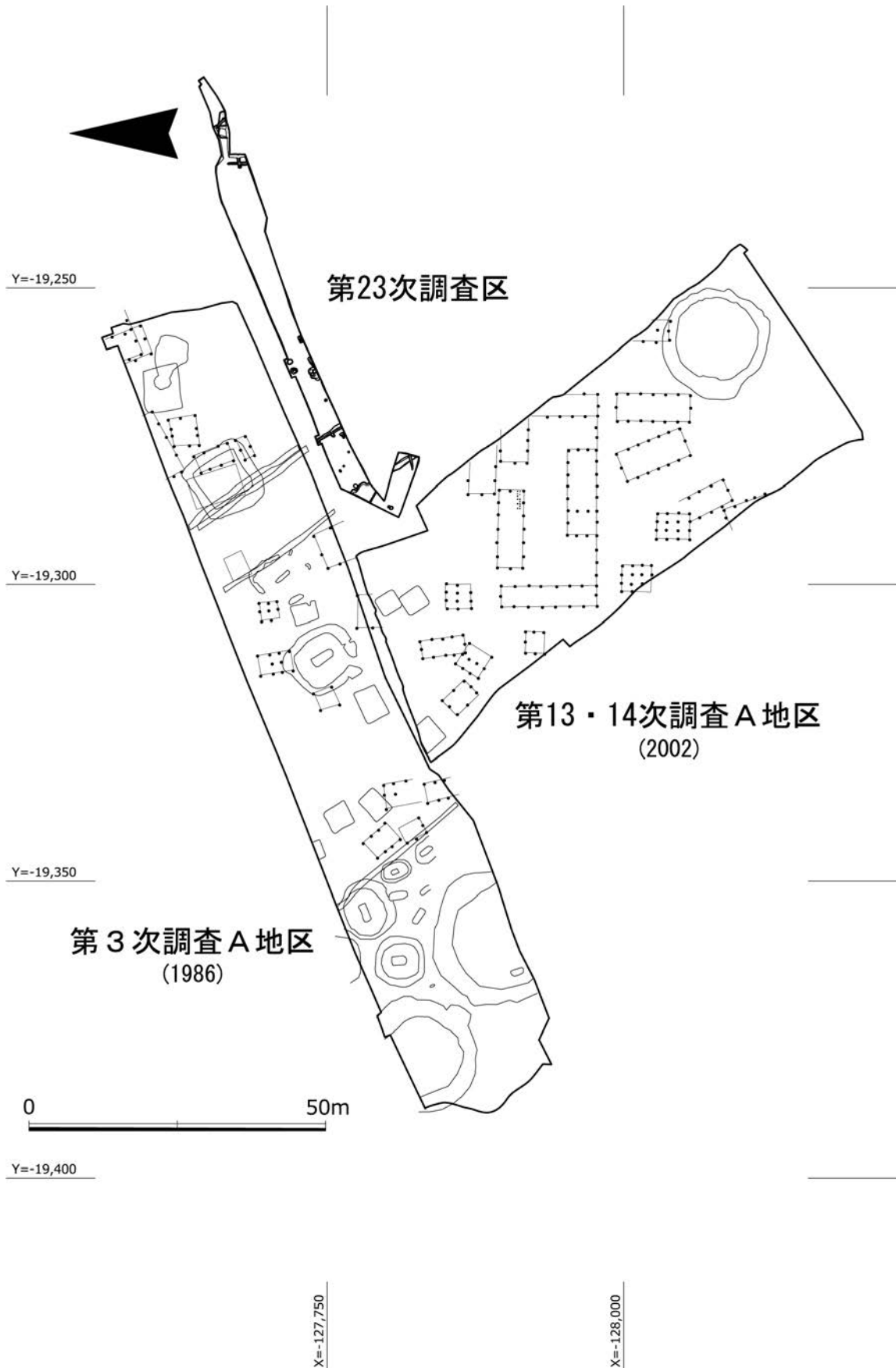
4. 調査概要

1) 基本層序

基本層序は、表土(第6～8図第1層)、暗褐色粘質土(第6図第4層)、褐色粘質土層(第7図第13層)及び黒褐色粘質土層(第8・9図第20層)と黄橙色粘質土層(第6・7図第9層)及び黄褐色粘質土層(第7・8図第14・15・16層)の堆積土、黄褐色系粘質土層(第6～8図第10・18・19・27・32層)である。黄褐色系粘質土層(第6～8図第10・18・19・27・32層)が地山層で、遺構検出面となる。

2) 検出遺構

調査区は、丘陵の上位平坦面から丘陵傾斜面、丘陵の中位平坦面にかけて東西方向に約80mあ



第4図 調査区配置図

る。調査区西端は、南東側に約10m折曲がる。

上位平坦面では表土直下から掘り込まれた溝1条と表土から掘り込まれた攪乱1か所、傾斜面との肩部で地山層を掘り込んだ土坑1基(S K02)と溝1条(S D01)を検出した。地山層の検出標高は49.8~48.0mあり、西側へやや傾斜する。

丘陵傾斜面では、遺構は検出されなかった。傾斜面での地山層の検出標高は47.5~40.0mで、上位平坦面と中位平坦面の標高差は約7.5mある。

中位平坦面の地山層上面では、溝3条(S D04・06・09)と土坑10基(S K03・05・07・08・10~15)を検出した。遺構の検出標高は40~38mで、遺構面(地山層)は西側へやや傾斜する。

土坑S K02は、上位平坦面と傾斜面との肩部で検出した東西を長軸とする楕円形土坑で、東側は溝S D01により削平される。南北の検出長は55cm、東西の残存長は60cm、残存する深さは19cmである。土坑底部からは、布留式土器の小型丸底壺1点と広口壺1点が出土した(第12図1・2)。小型丸底壺は、ほぼ完形で、やや東側に傾くが正位置に据えられた状態で出土した。広口壺は横倒しの状態で出土し、下側となった口縁部から体部の一部が残存していた。広口壺の出土状況から土坑上部は、自然流失あるいは削平されたと考えられる。小型丸底壺は正位置、広口壺は横位置に据えて埋納されており、古墳時代前期に行われた祭祀に関連する遺構と考えられる。

溝S D01は、土坑S K02の東側に隣接する南北溝とこれとT字状に直交する東西溝である。南北溝は、幅は40~60cm、深さは20cm、検出長は3.2mである。北端は調査区内で途切れ、南側は調査区外へ延びる。東西溝は、幅は50cm、深さは24cm、検出長は0.8mで、東側は調査区外へ延びる。埋土からは、土師器の細片が出土した。

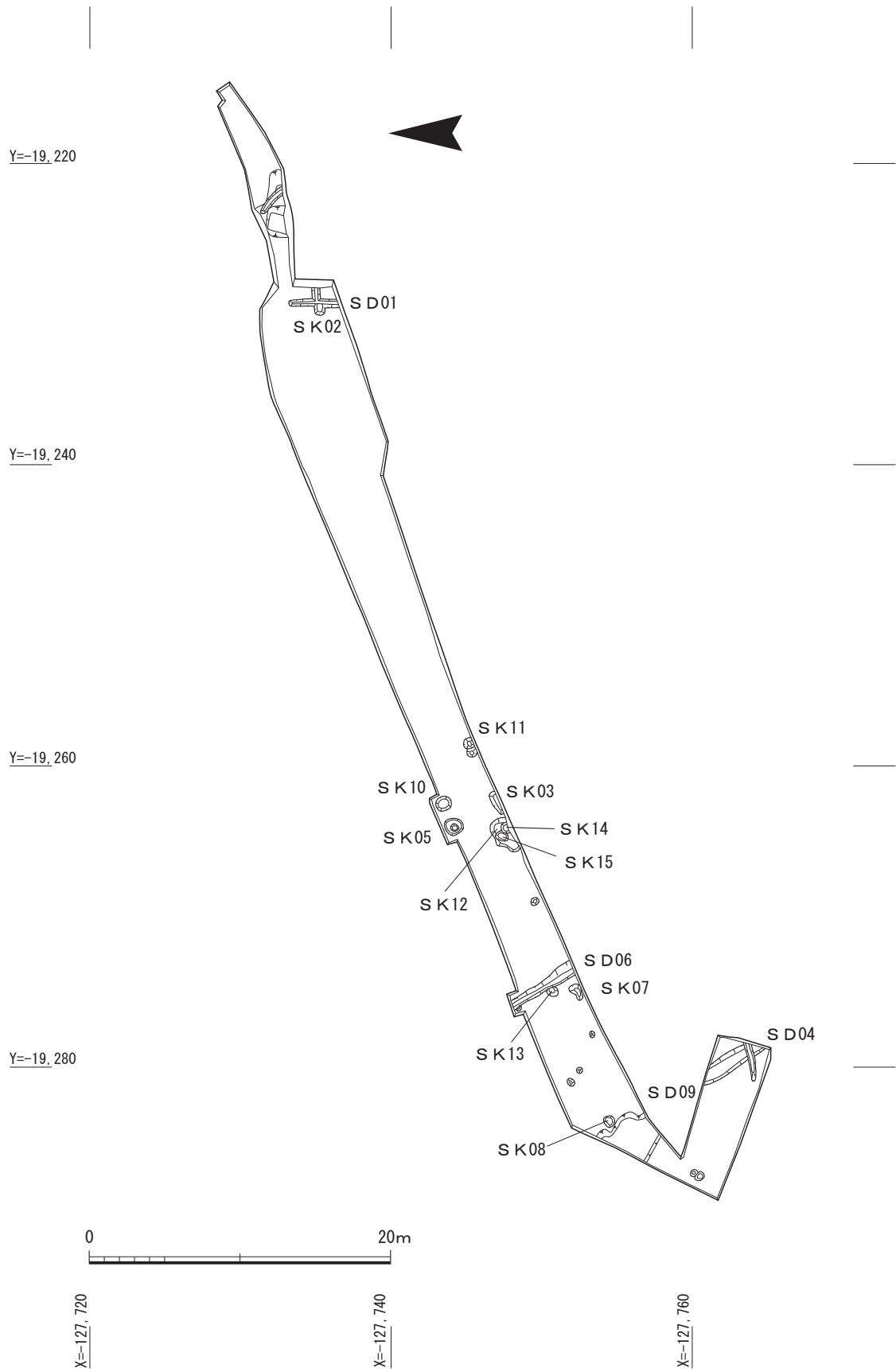
溝S D06は中位平坦面の中央付近で検出した北から西へ30°振る南北溝で、検出長は4.7mである。幅は47~90cm、深さは13~46cmあり、南半の幅が広く、深くなっている。埋土は黄褐色系粘質土で3層に分かれることから、徐々に埋没していったと考えられる。埋土からは土師器細片、埋土最上層上面で須恵器高台付底部片(第12図3)が出土した。

溝S D09は、調査区西端で南東側に折れ曲がる北から西へ35°振る南北溝である。幅は1.0~1.1m、深さは6~16cm、検出長は4.6mである。埋土は黄褐色粘質土で、出土遺物はなかった。溝S D09を北側へ延長すると東西調査区の西端部分にあたるが、この部分は大きく攪乱を受けており、溝S D09の北側延長部を検出することはできなかった。ただ東西調査区南壁面で、地山層を掘り込んだような傾斜面をわずかに確認した。溝S D09の東側肩部を北へ延長するとこの傾斜面の肩部と重なることから、溝S D09の東側肩部の残存部分と判断した。

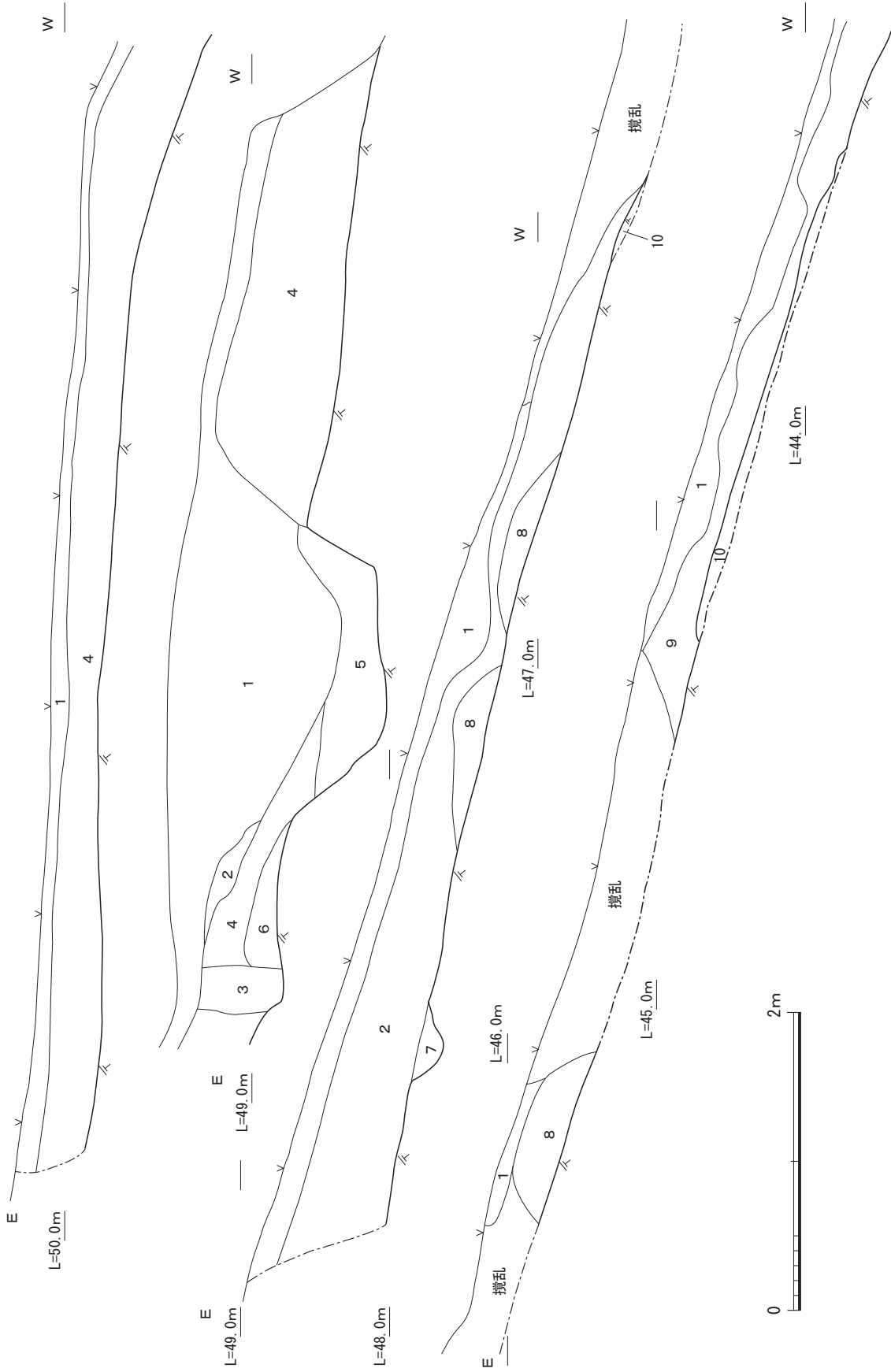
溝S D04は溝S D09を切る東西溝で、西端は調査区内で途切れる。幅は20~40cm、深さは11cm、検出長は2.7mである。埋土から土師器細片が出土した。

土坑S K03は、傾斜面の裾部から西へ約7mの調査区南壁沿いで検出した長方形の土坑で、大半は調査区外となる。東西の検出長は約2.1m、南北の検出長は約50cm、深さは19cmである。埋土から土師器細片が出土した。

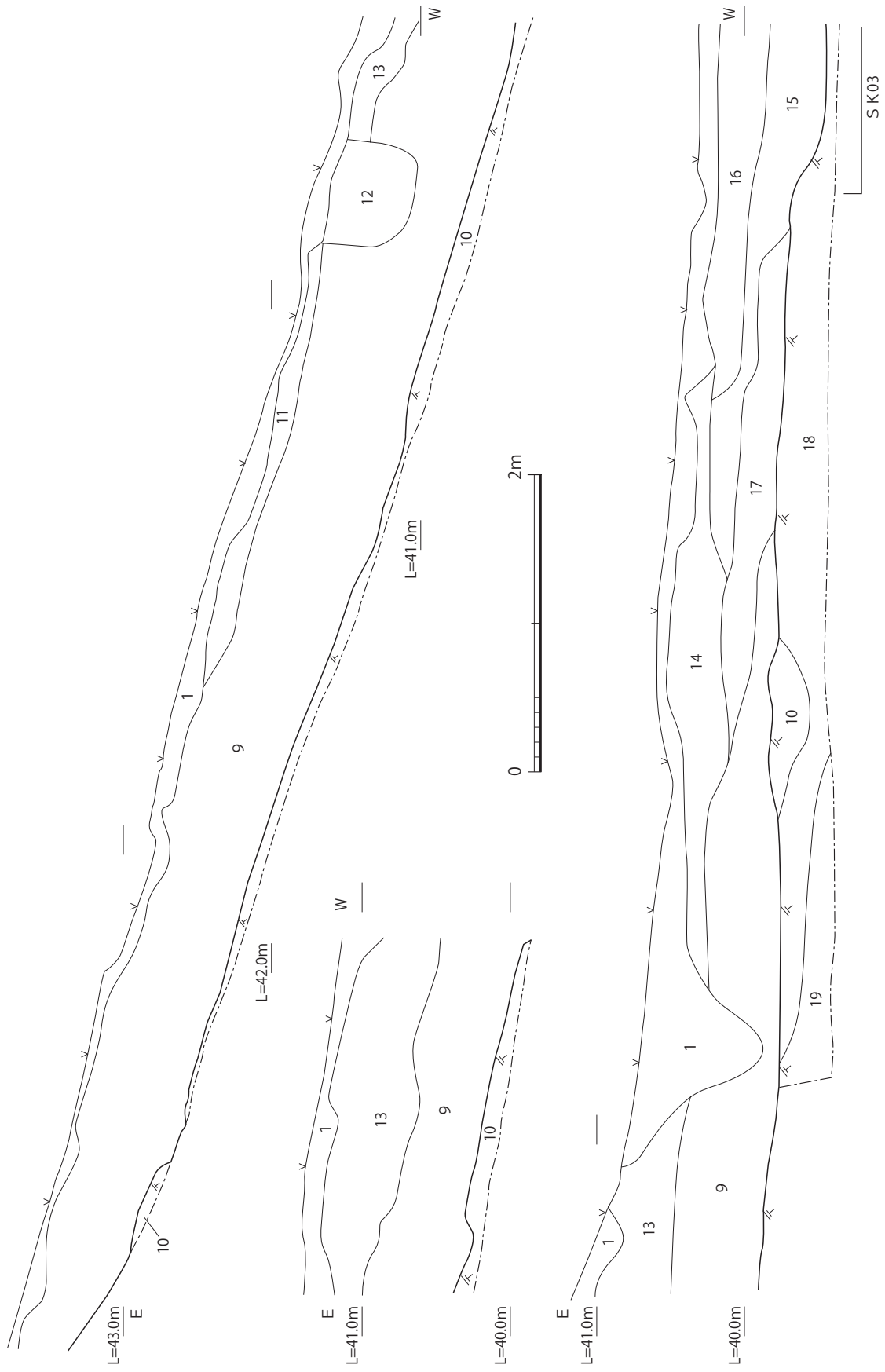
土坑S K05は、傾斜面の裾部から西へ約9mの所で検出した隅丸方形の土坑で、南北の長さ



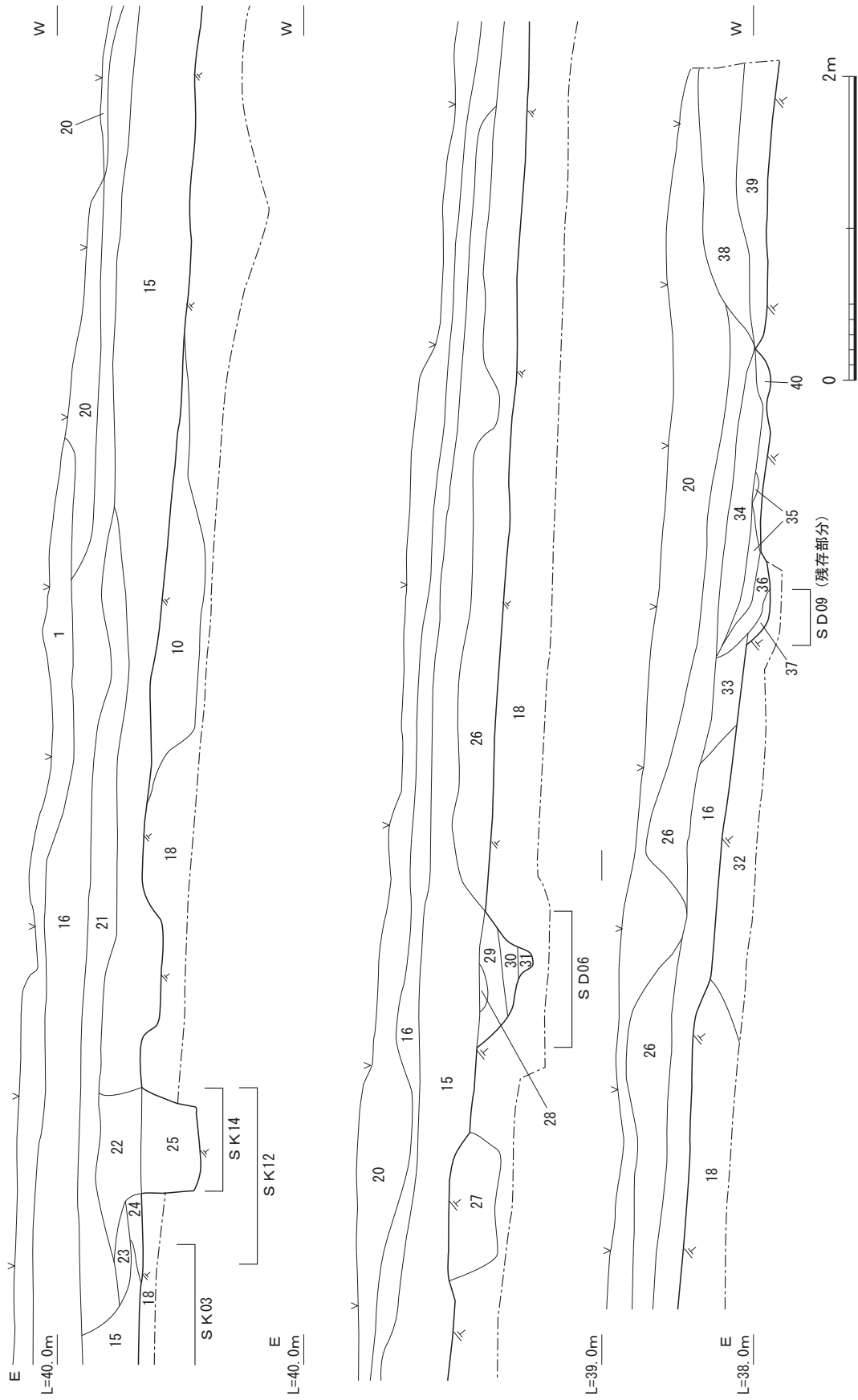
第5図 調査区平面図



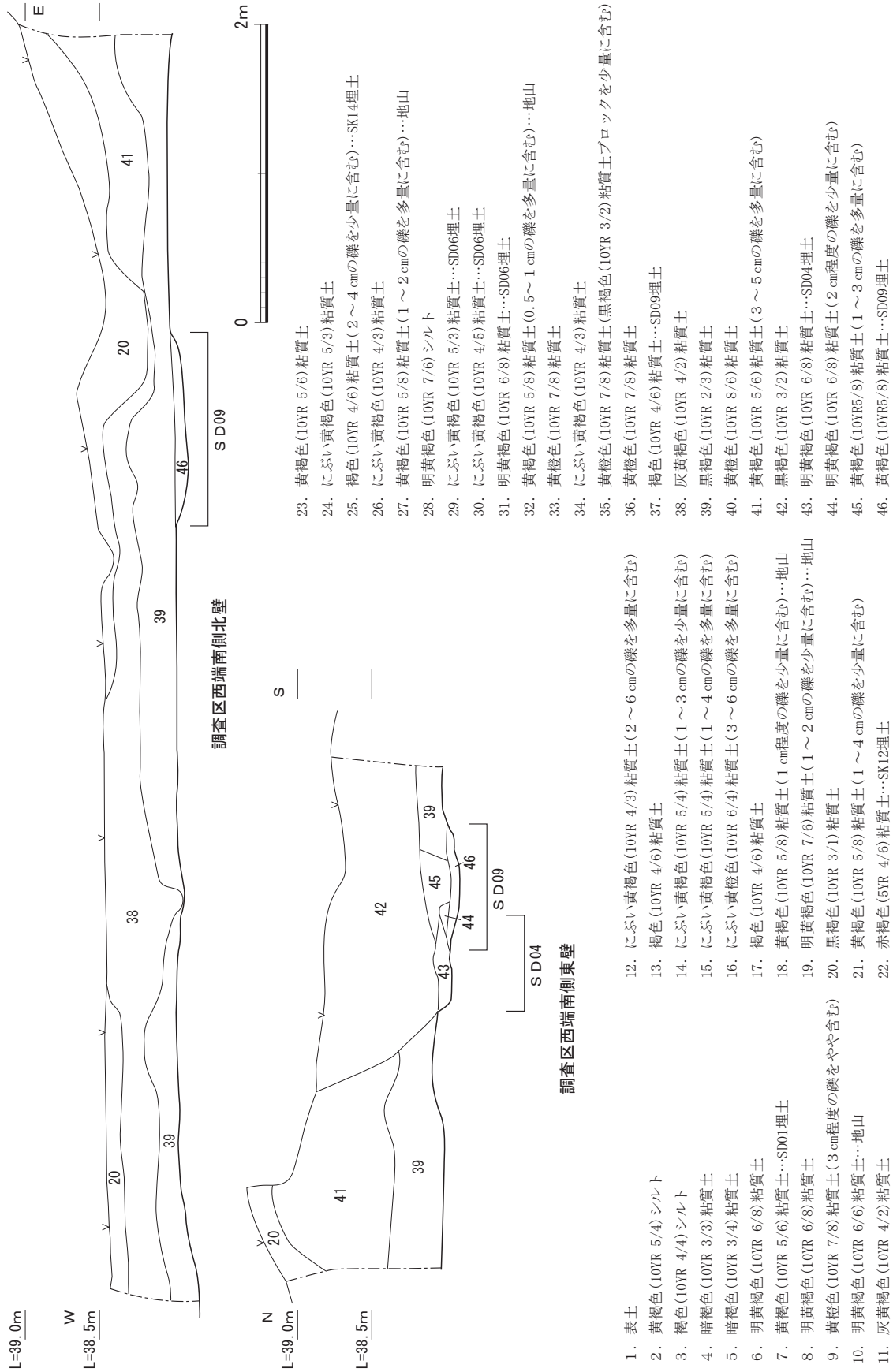
第6図 調査区南壁土層断面図1



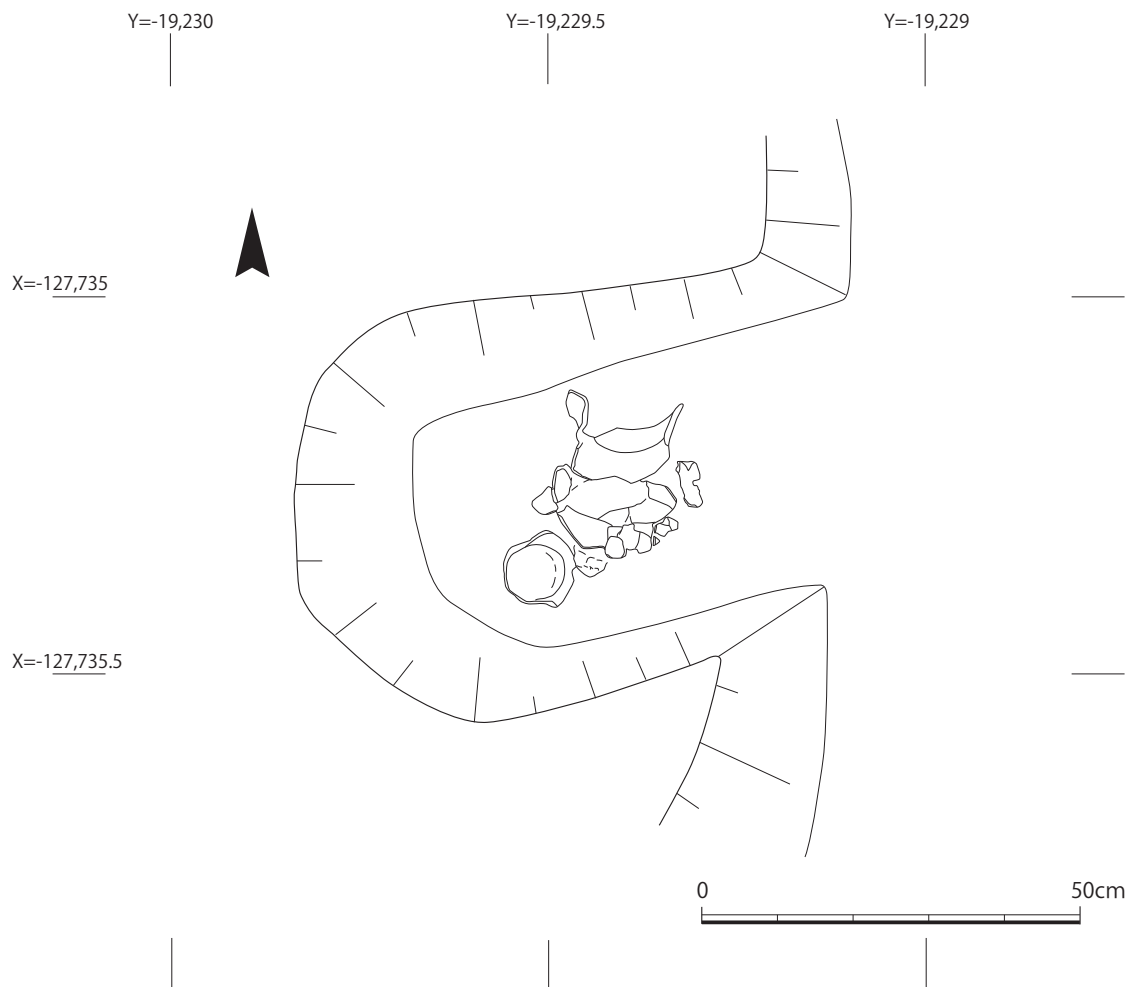
第7図 調査区南壁土層断面図2



第8図 調査区南壁土層断面図3



第9図 調査区西端南側土層断面図



第10図 土坑 S K02平面図

は約1.1m、東西の長さは約1m、深さは約54cmである。埋土から須恵器細片・土師器細片が出土した。

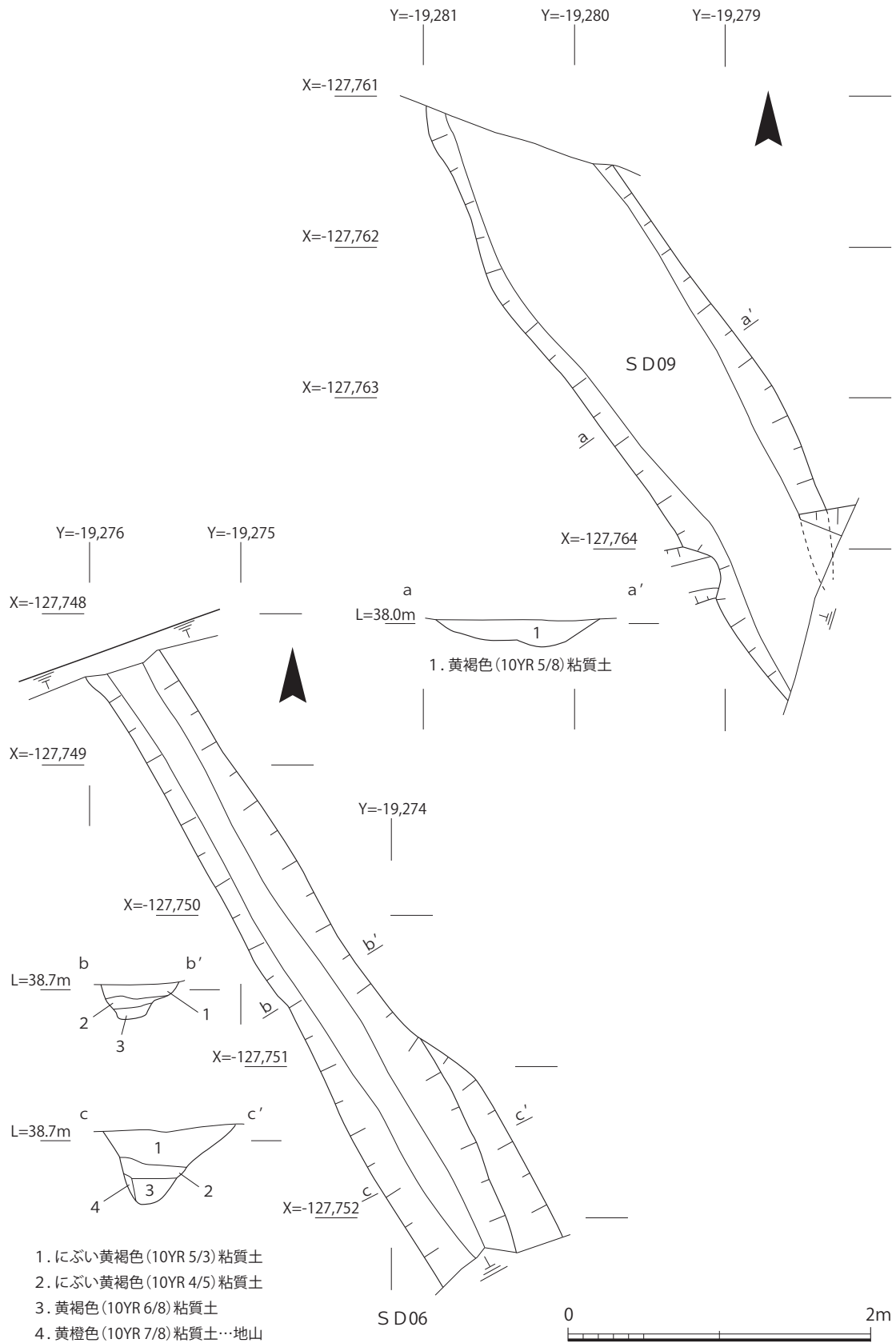
土坑 S K07は溝 S D06の西側の調査区南壁沿いで検出した長方形の土坑で、東西の長さは約1m、南北の長さは西端で約35cm、東端で約65cm、深さは26cmである。埋土から土師器細片が出土した。

土坑 S K10は、土坑 S K05から北東へ約0.7mで検出した隅丸方形土坑で、南北の長さは約0.9m、東西の長さは約0.8m、深さは約27cmである。埋土内からの出土遺物はなかった。

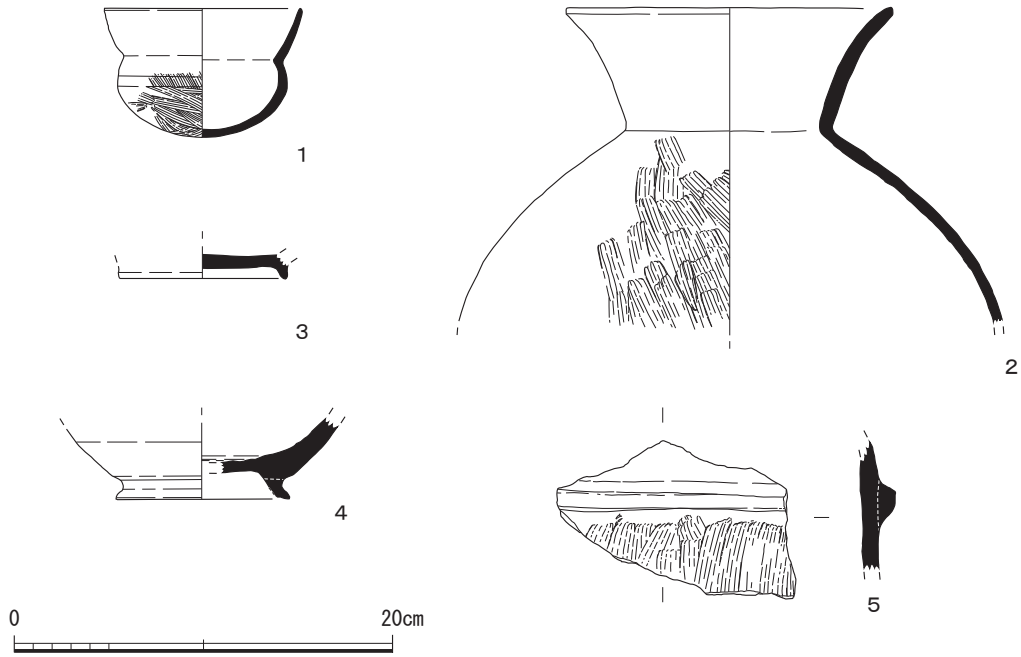
土坑 S K13は溝 S D06の西側に隣接して検出した楕円形状の土坑で、東半は溝 S D06に切られる。南北の長さは約60cm、東西の検出長は約65cm、深さは約32cmである。埋土からの出土遺物はなかったが、溝 S D06に切られることからより古い遺構と考えられる。

土坑 S K12は土坑 S K03の西側に隣接した不定形の土坑で、南側は調査区外となる。東西の長さは約2.4m、南北の検出長は1.2m、深さは19～26cmである。土坑内では土坑 S K14・15を検出した。埋土からの出土遺物はなかった。

土坑 S K14は、土坑 S K12の下層で検出した方形土坑で、南側は調査区外となる。東西の長さは約60cm、南北の検出長は45cm、深さ43cmである。上部は土坑 S K12で削平される。埋土から



第11図 溝SD06・09平・断面図



第12図 出土遺物

の出土遺物はなかった。

土坑 S K15は、土坑 S K12の下層で検出した楕円形状の土坑で、南北の長さは約75cm、東西の長さは約60cm、深さは約40cmである。上部は北端のほんの一部を除いて土坑 S K12で削平される。埋土からの出土遺物はなかった。

5. 出土遺物

主な出土遺物は、土師器、須恵器、埴輪^(注3)である。

1・2は土坑 S K02から出土した布留式土器である。1はほぼ完形の小型丸底壺で、口径が10.4cm、器高が6.7cmある。口縁部はやや発達し口縁部径が体部径を上回り、体部は扁平となる。口頸部外面にはヨコナデ調整、体部外面にはハケ調整、内面にはナデ調整が施される。2は口縁部から体部上半部が残存する広口壺で、復元口径が17.2cm、残存高が17.1cmある。口縁部はゆるやかに外反し、体部は球体を呈する。口頸部外面にはヨコナデ調整、体部外面にはハケ調整が施されるが、内面は摩滅のため調整はわからない。

1は寺沢編年布留1式併行期、2は寺沢編年布留0式併行期ものと考えられる。

3は、溝 S D06の埋土最上層上面から出土した須恵器の高台付底部片で、高台付杯身(杯B)かと思われる。復元高台径は8.8cm、残存高は1.3cmあり、内外面にヨコナデ調整が施される。

4は、遺構面から出土した須恵器の高台付底部片である。高台が大きくハの字に開くことから、高台付壺かと思われる。復元高台径は9.2cm、残存高は4.0cmあり、内外面にヨコナデ調整が施される。

3・4は、破片のため本来の器形はわからないが、概ね飛鳥・平城宮編年平城宮Ⅲ期に相当するものではないかと考えられる。

5は、京都府教育委員会が実施した試掘調査時に中位平坦面の調査区で竹の根の伐根作業中に出土した埴輪片で、表土直下の堆積土に包含されていたものと思われる。内外面とも風化による摩滅が著しいが、外面には明瞭な台形状の突帯が付き、突帯貼り付け後にタテハケ調整が施される。円筒埴輪の体部かと思われる。調査区に隣接する昭和61年度第3次調査区や平成14・15年度第13・14次調査A地区では、埴輪をもつ古墳は検出されていない。このことから、調査区南側の上位平坦面や中位平坦面の未調査地に埴輪をもつ未知の古墳が存在する可能性がある。

6. 調査の成果

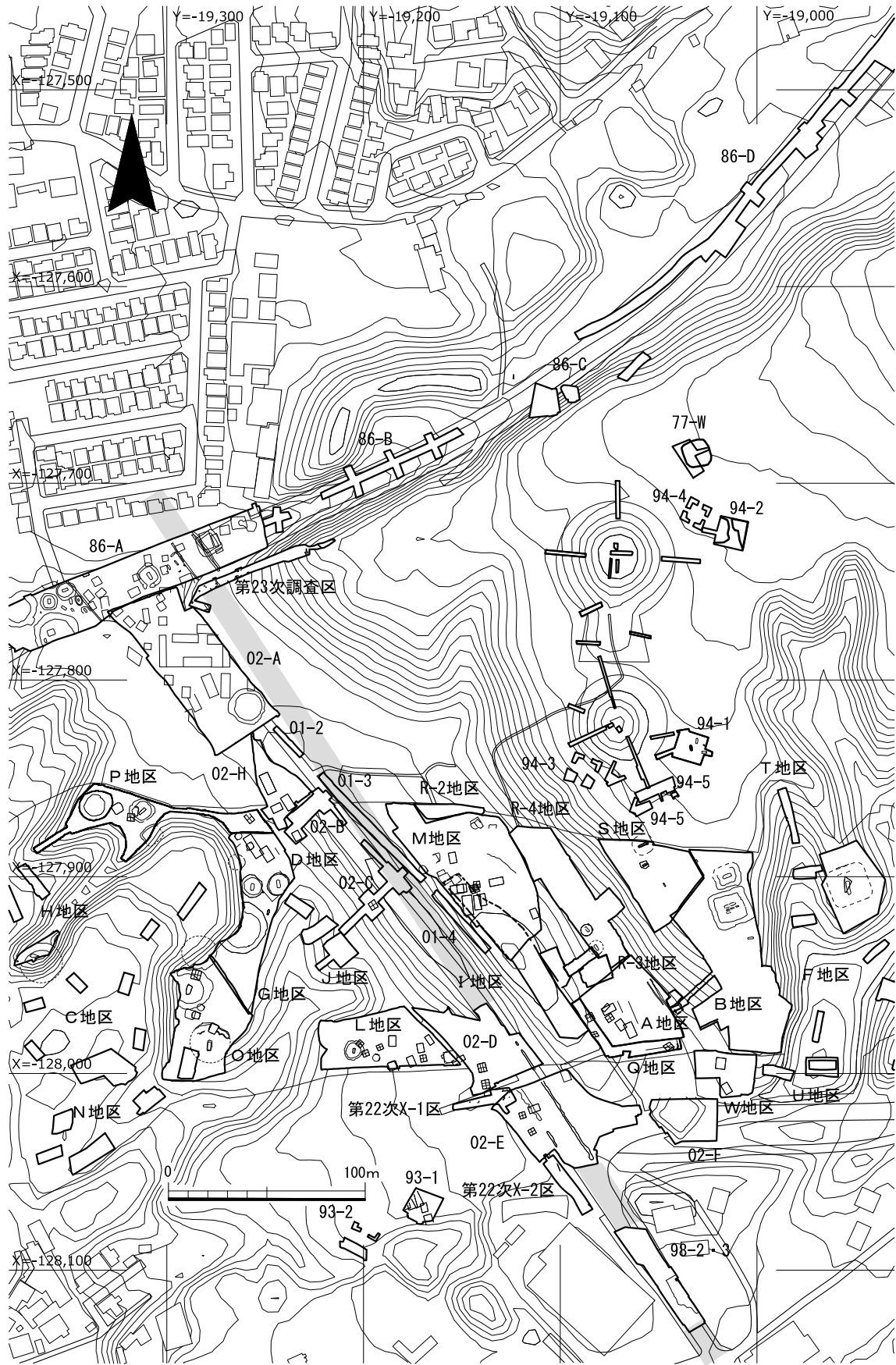
今回の調査で検出した主な遺構は、土坑S K02と平行して走る2条の溝S D06・09である。

芝山遺跡では布留式土器を伴う遺構は、昭和61年度第3次調査区で検出された竪穴建物1基がある。この竪穴建物は中位平坦面の西端近くで検出されており、土坑S K02との直線距離は約140m、比高差は約13mある。この竪穴建物では、布留0式前後の第1次床面と布留3式前後の第2次床面が検出されている。土坑S K02とほぼ同じ時期であることから、この両者は関連性が高いと考えられる。竪穴建物の居住者が、住まいの傍にある見晴らしの良い高台で祭祀を行い、使用した土器を埋納したものかもしれない。

溝S D06・09は、両溝とも埋土内からの出土遺物がほとんどないことから、明確な掘削時期や埋没時期はわからない。ただ、溝S D06の埋土最上層上面からは飛鳥・平城宮編年平城宮Ⅲ期の可能性のある須恵器高台付底部片が出土しており、奈良時代の中頃には埋没していた可能性がある。

溝S D06・09は、検出した位置から、調査区北側に隣接する昭和61年度第3次調査区で検出された溝2・4の南側延長部と考えられる。溝2・4は、両溝を側溝とする道路遺構と指摘されている。今回の調査で、道路側溝とされる溝がさらに南へ延びていることが確かめられた。溝S D09が攪乱により削平されるため、調査区内では直接平行した状態で検出することはできなかったが、溝S D06と溝S D09の心々間の幅は約11mと推定される。溝2と溝4の心々間の幅が12mであるのに対して、やや狭くなっている。今回の調査区から南へ約300mの平成14年度第13次調査E地区(第13図02-E)では、同様に平行して走る溝S D36・50が検出されている。溝S D36が溝2と溝S D06の延長線上、溝S D50が溝4と溝S D09の延長線上となる。溝S D36と溝S D50の心々間の幅は、11.1～11.7mある。3か所で検出した平行する溝の心々間の幅は11～12mで、ほぼ一致している。平成14年度第13次調査E地区の北側に位置する平成14年度第13次調査D地区(第13図02-D)では、溝S D36の北側延長部となる溝S D36が検出されている。ただD地区では溝S D50の北側延長部となる溝は検出されていない。これらの調査成果から、検出されなかった調査区はあるものの、同じ心々間の幅を保ち平行して延びる2条の直線的な溝が、少なくとも約380mにわたり掘削されていると考えられる。

平成14年度第13次調査E地区の南側には、小さな谷を挟んで東西に延びるやせ尾根状の丘陵がある。その丘陵の先端部で行われた平成10年度第8次調査では、丘陵先端を切り崩した切通状の



第13図 道路状遺構検出状況図

遺構が検出されている。切通状遺構の裾部には、幅約30cm、深さ5～10cmの南北溝が掘削されている。切通状遺構の斜面の堆積土からは、奈良時代の須恵器長頸壺片（飛鳥・平城宮編年平城宮Ⅲ期）が出土している。また切通状遺構北側の丘陵斜面では畝状遺構が検出されており、耕作に伴うものの可能性はあるが、いわゆる「波板状凸凹面」の痕跡とも考えられる。

平行する2条の溝と切通状遺構を合わせると、その直線距離は約470mに及ぶ。これらの遺構は、従来から指摘されているように、道路遺構である蓋然性は極めて高いと考えられる。

平行する2条の溝の掘削時期は明確ではないが、平成14年度第13次調査E地区溝S D 36からは8世紀後半～9世紀前半の土器が出土しており、8世紀後半から徐々に埋没し始め、おそくとも9世紀前半には完全に埋没したと考えられる。

平成14・15年度第13・14次調査A地区(第13図02-A)では、平行する2条の溝の西側で正方位をとる官衙的建物群が検出されている。この建物群の性格については、道路遺構との関連から駅家跡とする説の他に郡庁跡とする説などが提唱されている。官衙的建物群は8世紀前半に機能し8世紀中頃までに廃絶したと考えられている。

平行する2条の溝を道路遺構、官衙的建物群を駅家とするならば、8世紀中頃に駅家が廃止されるのに伴い道路機能が低下し、8世紀中頃以降は徐々に維持管理が行われなくなることで側溝の埋没が始まり、9世紀前半には道路としての機能が廃絶したのではないかと考えられる。

平行する2条の溝については、今回の調査区の南側に約100m分の未調査区があり、今後の調査により新たな調査成果の追加が期待される。^(注4) (小泉裕司)

注1 城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

注2 歴史的環境の執筆にあたって下記の文献を参照した。

城陽市史編さん委員会編1999『城陽市史』第3巻 城陽市役所

城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1987「芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第25冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2004「4. 芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第110冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第189冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「3. 小樋尻遺跡第13次」『京都府遺跡調査報告集』第192冊

注3 出土遺物の執筆にあたって下記の文献を参照した。

寺沢 薫1986「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊奈良県立橿原考古学研究所

一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編2011『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』

古代の土器研究会1992『古代の土器1 都城の土器集成』

注4 調査の成果の執筆にあたって下記の文献を参照した。

城陽市教育委員会1999『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集

城陽市史編さん委員会編2002『城陽市史』第1巻 城陽市役所

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1987「芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第25冊

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2004「4. 芝山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第110冊

(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2023「新名神高速道路整備事業関係遺跡芝山遺跡・芝山古墳群」『京都府遺跡調査報告書』第189冊

高橋美久二2006「山背国の奈良時代東山道と芝山遺跡」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

菅 博絵2021「城陽市芝山遺跡における正方位の建物群と道路状遺構の整理」『京都府埋蔵文化財論集』第8集(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

加藤雅士2021「未知なる道のはなし－田原道の研究史と芝山遺跡をめぐって－」『京都府埋蔵文化財論集』第8集(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

圖 版



(1) 調査地遠景(南東から)



(2) 調査地全景



(1) 拡張区1 東半全景(西から)



(2) 拡張区1 全景(東から)

(1) 6トレンチ全景(西から)



(2) 3・4トレンチ全景(東から)



(3) 5トレンチ全景(北東から)

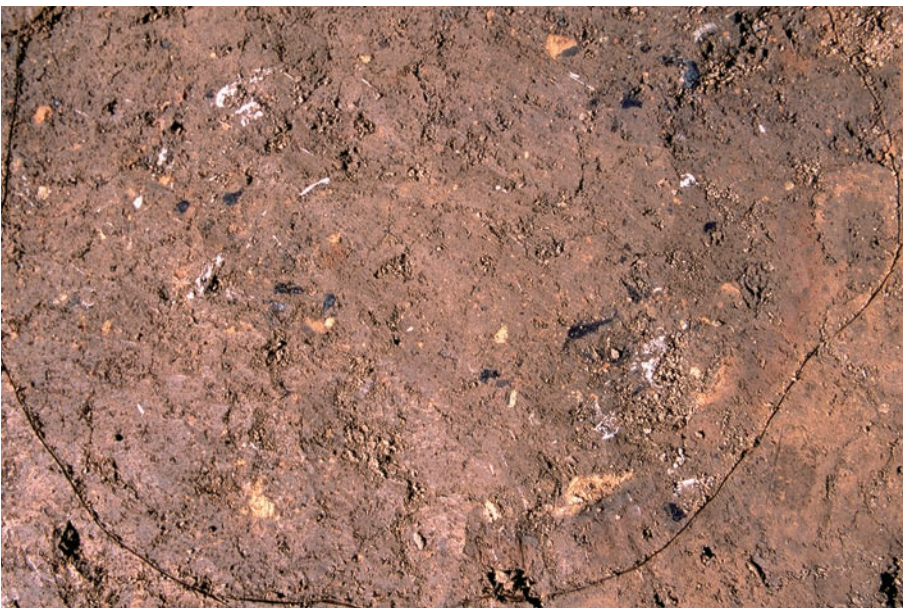




(1) S K01検出状況(南から)



(2) S K02検出状況(南から)



(3) S X03検出状況(東から)

(1) S X 4 焼土検出状況(東から)



(2) S K 1 半裁状況(東から)



(3) S K 2 半裁状況(北から)





(1) S K 1 完掘状況(東から)



(2) S X 4 掘削状況(東から)



(3) S X 4 完掘状況(北から)



(1) 調査地遠景(南西から)



(2) 調査地全景(右が北)



(1) 拡張区1・4トレンチ全景(北西から)



(2) 5トレンチ全景(北西から)



(1)下層確認トレンチ完掘状況
(南西から)



(2)下層確認トレンチ9完掘状況
(南から)



(3)下層確認トレンチ8完掘状況
(南から)



(1)下層確認トレンチ4完掘状況
(北から)



(2)下層確認トレンチ3完掘状況
(北から)



(3)下層確認トレンチ2完掘状況
(北から)



(1) 5トレンチ全景(上が北)



(2) 5トレンチ東壁(南東から)



(3) 5トレンチ東壁遠景(東から)



(1) 調査地全景(南から)



(2) 調査地全景(南西から)



(1) 調査区全景(上が北)



(2) 調査区近景(西から)



(1) 石器出土状況(北から)



(2) 調査区全景(北西から)



(1)上野遺跡堆積状況(北から)



(2)石器出土状況全景(南から)



(1) 範囲確認トレンチ
表土除去状況(西から)



(2) 石器検出状況1(北から)



(3) 石器出土状況2(北から)

(1) 石器出土状況 3 (左が北)



(2) 石器出土状況 4 (下が北)



(3) 断ち割り状況 1 (西から)





(1)断ち割り状況2(北から)



(2)斜面部堆積状況1(南西から)



(3)斜面部堆積状況2(西から)



(1) 第4次調査地遠景(南東から)



(2) 第4次調査地遠景(西から)



(1) 第4次調査地全景(真上から、上が北東)



(2) 第4次調査地全景(真上から、上が南西)



(1) 1区第1面全景(南から)



(2) 1区第1面近景(南から)



(1) 2区全景(北西から)



(2) 2区壁面(西から)



(3) 3区全景(西から)

(1) 1区SK1038遺物出土状況
(南西から)



(2) 1区石器出土状況(東から)



(3) 1区SK1238遺物出土状況
(南から)





(1) 1区S D1030断面(南から)



(2) 1区S D1030完掘状況
(南から)



(3) 1区S D1030完掘状況
(南西から)

(1) 1区S L1321検出状況
(南東から)



(2) 1区S L1321焼土除去後
(南東から)



(3) 1区S L1321完掘状況
(南東から)





(1) 1区S L 1326・1327・1328
検出状況(東から)



(2) 1区S L 1328検出状況
(北東から)



(3) 1区S L 1326検出状況
(東から)

(1) 1区S L1327検出状況
(南東から)



(2) 1区S L1328断面(北から)



(3) 1区S L1326断面(東から)





(1) 1区S L1327断面(北西から)



(2) 1区S L1326・1327・1328
完掘状況(東から)



(3) 1区S L1032検出状況
(南東から)



(1) 1区S L1032土砂除去後
(南東から)



(2) 1区S L1032断面(東から)



(3) 1区S L1032完掘状況
(南東から)



(1) 1区S L1322・1323・1324
検出状況(南東から)



(2) 1区S L1322検出状況
(東から)



(3) 1区S L1323検出状況
(東から)

(1) 1区S L1324検出状況
(東から)



(2) 1区S L1322土砂除去後
(南東から)



(3) 1区S L1323土砂除去後
(東から)





(1) 1区S L1324土砂除去後
(東から)



(2) 1区S L1322断面(南西から)



(3) 1区S L1322・1323・1324
完掘状況(南東から)

(1) 1区S L1320検出状況
(北から)



(2) 1区S L1320検出状況
(南から)



(3) 1区S L1320検出状況
(南から)





(1) 1区S B04断面(南東から)



(2) 1区S B04完掘状況・
S L1325検出状況(西から)



(3) 1区S L1325検出状況
(西から)

(1) 1区S K1286土器出土状況
(西から)



(2) 1区S K2423土器出土状況
(南から)



(3) 1区S K2288土器出土状況
(北西から)





(1) 1区S K2288土器出土状況
(北から)



(2) 1区S H2280断面
(北東から)



(3) 1区S L2287検出状況
(北西から)

(1) 1区S H2280完掘状況
(北西から)



(2) 1区S H2292土器出土状況1
(南西から)



(3) 1区S H2292土器出土状況2
(南西から)





(1) 1区S H2292土器出土状況3
(南西から)



(2) 1区S L2446検出状況
(南西から)



(3) 1区S H2292完掘状況
(北西から)

(1) 1区S L 2208検出状況
(南東から)



(2) 1区S L 2208とS P 2444
完掘状況(南東から)



(3) 1区S L 2287断面(南から)





(1) 1区第2面全景(南西から)



(2) 1区第2面全景(真上から、上が北東)



(1) 1区南西壁断面(北から)



(2) 1区南西壁断面(南から)



(1) 1区南西壁南側断ち割り(南から)



(2) 1区南西壁北側断面(北東から)



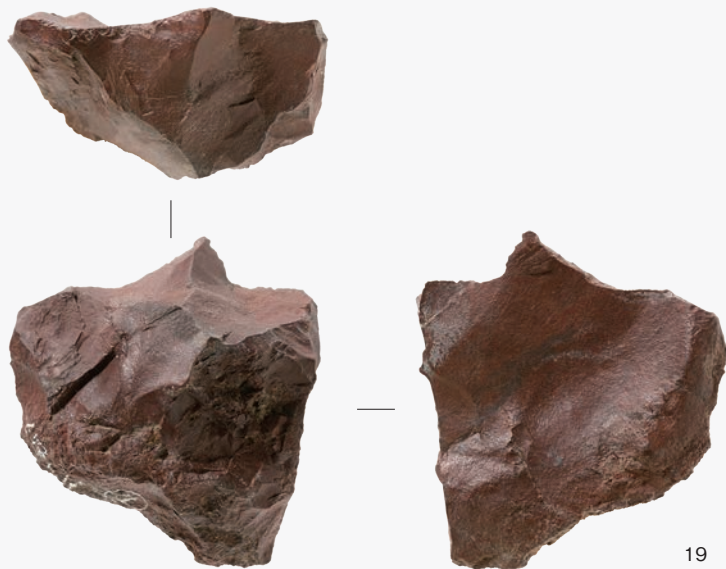
(1) 第1次調査出土遺物



(2) 第2次調査出土遺物



石器1 (第2次調査)





石器3 (第3次調査)



石器4 (第3次調査)



石器5 (第3次調査)



石器6 (第3次調査)



石器7 (第3次調査)



石器8 (第3次調査)











93



94



95

南金岐遺跡



(1) 調査前状況(南から)



(2) 調査前状況(南東から)



(3) 遺構検出作業状況(南東から)

南金岐遺跡



調査区全景(南東から)

南金岐遺跡



(1) NR 1 検出状況(南東から)



(2) NR 1 完掘状況(南東から)



(3) NR 1 西壁断面
(北東から)

南金岐遺跡



(1) NR 2 検出状況(南東から)



(2) NR 2 完掘状況(南東から)



(3) NR 2 西壁断面
(北東から)

南金岐遺跡



(1) NR 3 検出状況(北東から)



(2) NR 3 完掘状況(南東から)



(3) NR 3 西壁断面
(北東から)

南金岐遺跡



(1) NR 4 検出状況(南東から)



(2) NR 4 完掘状況(南東から)



(3) NR 4 西壁断面
(北東から)

千代川遺跡



(1) 調査前状況(北から)



(2) 36-1区・36-2区全景
(左が北)



(3) 36-1区全景(北から)

千代川遺跡



(1) NR 1・2 東壁断面
(西から)



(2) NR 4 東壁断面
(西から)



(3) 36-2 区全景(北から)

千代川遺跡



(1) 36-2区全景(南から)



(2) S B23検出状況(南から)



(3) S B23・S P19埋土断面
(西から)

千代川遺跡



(1) NR 5・6 全景(南から)



(2) NR 5 全景(南から)



(3) NR 5 東壁断面
(南西から)

千代川遺跡

(1) NR 5 東壁断面
(西から)



(2) NR 6 全景(南から)



(3) 36-3区・36-4区全景
(左が北)



千代川遺跡



(1)36-3区全景(南西から)



(2)36-3区南部(北西から)



(3)36-3区S X24(南から)

千代川遺跡



(1)36-4区全景(南から)



(2)36-4区全景(北から)



(3)36-4区北部S D01(西から)





(1) X-1区調査トレンチ全景
(上が北)



(2) X-1区調査トレンチ全景
(西から)



(3) X-1区調査トレンチ
西側拡張区全景(西から)



(1) X-2区調査トレンチ北半
(上が東)



(2) X-2区調査トレンチ全景
(北から)



(3) X-2区調査トレンチ全景
(南から)



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



(1) 調査区全景(上が南)



(2) 調査区全景(西から)



(3) 調査区全景(東から)



(1) 調査区東端(西から)



(2) 土坑 S K02(東から)



(3) 土坑 S K02土器出土状況
(西から)

(1)溝 S D09(南から)



(2)溝 S D09(北西から)



(3)道路状遺構(人物が並んでいる部分・西から)





(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちようさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第194冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第194冊
編著者名	面将道、加藤雄太、竹原一彦、小泉裕司
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2024年3月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
うえのいせき 上野遺跡第1次	きょうたんごしたんごちよう 京丹後市丹後町 上野地内	26212	156	35° 45' 13"	135° 10' 11"	20170714 ~ 20171204	1,700	道路改良
うえのいせき 上野遺跡第2次				35° 45' 14"	135° 10' 14"	20180801 ~ 20181221	1,570	
うえのいせき 上野遺跡第3次				35° 45' 14"	135° 10' 16"	20190801 ~ 20191216	1,100	
うえのいせき 上野遺跡第4次				35° 45' 14"	135° 10' 17"	20210825 ~ 20220125	1,700	
みなみかなげいせき 南金岐遺跡第2次	かめおかしおおいちよう 亀岡市大井町 南金岐重見	26206	107	35° 01' 42"	135° 32' 47"	20230721 ~ 20230922	250 m ²	道路改良
ちよかわいせき 千代川遺跡第36次	かめおかしちよかわちよう 亀岡市千代川町 北ノ庄測田ほか	26206	22	35° 03' 14"	135° 32' 04"	20230914 ~ 20231120	420 m ²	道路改良
しばやまいせき 芝山遺跡・芝山 古墳群第22次	じょうようしとの 城陽市富野 なかのしば 中ノ芝	26207	56 90	34° 50' 44"	135° 47' 28"	20230522 ~ 20230728	378 m ²	道路新設
しばやまいせき 芝山遺跡・芝山 古墳群第23次	じょうようしてらだ 城陽市寺田 みなみなかしば 南中芝	26207	67	34° 50' 54"	135° 47' 22"	20230822 ~ 20231025	350 m ²	道路新設 改良

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野遺跡第1次	集落	奈良・平安	土坑	製塩土器支脚、土師器甕	
上野遺跡第2次	集落	旧石器 弥生 奈良・平安		旧石器、弥生土器甕、須恵器杯、 黒色土器椀、土錘	
上野遺跡第3次	集落	旧石器	石器ブロック	旧石器	国内最古級の石器
上野遺跡第4次	集落	弥生・古墳 奈良・平安	竪穴建物、掘立柱建物、 鍛冶炉	弥生土器、土師器、石器、須恵器、 土師器、ふいご羽口、製塩土器支脚、 土錘、石錘	
南金岐遺跡第2次	集落 その他の墓	弥生・古墳	自然流路4条	石鏃、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、 陶磁器	
千代川遺跡第36次	集落	弥生・中世	自然流路、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶 磁器	
芝山遺跡・芝山古墳群第22次	集落 古墳	-	杭、溝	須恵器、土師器	
芝山遺跡・芝山古墳群第23次	集落 古墳	古墳・奈良	土坑1基、道路側溝2条	土師器、埴輪、須恵器	

所収遺跡名	要約
上野遺跡第1次	古代の土坑を検出した。
上野遺跡第2次	後期旧石器時代前半とみられる石器が出土した。
上野遺跡第3次	AT下位から後期旧石器時代前半の石器ブロックを検出した。
上野遺跡第4次	第1面で奈良・平安時代の鍛冶炉を伴う掘立柱建物、第2面で竈を持つ竪穴建物を検出した。
南金岐遺跡第2次	自然流路のみ検出した。出土した遺物から近辺に弥生時代後期の集落の存在が予想される。
千代川遺跡第36次	4か所の調査区を調査し、幅33mを測る東西方向の流路などの自然流路と中世の建物1棟を検出した。
芝山遺跡・芝山古墳群第22次	調査区内は後世のかく乱のため、遺構面がほとんど残されてなかった。土坑と溝を検出したが、遺物が小片のため時期を特定できない。
芝山遺跡・芝山古墳群第23次	古墳時代前期の土坑と奈良時代の道路遺構の両側溝を検出した。

京都府遺跡調査報告集 第194冊

令和6年3月25日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152